

【完結】魔法界に百合の 花が咲く

藍多

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法界にはとある一族が存在していた。

リンリー家。

その家系には女性しか生まれない。それも全員が絶世の美女なのだ。

そしてその女たちはある特異体質を持っていた。

それは……女を魅了し、男を恐怖させるものだった。

『生き残った男の子』ハリリー・ポッターが魔法界に戻る時

リンリー家からも一人の少女がホグワーツに入学する。

これは一人の少女が百合ハーレムを作り、自由に生きていく物語。

※百合ものです。ついでにハーレムものでもあります。

※男キャラは基本不憫です。敵も味方も。

※かなり人を選ぶ内容になっていると思います。

目次

1章 賢者の石より女の子が宝

1. 魔法界の特異な一族 | 1

2. ホグワーツに戦慄が走る | 9

3. 入学準備という名のデート

17

4. 運命との出会い | 26

5. 組み分け | 36

6. 最初の授業 | 51

7. 飛行と非行 | 63

8. 記念日はハロウィーン | 75

9. クイディッチにシーカーなど不

要 | 90

10. クリスマスプレゼントは伴侶

| 103

11. リリアンズペット竜(ドラゴ

ン) | 115

12. ハーレム一年目 | 126

2章 秘密は女には必要な要素

13. 夏休みとお買い物 | 137

14. 初めての妹 | 147

15. 苦手な教師 | 157

16. | 167

17. 開く部屋 | 176

18. 激闘と決闘 | 186

19. 推理と聞き込み | 200

293	2 9.	ホグワーツでのクリスマス	285	3 8.	選出	386
	2 8.	嵐	274	3 7.	他校到着	375
	2 7.	ホグズミードデート	263	3 6.	許されざる呪文	367
	2 6.	新授業	254	3 5.	三大魔法学校対抗試合	345
	2 5.	新任教師	245	3 4.	クイディッチワールドカップ	
	2 4.	吸魂鬼	238	4 章	炎のゴブレットは良い選出をした	
	2 3.	脱獄囚	229	3 3.	ハールム三年目	334
	3 章	囚人、なんだ男か	219	3 2.	捕縛	325
	2 2.	ハールム二年目		犬		314
	2 1.	孤独の蛇王を癒すは		3 1.	試験と小さなネズミと大きな	
210	2 0.	幽霊少女や邪悪な日記		3 0.	守護霊は嫁	303

4 8.	リリちゃん絶対護る隊	501	5 5.	希少種	619
4 7.	先行き見えぬ五年目	491	5 4.	降伏勧告	608
4 6.	迷惑な勧誘	482	6 章	プリンセスになつて出直せ	
4 5.	忍び寄る闇	482	5 3.	ハーレム五年目	595
5 章	不死鳥の騎士団に女はいらない		5 2 (裏).	墮ちる	579
幕間	男たちの舞台裏	469	5 2.	少女たちの決戦	567
4 4.	ハーレム四年目	458	552		
4 3.	混戦乱戦な第三課題	447	5 1 (裏).	澱み溜まり濁る心	
4 2.	第二課題	431	539		
		420	5 1.	ホグワーツの女の子たち	
4 1.	クリスマスダンスパーティー		5 0.	幸せな夢	526
4 0.	第一課題	406	4 9.	少女進化中	517
3 9.	悲劇な四人目	396	510		

グワーツ	62.	闇に染まる日常と非日常なホ	704	ンジャー	71.	ハーマイオニー・ジーン・グレ	792
	最終章	リンリーの秘宝			782		
	61.	ハーレム六年目	693		70.	クラウディア・エンジェル	
	60.	激戦 そして	678		69.	パーバティ・パチル	771
	59.	前夜	668		68.	パドマ・パチル	763
658	58	(裏) 攻防とその裏で		752	67.	ダフネ・グリーングラス	
	58.	新人歓迎	648		リ		
639	57.	大人の助けと少女の癒し			66.	ジネブラ・モリー・ウィーズ	743
	56.	やさしさに溶かされる			65.	終わりそして	733
	627				64.	愛とは呪い	722
	56.				63.	世界連合	713

エ
ピ
ロ
ー
グ

7
2.
卒
業

810 801

1章 賢者の石より女の子が宝

1. 魔法界の特異な一族

魔法界にはある一族が存在していた。

古くから、それこそホグワーツの創設者たちよりも古くから存在していたと言われて
いる一族。

それほどまでの歴史があるにもかかわらず、非魔法族のマグルを受け入れ、忌避をし
ないことでも有名であった。

それにもかかわらず、魔法使いはマグルより上の存在であると信じている純血主義者
を含め、その一族は魔法界において畏怖または崇拜の対象であった。

それは彼女たちが持つ魔法界でも一際異質な特異体質が原因であった。

その一族には女、それも絶世の美女しか生まれない。

その美女たちは同性を惹きつけ、異性を畏怖させる魔性の魅力を持っている。

その一族の女たちが世に現れる時には決まって混乱、厄介事を呼び込んだ。

あらゆる女を魅了し虜にしてしまい男への興味を失うまでになつてしまうと、ただで
さえ少ない魔法族の婚姻数や出生数に影響してしまうのだ。

それだけではない。

その一族と同年代の世代では女性が活躍し、逆に男性は日の目を見ることは全くと言つていいほど無くなってしまっている。

政治、経済、スポーツ、その他全ての事柄が女性だけで進んでしまうのだ。

その一族の名は……リンリー。

例のあの人、名前を言つてはいけないあの人、闇の帝王と恐れられた存在が猛威を振るっていた時も悪に屈することも無く、かといつて善に力を貸すことなく平時と変わらずあり続けた。

闇の帝王が滅び10年の月日が経過した。

生き残った男の子ハリリー・ポッターが魔法界に帰還するこの年。

リンリー家からも一人の少女がホグワーツに入学することになる。

名前はリリアン・リンリー。

生き残った男の子も闇の帝王も関係ないとばかりに魔法界で好き勝手、自由に過ごしていくことになる少女の名であった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

人の住む世界から離れた山奥。

そこに貴族でも住んでいるかのような豪邸が建っていた。

聖28一族のマルフォイ家の屋敷にも引けを取らないほどの豪華な建造物。

この屋敷こそリンリー家に代々受け継がれてきた由緒ある屋敷である。

そこに一羽の梟が手紙を携えてやってきた。

梟便専用のポストに手紙を投函するとその梟は名残惜しそうにしばらくポストに留まっていたが、自らの仕事を思い出し飛び去って行つた。

しばらくすると家の中からメイドが姿を現し手紙を受け取る。

手紙に書かれていた宛名はこの豪邸に住む一家の大事な一人娘であり、彼女がイギリスいや世界有数の魔法学校である hogwarts 魔法魔術学校への入学が決まったことを示していた。

「リリお嬢様もそのような年なのですねぇ……。早速お知らせしなくては。」

メイドが屋敷に戻ると彼女の主とその妻が姿を見せた。

「おはようメイ。今日もいい女だな。」

「おはようございます、メイ。」

「ロザリンド様！ おはようございます！ レイラもおはよう。 ああ……ロザリンド様……。今日も御美しい……。」

「ありがとね。で、その手紙はなに？」

「ハッ!? そうでした。こちらはリリオ嬢様のホグワーツの入学案内でございます。」

「そっか、そろそろだったな。明日にでもダイアゴン横丁に買い物にでも行こうか。ついでに皆でデートだ！」

「急に決めないでください。でもたまにはデートもいいかもしれないですね。メイ、他のメイドみんなにも連絡しておいてください。」

「はいっ！」

メイは朝食の準備をしている他のメイドにデートについて教えに行つた。

次の瞬間には厨房から歓喜の声が聞こえてきた。

「さてさて、私らの愛する娘はそろそろ起きてくるころかな？」

「確か、レーナが起こしに行っているはずです。」

~~~~~

リンリー家の一人娘、リリアンは朝が来たにもかかわらず自室のベッドの上で微睡んでいた。

そこにメイドの一人、レーナが起こしにやってきた。

「リリオ嬢様、朝でございますよ？ そろそろ起きてください。」

ベッドで眠る少女の姿は美しかった。

金色に輝く長い髪、顔のパーツはどれをとっても素晴らしくまさに神によって設計された人であると確信を抱かせた。鼻孔から出てくる息でさえ最高品質の愛の妙薬よりも強い魅力が満ちている。それらは理性を溶かすには十分すぎるほどの力であった。

レーナは自分でも気づかぬうちにベッドのすぐ近くに寄って行っていた。

「お嬢様……起きてください……。起きないのですか？ それなら……。」

ナニをしてもよろしいのですよね……？

未成年、それも愛する主人の一人娘に対していったい何をするつもりなのか。

だが、これもリンリーの血を受け継いだ者に対する女^誰として当たり前^誰の反応であった。

特にこの家のメイドたちはリリアンの母、ロザリンド・リンリーの魅力で墮ちた女たちだ。

息を荒げリリアンに近づいていくレーナ。

次の瞬間、リリアンの目を覚ました。

そして間髪入れずにリリアンがレーナの唇を奪った。

「!? んん!? んん!?」

リリアンの舌がレーナの唾内を蹂躪する。

舌、歯、歯茎、喉奥、たつぷり5分ほど時間をかけてじつくりとリリアンの舌はレーナを堪能した。

リリアンが口を離すと二人の口を結ぶように唾液の橋が出来上がっていた。

「おはよう、レーナ。ごちそうさまでした。」

対するレーナは息も絶え絶え、身体を痙攣させ挨拶どころではなかった。

そんな彼女をベッドに優しく寝かせてリリアンは朝食に向かった。

レーナは愛するお嬢様の唾液の味とベッドに残った香りでの世で最も幸せだと確信しながら気を失った。

~~~~~

「ママ、お母様、おはよう!」

「おはよう! リリ!」

「おはようございます。レーナはどうしました?」

「美味しかったわ。」

レイラは娘が段々とかつてのロザリンドに似てきたと思わずにはいらなかった。

そのロザリンドとさえ、「私も混ざりたかった」などと呟いている。

「はいはい、そこまでです。それでは朝食にしましょう。」

レーナを除いたロザリンド、レイラ、リリアン、そしてメイドの4人で一緒に朝食を  
楽しんだ。

「ああ、忘れるとこだった。ほいりり、手紙。」

「手紙？ 何かしら？ ホグワーツ……これホグワーツの入学案内だわ！」

「そう。おめでと、これで9月から晴れてホグワーツの一員だな。」

「おめでとございます。明日はダイアゴン横丁に必要なものを買に行きましょう。」

「嬉しいわ！ これで色んな女の子と会えるのね！ ああ、楽しみだわ！」

「我が娘ながら楽しみなのはそこかい。」

「人の事を言えないですよ。あなた、私と会った第一声は何でしたっけ？」

「んんん『美しい！ 結婚しよう！』だっけ？」

「……正解です。」

「いちやつきだした両親を無視して9月からのホグワーツ生活に思いをはせるリリアン。」

（ホグワーツはどんな娘がいるのかしら？ 可愛い娘、カッコいい子、同級生だけでなくお姉さまたちもたくさん！ それに7年間もあれば後輩もいっぱい！ お姉さまと慕

われるのも最高ね！ ああ、待ち遠しいわ！)

仮にも魔法学校に行くというのに魔法を学べることや学校自体には全く関心がないリリアンであつた。

男という存在のことなど一欠けらも頭には無かつた。

~~~~~

同時刻。

非魔法族、通称マグルと呼ばれる一家にも同じ手紙が届けられていた。

やってきた老魔女から直接手渡された手紙をその一家の娘、茶色の縮れ毛を持った少女が見ていた。

「ホグワーツ？ 魔法？ 何ですかこれ？」

彼女が魔法界の運命を左右させる少女になることはまだ誰も知らない。

2. ホグワーツに戦慄が走る

リリアン・リンリーの元にホグワーツの入学案内が到着する1カ月ほど前。

ホグワーツ魔法魔術学校は現在、夏休みの真つ最中である。

教師たちは新学期の準備をしたり久方ぶりの休暇を楽しんでいた。

そんな中、副校長のミネルバ・マクゴナガルは自室である副校長室で新たに入学する生徒たちへの入学案内書の準備をしていた。

入学してくる子供たちは多種多様だ。魔法界の名家や有名な一族、かつての学友の孫、教え子の子供たち、マグル生まれの子、海外から入学する子供までもいる。

今年も多くの生徒たちが新たに入学し、ホグワーツの一員となる。

マクゴナガルはこの入学案内書を準備するのが楽しみであった。

毎年多様な生徒が入学し、活躍する。今までも一人として同じ子供はいない。皆それぞれ違っていいが必ず良いところがある。今書いている入学案内を受け取る未来の生徒たちも先達に負けず劣らず立派になっていくだろう。そう思うと教育者としてこれからのとても楽しみになるのだ。

（今年入学する子供たちは一癖も二癖もありそうですね……。マルフォイ家の子を筆頭

に聖28一族が何人か、ウィーズリー家からはまた一人入学ですか、アーサーとモリーはどれだけの子を設けたのやら。この子もぜひグリフィンドールに来てもらいたいのです。いえ、いけませんね公平にしなければ。しかしなんととっても注目されるのは彼、ハリー・ポッターでしょうね。」

ハリー・ポッター。

名前を言っではいけないあの人を打倒した生き残った男の子、すなわち英雄である。そんな子が魔法界に戻って来るのだ。

（あの子はどの程度魔法界について知っているのでしょうか。周りからの英雄視が悪影響を及ぼさないと良いのですが、あの問題児が父親なのですからどうなることやら。）

最後の入学案内も作成し終える。

ここらで紅茶でも飲んで一息つきたいのだがそうはいかない。

「さてと。いつまでも現実逃避してはいられませんね。」

名簿の中の入学案内作成済みのチェックが入っていない名前を見る。

案内書を書いている途中でその名を見た瞬間、現実逃避をしてその子に関する全てを後回しにしていたのだ。

見間違えであつて欲しいと、自分が疲れているだけだと、そう思いながらそれを目にする。

そこにはホグワーツに関わる全ての職員が集まっていた。

校長 アルバス・ダンブルドア。

副校長兼グリフィンズ寮監 ミネルバ・マクゴナガル。

レイブンクロー寮監 フィリウス・フリットウィック。

ハッフルパフ寮監 ポモナ・スプラウト。

スリザリン寮監 セブルス・スネイプ。

それら以外にも各教科担当の教師たち、その中には普段は滅多に姿を見せないシビル・トレローニーの姿まである。

さらには森番のルビウス・ハグリッドに校医のポピー・ポンフリー、司書のイルマ・ピンス、管理人のアーガス・フィルチまで全てである。

更には各寮の代表ゴーストまでも集まっていた。

マクゴナガルが話し始める。

「さて、皆さん集まっていたことに感謝いたします。この会議の議題は前もって伝えた通りです。早速議論を進めたいところなのですが……その前に。ダンブルドア校長、なぜリンリー家の子が入学することを黙っていたのですか？ 校長であるあなたなら最初に知っていたはずですわね？」

「……………申し訳ない。」

「謝る必要はありません。なぜもつと早く伝えて下さらなかつたのか、理由を聞かせて下さい。」

「……………わしはの、リンリー家の者が怖いのだ。何よりも。だから……………逃げておつたのだよ。本当にすまぬ。」

偉大なはずの魔法使いが弱弱しく頭を下げて謝っている。

そのあまりの姿にこれ以上咎めることに気が引けたマクゴナガルは議論に移った。

「気を取り直しまして、リンリー家の少女が入学することについてです。過去同様に組み分けされた寮の寮監が責任を持つということ、他の教職員はその手助けをするという方式でいきます。」

男子生徒は不用意に近づくことはないはずなので問題ありませんが、問題は女生徒です。」

「確かにそうですね。アレは意識していても抵抗するには子供たちには荷が重すぎる。「同感だ。アレほど強力な呪いはそうはないだろう。しかし、いい案はありますかね？」前回と同じような方法だとしたら我輩は反対ですぞ。」

スネイプは前回のリンリー、つまりは今回入学するリリアン・リンリーの母親と同年であった。色々とおつてハッキリ言つてトラウマになっている。

スネイプ以外の全員もその当時のホグワーツを思い出して顔を歪めていた。

「分かっています。まずは様子を観察、行動傾向の分析、状況次第で静観または積極的介入のどちらかを選択します。彼女が比較的大人しいならば良いのですが……。教育者としてもあまり子供に無理をさせたくはないのですが、こればかりは。但し前回のようなどことになるようならば最悪退学も視野に入れなければなりませんでしょう。」

その後も会議は続けられていく。

リアン・リンリー
対象の少女がどのように行動したらどう動くか細かな対処案の作成。

マダム・ポンフリーを中心に魅了された女生徒に対するケアチームの結成。

男生徒に徹底的に注意事項を叩きこむ特別補習の計画。

何より少女がどのような性格か、呪い魅了をどのように扱うかなどの把握を最優先。

会議は夜遅くになってやっと終了した。

「お疲れ様でした。この会議をしたから問題はないなどと考える者はここにはいないと信じています。これから7年間、頑張りましょう。」

「はい。」

~~~~~

入学案内が届く1カ月前に Hogwarts で恐れられ、対策会議まで開かれていたなど夢にも思っていない件のリリは明日に控えた家族たちとのダイアゴン横丁デートの為

に速めにベットに入って夢を見ていた。

リビングでは二人の母と5人のメイドが酒を飲みながらホグワーツの学生だった頃の思い出話で盛り上がっていた。

「いや〜リリもホグワーツか〜。どここの寮になるかな?」

「リリの性格から言えばどこも可能性はある気がしますね。」

「ま、どこでもいいさ。それよりカワイイ嫁ができるかどうかの方が重要だな。」

ロザリンドにとっては学業よりもそちらの方がはるかに重要だと捉えていた。

「確かに。お嬢様には是非とも絵になるような少女を連れてきて欲しいものです。」

レーナが鼻息を荒くしながら願望を口に出す。

「黙ってる、ロリコンレーナ。わたくしとしてはリリ様が幸せならばそれで何も問題はありません。」

キャロルがロリコンを鉄拳で黙らせながらメイドたちの総意を示す。

この家にいるメイドは趣味嗜好もかも全く違っている。

それでも共通なのは主であるロザリンド・リンリーに好意を抱いていることだ。

もちろんその娘のリリにもだ。

「母親としての心配はロザリンドの主人と同じようにならないかだけです。」

「えー? 私、何かしたっけ?」

「「「はい。」」」」

メイドたちは声を揃えて肯定した。かつてのホグワーツで色々あったから現在はここでメイドなどしているのだから。

レイラは頭を抱えてため息をついた。

娘がホグワーツに入学するのは喜ばしいが、ロザリンドの様にやりすぎないかだけが心配でならなかった。



### 3. 入学準備という名のデート

ロンドンにあるマグルの世界と魔法界を繋ぐパブ、漏れ鍋。

店内は今日も賑わいを見せており、店主のトムが忙しそうにしている。

もうすぐホグワーツの新学期が始まる時期なので多くの新入生がここを通ってダイアゴン横丁に訪れていた。

トムとは顔見知りの家族に、魔法使いに案内されたマグル生まれ、それに何と云ってもハリー・ポッターが戻って来る。

トムは毎年この時期を楽しみにしていた。初々しい子供たちがこれから成長していつかはこの漏れ鍋の客として来てくれると思うとそれだけで嬉しくなってくる。

そしてまた新しい新入生とその家族が暖炉から煙突飛行粉フルーパウダーを使ってやってきた。

その一団が現れた瞬間、漏れ鍋が静まり返った。

まず現れたのは絶世の美女だった。

頭の前からつま先までどこをとつても人とは思えぬ魔性の美女だった。

その後に続くのは先の美女には劣るが美しい女だった。だが、どこか存在感が希薄で美女の存在に隠れてしまい目に入っているのに認識しづらい女性だった。

更に5人もの女性が後に続く。それぞれ異なるタイプではあったが皆、美しかった。そして最後に、人形のように可愛らしい少女が現れる。

美人だらけの集団が現れれば男たちの視線を釘付けにして黙らせることもあるだろう。

しかし、客の男たちは息を殺して目を合わせようとしない。

本能的にあの女たちに関わつたらいけないと悟ってしまったている。

それとは逆に女たちはまるで目の前に最高の御馳走が用意されたかのように生唾を飲み込んでいた。麻薬に侵されたようにその美女と美少女を食い入るように見つめ続ける。

その女たちはそんな漏れ鍋の空気を感じていないかのようにダイアゴン横丁に向けて移動した。

彼女らが去った後もしくはばらくは緊張状態が続く。

店主のトムは過去にもこれと同じことを体験していた。

(リンリーがまた……！ 急いで知らせなくては！)

トムは急ぎダイアゴン横丁の全ての店舗にリンリー一族来訪の緊急連絡を回した。

~~~~~

グリーンゴッツ魔法銀行でお金を用意してきたリリアンたちはそれぞれの買い物をし始めた。

トムの迅速な連絡により普段のダイアゴン横丁の賑わいはほほなく実質彼女たちの貸し切り状態であった。

今現在店が開いているのはホグワーツ入学に必要な店とリンリー家を受け入れている店ぐらいいである。

「んじゃ、メイとレーナは教科書、リディアとアンはその他の必要なものを買ってきてくれ。」

キャロルは私たちと一緒に着いてきな。買い物が終わったらフロリアン・フォーテスキュー・アイスクリームパーラーに集合な。」

「「「「畏まりました。」」」」

メイド四人はそれぞれ足早に買い物を完了するために行動を開始した。

一人残ったキャロルは護衛を兼ねているため主人であるロザリンド、レイラとリリアンと一緒にだ。キャロルは心の中でガッツポーズをとっていた。

四人は早速マダム・マルキンの洋装店に向かいローブや三角帽などを買いに行く。

店内に入るとちょうど良く誰も他の客はいなかった。

マダム・マルキンがやって来るとすぐにロザリンドとリリアンを目にして熱に浮かさ

れたかのようになる。

「まあまあまあ！　もしかしてロザリンドちゃんかしら！　大きくなつたわね！　こっちは娘さんかしら？　ホグワーツの入学準備ね？　お嬢様、お名前は？」

「お久しぶりだね、マダム・マルキン。この子は娘のリリアンさ。今年からホグワーツなんだ。とびつきりの制服をお願いするよ。」

「初めまして、マダム・マルキン。リリアン・リンリーです。よろしくお願いします。」
スカートをつまんで優雅にお辞儀するリリにマダムはノックアウトされた。

「ええ、ええ！　もちろん！　最高級の生地で最高の制服を作ってみせるわ！　さ、まずは採寸ですね。」

鼻血を職人魂で何とか押さえつけながら採寸していくマダム・マルキン。

普段であれば魔法のメジャーが勝手に採寸していくのだが、こればかりは自らの手でやらなくてはもつたいたいとゆっくり丁寧に採寸していた。

実に通常の二倍近い時間を有して制服やその他の一式を用意したマダム。

だが、出来上がった品の品質で言えば通常の二倍以上のものに仕上がったと魂を賭けられると断言するだろう。

「お待たせいたしました、美しいお嬢様。何か御用があればすぐに駆け付けますので、今後とも御鼻頂のほどよろしくお願いいたします。」

リリはその出来栄えに満足したのか満面の笑みだ。

「ありがとう！ 素敵だわ、マダム。」

リリはマダムの指先に感謝の気持ちを込めてキスをした。

それだけでマダムは代金など不要だと言いつしたが、それではキスがお金と同じ価値になってしまうと言われてしまい引き下がるしかなかった。

リリたちが最後に訪れたのはオリバンダー杖店だ。紀元前382年創業の老舗の杖専門店でホグワーツに通う生徒のほとんどはここで杖を手に入れている。

店主のオリバンダー老にかかればどんな魔法使いであろうともびつたりと相性のあつた杖を選んでくれるのだ。

店内に入ると既にオリバンダー老が待ち構えていた。

「ようこそリリリー家の皆さま。杖の準備は出来ております。」

リリは初めて自分たちの事を恐れない男性に出会った。

なぜ恐れるそぶりを見せないのか、その疑問はロザリンドが答えてくれた。

「オリバンダーのじいさんは別に怖がつてないわけじゃないぞ。ただそれ以上に杖に対しての執着が強いだけだ。ま、こんな人間男は滅多にいないけどな。」

「褒めていただいて恐縮ですな。それではこちらがあなた様の杖になります。」

丁寧に包装がされた真っ白い箱を手渡される。

受け取ったリリは早速箱を開けて杖を使ってみたい衝動に駆られた。

箱から取り出した杖は手に、体にすんなりと馴染んだ。まるで血を分けた肉親の様に。

「その杖は20センチ、材質はセコイア。芯材は代々と同じく先代のリンリー家の者の髪を使用してあります。」

そのオリバンダーの言葉に驚いてロザリンドを見るリリ。

ロザリンドは悪戯が成功した子供のような笑顔になっていた。

「驚いた？ これも一族の伝統ってやつさ。子供が初めて杖を持つ前に杖職人に親が髪を提供してそれを芯材にして杖を作らせる。そんなもって手にするときにはネタばらしてね。私も初めて杖を手に買った時に驚かされたさ。で、どうだい？」

「……うん、しつくりくる。ありがとうママ。オリバンダーさんも。」

上機嫌になったリリはオリバンダーに礼を言う。男に興味がないリリにしては珍しい反応である。そして杖の特性を教わった後に店を後にする。

入学準備が済んだので目指す先はフローリアン・フォーテスキュー・アイスクリームパーラー。入学準備という前座が終わったのでこれからは楽しい楽しい皆でのデートタイムだ。

しかも、ダイアゴン横丁だけでなくノクターン横丁まで合わせた広い場所が彼女らの

貸し切り同然である。更には入学準備のための店以外に開いている店は女性が店主の店だけだ。

楽しみにならないわけがない。

デートの最初は勿論フロリアン・フォーテスキュー・アイスクリームパーラーでアイスクリームを食べることからだ。全員が違う味を頼んで食べさせ合いをして楽しむ基本からスタートだ。

メイドたちはロザリンドとの食べさせ合いを求め、それを当然のごとく全員分受け入れるロザリンド。レイラはそのいつもの光景と傍観していたが、ロザリンドから不意打ちで口移しにてアイスクリームを流し込まれる。

そうしたらメイドたちも我先にと主人のお情けを受けたいと申し立てる。

リリはそれを見ながら自分も将来はああやって多くの女に囲まれながら幸せに過ごすのかなとレーナの膝の上でぼんやりと考えていた。

愛すべきお嬢様を膝上にのせたレーナは鼻血を滴らせながら気絶寸前であった。

その後はロザリンドもしくはリリとのデートをメンバーの組み替えを行って色んな店を見て回った。

服を着せたり、ただ単に店を見て回ったり、お茶を楽しんだりとメイド今日出来ることを心の底から楽しんだ。

ロザリンドはメイドそれぞれの趣味に合わせて行き先を変え不満一つないデートコースを、

リリは逆にメイドにエスコートを任せると言ったまたママとは違ったデートを楽しませた。

そして最後はロザリンドとレイラが二人つきりで夜を楽しむことになったのでリリはメイドを独り占めして家に帰ることになった。

~~~~~

同時刻。

「あれ？ マクゴナガル先生、ダイアゴン横丁でしたっけ？ そこに行くのではなかったのですか？」

「申し訳ありません、ミス・グレンジャー。どうやらダイアゴン横丁でトラブルが発生したようです。また明日でも構いませんか？ 代わりと言っては何ですが魔法界やホグワーツについてお話しておきましょう。」

「ええ、大丈夫です。それより聞きたいことがいっぱいあるんです！」

マグル生まれだからなのか魔法について貪欲に知りたがる少女を見て良い生徒になるだろうとマクゴナガルは思った。



同時に今ダイアゴン横丁にいる存在とは関わって欲しくないと思っていた。

## 4. 運命との出会い

1991年9月1日。

キングス・クロス駅9と4分の3番線。

毎年この日、ここからホグワーツに向けて数多くの子供たちが旅立つ。

特に新入生はこれからのホグワーツ生活に対して希望と期待そしてちよつぴりの不安を混ぜた気持ちで紅い蒸気機関車を見上げ家族との別れをしていた。

しかし、今年はいつもと少し様子が違っていた。

いつもは愛する子供を蒸気機関車が見えなくなるまで見送っていた父親は簡単な挨拶だけで逃げるようにホームから去っていく。

男子生徒は我先にとコンパートメントを確保し窓を開けることさえしない。

逆に母親と女子生徒はある一団を遠巻きにそして食い入るように見ていた。

周りの女性からの視線を集める一団、もちろんロザリンドとリリアンを中心とした女性たちだ。

リリのホグワーツへの旅立ちを前に両親とメイドたちが別れの挨拶をしている。

「リリ、ホグワーツはいいぞ！ どの寮にも良い娘が必ずいる！」

「ロザリンドは少し黙っててください。良く聞いてくださいりり。パートナー探しももちろん重要ですが、勉強も大切です。それ以外にも色々と学ぶことは多いでしょう。頑張りなさい。」

両親に続きメイドたちもそれぞれアドバイスを告げていく。

「ハツフルパフになつたら皆優しいですよ。」メイが自身が所属していた寮について言う。

「私が所属していたスリザリンは嫌われものでした。ですが、お嬢様なら問題ないでしょう。一応スリザリンに所属したらそのあたりは注意した方が良くかと。魔法薬についてはスリザリンの寮監が詳しいので利用するのが良いでしょう。」リディアは寮間の溝について注意を促す。

「勉強について損はありません。賢いことで繋がる縁もあるでしょう。何かあれば私がアドバイスをいたします。」アンは勉強について支援を約束する。

「力はないよりある方が良い。最低限の力はあるべき。お嬢様の身だけでなく将来の伴侶を護る力をつけてください。」キャロルは警護担当らしい助言をする。

「うううううううううう！ お〴〵じよう〴〵ぎま〴〵！」  
レーナロリコンは泣き崩れてアドバイ

「ありがとう！ ママ、お母様、皆！ 行つてきますー！」

最後に皆に熱いキスとハグをして一番最後に蒸気機関車に乗り込む。扉が閉まるまで別れを惜しんだ。

そしてとうとう蒸気機関車はホグワーツに向けて出発した。

「行っちゃったな。」

「ええ。次に会えるのはクリスマスですね。」

「ううううう……。お嬢様……！」

「いつまでも泣いてんな！」

「そうですよ。帰りますよ。」

レーナはこの後無茶苦茶慰められた。

~~~~~

蒸気機関車に最後に乗り込んだリリはコンパートメントを探していた。

どこに入るか悩んでいるが、男がいなくて女の子がいるところならばどこでもいいかなとは思っていた。

とりあえず自身の直感に従ってコンパートメントを決めて扉を開けた。

そこでリリアン・リンリーは運命に出会った。

コンパートメント内には少女が一人だけで本を読んでいた。

少女は栗色のくせつけの髪を持ったちよつと出っ歯な女の子であった。リリが扉を開けたことで本から顔を上げこちらを見て固まっている。目が合った。

その瞬間、リリは股間と子宮にかつてない衝撃が走るのを感じていた。幼き日に聞いたロザリン^マドの言葉が頭をよぎる。

『ママ！ ママはどうやってお母様がお嫁さんだつて思つたの？』

『ん〜？ そうだあ……。色んな娘と付き合つたり寝たりしたけど……。一目見て一発で股間が疼いたのはレイラだけだつたなあ……。母さんや先祖たちの話じゃ生涯の伴侶は股間か子宮が疼いてこの女を孕ませたい、この女の子を産みたいって思つた相手が運命の人らしいぞ。』

そこまで言つてレイラに頭を叩かれるロザリン^マド。

『いくらリンリー家の娘だとしても孕むだの股間だの子宮だの、そこまで言うには幼すぎです。もう少し大人になってからにしてください。』

『ええ〜？ 別にいいじゃん。とにかく運命の人と会つたら体が教えてくれるはずさ！』

（ママはああ言っていたけどこれはマズいわ！ お腹とアソコが疼いてヤバいわ。それに……なんだか顔も熱くなっている気がする。これが一目惚れ、恋なの？）

扉の前でもじもじしながらしばらく立っただけでもコンパートメント内の少女からは何も声をかけられない。しばらくしてようやく少女は落ち着いたリリは恐る恐る声をかける。

「あの、ええと。ここ空いてるかしら？ できれば一緒にいたいだけけれど……。」

その問いかけにようやく少女は反応を返した。

「あ、ええー！ どうぞどうぞー！ ゆ、ゆっくりしていつてねー！」

ぎこちない返事だが一緒にいられると分かるとリリはそれだけで嬉しくなった。

笑顔でコンパートメント内に足を踏み入れた。

~~~~~

ハーマイオニー・グレンジャーは興奮していた。

ホグワーツからの入学案内を手にしてからずっとだ。

初めて魔法を見ることができた。

魔法使いの街で見たことが無いものを見れた。

そしていよいよホグワーツに向けて列車が発車してますます気分が高まる。

これからホグワーツではどんなことを学ぶのだろうか？ それを考えるだけでワクワクしてくる。もう全ての教科書は暗記してしまったし、他にも色んな魔法界の本も読みこんでしまった。それでももう一度確かめるように教科書を開いた。

読み始めてすぐにコンパートメントの扉が開かれた。

そこには天使が立っていた。

比喩でも何でもなくハーマイオニーにはそこにいる存在が天使のように思えた。

(かわいい……。)

今まで頭にあつたホグワーツや魔法についてなど吹き飛んでその少女を見ていた。

しばらく見つめ合っていると声をかけてきた。

その声もまたハーマイオニーの心を震わす。

(なにこれ声までかわいい。え？ このコンパートメントに？ これ夢かしら？)

「初めまして。私はリリアン・リンリー。今年入学するの。リリって呼んで？」

「わ、私はハーマイオニー・グレンジャー。」

「じゃあ、ハーミーね。ハーミーも新入生なのかしら？」

「ええ、そうなの。えつとリリアンと「リリ。」一緒、え？」

「リリって呼んで。ね？」

(ああもう！ 上目遣いだなんて反則よ！ このまま……あれ、なんで私？)

ハーマイオニー・グレンジャーの生来の生真面目な精神がすんでのところで墮ちるのを食い止めた。それでもリリアンの魅力にかなりやられており心は乱れっぱなしであつたが。

「……リリ。これでいいかしら？」

「ええ！ もちろん！ ハーミーは勉強家のね。私はそんなに本なんて読めないわ。」  
「本を読んで知らないことを学べることは楽しいわよ。それにホグワーツではもつと色々と学べるはずよ。」

「私はもつとハーミーの事も知りたいわ。それに私の事も知って欲しい……。」  
隣のすぐ近くに座りじりじりと距離を詰めながらそんなことを言ってくるリリ。

ハーマイオニーの常識はどんどんと崩れていく。頭の中はカワイイやいい香りなんてことでいっぱいだ。

「ホ、ホグワーツに着いてからね！ それよりリリはどの寮がいいかしら？ 私はレイブンクローかグリフィンズに興味があるの。」

「うーん、そうねえ……。可愛い子が多いところが良いんだけどね。」

「もつと真剣に考えなきゃだめよ！」

そんな感じでリリが誘惑しハーマイオニーが耐えるという時間が過ぎていく。

蒸気機関車の旅路も半分を過ぎお昼の時間になった。



互いに持つてきていたお弁当を食べ始める。

「ハーミーのお弁当ってあまり見ないものが多いのね。もしかしてマグル生まれ?」

「ええ。そういうリリは魔法界出身なの?」

「お母様はマグル出身だけどね。ねえ、そのおかず一つちようだい? 私の方も一つあげるから。」

「いいけど。っ!?!」

リリは餌を待つひな鳥の様に口を開けている。どうやらハーマイオニーが食べさせてくれるのを待っているようだ。

フォークでおかずを指してリリの口に入れる。リリはそれを頬張り美味しそうにする。

ハーマイオニーはリリが食べ終わった後のフォークを凝視している。

「はい、私の番。あーん。」

リリも同様にフォークでおかずを差し出してくる。何も考えないようにしながらそれを口で受け取るハーマイオニー。そのおかずは今まで味わったことの無い味がした。

その後も表面上は談笑しながらの食事を続けるがハーマイオニーの頭はパニック寸前だった。

(私の唾液が付いたフォークがリリの口に、リリの唾液が付いたフォークが私の口に!)

唾液交換！ ひ、卑猥だわ！ これはキス!? いえ、それ以上!? お、おとおお、女の子同士だし普通よね!? って普通じゃないわよ!」

ギリギリ理性を保つハーマイオニー。リリは平然としているがハーマイオニーとの行動一つ一つに普段以上の幸福を感じていた。

食事も終えたころ車内移動販売がやってきた。

「お菓子はいかがお嬢さん方。あらあら！ 可愛い子ね！ おばさん、サービスしちゃうわ！」

ハーマイオニーは初めての魔法界のお菓子に驚いたり感動したりしているのを見てリリも嬉しくなる。

ホグワーツまで後一時間ほどまでの距離に来た時二人がいるコンパートメントがノックされた。

返事をするとう級生と思われる女の子が扉を開いてきた。

「あー……えーと変なんだけどね。このコンパートメントの事がずっと気になってて……。うん。突撃してよかった。こんなかわいい子がいるなんて！」

それからは怒涛の勢いだった。

最初に訪れた女生徒からの話が伝わったのか次から次へとリリたちがいるコンパートメントに女子が訪問してくるのだ。

それも面識がある子は一人もない。皆一様にここを気になっていて切っ掛けを待っていたようなのだ。

リリは来訪する女子全てに握手やハグといったスキンシップをしていった。

その様子を見ているハーマイオニーは不機嫌になっていった。

（何よ！ 嬉しそうにして。私と二人でいるよりいいのかしら。わ、私だつて抱きしめたり、膝の上ののせて撫でたり……。だ、ダメダメ！ そんな事友達にすることじゃないわ！）

「あ、そろそろ制服に着替えなきゃ。」

「へあ!? 私外に出てるね！」

「何言っているのよ、女同士でしょ？一緒に着替えましょうよ。」

ホグワーツに到着するまでの時間悶々とした気持ちのままのハーマイオニーであった。

## 5. 組み分け

日が沈みホグワーツ生を乗せた蒸気機関車はホグズミード駅に到着する。  
ぞろぞろと子供たちが降りていく。

リリとハーマイオニーもその流れに沿って降りていくと3メートルはあろうかという大男が声を上げて新入生を誘導していた。

「イツチ年生！ イツチ年生はこっちだ！ ついて来い！」

その大男の案内に従って山道を付いていく。

「さあイツチ年生のみんなホグワーツが見えるぞ。この角を曲がったらすぐだ！」

山道を抜けるとホグワーツが見えた。その圧倒される光景に周りからは歓声が上がっていた。

「綺麗ね！ 私たちあそこで魔法を勉強できるのね！」

ハーマイオニーは興奮しながらリリに話しかける。

コンパートメントでのやり取りから分かっていたがハーマイオニーは本当に学ぶことが好きなのだと確信するリリ。

リリもホグワーツの威容に感動しながらもハーマイオニーとは全く別の事を思っ

いた。

「確かに綺麗ね。あそこでいっばい思い出が作りたいわ。」

その後はボートで湖を移動することになった。

四人一組でボートに乗ることになったが、ハーマイオニーは確定として残り二人はどうしようかとリリは思案していると声をかけられた。

「ねえ？ 一緒に一緒にしてもいい？」

リリが振り返ると黒い瞳に黒い長髪でそっくりな外見をした二人の美少女がいた。

「私、パーバティ・パチル。こつちが妹で」

「パドマ・パチル。よろしくね。」

早速美少女二人とお近づきになれて上機嫌になるリリ。

「私はリリアン・リンリー。リリって呼んで。」

「私はハーマイオニー・グレンジャーよ。よろしく。」

4人はボートに乗り込む。

生徒を乗せたボートはゆっくりと湖を進んでいく。

パーバティはおしやべりなのかリリとハーマイオニーにぐいぐい質問してきた。

「ねえねえ。二人は魔法界出身？ 私とパドマは半純血、パパが魔法使いだっただの。」

グレンジャーって聞いたことないからマグル出身かしら？ あ、リンリーは聞いたこ

とあるわ。何でもすごい美人ばかりだつて！」

「私もリンリーは聞いたことあるわ。パパが止めたせいで詳しくは知らないんだけどね。」

「私の両親は魔法使いじゃないわ。そういう生徒つてあまり多くないのかしら？」

自分の立場が少数の特殊なものではないかと少し緊張するハーマイオニー。

そこにリリが助け舟を出す。

「そんなことないよ、ハーミー。ママに聞いた感じだと結構マグル出身の子はいるみたい。私も半分はマグルの血が流れているしね。それに重要なのは血じゃないと思うの。」

リリはためを作りハッキリと答えた。

「やっぱり女の子は可愛く！ 綺麗！ それが一番重要よ！ その点このボートは最高ね。私はホグワーツに着く前から幸せよ。周りがこんなにかわいい子でいっぱい。」

「でもリリが一番かわいいわよ。ねえバドマ。」

「反論しようがないわね。やっぱりリンリー家つてみんなそうなの？」

「ふふ、秘密。これ以上はもつと仲良くなつてからね。」

その後も四人はガールズトークをして短い船旅を楽しんだ。

やがてボートは鳶のカーテンをくぐり崖にある入り口に入っていく。暗いトンネルの先の船着場に到着し、大きな扉の前まで案内される。

「よし、全員いるな？」

扉を三回ノックし、扉が開くとエメラルド色のローブを着たマクゴナガル教授が待っていた。

その目からいかにも厳しい先生なのだと思新生たちは感じた。

だが、知る人が見ればいつも以上に険しい顔をしていると分かったであろう。

今年は要注意生徒がいるので無理もないが。

「マクゴナガル教授、イッチ年生のみなさんです。」

「ご苦労様、ハグリッド。ここからは私が預かりましょう。」

マクゴナガル教授に案内され玄関ホールを通って小さな部屋に通される。

「ホグワーツ入学おめでとうございます。新入生の歓迎会がまもなく始まりますが、大広間の席に着く前に皆さんが入る寮を決めなくてはなりません。」

寮は全部で四つあります。グリフィンドル、ハッフルパフ、レイブンクロー、そしてスリザリン。どの寮も輝かしい歴史があり、偉大な魔法使いを輩出してきました。

寮ごとに生徒に対しての加点と減点があり期末に最も得点を得た寮が寮杯を手に入れます。くれぐれも軽率な行動はしないことです。それでは準備がありますのでしば

しお待ちを。」

そうやって小部屋を出ていくマクゴナガル。

扉を閉め誰の目がない所に来たとこで体中の力が抜けていくのを感じた。

（心を強く持たねば平常心も保てないとは……。母親ほどではなくとも相当に強い力で。これでは既に近くにいる生徒には影響が……。組み分け後に早急に対策案の修正をしなければ……！）

気を取り直して組み分け儀式の準備を進めるマクゴナガル。

~~~~~

新入生たちは組み分けがどんなものかお互いに様々な憶測が飛び交う。

呪文を使うテストだの、ものすごく痛いだのと現実的ではない意見も多かった。

ハーマイオニーもブツブツと知っている呪文を口になっている。

その間にリリは周りの女の子とどんどん友達になつていつている。

既に新入生の半分、すなわち全ての女子の顔と名前は把握済みだ。

リリが元のハーマイオニーの隣に戻つてくるとまだハーマイオニーはまだ呪文を口にしていた。

自分が戻ってきたのにそれを気付かないのは面白くない。

「えい！」 後ろから思い切り抱きつくリリ。

「きやつ!? え、何? リリちよつと!」

「そんなに心配? 大丈夫よ、頑張り屋さんのハーミーなら大丈夫。だから私を見て?」

「分かったから、大丈夫だから離れて!」

(ううゝ頭にあつた呪文とか飛んで行つちやつた。でもいい匂い……。体も柔らかいし抱きしめられからなのか緊張ほぐれた。わ、私からもお礼にハグした方が良いのかしら……?)

「はい、お終い。大丈夫そうね。」

「あ……。」

名残惜しそうに離れたリリを見る。

そしてその光景を羨ましそうに見る周りの女子たち。

男子は視界に納めないように考えないように必死に組み分けについて話し続けた。た。

しばらくした後、マクゴナガルに呼ばれ、新生は大広間に連れられて行く。

大広間は素晴らしい光景が広がっていた。

何千もの蠟燭が宙を浮き広間を照らす。

中央には大きなテーブルが四つ並んでおり金色の皿やゴブレットが置かれ、上級生が

新入生たちを見ながら座っている。天井には本物の空のように見える魔法がかけられ、星々が大広間の上で輝いていた。

『ホグワーツの歴史』に書かれていた通りね！ 凄く綺麗！』

得意げなハーマイオニーを見てほっこりするリリである。

（夜空も綺麗だけど、やっぱり女の子の方が美しいし好きだわ。それにしてもマクゴナガル先生もカッコイイ出来る女って感じで好みね。美老女も素敵だわ。）

新入生たちが並んで待っているとマクゴナガルが椅子を置き、その上はかなり古くボロボロになっている帽子を置いた。

新入生たちは何が始まるのだろうと思っていると、次の瞬間に帽子が歌い始める。

『わたしはきれいじゃないけれど

人は見かけによらぬもの

私を凌ぐ賢い帽子

あるなら私は身を引こう

山高帽子は真つ黒だ

シルクハットはすらりと高い

私はホグワーツ組み分け帽子

私は彼らの上をいく

君の頭に隠れたものを

組み分け帽子はお見通し

かぶれば君に教えよう

君が行くべき寮の名を

グリフィンドールに行くならば

勇気ある者が住まう寮

勇猛果敢な騎士道で

他とは違うグリフィンドール

ハッフルパフに行くならば

君は正しく忠実で

忍耐強く真実で

苦勞を苦勞と思わない

古き賢きレイブンクロー

君に意欲があるならば

機知と学びの友人を

ここで必ず得るだろう

スリザリンではもしかして

君はまことの友を得る

どんな手段を使つても

目標遂げる狡猾さ

かぶつてごらん！ 恐れずに！

興奮せずに、お任せを！

君を私の手に委ね（私は手なんかないけれど）

だつて私は考える帽子！』

歌が終わると、生徒と教員の全員が拍手をおくつた。

組み分けの方法が帽子をかぶるだけだと知って周りからは安堵の聲が聞こえてくる。

「ABCの順番に名前を呼びます。帽子をかぶつて椅子に座つて組み分けを受けてください。」

「アボット・ハンナ！」

最初に金髪おさげの少女が呼ばれ帽子をかぶり座る。

一瞬の後帽子は彼女の寮を決定した。

「ハッフルパフ！」

その後も次々と名前が呼ばれ各寮に組み分けられていった。

上級生たちはその様子を見守っているが、かなりの人数が一人の少女を注目していた。

女は熱に浮かされたかのように、男は化物を見ているかのように。

「グレンジャー・ハーマイオニー！」

ハーマイオニーの順番になった。

帽子はしばし迷ったようだが、適切な寮を選び出した。

「グリフィンホール！」

ハーマイオニーはグリフィンホールの机に拍手を持って向かい入れられる。

その後も組み分けは続いていく。

しかしリリアン・リンリー、つまりアルファベットのLの順番になってもリリアンが呼ばれることはなかった。

パチル姉妹はグリフィンホールとレイブンクロウにそれぞれ組み分けられた。

そして最後にリリだけが残された。

絶世の美少女が一人、ホグワーツ全ての注目を集め立っている。

好意、恐怖、困惑、羞恥、決意、集められた視線には様々な想いが込められている。

マクゴナガルが名前を呼ぶ前にリリはゆっくりと歩きだし帽子をかぶった。

(ふくむ?) おお、君はリンリー家の者か。どうりで新入生の心が乱れているわけだ。さてどこが良いかのお……。)

(グリフィンドールでお願い。)

(ほう。グリフィンドールを希望かね。……確かに資質はあるが、それで本当に良いのかね?)

(ええ。いい人がいるからね。)

「よかろう……。グリフィンドール!」

その瞬間、大広間に歓声と悲鳴が響き渡る。

グリフィンドールの女子生徒は歓喜し、逆に男子生徒は愕然とする。

他の寮は逆に女子生徒が落胆し、男子生徒が喜びで万歳する有様。

それは寮監たちも同様であった。

フリットウィックやスプラウトは組み分け帽子の判断に喝采し、スネイプは普段見たことの無い笑顔で小さくガッツポーズをしている。

マクゴナガルは……大勢の前だというのに床に手と膝をついて呆然としている。

そんな中リリは悠々とグリフィンドールの席に近づいていった。

すぐにハーマイオニーとパーバティが隣同士で座っているのを見つけてその間に入り込んだ。ちなみに座った席の周りは女子しかない。

「ハーミー、パーバティ、一緒になれたわね。嬉しいわね！」

「私もよ。これから7年間よろしくね。」

「あーあ、私はパドマとは別になっちゃたわ。でもリリがいるならプラスかしらね。」

大広間に続く混乱はダンブルドア校長が鎮め、簡単な挨拶の後にテーブルの上の大皿には多種多様な料理が現れていた。生徒たちはそれぞれ自由に食べ始める。

ホグワーツの料理はどれも美味しくリリは満足であった。

中には海外のものだろう見たことも無い料理までもあった。

「あ、これも美味しい。」

「ねえねえ、リリ。それどんな味？」パーバティも異国の料理に興味津々であった。

「ん〜と、口で説明するより食べた方が速いよね。はい、パーバティ。あーん。」

パーバティは恥ずかしながらも口を開けてリリの持つフォークを受け入れる。

「どう？ 美味しいでしょ？」

「ええ……。」（味なんて解らないわよ！）

それを周りは羨ましそうに見ている。その中でより一層の熱い視線を反対側から感じる。

「ハーミーも一口いかが？ 恥ずかしがらないで、コンパートメントでもやったでしょ？」

「え?! ええと、その……。それじゃあ」

顔を真っ赤にしながらお願いしようかと思っているとダンブルドアが立ち上がりパーティーはお開きとなった。

「残念……。ハーミー、また今度ね。」

ハーマイオニーは今しがたの大勢の前であんなはずかしいことをしようとした自分がどうにかなくなってしまったのかという思いと残念に思っている自分で頭がいっぱいになってしまつて頷くことしかできなかつた。

ダンブルドア校長の注意事項を伝えていた。

「皆お疲れじやろうから手短にしよう。校内の森への立ち入りは禁止。廊下での魔法禁止、クイディッチについてはフーチ先生から詳細を聞くように。」

最後に、とても痛い死に方をしたくない者は、今年は四階右側の廊下は入らないようにすることじゃ。それでは解散! 就寝! 良い夢を!

いつものおちやめな様子はなく早口で伝えることだけ伝え、足早にその場を後にした。

生徒たちは各寮の監督生に連れられてそれぞれの寮に向かつていった。

リリたちグリフィンドールの新入生もホグワーツ城で最も高い8階の東塔に案内される。その後は数人ずつの部屋割が知らされた。

リリは誰と一緒にかなと期待していたが、部屋割りを見た瞬間今日二番目の衝撃を受けた。

おかしなことにリリは一人部屋であったのだ。

リリが監督生に尋ねると人数のせいでのようになってしまったとの事しか分からないようだ。

なつてしまったものは仕方がないと気持ちを切り替えることにした。

(一人ということとは出入りも自由。誰を連れ込んでも良いし、逆に他の部屋もしくは他の寮にも簡単に行けるということじゃないかしら? ……良いわね!)

とりあえずパジャマに着替えたリリはハーマイオニーとパーバティ、それにもう一人ラベンダー・ブラウンの三人部屋に突撃した。

「来たわよ!」

「リリ!?!」

「あらあら噂をすれば。」

「すごいタイミングだね。」

「何々? どんな話をしてたの?」

「えつとね、ハーマイオニーが羨ましいって話。」

「私からしたらパーバティもよ。何よ、ボートが一緒に席も隣って!」

「ちよつと!？」

早速三人は仲良くなっているようでこちらも嬉しくなってくる。

「ガールズトークね！ 私も混ざりに来たのよ。今日は一緒に寝ましょう？」

「是非！」

「わ、私は明日からの授業があるから、もう寝る！ おやすみなさい！」

ハーマイオニーはベッドに潜ってカーテンを閉めてしまった。

「照れてるハーミーもかわいい……。じゃあ三人でベッドで楽しみましょう。」

こうしてホグワーツ最初の夜は更けていった。

6. 最初の授業

朝日が昇る。ホグワーツはまた新たな一日を迎えた。

昨日からホグワーツの一員になったラベンダー・ブラウンは窓から差し込む陽の光からすっかり朝が来たことを感じ取った。

朝だとは分かったが未だに頭はぼんやりしたままだ。

とりあえずは体を起こそうとするが右腕に違和感がある。

横を向く。右手は天使による祝福がなされていた。

まだ十年と少ししか生きてはいないが、それでも確信を持つて言える。

(今朝は人生最高の朝ね……。)

ラベンダーの右腕には魔法界で最も尊い生き物が抱き着いている。

これを振りほどいてまで起きる気にはなれない。だが、興奮と幸福で二度寝することできそうにない。とりあえず天使の寝顔でも見て癒されようとする。天使の向こうの少女と目が合った。

「おはよう、パーバティ。」

「おはよう……。ねえラベンダー、これ夢じゃないわよね。」

パーバティは自分の左ですやすや眠るリリアンを見て現実を確かめていた。「頬をつねる?」「遠慮するわ。」

二人はリリアンが起きるまで寝顔を堪能することを言葉を介さず決めた。その後、リリアンが起きるまで幸せ空間は続いた。

~~~~~

ホグワーツ新一年生。グリフィンドル所属のハーマイオニー・グレンジャーはまだ人がまばらな大広間で朝食を食べていた。

こんなに早い朝食になったのには理由がある。

一つは今日からの授業が待ちきれなくて急いで食べて授業の予習をするためだ。

もう一つは、単純にあまり眠れなくて早くに目が覚めてしまったからだ。

平和だが面白くないマグルの世界から未知と想像以上のもので満ちた魔法界にやって来たからには興奮しないわけがない。

だが、それよりも隣のベッドで眠っていた存在が彼女の心を乱していた。

リリアン・リンリー。

ホグワーツ行き列車で初めて見た時から心は乱れまくっていた。

決して不快ではないのだが……、それでも未知の感情でハーマイオニーはいっぱい

いっぱいであった。

リリが隣でルームメイトと寝ている。それを想像するだけで、自分がそこにいると考えるだけで、様々な想いが脳を駆け巡る。

(ああ……。私も一緒のベッドだったら……。寝顔もきつとカワイイはずよね。)

何度目か分からない溜息を吐く。

そうこうしているとぞろぞろと生徒たちもやって来る。

食べ終わった自分はそろそろ教室に行こうとすると大広間の入口で何やら言い合いをしている集団があった。

どうやらグリフィンドールとスリザリンの女生徒達らしい。

先輩の話ではよくあることなので放っておこうとしたが、その中心にいる存在を見て驚くことになった。

~~~~~

リリアン、パーバティ、ラベンダーが起きて朝食に向かったのはちようどいい時間であった。

リリは普段から目覚ましが無くてもちようどいい時間に起きられる体質であった。

授業の準備をして大広間に向かう。ハーマイオニーとも一緒に行きたかったのだが

先に行ってしまったようだ。

部屋から出て談話室に降りると男子は一人もいなかった。

代わりに女子生徒が大勢待ち構えていた。

同級生だけでなく2年生から最上級生まで勢ぞろいだ。

「あー、来た来た！ おはようリリちゃん！ これから朝食よね!? 一緒に行こう！」

上級生の一人が代表として話しかけてきた。美人のお姉さまと言った雰囲気だ。

「ええ、もちろん。行きましようお姉さま。」

断る理由がないリリアンはそこにいた一団と一緒に大広間に進む。

その間に上級生の顔と名前をぼつちり記憶し親密になつていくことも忘れない。

大広間の扉まで来たところとある一団が待ち構えていた。

新入生の顔からその一団がスリザリンだと即座に分かった。

「グリフィンドール！ リリアン・リンリーをこつちに引き渡してちょうだい！ 彼女は

スリザリンにこそささわしいわ！」

上級生のスリザリン生がそう言い放つ。

それを皮切りにお互いが罵声を浴びせ始める。

リリアンはそれを聞きながらちよつと面白がっていた。

（リディアが言っていた寮間の溝つてこれかあ……。でも彼女は渡さない！ つて感じ

で取り合われているのは何となく面白いわね。」

戦いはヒートアップし続けている。そろそろお腹も食物を求めているので仲裁に入る。

「はい、そこまで！ 喧嘩はダメよ。みんな仲良く！ 昨日はグリフィンドールと仲良くなつたから、今日はスリザリンとご一緒しようかしら。もちろんハッフルパフとレイブンクローともいずれね。」

喜ぶスリザリンと落ち込むグリフィンドール。

グリフィンドールの女生徒たちにハグをして納得してもらいスリザリンのテーブルで朝食を楽しんだ。

同じ一年生のパグ犬顔のパンジー・パーキンソン、ミリセント・ブルストロードとダフネ・グリーンングラスとは仲良くなれた。特にダフネはリリの好みに高得点だ。

スリザリンは貴族が多いからか礼儀正しくグリフィンドールとはまた違って楽しめた。

グリフィンドール生なのに敵対する悪しきスリザリンと楽しそうにするリリアンを見て一部のグリフィンドール男子が敵愾心を抱いていた。

くくくくく

グリフィンドールの初日の授業は寮監のマクゴナガルが担当する変身術とフリッツウィツクの呪文学にスネイプの魔法薬学である。

最初の変身術の教室に行くのには特に苦労なかった。

新入生たちは通常であれば動く階段や様々な仕掛けを身を持って体験してホグワーツを知ることになる。だが、リリアンは上級生たちに可愛がられることで丁寧に案内されたのだ。

更にレイブンクローの先輩からホグワーツの注意点をまとめたメモまで貰ってしまった。

リリアンと連れ立っていた女子たちが教室に入るとマクゴナガルの姿はなく、トラ猫が教壇の上に座っているのみだ。

生徒はハーマイオニーがいるだけで他の生徒、つまり男子は誰も到着していなかった。

リリアンは迷わずハーマイオニーの隣に座った。

「ハーミー、おはよ。」

「おはようリリ……。ねえ、さつき大広間でスリザリンのテーブルで食べてたわよね。……リリはスリザリンでもいいの?」

「スリザリンに限らずどの寮の娘とも仲良くなりたいわね。」

「……ふーん……。」

ハーマイオニーは誰でもいいというリリのスタンスにちよつぱり機嫌が悪くなった。どうしてそんな気分になるかは分からないが、とにかく嫌だった。

生徒が全員揃うと教壇の上の猫がマクゴナガルの姿に戻り、その変化に生徒が驚く中マクゴナガルは授業の注意を話始める。

「最初に警告しておきます。変身術はホグワーツで学ぶ魔法の中で最も複雑で危険なものの一つです。ふざけた態度で私の授業を受ける生徒は出て行ってもらいますし、二度とクラスには入れないと思ってください。」

授業は変身術の実演を見せ、理論を教えるからマツチ棒を針に変える課題をすることとなった。

今まで魔法を使用できなかった生徒たちは悪戦苦闘である。

リリアンも上手くいかず既に半ば諦めていた。

隣のハーマイオニーはどんな感じかな？ と見てみるとマツチ棒は見事な銀色の針に変化していた。

「ハーミー凄い！ 先生、皆見て！」

「どれどれ。初めてにしては素晴らしい出来です！ 皆さんミス・グレンジャーを手本に頑張りなさい。」

褒められ顔を赤くするハーマイオニー。

「ハーミー、コツ教えて。」

「ええ、良いわよ。えっとね、まずは」

教えるために必然距離が近づく二人。その肩がくつつくかというほどに近づいた様子を見ていた女子たちは嫉妬や自分もリリアンに教えられるように全力で魔法に取り組みだした。

最終的にほぼ全ての女子が変身させることに成功していた。

次の呪文学の授業はレイブンクローとの合同授業であった。

授業内容は初歩の呪文の講義と実習だったが、ここでもハーマイオニーが活躍した。

それを見て目を輝かせるリリを見てハーマイオニーに負けなように勉強することを誓った女子一同であった。

特に勉学に熱心なレイブンクロー生は大いに刺激を受けていた

初日最後の授業、魔法薬学。

場所は薄暗い地下牢でスリザリンとの合同授業であった。

グリフィンドールとスリザリンが敵対していることから席は真つ二つに分かれてい

た。

そして今年はいつもの対立だけでなく宝の取り合いまで起こる。

女子たちはリリアンを自分たちの側に引き込もうと舌戦を繰り広げ、男子は逆にこつちに来ないで欲しいと祈るしかない。

それはスネイプが来るまで続けられた。

「静かにしてさっさと席に着かんか。グリフィンドール1点減点。……スリザリンも同様だ。」

誰もが前評判で聞いていたスリザリン鼻屑とは違いスリザリンからも減点したことに地下牢がざわつく。

スネイプはそんな事を無視して出席を取って魔法薬について語りだした。

「このクラスでは杖を振り回すようなバカげたことはやらん。それが魔法なのかと思う者が多いかも知れないが、沸々と揺れる大釜、立ち上る湯気、人の中をめぐる液体の繊細な力は人の心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力となる。君たちがこの技術を真に理解することは期待していない。私が教えるのは名声を瓶詰にし、栄光を醸造し、地獄の窯にさえ蓋をする方法である。もつとも、私がこれまでに教えてきたウスノ口たちより君たちがマシだったらの話だが。」

演説を終え生徒たちは静かになる。

「ポッター!!」

急にスネイプが声を張り上げた。

「アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えると何になるか?」

ハリーは全く分からないのか何も答えられない。もちろんリリも同様だ。

ただハーマイオニーの手だけが天高くまっすぐと伸びていた。

「ポッター。もう一つ聞こう。ベゾアール石を見つけて来いと言われたら、何処を探るかね?」

「更に一つ聞こう。モンクスフードとウルフスベーンとの違いは何だ?」

ハリーはどれの質問にも答えられない。

ハーマイオニーは手を上げ続けていたが、スネイプは無視し続けていた。

「そのハーマイオニーなら答えられると思うので、彼女に質問したらどうでしょうか。」

だが、スネイプはなおも無視し続ける。

スネイプがグリフィンボールを嫌っていることは知っていたがあまりに度が過ぎる。

ハーマイオニーの目にはうつつすら涙がにじみ始めていた。

『女の子を泣かせた罪は何より重い。そんな奴には遠慮するな。』

ロザリンドの言葉を思い出す。初日だろうが教師だろうが関係ない。

「セブルス・スネイプ先生。」

一言、名前を言っただけ。だがそこにはたつぷりの恐怖をのせている。

地下牢の男たちは一瞬息をするのを忘れるほどであった。

スネイプも硬直しリリアンを見る。

「なぜ、ハーマイオニーを無視するんですか？　個人的にグリフィンドールが嫌いというだけなら謝罪してください。」

恐怖がますます強まる。

スネイプは憎き敵の子が目の前にいることでやりすぎてしまったことを自覚した。

リンリーがいる場所で女生徒をないがしろにしてしまった。

かつてのトラウマが刺激される。

「……すまない。それでは、グレンジャー答えなさい。」

「は、はい！」

ハーマイオニーは見事全部の質問を的確に答え、グリフィンドールに1点だけだが点数が入った。これにはスリザリンも優秀であると認める生徒が現れた。

その後は簡単なおどきを治す薬の調合をすることになった。

リリとハーマイオニーはペアを組んで作業をする。

リリは楽しそうに、ハーマイオニーは正確に測り取りながら作業を続ける。

「リリ、さつきはありがとう。正直あのままだったら泣いちやったかも。リリは強いからね。私はあんな風に先生に言えない。」

「ハーミーは皆ができなかったことをしたんだから当然のことよ。あのねっとり髪が全部悪い。それにハーミーは私にはないものをたくさん持つてる。逆もそう。まだまだホグワーツは始まったばかりなんだから頑張りましょう。」

男子の誰かの鍋が爆発するというハプニングもあつたがほぼほ順調に授業は進んでいった。

授業初日が終わりホグワーツには新たな話題でもちきりだった。

『スネイプがスリザリンから減点した。更にはグリフィンドールの加点までした』

『スネイプがグリフィンドール女子に頭を下げた!』

『リンリー怖い』

『リリちゃんマジ天使』

大体がリリに関する話題であつた。

こうして男子たちからは恐れられ、女子は魅了される教師が恐れる通りのホグワーツがスタートした。

7. 飛行と非行

授業が始まって数週間が経過した。

その間にリリはホグワーツの全ての女子生徒と友達になり多くの女子に愛をささやいていた。

グリフィンドールは同じ寮であるから当然として、同学年は合同授業で、上級生は毎朝の朝食を違う寮のテーブルで食べることで徐々にその影響を強めていった。

それでも未だにハーマイオニー以上に体が疼いた女の子には出会えていなかった。

そしてそのハーマイオニーとは進展せずに友達止まりである。

授業や部屋、その他一番距離を詰めてはいるのだが、予想以上に抵抗が強い。

最後の一線がなかなか超えられないのだ。

そんな距離をリリは不快には思わずこの何とも言えないヤキモキした感じを楽しんでいた。

逆にハーマイオニーは毎日近くに来るリリから距離を取ろうとするが上手くいかず結局は流されてしまっていた。

リリの周りの女の子たちはリリからの一番の愛を受けているのにそれを受け入れな

いハーマイオニーを恨めしく思ったり不思議がつていたりしていた。

そして一部女子は成績優秀なハーマイオニーがリリのお気に入りなんだと思ひ込みハーマイオニーに負けないように勉強に励むようになっていった。

ちなみに、男子生徒には授業が始まってから最初の休日にリンリー家に対する特別補習が実施されていた。そのためリリを中心としたグループには決して触れないようにしていた。

それでもグリフィンドールのリリがスリザリンと仲良くすることでスリザリンの男子は快く思っておらず、またグリフィンドール男子もリリを裏切り者とみなしていた。もちろん声に出すことは決してなかったが。

~~~~~

その日朝食に向かうと何やら人だかりができていた。

どうやら飛行訓練が開始されるらしい。

「飛行訓練かあ……。箒って苦手なのよね。」

「リリちゃん！」

「それならば！」

「私たちにお任せを！」



そうやってきたのはグリフィンドルクイディッチチームのアンジェリーナ・ジョンソン、アリシア・スピネット、ケイティ・ベルのチエイサー三人娘であった。

同じグリフィンドルだからそれなりに接点はあるのだが、鬼のキャプテンオリバー・ウツドの練習のせいではなかなか親密度を上げられないと嘆いており、このままではチームを抜けるしかないか、いやそれだと試合でカツコイイところを見せられないとかなり悩んでいたのだ。

そこに箒が苦手だという情報が舞い込んだ！

「私たちが練習した後で良いなら教えてあげる！」

「そうそう！ お姉さんたちに任せなさい！」

「もちろんウツドとかには邪魔させないよ。」

「是非教えてください。手取り足取りじっくりと……ね。」

三人娘は歓声を上げるが即座に他の寮のクイディッチチームに所属している女子たちも集まってきた。

結局はいつもの様に順番に教えてもらうことになってしまった。

朝食時間の大広間でも一年生の飛行訓練が開始することからそこから中で箒だのクイディッチだのといった話題でもちきりであった。

今日はグリフィンドールのテーブルで食べる日であつたので必然的にハーマイオニーの隣に座るリリ。

ハーマイオニーは既に食べ終わっていたが箒についての本に集中していた。

「ハーミー、そんな本読んでたつて実践してみないと分からないんじゃないかしら？」

「でも、読んでないと落ち着かなくて。ええと箒の握りは……。」

「ほんと、何でも熱心ね。そういうところも好きよ。」

「っ!? いきなり何言うのよ!」

「好き、大好き。こういうのは言葉にしなくっちゃね。」

「リリは誰にでも言いすぎ! もっと私だけに……。」

最後の方は消えるような声だつた。そして逃げるように走つて授業に行つてしまつた。

~~~~~

飛行訓練はグリフィンドールとスリザリンの合同で行われた。

既にリリが箒が苦手であるという情報は伝わっていたのでスリザリンのお金持ちたちが初心者向けの箒をプレゼントしたいなどと詰め寄つて来る。

せっかくの好意を断るのも悪いが箒は一本あれば十分だということでスリザリン女

子一同から箒をプレゼントしてもらったことになった。

そうしていたら担当のフーチ先生が現れた。

「何をボヤボヤしているんですか！ みんな箒の傍に立って！ さあ早く!!」

リリの周りにいた生徒たちは慌てて箒の横に走っていく。

「右手を箒の上に突き出して！ そして、『上がれ』と言う。」

どうやら授業は箒を手にとるところから始めるらしい。

みんなが次々と上がれと唱え箒を手にとろうとする。

自信ありげに自慢していたうざったい青白い男子やメガネのグリフィンドール生は一発で箒をキャッチしている。

ハーマイオニーはころりと転がっただけで上げるまでに時間を要しているようだった。

他の生徒も似たり寄ったりで一回での成功は極少数だ。

リリも何度か目でようやく手に箒を収めることに成功していた。

その後は握り方や跨り方についてのレクチャーが行われたがリリに対しては必要以上丁寧に教えてきた。鷹の様なフーチの目がまるで獲物を狩る目をしていてちよつとぞくぞくしたりリリであった。

「さあ、私が笛を吹いたら地面を強く蹴るんですよ。箒はしっかり持って、数メートル浮

上して、前かがみになってすぐ下りてきてください。笛を吹いたらですよ？ 1、2の……。」

フーチ先生が笛を吹く前に、物凄い速度で浮上する影が一つ。

どうやら誰かが焦って先に地面を蹴ってしまったらしい。

「くらー！戻ってきなさいッ！」

丸っこい顔の男子が急上昇していく。

これが女の子であったなら即座に助けに行くところであるが男子なので特に気にもしない。

意識から外していると男子生徒は墜落して怪我をして医務室に連れていかれていた。

その後はスリザリンとグリフィンドールの男子たちで何やらもめていた様だ。

そして二つの影が空に向かって上がっていった。

そんなどうでもいいことに興味も持てないリリはハーマイオニーと楽しむために近づいていったが、どうやらハーマイオニーはご機嫌斜めな様子。

「まったく、もう！なんであんなことするのかしら！これじゃ減点だわ！」

「どうしたのハーミー？」

「どうもこうもないわよ！フーチ先生の言いつけを破ってポッターが箒で空に！」

「ポッター……？ ああ、そんな男子もいたわね。あの空を飛んでいるのがそんなのね。そんなのどうでもいいじゃない。」

「……本当にリリは男子に興味がないのね。そんな事より速く止めさせないと！」

このままじゃ、魔法を使っても止めかねないと思ったりリリはハーマイオニーをなだめる。

「ハーミー、落ち着いて、ね。ここであなたが責任を感じる必要なんてこれっぽっちもないわ。悪いのは全部馬鹿な男たち。あなたは何一つ悪いことしてないわ。それにグリフィンドール一年生の点数の大半があなたのものよ。もつと自信をもつても良いぐらいよ。」

「リリ……。」

いい雰囲気になるが周りの男子の歓声で妨害される。

どうやらメガネの……ポッター？ が何かしたらしい。

その後、いきなり現れたマクゴナガル先生にメガネが連れて行かれるなどあったが無事飛行訓練は再開された。

~~~~~

その日の夕食時。

レイブンクローのテーブルで夕食を楽しんでいたらハーマイオニーがスリザリンとグリフィンボールの男子が言い合っていた所に向かっているのが目についた。

ハーマイオニーがグリフィンボールの男子に何か話しているようだが、遠目から見ても険悪な雰囲気であることが分かる。

リリは食事を中断してハーマイオニーのところに向かった。

近づくにつれハーマイオニーの声が聞こえてきた。どうやらまた何か男子が悪さをしようとして止めているようだ。

メガネの男子が「大きなお世話だよ。」なんて言葉をお口から出した。

「あなた達、何なの?」

リリは自身の呪いを意図的に強めてメガネと赤毛を見る。

「ハーマイオニーはグリフィンボールの事やあなたたちのことを思って忠告してあげてるのにそれを無視するの? どうせくだらないことなんだから止めて欲しいわ。あなたたちのような存在のせいでハーマイオニーが体調でも崩したらどうするの。」

「う、うるさい! 君たちには関係ないだろ?! さっさとどっか行け!」

「そ、そうだ! この異常者! 僕たちなんかより悪の魔法使い予備軍のスリザリンなんかと仲良くしているお前の方がよっぽどグリフィンボールの迷惑だ! ひいつ!」

リリの呪いだけでなく大広間中の女子が一斉に発言主のロン・ウィーズリーを見てい

た。

その目には敵意を通り越して殺意が込められていた。

殺気を感じたロンはホグワーツに入学してから最初の休みに実施された男子限定特別補習を思い出していた。補習内容はこのようなものだった。

1. リンリー家に恐怖するのは男性なら当然なので出来るだけ関わらないようにすること。

2. 恐怖を強く感じたら距離を取ること。酷ければ保健室に行くこと。

3. 決してリンリー家を怒らせてはならない。特に女性を侮辱してはならない。端的に言えばリンリー家から関わるな、離れる、怒らすなどということであった。

「あ、あ……。いや、その、ごめんなさいリリアン・リンリーさん！ とにかくグレンジャー！ お前は余計なお世話なんだよ！ 行こうハリー！」

二人は寮に全速力で逃げかえった。あのままあそこにいたらどうなっていたことか。嫌な想像はさっさと忘れるにかぎる。二人はマルフォイをどうやって倒そうか考えることに頭を使うことにした。

「やっぱ男はダメね。さてと、ハーミー行きましょう。」

「え、行くってどこに？」

「私の部屋。あんなのを見てたらムカムカしちやつて。これからハーミーといっぱい過ごして癒されなくっちゃ！」

リリアンはハーマイオニーの手を引つ張つて寮の自室に戻つていく。

ハーマイオニーは言葉では抵抗するが体は全く拒否することなくリリアンに連れられて行かれる。

塔に上り太った婦人の肖像画を超えてリリの自室に到着するころにはハーマイオニーの心臓は全力で走つた後の様になっていた。実はリリの部屋に入るのはこれが初めてであった。

(ここがリリの部屋……。リリらしさが出てるといふか、カワイイ部屋……。リリの香りも強くてくらくらしてくる。はっ、私臭くないかしら!?) 今日(今日は飛行訓練で汗かいたし!)

「ほらほらハーミー入つて来て。お菓子もいっぱい用意してあるしいっぱいおしゃべりして楽しみましょう。今日は朝までずっと一緒よ。」

ベッドに座つて隣をポンポン叩いて座るように促す。

ベッド、朝まで一緒、楽しむ。これらのワードからハーマイオニーの脳内で桃色の妄想が始まつてしまうが、室内に充満した濃厚なリリの香りと強めてしまった呪いがハーマイオニーの思考を鈍らせる。



そのままリリの隣に座るといきなり抱き着かれてベッドに押し倒された。

「リリ!? ちょっと待って、せめてシャワーぐらい。いやそもそも私たちまだ……。」

「ハーミー。好きよ。大好き。でもハーミーが嫌がることはしたくないの。」

ハーミーは私の事……好き? それとも嫌い?」

「わ、私もリリの事は好きよ。で、でもそれって友人としてなのか、恋人にしたいってことなのかまだわからないの。いやそもそも女同士だし、私ってこういうことって全然わからないの。でも! リリとこうしているのはすつごく胸がドキドキするけど……嫌じゃないわ。」

二人は見つめ合う。

たつぷり一分ほどはそうしていただろうか。

「ふふふ、私のどんなところにドキドキしたの?」

「え! えっと、秘密よ!」

「えく。まあ良いわ。今日は一緒におしゃべりとか同じベッドで寝るぐらいでそれ以上はするつもりはなかったし。」

「え……。」

「だってハーミーとは一緒にベッドで寝ようって言っても逃げちゃうし。今日はハーミーが私を独占ね。ハーミーが思うようなのはもっと好きになって恋人同士になって

からね。」

その後は気を取り直して日常の事、友人の事、趣味、授業、色んな事を話しあった。お互いに知らなかったことを多く知ることができた。一つ仲が深まった。

シャワーを浴びてパジャマに着替え同じベッドに潜る。

ちなみにシャワーは一緒に浴びようって誘ったが真つ赤になつて断られてしまった。

「勉強だけじゃなくてこうやって一緒に話すだけでも有意義でしょ？ お互いに多くの事を知れたのはいいことね。」

「でも同じベッドで寝なくても……。」

「距離が近くなるのはいいことよ。それじゃあ、おやすみ。いい夢を。」

リリはハーマイオニーの頬に軽くキスをして目を閉じた。

ハーマイオニーはあまりの衝撃で動きが止まってしまったがこれぐらいいいだろう。

ぶつちやけこれでもかなり我慢しているのだ。

隣に運命の人がいるというだけでいつも以上にぐっすり眠れそうだなと思いつつ、思考は夢へと沈んでいった。

ハーマイオニーはしばらくして意識が復活したが既にリリは眠ってしまったっており、何もうことでもできずドキドキしながら数時間も眠ることができなかった。

## 8. 記念日はハロウィーン

リリはハーマイオニーと初めて一緒に朝を迎えた。

二人の距離は大分近づいたが、最後まで心を許していないのかまだハーマイオニーとはほんの少しだけ距離を感じる。

それでもこうして一緒に着替えて身支度をして朝食に向かうだけでとても気分がよい。

周りも空気を読んだのか二人だけで大広間に到着した。

そこではちよつとした騒ぎが起こっていた。

なんとグリフィンドールの得点を示す真紅のルビーがごっそり100点分は減っていたのだ。

「おはよう。何々？ どうしたの？」

「あ、おはようリリちゃん。これ見てよ！ 100点も減点されて私たちが最下位だよグリフィンドール

！ 何でもハリー・ポッターとウィーズリーの末弟が馬鹿をやらかしたらしいの。」

「そうみたいなの。昨日その彼女が忠告したつのにね。あーあ、これで一位がスリザリンかあ。」

集まっていたスリザリン生以外は皆一様に文句を言っていた。

そして煽り始めるスリザリンの男子生徒<sup>馬鹿</sup>。

そんな場にハリー・ポッターとロン・ウィーズリーが現れた。

大広間の全ての目が一齐に向けられる。

男子さえ当のハリーとロンに厳しい目を向けている。

そして始まる避難の嵐とスリザリンからの称賛。

「やっぱり止めた方が良かったのかしら?」

「わざわざあんなのと関わる必要なんてないわ。せつかくのハーミーの良さが損なわれちゃうじゃない。ハーミーは今そのままが良いわ。」

それからは大きな変化もなく毎日が経過していく。

リリとハーマイオニーとの距離もゆっくりだが確実に縮まっている。

週の内半分はどちらかのベッドで一緒に寝ているし、ハーマイオニーが授業で成功するとリリにご褒美を求めてくることもある。

そんな様子を見て悔しい、羨ましい、妬ましいという感情を持つ女生徒たちもいるが大半が諦めていた。

確かにリリは自分たちの事も愛してくれている。だがそれでも特別なのは彼<sup>ハーマイオニー</sup> 女なの

だ。リリのおんな顔を見てしまつてはどうしてもそれが分かつてしまう。

自分たちは二番手三番手でもいい。それでも愛してくれさえいればそれだけでいいのだと。

女子たちがそんな考えになつてしまうほどにリンリーの魅了呪いは浸透していた。

~~~~~

それからしばらく経過し、10月末。

ハロウィンがやつて来た。

朝からかぼちゃとお菓子の香りでホグワーツは満たされていた。

別にハロウィンだからとはいえ授業が行われることは変わらない。

いつもの様に大広間で朝食を食べているリリ。今日はスリザリンのテーブルである。

ハロウィンだからか、いつもは比較的落ち着いているスリザリン生達もどこかそわそわした感じをして落ち着いていなかった。それが顕著だったのは女子たちだ。

リリの隣に座つていたダフネが唐突に叫ぶ。

「リリ！ トリック or トリート！」

そこまで大きな声ではなかったが、大広間中になぜか広がり静かになる。

「あらダフネ、いきなりね。うん……でも困つたわ。今お菓子の持ち合わせがないの

よ。

「私は何をされちやうのかしら？」

リリはダフネに向けて両手を広げて何でも受け入れるといった態勢になる。

ダフネも勢いに任せて言ってみたはいいがまさか上手くいくとは思っていなかったのか数秒固まる。

解凍したダフネは両手でリリの顔を包みその柔らかな頬をこねくり回すという悪戯なのか何なのか謎の行動に出た。

リリの顔は手の動きに合わせてムニユムニユと動くがそれすらも可愛いと思えてしまふ。

（や、柔らかか……！ え、なにこれなにこれ！ コレほんとに人の肌!? 触ってるだけで幸せなんだけど！ ヤバい魔法薬の原料になったりしそう！）

「ダ、ダフネ。そろそろ放してくれないかしら？」

「え、あ、っそそそうね！ ありがとうございまして！」

手をゆっくり放したダフネはじーっとその手のひらを見つめ続けていた。

そして静まり返っていた大広間の時が動き出す。

「ちよちよちよちよつとダフネ！ ずるいわよ！」

「そうよそうよ私たちだつて！」

「リリちゃんの頬……。」

「リリちゃんのあの感じ、まさか何してもいいの!？」

「ちよつとスリザリン! リリちゃんに何するつもり!？」

「リリは私たちグリフィンドールのよ!」

「今日の授業は確かレイブンクローと合同授業があつたはず。よし。」

「一年生はそれとして、私たちはこの『リリちゃん行動分析表』から最適な場所と時間を
選択しましょう。」

「はわわわ。どどどどうしましょう。」

「落ち着くのをよ。で、リーアンどうしましょう!？」

「落ち着くのはあなたもよ。さて行つてくる!」

「抜け駆けだー!」

大混乱に陥る大広間。

教師たちが総出で鎮静化させるも、落ち着くまで相当の時間がかかってしまい一限目の授業は半休となつてしまった。

その後も授業の合間の移動中の廊下や授業中の隙にいかにしてライバルを出し抜いてリリにトリックortトリートを宣言するか女同士の争いが勃発していた。

廊下では寮の仲間と連携して相手の寮を抑え込んだりといった協力もしながら、い

ざ邪魔な他の寮生を排除したら即座に先ほどまでの戦友が敵となっていた。

ちなみにグリフィンドール一年生女子は有利すぎるということで公平に限られた人数のみが権利を得られるようにくじ引きにて決まった。

そんな混沌としたハロウィーンな為廊下ではいつも以上に魔法が使われ減点、罰則者が続出していた。

それを見ていたホグワーツ一の悪戯小僧のウィーズリー双子は落ち込んでいた。

「兄弟、これじゃ俺たちが何かしても誰も見てくれやしないじゃないか。」

「ああ、兄弟。俺たちが悪戯したところでバレもせず罰則も何もなないなこりゃ。」

~~~~~

熾烈な廊下でのやり取りの後の2限目の授業は呪文学であった。

今日の授業内容は物を浮かす魔法だ。今までの魔法と比べて分かりやすく魔法的なのでワクワクしている生徒が多い。

フリットウィックは生徒を2人ずつ組ませて練習させることになったが、先ほどの騒ぎからリリと女子をペアにしてしまうとまた暴走が起きる危険性を考慮して男女のペアになってしまった。

これには全員が不満そうだったが、渋々受け入れるしかなかった。



くじ引きの結果リリのパートナーはネビル・ロングボトムに決定した。

女子からアバダケダブラ級の視線と男子からの生贄の羊を見る哀れみの目を向けられたネビルは亡者と変わらぬ酷い顔である。

「……よろしく。」

「ほひゅっ……。」

女子と組めなくて不機嫌なりりの顔を見てしまったネビルの意識は途絶え、授業中意識を取り戻すことはなかった。

結局リリはフリットウィックから直に教わることになる。

「皆さん、呪文はウィンガーディアム・レヴィオーサー。杖はこう、ビューン、ヒョイですよ。」

それぞれのペアが白い羽を浮かすために取り組み始める。

何人かの女子は成功していたが、なかなか浮かかなかつたり、なぜか燃えてしまったりなど予想外の事が起こっていた。

リリはハーマイオニーの方を見ると運が悪いことにあのロン・ウィーズリーとペアになっていた。

真面目が過ぎるハーマイオニーとそれを良く思っていないウィーズリーの間は早速険悪な雰囲気になっている。

「言い方が間違っているわ。ウイン・ガー・ディラム・レビ・オー・サ。『ガー』と長く綺麗に言わなくちゃ。」

「そんなによくご存じなら、君がやってみようっ！」

溜息をつきながらハーマイオニーが杖を振るうと、羽は机を離れ頭上二メートルぐらゐの所に浮かび上がった。

そのできにフリットウィックが点数を与え、リリが褒め、他の女子が奮起するといういつもの流れになった。

結局最後まで成功できなかったロンはその光景を苦々しい気持ちで見ていた。

授業が終わりハーマイオニーの元に行こうとするリリの耳に不快な言葉が聞こえてきた。

「あいつはあのリンリーのお気に入りだから得点貰っているんだよ。教師だってリンリーを特別視しているし。それにリンリーがあいつのことを気に入っているのは勉強ができるからだ。要はいいように利用されているのさ。考えてもみてよ。あの出っ歯にくしやくしやな髪。あんなのを気に入るなんてそれこそどうかしているよ。」

リリはその言葉を発したウィーズリーを殴るより先にハーマイオニーを探す。

ハーマイオニーもそれが聞こえていたのか涙を流しながら走り去ってしまった。

「ハーマイオニー！ 待って！」

その言葉も届かず姿は見えなくなってしまった。

そしてリリアン・リンリーからは目に見えるのではないかと錯覚するほどの怒気が噴出していった。

周りの男子はロンの発言と同時に逃げ出していた。親友のハリー・ポッターも同様である。

当のロン・ウィーズリーは女子たちに拘束され口答えできないようにされた状態だ。

「んんんん！ んんんん！」

「お前はもう喋るな。皆、これと口聞いちやダメね。」

何かを訴えるようなロンを無視して顔をけり飛ばしてそのまま放置する。

そしてハーマイオニーを探すために駆けだした。

ロンはそのまま廊下に放置されたまま3限目の授業が始まった。

~~~~~

授業もさぼって探し続けた。そうしてようやく見つけることができた。

ハーマイオニーは地下室近くの人があまり利用しないトイレの個室にいた。

未だにすすり泣く音が聞こえる。

リリはゆつくりとトイレのドアをノックした。

「ハーミー？　いるんでしよう？」

「リリ!?　……私がいけないから授業が分からない、だから連れ戻しに来たの？　もう放つておいて！」

リリは何も言わず扉をこじ開けた。

「リリ!?　嫌、やめて来ないで！　わた、」

驚き逃げようとするハーマイオニーを無理やり抱きしめる。

それでも逃げようともがくが何が何でも離さないという気持ちを込めて力いっぱい抱きしめ続けた。

数分してようやく落ち着いたので抵抗がなくなった。

「ハーマイオニー・グレンジャー。今からハッキリ言うわ。良く聞いて。」

息を吸って一気に言ってやった。

「リリアン・リンリーはハーマイオニー・グレンジャーの事を愛しているわ。私はあなたが好き、大好き！　他の誰よりもずっと！　例えばあなたが馬鹿で勉強ができなくなつて、ドジで運動ができなくなつて、不細工で酷い顔だつて、マグルで魔法が使えなくなつて！　あなたを一目見た時からずっと、ずっと！　あなたに惹かれていた、魅了されつぱなしだった！　周りがどんなことを言ってもその事実だけは変えられない！　私は

あなたを愛している！　こんなところでウジウジ泣いていないで、私のそばにいて！　誰もあなたを、あなたの頑張りを認めなくて私はずっと見ているわ！」

嘘偽りない本心からの告白。今までも愛をささやいたことはあれどこまで真剣に愛を叫んだことはなかった。

言った方も言われた方も顔を真っ赤にしている。

しばらく地下室のトイレは静寂に包まれた。

二人の少女は自分の心臓の音しか聞こえていない。

沈黙を破ったのはハーマイオニーだった。

「本当……？　本当に私の事を？」

リリは何も言わず真っ直ぐに見つめる。

「私はリリみたいに可愛くない。頭が固いし、友達だって今までほとんどいなかったわ。勉強だって認められたいから頑張っているだけ。……ロンが言った時、ああ、そうなんだって納得しちゃったの。リリは私が勉強を出来るから頼ってるだけだって。私だけがリリの事をす、好きなんだって。可愛いリリに頼られて褒められて女同士なおかしいって気持ちも感じないくらい好きになっていった。でも、リリも同じ気持ちなのね？」

「ええ。」

「私も言うわ。私はあなたのことが好き。愛している。これからもそばに居させて。」
返事の代わりに熱いキスをあげた。

初めての唇同士のキスに困惑するハーマイオニーだったがすぐに快樂と幸福に飲まれていった。

例えリンリー家の呪いが無くてもハーマイオニーはこの口づけを拒絶することはなかっただろう。

10分はそうしていただろうか。

ようやくお互いの口を離す。

「これで私はハーミーのもの。ハーミーは私のもね。」

「……よろしく願います。」

今日はせっかくのハロウィンパーティーなのだ。

こんな場所からさつきとおさらばして大広間でかぼちや料理を楽しもうと出ようとしたら入口に3メートルはあろう巨大な人型がいた。

「な、何あれ……?」

「あー……。トロールかな?」

トロールはリリを見つけると跪きリリへの忠誠を誓うかのようだった。どうやら雌らしい。

その直後にトイレにマクゴナガル、スネイプ、クイレルが駆け込んできた。

「無事ですか!？」

「はい。私もハーミーも大丈夫です。このトロールはどうやら女の子みたいなんで大丈夫です。怪我させないように元の場所に帰してやってください。」

「怪我がないようで何より。それでどうしてこんな時間にここにいたのですか?」

リリはハーマイオニーがここにいた理由とハーマイオニーを探してここに来たことを話した。

「事情は分かりました。ミスター・ウィーズリーには私から罰則を言い渡しておきます。寮に戻りなさい。今頃は寮でパーティーの続きが行われているはずです。せっかくのハロウィーンです、楽しまなくては損でしょう。」

「ありがとうございますマクゴナガル先生! ハーミー行こう!」

寮に戻ると姿が見えなかった二人を心配していた同級生や先輩たちが出迎えてくれた。

二人の様子からどうやら恋人になったことを察したようだ。

「リリ! よかった心配したのよ!」

「リリ、ハーマイオニー! 怪我してない?」

「リリちゃんご飯食べた? いっぱい持ってきたからここでパーティーの続きしましよ

う！」

その後夜遅くなるまでハロウインパーティーという名の女子会が開催した。そこで二人が恋人になったことを宣言。

周りは祝福してくれたが次第に二番手争いに突入していった。マクゴナガルの雷が落ちるまで騒ぎは続けられた。

部屋に戻るリリとハーマイオニー。

明日にでも学校に頼んでリリとハーマイオニーの2人部屋に出来ないか相談するつもりだ。

「あー疲れた。でも楽しかった！」

「私も色々疲れたわ。」

「ハーミー今日こそは一緒にシャワーを浴びましょう？」

「え!? その、まだ……。」

「いいから行くの！」

お風呂に行つて体中を洗いこした。眼福であつた。

体中にキスマークをつけてしまったが他の誰にも見せないのだから何も問題はない

!

それに真つ赤になったハーマイオニーが可愛くてリリは色々抑えることができなかったのだ。

パジャマに着替えて一緒のベッドに入る。

「リリ、私あなたの恋人でいいのよね？」

「何回でも言うわ。あなたが私の恋人よ。」

「じゃあ、他の女の子に手を出さない？」

「……………善処します。」

「はあ…………。いいわ。但し！ 私があなたの一番よ！」

「もちろん！」

その後は二人っきりの夜をじっくり楽しんだ。

9. クイデイツチにシーカーなど不要

ハロウィーンの後からリリアン・リンリーとハーマイオニー・グレンジャーの関係は大きく変わった。

一緒にベッドで寝て、移動するのも、授業を受けるのもずっと一緒に行動するようになった。

一番である恋人の座を取られた他の女子たちは最初のうちはハーマイオニーへの敵意を隠そうともしなかったが、リリのあまりに幸せそうなオーラで数日もしたらすっかり認めるようになっていた。

リリアン・リンリーはカワイイ子が好きだ、大好きだ。

最愛の恋人ができたからと言ってそれが変わるわけではない。

むしろハーマイオニーと恋人になったことで、一番欲しかったものを手に入れたことでそれ以外のそれまで自重していた女子へのアプローチが激化した。

スキンシップ、ハグ、様々な接触到に言葉。女子たちへの魅了呪いの影響は日々強まる一方だ。

もちろん一番好きなのはハーマイオニーであることは変わらない。

しかし一番が確定したからこそ他の女の子とも良い関係を築きたかったのだ。
 良い関係を築きたいのはリリだけではなかった。

ホグワーツ中の女子たちがリリの二番手、あるいは三番手を、愛人の座を狙っていた。廊下で告白される、授業中に熱烈なラブレターを受け取る、食事中に拉致されかける。それがしばらくのホグワーツの日常になった。

ハーマイオニー・グレンジャーはそんなリリと周囲の騒動を嫉妬しながらも見守ることにした。

リリがああいう女性なのは入学した時から分かっていた。

リリに好意を寄せる多くの女の中で自分の事を一番だと言ってくれて、愛してくれているのだ。

他の子と仲良くしているのはちよつと、いや非常に妬ましいが愛する人を信じることにしたのだ。

そうした状態が数週間続いた。

結論としてホグワーツ女子の中でいくつかのルールが決められた。

一つ。リリアン・リンリーの正妻はハーマイオニー・グレンジャーである。

二つ。リリアン・リンリーの愛人はリリに選ばれた者である。誰にも邪魔は出来ない。

三つ。リリへのアプローチは禁止しない。但し強引な手段は禁止。四つ。愛人関係になくてもリリが求め、それを受け入れるのなら問題なし。

全くもって酷いルールができたと言え、それを抱える教師陣。

だが、リリの母親であるロザリンドが在学中よりはマシだと言いつつ聞かせてどうにか耐えた。

ちなみに未だにリリの愛人の座に収まった女はいない。

リリ曰く現在品定め中との事だ。これがロザリンドであれば片っ端からハーレム入りしていたことだろう。

~~~~~

11月になりクイディッチが開幕した。

初戦はグリフィンボール対スリザリン。因縁の対決だ。

だが、今年は例年とは様子が違う。

男子たちだけが必死にお互いを罵り合っているが女子は対抗するベクトルが違う。

リリの気を引くための争いをしてきた女子たちはいつの間にか憎しみ合う間から高め合うライバルへと変化を遂げていた。

クイディッチの試合も単純に楽しむつもりだ。楽しむとはいっても試合を見ては

しやぐであろうリリの姿を目に焼き付ける方にだが。

とは言え、それは選手以外の話。

グリフィンボールの選手であるアンジェリーナ・ジョンソン、アリシア・スピネット、ケイティ・ベルは覇気に満ちていた。

いつもクイディッチ狂いと言われているほどのキャプテン、オリバー・ウッドをもひるませるほどである。

「アリシア、ケイティ、行くわよ！」

「ええ！　ここでリリちゃんにカツコイイところ見せましょう！」

「もちろん！　シーカーなんていらなくていいことを証明してやるわ！」

（（勝利！　そして、リリちゃんの愛人への第一歩!!））

他の誰にも真似できない選ばれた選手だけの特権。

確実に自分たちだけを見られる絶好の場。

これは気合が入らないわけがない！

控室で最後のミーティングを行っているときリリが激励するためにやって来た。

キャプテンウッドはチェイサーの三人の調子上がるなら恐怖など問題ないと許可を出した。

「アンジェリーナ、アリシア、ケイティ。頑張つてね！　これは私からの勝利のためのプ

レゼントよ。」

そう言うのと三人に立て続けて頬にキスをした。

リリからのキス。

唇は未だにハーマイオ<sup>正</sup>ニー<sup>妻</sup>だけの特権なのだが、それ以外なら他の女子たちにもしている。但しリリが特に気に入っている相手だけだ。

つまり……自分たちはリリのお気に入り認定されている!!!

闘志を燃やす三人に更に燃料が投下された。

「この試合に勝ったら……もつとしましょう?」

三人は爆発した。

それを見ていたオリバー・ウッドは後に語る。

「試合が始まる前なのにスリザリンに同情してしまったよ。ああ、これは酷い試合になるなつて。」

数十分後。

選手たちが控室からコートに入場する。

気合も何もかも十分なグリフィンドールに対してスリザリンは圧され気味だった。運が悪いことにスリザリンのチームには女子が一人もいないのである。

これではリリの存在は逆にしか働かないのだ。

~~~~~

クイディッチ競技場は満員である。不在なのはダンブルドアぐらいだ。

マダム・フーチが審判を務め、試合が始まった。

男子たちは必死に応援用の旗を振ったり、声援を飛ばしているが女子たちは双眼鏡を用意してリリを必死に見ている。

そのリリはハーマイオニーの隣でチェイサーの三人を応援していた。

応援をされている三人のことは羨ましいが、それでも彼女たちの活躍で一喜一憂するリリの姿はいつもと違い格別である。

試合が開始して15分が経過した。

試合は見たことも無い内容になっていた。

グリフィン・ドール……230点

スリザリン……40点

この時点でスニッチを捕まえてもスリザリンの負けが確定している。

だが、このままではさらに点差が開くのは確定だ。

グリフィン・ドールのチェイサーの動きが異常だった。

箒が出せる最高速度のまま減速もせず突き進む。

ブラッジャーも紙一重で避け続け速度を落とすことさえできない。そんな三人がまるで思考が繋がったかのように連携してくるのだ。

互いに目も合わせないのにクアツフルが行き交う。

キーパーも必死になつて防ごうとするがなすすべがなく点が積み上げられていく。気が付いたらこんなことになつていた。

シーカー、ハリー・ポッターの箒が暴走していることなど目に入らない程の激しく美しいプレーに男子の全てが魅せられていた。

女子はリリに魅せられっぱなしだ。

10分後。

ようやくスニッチを手にしたスリザリンのシーカーだったが、本来掴めれば勝つのが殆どのそれを投げ捨て足早にコートを後にしていた。

グリフィンドール……330点

スリザリン……210点

シーカーによるスニッチ150得点を入れても100点以上の差。正直異常であると言わざるを得ない結果であつた。それでも勝ちちは勝ちだ。

スリザリンは失意に沈み、残りの三寮はグリフィンドールの勝利に舞い上がって

た。

勝利の立役者のチェイサーの三人は試合が終わると即座に着替えてリリの元に向かおうとした。

だが、控室にはリリがすでに待ち構えていた。

「おめでとう！ 三人ともとつてもかっこ良かったわ！」

そう言いながら三人に向けてダイブしてきた。とつさに受け止めるが先ほどまでの試合の大量の汗による臭いは気にならないか、自分たちはどうすれば良いのか。これで愛人になれるのか、などの思考でいっぱいであった。

「リリちゃん、その嬉しいんだけど離れてくれないかな？」

「私たち絶対汗臭いわ！ シャワー浴びなきゃ！」

「でも……私たちの全てを知ってもらうにはむしろこのままの方が……？」

「シャワーなら一緒に行かない？ 監督生に聞いたんだけど専用のバスルームがあるみたいなの。一緒に行きましょう！」

「是非！」

~~~~~

監督生とクイディッチキャプテンのみが使用を許可されているバスルームがあるが、

リリは女子監督生の全員と教師から使用許可を得たのである。

ここに居るのはリリとチェイサーの三人、そしてハーマイオニーだけである。

「なんで私まで……?」

「ハーミーとも大きな風呂に一緒に入りたかったから!」

「まあ、良いけど。それより! ちよつとは隠したらどうなの!」

現在脱衣所で各自入浴準備中であるが、ハーマイオニーやアンジエリーナ、アリシア、ケイティは恥ずかしがって中々服を脱ごうとしてくれない。

逆にリリはすぐに全裸になりタオルで体を隠すこともせず堂々としている。

「? 恥ずかしがることなくなんて無いと思うけど? 先行つてるね。」

「はあ……。まあ良いわ。私も行きますか。」

ハーマイオニーも浴場に向かおうとしたら、アンジエリーナたちが膝から崩れ落ちていた。

全員が顔を手で覆っており、指の隙間から血が滴っている。

「だ、大丈夫!?! マダム・ポンフリーの所に行った方が良いのかしら!」

「だ、大丈夫……。鼻血が。」

「ちよつと刺激が強かっただけだから……。」

「ここで死んだらもつたないわ。ああ、でもこれから死ぬのかも……。」

真正面からリリの裸体を見たことによる衝撃によって血圧が一気に上昇しただけであつた。

ハーマイオニーは呆れながら、三人は覚悟を決めて浴場に足を踏み入れた。

まずは髪と体を清潔にしようとしたらリリから爆弾発言が飛び出した。

「今日大活躍だった三人の為に私が洗ってあげる。髪も体も隅々までね。」

（これはきつと夢ね。起きたら試合開始前なんだわ。） 現実逃避するアンジェリーナ。

（きれい……。） 思考が鈍っているアリシア。

（洗い、密着、幸福、絶頂、……。死？） 死を予感するケイティ。

色とりどりの泡を使って順番に三人を洗っていくリリ。

髪を丁寧洗い、腕、胸、腹、足、隅々まで洗っていく。

「やっぱりスポーツクイディッチをやっていると体が引き締まっているのね。触つてい

て気持ちが良いわ。」

「あ……。ああ、ああああ。」 あまりの気持ち良さに声を止められないアンジェリーナ。

「アリシアは胸が大きいわね。私と二つしか違わないのに。後で秘訣教えてね？」

「は、はいいい！ 胸が大きい方が好みでしょうか!?」 思わず敬語になってしまいうアリシア。

ちなみにリリはどんな胸であろうと平等に好きである。

「きや!? ごめんなさいケイティ。大丈夫?」

泡で滑って全裸のまま抱き着いてしまったりリ。

「ええ、大丈夫よ。」

(アグアメンティ、アクシオ、ウインガーダイヤモンド・レヴィオーサ、エレクト、スコージ  
ファイ、テルジオ、……………)

言葉とは逆に頭の中では理性を保つために知りうる限りの呪文を延々と唱えている  
ケイティ。

洗い終わり湯船に浸かるころには三人とも試合の疲れと幸せの連続でぐったりと  
していた。

「さてと、ハーミーお願い。」

「はいはい。今行くわ。」

先に洗って湯船でゆったりしていたハーマイオニー。

リリに呼ばれると後ろに座る。

「それじゃあ、今日もよろしくね。」

いつもの習慣でリリの身体はハーマイオニーが洗っているのだ。

うっとりとした表情で洗われていくリリ。やはりハーマイオニーに体を任せるのは心地が良い。

こうして幸せと鼻血で溢れた裸の付き合いでチェイサー三人娘はリリとの距離を一段に縮めたのだった。

~~~~~

一方、グリフィンドール期待の新人シーカーであつたハリー・ポッターはどうだったかというと。

「あれが選ばれたシーカー？ 俺だつてあそこまでひどくねえぞ！」

「正直、ダンブルドアやマクゴナガルの鼻肩だから選ばれただけなんじゃねーの？」

「というか、見てなかったわ。チェイサーが凄すぎだしな。」

「ああ。ポッターがいなくてもいいんじゃないかな。」

箒の制御すらできなかつたハリーは誰にも期待されることはなくなつていった。

結果的には試合に勝利をしたのだが、ハリーにとってはこの結果すらも悪かつた。

負けたのなら期待外れ、戦犯として記憶に残る。

だが、今回の結果はそれ以下だ。ほとんどの生徒がハリーを見てすらいなかつた。

負けて悔しいはずのスリザリンでさえハリーの事を見ていない。

数人のグリフィンドールの友人だけが慰めているぐらいだ。

(くそっ！ スネイプめ！　なんで僕の事を！)

ロンからスネイプがハリーの箒に何かしているということを聞いたハリーはスネイプに対して憎しみを募らせていっていた。

ハリーの中で黒い何かが大きくなっていた。

10. クリスマスプレゼントは伴侶

12月下旬。

すっかり寒くなりホグワーツは雪で白く覆われていた。

明日からはクリスマス休暇が始まる。

クリスマス休暇が近づくとつれ女子たち、特に聖28一族などの有力な貴族から休暇中と一緒に過ごさないとリリは熱く誘いを受けていた。

しかし誘いは全て断った。

リリは勿論愛するママとお母様、そしてメイドたちが待つ家に戻るつもりだ。

更にはクリスマスは最愛の恋人、ハーマイオニー・グレンジャーと一緒にいると決めていたのだ。

ハーマイオニーにそれを伝えると喜んで了承してくれた。

そして次の日、クリスマス休暇初日。

リリとハーマイオニーはホグワーツからキングス・クロス駅に向けての列車に乗っていった。

初めて会ったコンパートメントと同じで中は二人だけだ。

他の女子たちにはあらかじめ二人きりが良いと伝えておりゆったりと二人だけの時間を過ごしている。

大体はリリのそばには女の姿があるので二人きりというのは夜の部屋ぐらいなのだ。

「リリの家って山奥にあるって聞いてるけどホグワーツに入学するまではどんな感じだったの?」

「前に言ったと思うけど、私の一族^{リンリー家}って少し変わってるの。魔法界ではちよつとした有名な名みたいね。そのせいか私は入学するまであまり外に出なかつたわ。ママやお母様以外にもメイドたちもいるし、ママがイギリスだけじゃなくて世界中からいろんな女の人を連れてくるから飽きなかつたわ。」

（リンリー家のこと調べたことあるけど少しじゃないわよ……。魅了^{呪い}が無かつたら私たちの関係って全然違つてたのかしら? ……どうでもいいわ。今、私は幸せなんだから。）

「ハーミー? どうしたの?」

「んーん、何でもないわ。幸せだなあつて。」

「私も幸せ。キングス・クロス駅に着いたらメイドのキャロルが待っている予定よ。その後は魔法で移動ね。今日はハーミーを見るために全員が外のお仕事も切り上げて歓迎会に参加するわ。」

「緊張するわね。歓迎会は何人になるの?」

「えーと……。私、ハーミー、ママ、お母様にメイドが5人で9人だと思う。他にももしかしたらサプライズで誰か呼んでいるかもしれないけど、多分ないかな。」

ハーマイオニーは前々から聞きたかったことを聞いてみることにした。

「ねえリリ。やつぱりリリのママも……。その、女性がパートナーなの?」

「うん。ママが当代のリンリー家の当主、ロザリンド・リンリーよ。でお母様が妻のレイラ。メイドたちもママのハーレムの一員よ。」

「やつぱりそうなのね……。それと気になっていたのだけど、リリのパパってどうしてるの?」

「? パパ? 何それ?」

「え?」

「ん? どうしたの?」

「いや、ちよつと待って! リリ、パパとか父親とかそういう人はいないの?」

「えーと。父親ってつまりは生んでくれた人の相手ってことよね? ママがそうよ。」

ハーマイオニーは混乱した。当然だ。

リンリー家が女性を惹きつけ女性と結ばれる家系というのは知っていた。

人とは本来雌雄で子孫を残す生物なのだ。

リンリーもその原則には当てはまった存在だと思込んでいたのだ。

だが、世間には秘密のリンリー家とその愛人だけにしか伝えられていない秘密があった。

尚も混乱が続くハーマイオニーであったがリリに抱き寄せられ、その甘い香りに包まれると落ち着きを取り戻していった。

「ハーミー、大丈夫よ。私は、私たちリンリーは異常だと思うわ。それでもこの生き方に恥じることはないしあなたと恋人になれて幸せよ。私はあなたの全てを受け入れる。だからあなたも私の事を知っても離れないで。」

ハーマイオニーはそれを聞いて自分の常識で考えてしまう癖のせいでリリを不安にさせてしまったことを悟った。

同時に先ほどまでの会話で混乱こそしたが、リリやリンリー家に微塵も負の感情を持たっていないことにも気が付いた。

「約束するわ。何を知っても、どんなことでもあなたから離れない。ずっと一緒よ。」
いまさらこの愛しい人から離れることを考えるなんてできそうにない。

二人とも声に出さずとも同じことを思っていると確信していた。

~~~~~

キングス・クロス駅 九と四分の三番線。

蒸気機関車から降りるとメイド姿の女性が二人を出迎えた。

「お帰りなさいませ、リリオ嬢様。そして初めまして、ハーマイオニー・グレンジャー様。私はリンリー家のメイド兼警護係のキャロル・フォードと申します。心より歓迎いたします。」

きつちりとメイド服を纏っているが、まるで規則に厳しい軍人のような印象を受ける。

「護衛係？」

「はい。ロザリンド様は少々敵が多いので……。コホン、さてそれではお二人ともお手を。」

差し出されたキャロルの手を握る二人。

その瞬間、周りの風景が一瞬で切り替わった。

先程までの人でいっぱいであったキングス・クロス駅のホームではなく森の中、そして目の前には豪邸が存在している。

「え？ あれ？ どういうこと!？」

「大丈夫です。ただの付き添いくらましです。」

「でも、何の違和感もなかったわ！ 本には慣れてないとめまいや吐き気がするって。」

「それは未熟者の場合のみですね。熟練者ならばそのような事は起きません。それにお嬢様とその恋人に不快な思いをさせようものなら恥で死んでしまいます。」

平然とキャロルは言うが超一流の技術によるものである。

もちろん最初からこうだったわけではなく、主人の為の血のにじむような努力の賜物である。

「さあ、参りましょう。ロザリンド様とレイラ様がお待ちです。もちろん他のメイドも。」

久々の我が家にリリは足早に扉に近づいて思いっきり扉を開けた。

「ただいまー！」

「お帰り！ 会いたかったぞー！」

「お帰りなさい。会えてうれしいですよ。」

待ち構えていたロザリンドに抱きしめられ、その後ろにいるレイラも滅多に見せないぐらゐの笑顔だ。

「「お帰りなさいませー！ お嬢様！」」

メイドたちも声を揃えて天使を出迎える。

ロリコン<sup>レナ</sup>だけは久々のお嬢様分の過剰摂取によって鼻血の海に沈んでいるがいずれ復活するので放置されている。

「お、お邪魔します……。」

そこにハーマイオニーが入って来る。

リリが選んだ娘がどんな子なのかとロザリンドとメイドは興味津々である。

「ママ、お母様、皆、紹介するわ！ 私の最愛の人、ハーマイオニー・グレンジャーよ！」

「は、初めまして。リリ、リリアン・リンリーさんとお付き合いさせていただいています。

ハーマイオニー・グレンジャーです。よろしくお願いします。」

「おー！ 可愛い！ リリはいい子を持つてきたなあ！」

「……うん。磨けばもつと光りそうね。」

「確かに。いい感じね。ところで趣味は？ 特技は？ どこまでいった？」

「こらリディア！ ゴメンね。ところでお嬢様との出会いはどんな感じだった？」

一斉に詰め寄られてあわあわしているトレイラが手助けしてくれた。

「はい、そこまで。とりあえずリリとハーマイオニーさんは荷物を置いてきなさい。寝室はリリの部屋です。リリ、案内してあげなさい。」

「はい。行こうハーマイオニー！」

「ええ。皆さん休暇中はよろしくお願ひします。」

二人が部屋に向かつていく。もちろん手を繋いで。

それを見てニヤニヤしているロザリンドとメイドたちであった。

~~~~~

リリの部屋ので荷解きを終え、二人でベッドでくつろいでいると扉をノックされた。

「お嬢様、ハーマイオニー様。ロザリンド様とレイラがお呼びです。」

「ママたちが？ 分かったわすぐ行くわ。」

「何だろう？ 私何かしたかな？」

「大丈夫、大丈夫。」

ロザリンドとレイラの部屋に行くと紅茶の準備が整えられ、二人が待つていた。

「おー来た来た。そんじゃ、レイラ頼むわ。」

「もう少しちゃんとしなさい。さて、席にかけてまずは紅茶でも飲んでリラックスしましょう。そしたらちよっとお話ししましょうか。」

レイラが淹れてくれた紅茶を飲む。

一呼吸入れてレイラがハーマイオニーに尋ねてきた。

「ハーマイオニーさん。あなたはこれからもリリの恋人でいたいのですか？」

「は、はい。」

「何があっても？ どんなことを知っても？」

「はいっ！ リリが私から離れない限り、私は恋人でいたい、愛しています！」

ヒューと口からわざとらしく音を出すロザリンドを無視してレイラは真剣にこちらに視線を向けるハーマイオニーと顔を赤くする娘を見る。

「突然こんな事を聞いて申し訳ありません。ですが、こういうことはきちんとしておかなければなりませんから。私もロザリンドも別にあなたたちの仲を反対するつもりはありません。リリが選んだのならそれだけで十分でしょう。」

恋人の両親に認めてもらい嬉しくもあり恥ずかしくもあるハーマイオニー。

「ですが、このままいけばあなたはここ、リンリー家に嫁ぐことになるでしょう。」

その前に更なる覚悟をしてもらいます。これは今までもずっと続けられてきたものです。

私もロザリンドの母から覚悟を問われました。」

「覚悟……。いったいどんなものでしょうか？」

「我が娘、リリアン・リンリーとの子を設ける覚悟です。」

「え、ん? ……ほあ!？」

「分かります。私もそんな反応でしたから。リンリー家は女性を魅了するだけでなく、女性としか子を成せません。リンリーが妊娠する、またはパートナーの女性が妊娠する。どちらも可能です。ともかくリリと恋人になるからにはゆくゆくは結婚、そして子供を作るという未来があると思ってください。あなたはそれが可能ですか？」

いきなり告げられる言葉にしばらく頭が白紙になる。

ハーマイオニーの手をリリが握る。その目がこちらを見つめてくる。

それだけで真つ白になったハーマイオニーの頭に思考が戻って来る。

考える。リリとの未来。恋人、結婚、その先。

(……結論なんてハロウイーンのあの日からとつくに出てたじゃない。)

「レイラさん、ロザリンドさん。いえ、お義母様たち。私は大丈夫です。先ほど言った通りです。私は、ハーマイオニー・グレンジャーはリリアン・リンリーを愛しています！」

レイラから目を離すことなくきっぱりと言いつつた。

それを聞いたレイラは笑顔になった。

「それではリリをよろしくお願いします。色々と困ることもあるでしょうが、私たちのことを頼ってください。リンリーに惚れた同士としてしかできない苦労もありますしね。」

「えー何だよ苦労って。それよかこれでハーマイオニーちゃんも私たちの娘みたいなもんだ！」

二人の娘を纏めて抱きしめようとするが、リリがハーマイオニーを抱き寄せてガードした。

「ママ！ ハーミーは私のものよ。手を出しちゃダメ！」

「キスも?」

「絶対ダメ!」

「ハグは?」

「それも嫌!」

「ちえちよつとした親子のスキンシップじゃないか。ああ、そうだ。今のうちに二人に子供の作り方を教えておこう! もちろんレイラとの実戦を見せ、レイラ、痛い痛い! 耳引つ張らないで! ゴメン調子乗った!」

「まったく。それでは今日のクリスマスパーティーは二人の未来を祝福して大いに盛大にやりましょうか。」

~~~~~

パーティーは宣言通り盛り上がった。

人数は10人にも満たないがそれでも楽しいものになった。

調理担当リディアがいつも以上に張り切り極上の料理の数々を揃える。

酒に酔ったロザリンドが学生時代のメイドたちとの出会いやレイラとの馴れ初めを話始めるとリリも負けじとハーマイオニーとの仲をアピールし始める。

メイドはリリお嬢様の選んだハーマイオニーに絡んであれやこれやと聞き出し、色々

と吹き込んでいる。

ロリコンはお嬢様とその恋人が並んでいるのを見て神々しさに失神しそうになっていた。

段々とお酒も酔いが回って来たロザリンドが暴走する前にレイラが部屋に連れ込んでパーティーはお開きとなった。

未成年二人もリリの部屋へと戻っていった。

「あー楽しかった！ これでハーミーも私たちの一員ね。改めてよろしくね、マイハニー？」

「ごちそうさ、マイハニー？」

二人は当然同じベッドの上で眠りにつく。

お互いのクリスマスプレゼントはお互い自身だ。

そのクリスマスプレゼントを抱きしめ合いながら聖夜は過ぎていった。

## 11. リリアンズペット竜（ドラゴン）

クリスマス休暇はあつという間に終わってしまった。

数日はクリスマスプレゼントの処理で費やされていた。

クリスマスということでホグワーツ中の女子からリリ宛てにクリスマスプレゼントが届いたのだ。

それだけでなくロザリンド宛てにも世界中の女から<sup>愛人</sup>プレゼントが届いていた。

食べ物、服、金品、魔法の品、本、写真、媚薬、様々なプレゼントで溢れたリリンリーの屋敷はまさに混沌<sup>カオス</sup>であった。

それをリリンリー親子は全て丁寧<sup>カオス</sup>に開封し受け止めていった。

どんなに苦勞しようとも一つもぞんざいに扱わず、プレゼントの送り主と品を余さず記憶していく。

それがようやく終わったころになってメイドたちからのプレゼントが待っていた。

こんなことは毎年の事なので邪魔にならないように最後に渡すようにしているのだ。

リリとハーマイオニーはリリンリーの屋敷でたくさんの事をしていた。

お互いをもっと深く知るためにどんどん色んなことを話した。

リンリー家の事を知りたいハーマイオニーはロザリンドに尋ねたり、同じ境遇ともいえるレイラにも色々教えてもらっていた。

他にも二人そろってメイドたちから花嫁修業という名の家事について伝授された。

掃除、料理、その他の家の事。魔法を使えば簡単に済むこともあえて自らの手を使う方法を教わった。メイドたちが言うには、やはり自分でした方が相手への思いを込められる、ということらしい。

それ以外にも金策や護身についてなど学ぶことは多い。

学ぶことが好きなハーマイオニーはそれどれも貪欲に習得していく。

リリの方は家事の方を、特に料理を中心に頑張っていた。

そしてあつという間にホグワーツへと旅立つ日がやって来た。

「リリ、ハーミー。行ってこい！」

「二人とも体には気を付けるように。寒いので暖かくしてくださいね。」

ロザリンドのとレイラのはすっかりハーマイオニーにとつても第二の両親といえる存在に成っていた。

メイドたちもそれぞれがお別れの挨拶をする。

この休暇中にすっかり仲良くなったメイドたちもすっかり歳の離れた姉のように感

じている。

「行つてきます！」

ホグワーツでの生活が再び始まる。

~~~~~

ホグワーツに戻つて最初に待ち受けていたのはホグワーツ全女子からの熱い抱擁であつた。

全員が順番になつてリリを抱きしめ回した。

休みの間にリリとの接点が若干なかつたり精神が強かつたものは何かがおかしいと感じていたが、リリと距離が近づき接触した瞬間そんな思いは吹っ飛んでしまった。

その後は特に何事もなく日常が過ぎていった。

授業、クイディッチ、女子会、パジャマパーティー、そんな穏やかだが楽しい日常だけがあつた。

だが、そんな平穏な日常に突如事件は起こつた。

雪の降るある日。

昼食をせっかくだからと雪を見ながら食べようとハーマイオニーをはじめ何人かで禁じられた森が見える校庭の一角で防寒・雪対策をして暖かい料理を食べていた。

身体もあつたまり雪景色を楽しんでいると森のそばの小屋が突如として燃え上がる。唾然とその様子を見てみると炎の中から何か飛び出してきた。

それは一直線にリリに向かって突撃してくる。

「リリちゃん！ 危ない！」

咄嗟に上級生の一人が盾の呪文プロテゴを使ってそれを阻む。

盾に当たってその場に落ちたそれは……ドラゴンだった。

ドラゴンといってもまだまだ小さく体長50cmにも満たないサイズではあつたが、翼に牙、それに何より口より漏れる炎がその存在がドラゴンであると明確に示していた。

そんなドラゴンの幼体を見たリリは一言。

「カワイイ……。」

「カワイイ!?!」

常人とは異なつた感覚でドラゴンを可愛いと断言するリリ。

もちろんこのドラゴンは雌である。

リリの一言で盾の呪文プロテゴが解除され、ドラゴンがリリの肩に飛び乗った。

頬ずりをして甘えるような鳴き声を上げる。まるで子が親にするかのようだ。

その様子を見て何人かは嫉妬を覚えていた。

人の羞恥を捨てればあそこまで甘えられるのではないかと思う者もいる始末だ。

そこへ大きな足音を響かせ巨大な人影が現れた。

「おお！ おおお！ ！ ノーバートここにいたのか！ んん！！ こりやたまげた！

ノーバートが懐いとる！」

森番の巨大な手がドラゴンを捕まえようとす。

それに怯えたドラゴンは牙をむいて威嚇するがそれを親愛の表現と勘違いしているハグリッドは気にも留めずに手を伸ばす。

それをリリが妨げる。

「止めてちょうだい。この子が嫌がつてるわ。」

「ん？ そうか？ 俺には喜んでるようにしか見えんぞ。ほらノーバート行こう。」

「嫌がつてるのが分からないの？ こんなに震えて牙を向けているのに！ もういいわ。大丈夫よ、私が守ってあげる。とりあえずどうしたらいいかしら、ハーミー？」

「まずは先生に連絡するべきじゃないかしら。ドラゴンを飼うのは違法だし私たちだけじゃ対処できないと思う。」

ドラゴンを抱きしめたままみんなと一緒に信頼できるマクゴナガルの元へ行こうとする。

しかしその前にハグリッドが立ち塞がった。

「待て！ ノーバートは俺のドラゴンだ！ 俺のだ！ 卵の時から心を込めて育てたんだ。何でお前さんが勝手に連れて行こうとする!？」

それを無視してそのまま歩を進めるが、それに怒ったハグリッドが力づくでドラゴンを取り戻そうとしてきた。

「プロテゴ！」 護 れ 「ステューピファイ！」 麻痺 せ よ 「インペテイメンター！」 妨害 せ よ

「ペトリフィカス・トタルス！」 石化 れ な

それを周りにいた女子たちが防ぐ。

盾でリリを護り、失神などの様々な呪文でハグリッドに攻撃を仕掛ける。

その巨人の血が流れる巨体には効果がいまいち発揮されなかったが、その場を離れる時間稼ぎには十分であった。

「みんなありがとう！ 無理はしないでね！ 行こうハーミー！」

「ええ！ 全くハグリッドってあんなに野蛮だったのね。ドラゴンを飼うだけじゃなくまさか女の子に危害を加えようとするなんて……！」

リリはマクゴナガルの元へ急いだ。

もし女子たちが一人でもかすり傷でも負っていたらあの大男を唯じゃ済まさないと思いながら。

~~~~~



くくくく

マクゴナガルは自室で昼食を食べていた。

今日のホグワーツの料理も美味しく食べるだけで日々のストレスが消えていくようだ。

リリアン・リンリーを筆頭に今年のホグワーツは問題だらけである。

リンリー以外にもウィーズリー双子、ハリー・ポッターとロナウド・ウィーズリー、スリザリンと他三寮との確執、マルフォイを筆頭にした聖28一族たちの純血主義。

おまけに賢者の石といった重要な品の防衛。

昼食時ぐらいこうして自室でゆっくりしたいものだ。

その貴重な休み時間は胃を痛める存在の筆頭であるリリアン・リンリーが破壊した。

「マクゴナガル先生！ 大変です！」

ノックもせずに飛び込んできたリリとハーマイオニーを見て嫌な予感しかなかった。

「どうしたのです!?! そんなに慌てて！」

「先生！ この子！」

リリが抱きかかえるドラゴンを見せる。

教師生活が長いマクゴナガルも生徒がドラゴンを抱えてやって来たことなど皆無であつた。状況がまるで理解できない。

ハーマイオニーがそこに助け舟を出す。

「マクゴナガル先生。私たちが校庭で昼食を食べていたらハグリッドの小屋がいきなり燃えてそのドラゴンが飛び出してきました。どうしたらいいのか分からなかったのでマクゴナガル先生を頼るために来ました。それに今皆がハグリッドを抑えようとしています、助けて下さい！」

マクゴナガルは頭を押さえ今の情報を整理する。

要約するとハグリッドがドラゴンを密かに飼っていてそれが逃げ出したと。

何はともあれハグリッドの所に行かなくては。

「ミス・リンリー、ミス・グレンジャー。ハグリッドの所まで案内してください。」

「はい！」

廊下を走って元の校庭に戻るとそこには鎖が巻きつけられ身動きが取れないようにされたハグリッドが転がっていた。

どうやら火事の騒ぎで集まった女子たちが総出でハグリッドを捕らえたいらしい。

「みんな無事!?!」

「もちろん！」

「ええ、私たちを傷つけていいのはリリちゃんだけよ。」

「こんな野蛮人なんかには負けないわ。」

女子たちはどこも怪我などしていないようでもまずは一安心だ。

後の処遇はマクゴナガル先生に任せることしよう。

「ルビウス・ハグリッド！ これはどういうことですか!? 説明しなさい！」

「マ、マクゴナガル先生……。これは違うんです。そ、その娘が俺のノーバートを！」

「何が違うのですか！ ドラゴンの所持は重罪です！ それに女子生徒に手を出したとも聞きました！ あなたに森番を任せたダンブルドア校長も失望するでしょう！」

恩人のダンブルドアの名を出されてようやく大人しくなった。

生徒たちは授業があるので解散となったが、ドラゴンはリリから離れないため今日は特別に授業は休みとなった。

~~~~~

後日、ルビウス・ハグリッドの処罰が決まった。

ホグワーツの永久追放である。

ドラゴンの所持についてはダンブルドアの擁護もありアズカバン送りは免れたが、女子生徒に危害を加えようとした恐れがあることや危機管理能力の低さからホグワーツにはふさわしくないと生徒の保護者から批判が殺到した。

これにはハリー・ポッターやロン・ウィーズリーを中心としたグリフィンドール男子

が反対したが決定は覆るはずはない。

女子は全員がハグリッドの追放に賛成であり、スリザリン男子は当然としてグリフィンドール男子の中にもハグリッドを危険だと思っている者が少なくないのが事実だ。

それでも反対するハリーとロンに追い打ちが待っていた。

匿名の密告により燃えるハグリッドの小屋から二人が逃げる様子を見たと言うものがいたのだ。

二人に追求するとドラゴンを知っていたと認めグリフィンドルから更に点数がマインナスされた。更には罰則も言い渡された。

これでハグリッドだけでなくハリーとロンへの元々あった負のイメージが更に加速する。

ちなみにドラゴンは雌であったのでリリにもものすごく懐いた。

リリも初めてのペットができたみたいで喜んでいる。

ダンブルドア監修の元、ドラゴンはリリのペットとして認められた。

ただしそう簡単には飼育は出来ないのでハグリッドの小屋があった場所に飼育スペースを作りロザリンドのコネから女性ドラゴンキーパーを数人ホグワーツに派遣することになった。定期的リリが訪れることで普通のドラゴンと比較してとても大人

しく従順に成長している。

12. ハーレム一年目

ルビウス・ハグリッドによるドラゴンの騒動の後の混乱は一週間も経たずに収束を迎えた。

元々グリフィンボール男子生徒以外とはさほど接点もない森番の犯した罪など大して話題にもならなかったのだ。

それからはイースター休暇があつたりなどしたが、学生にとっては大敵な期末試験が近づいてきた。

真面目で勉強好きなハーマイオニーは本領発揮とばかりに勉強に打ち込んでいる。

パートナーたるリリにも良い成績を取って欲しいハーマイオニーは連日図書館でリと一緒に勉強漬けだ。

リリも少々それに付き合っている。嫁のやる気に満ちた顔を見たら断ることなどできなかつたのである。

それに触発された女子生徒たちも例年と比べものにならないほど早く試験に向けての勉強を開始していた。

そんな女子たちの頑張りの陰でハリー・ポッターとロン・ウィーズリーの二人はドラゴン隠しの罰則として禁じられた森の調査をさせられていた。監督として付き添ったのは二人にとって最悪なことにグリフィンボール嫌いのセブルス・スネイプであった。そこで彼らはユニコーン殺しのおぞましい存在と遭遇することになるのだが、それを知るのはほんの一握りの人間だけであった。

~~~~~

試験も終わり、後は最終日までのんびり過ごすのみである。

リリはハーミーやその他の女子とイチヤイチャと時間を過ごしていた。

リリアン・リンリーが今年のホグワーツで得たのは、嫁であるハーマイオニー・グレンジャー。

そしてハーレムとして4人の少女が選ばれた。

お気に入りの女子は数多くいたが、ママやメイドたちの意見を参考に少人数に絞ったのだ。容姿、相性、その他色々な事を考えに考え抜いて4人にか絞ったのだ。

グリフィンボールからはパーバティ・パチル。

ハーマイオニーを除けば最初に友達になったことや頻繁に部屋に遊びに行き交流も多くなんだかんだと相性が良かったのだ。

ハツフルパフからは二学年上のクラウディア・エンジェル。

二つ上とは思えないほどの大人な容姿、年下だけでなく年上さえも甘えたくなくなるほどの包容力が全身から発散されているまさに天使のような人。ハーマイオニー嫁がきついところもある（そこも堪らないのだが）のでリリにとつては癒し成分にもなっている。

レイブンクローからはパーバティの双子の妹、パドマ・パチル。

パーバティ繋がりでは他寮では接点が多く、そして冷静に物事を見てリリと接しているのも他の娘にない点でポイントが高い。

スリザリンからは聖28一族のグリーングラス家、ダフネ・グリーングラス。

貴族らしい高貴な雰囲気、スリザリンにしては他者を下に視ることがほとんどない人格者。

それでいてたまにするお茶目がたまらなく良いのである。

ハーレムに選ばれた4人は誰も拒むことなく受け入れてくれた。

それを選ばれなかった他の女子たちも内心の嫉妬などの暗い気持ちを抑えて祝ってくれていた。

~~~~~

ホグワーツ最終日。

大広間では学年末パーティーが開催される。

今年の優勝杯もスリザリンが獲得した。これで7年連続である。

二位は僅差でレイブンクロー、そしてハッフルパフが続きかなり離れて最下位グリフィンドール。

寮監のスネイプは優越感から来る笑みを隠し切れず、マクゴナガルはそれを見ないようには必死である。

宴が始まる前にダンブルドア校長が立ち上がり声をあげた。

「また1年が過ぎた！ 皆、ご馳走にかぶりつく前に老いぼれの戯言をお聞き願おう。

1年が過ぎ、君達の頭も以前に比べて何かが確実に成長したじやろう……新学年を迎える前に君達の頭が綺麗さっぱり空っぽになる夏休みがやってくる。

その前にここで寮対抗の表彰を行うとしよう。点数は次の通りじゃ。

4位グリフィンドール、274点。

3位ハッフルパフ、377点。

2位レイブンクロー、435点。

そして1位スリザリン、458点」

スリザリンのテーブルが喜びで爆発した。

他寮の男子たちはそれを恨めしい目で見ているが、女子たちは悔しそうにしながらも

拍手を送っている。

もちろんリリも惜しみない拍手をしている。スネイプが鼻屑したとはいえ、それ以外でも団結し寮杯に向けて邁進しているのを知っているのならばこの結果は当然といえる。

逆にグリフィンボールなどハリーやロンを筆頭に、問題児のウィーズリー双子、授業で失敗を連発するネビル・ロングボトムがいるのだから最下位も必然である。

そんな興奮と喜びに満ちていた大広間に思いもしない言葉が告げられた。

「よし、よし、スリザリン。よくやった。しかし、つい最近の出来事も勘定に入れなくてはなるまいて」

その言葉に静まり返る大広間。

「まずは、ロナウド・ウィーズリー！ わしが見てきた中で最高峰のチェス・ゲームを見せてくれたことを称え、グリフィンボールに80点を与える！」

グリフィンボールのテーブルからは大広間を揺るがすほどの歓声が沸き起こる。

それに対して周りの反応は冷ややかである。

ロナウド・ウィーズリーの兄たちが自慢する声が聞こえてくる。

「次に、ハリー・ポッター！ 恐るべき存在に立ち向かう強靱な精神力と並外れた勇気を称え、グリフィンボールに90点を与える！」

先程よりすごい爆発したような大歓声が上がる。

これで最下位だったグリフィンドールは一気に2位に浮上した。

だが、これで終わりでは無かった。

「勇気にも色々ある。敵に立ち向かうことにも大きな勇気がいる。しかし味方、友人に立ち向かうのも同じくらい勇気が必要となってくる。そこでわしはその勇気を示したネビル・ロングボトムに15点を与えたい！」

これでグリフィンドールの点数は459点。

狙ったかのようにスリザリンの点数より1点多い。いや実際にそうなのだろう。

グリフィンドールが逆転勝利、寮杯を獲得したというのに先ほどまでの歓声はない。

代わりに大広間には冷ややかな雰囲気包まれていた。

女子たちは冷めきった目でダンブルドアを見ていた。

その中でリリアン・リンリーは最も冷たい目でダンブルドアを見据えていた。

男子はリリアンから発する呪いで声を出すこともできずにいる。

リリは立ち上がり、問いただす。

「アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア校長先生。いくつかわるしいでしょうか？」

「う、うむ。何かね？」

「今の三人に与えた点数、その内容を詳細に説明してください。ただ凄いチエスをした、勇敢だった。そんな内容では誰が納得するのですか？ それとも説明できないのですか？ 私のハーマイオニー・グレンジャーはこの一年で30点以上点数を貰っています。その2倍も3倍もすごいことをそいつらはやったのですか？ 答えろ！」

ありつたけの呪いをダンブルドアにぶつける。

リリは怒りに震えていた。

「明らかな依怙鼻屑。これまでホグワーツの女子たちが頑張ってきた成果を馬鹿にする行い。」

「トップであつたスリザリンだけでなくレイブンクローもハッフルパフも、そして何よりグリフィンドールを馬鹿にしていると思えない。」

「すまぬが……機密であるため詳細までは言えぬが、ロナウド・ウィーズリー君はこのホグワーツで最も優れたチエスプレイヤーであると断言できる。ハリー・ポッター君はヴォルデモートを前にしても一歩も引かない勇気を示してくれた。わしはこの点数が正当な評価であると確信しておる。」

「失望した。今世紀最高の魔法使いなどと言われているのだからまともな人だと思つていたがそれはどうやら誤りだったらしい。」

「そうですか。それじゃあ、私は寮で今年が平和に終わったことをお祝いします。」

こんな穢れた宴なんかいる必要なんてないし、寮杯も無意味だわ。」

リリはここにいる意味を見出せず寮に席を立った。ハーマイオニーもそれについていく。

リリが歩き出すと続々と全女子生徒がそれに続いていった。

教師たちがそれを制止するが誰一人として歩みを止めることはなかった。

「待つんじゃ、待ってくれ！」

ダンブルドアの言葉は人数が半分になった大広間に虚しく響くだけだった。

~~~~~

あの後にはスパツとどうでもよいことは忘れて女子たちだけでお祝いをした。

今年で卒業となる7年生はリリとの別れを嫌がり、卒業しない！ だの、リリちゃんを攫う！ などと暴走一歩手前であったが、リリが優しく説得したおかげでどうにか治まってくれた。

説得内容としては『何でもしてあげる♡』と書かれたチケットを渡すことであったが、それだけで鼻血を出して倒れる先輩も多くいた。

ちなみに有効期限はなく、本当に何でもOKなのである。

ホグワーツでの最初の一年が終わった。

一年生の最高優秀者は圧倒的な差をつけてハーマイオニーであった。

これには男子を含めて全員が納得するしかなかった。

リリは自分の嫁がトップでドヤ顔をしていたが、自身の成績自体は平均的なものであり夏休みには勉強ももっと頑張りましたしようと笑顔でハーマイオニーに言われてしまった。

そんな事は一旦忘れて、キングス・クロス駅行きの赤い蒸気機関車のコンパートメント内。

中はリリのハーレムメンバーが勢ぞろいしていた。

ハーレムの主リリ、正妻ハーマイオニー。パチル姉妹にクラウディア、ダフネ。

普通だったから見られない全寮揃い踏みだ。

「あーあ……。夏休みが憂鬱……。みんなと会えないんだもの。」

「私とパドマはすぐに会いに行くわよ。」

「もちろんね。でもダフネは大変じゃない？」

パチル姉妹は既に夏休みはリンリー家に行く計画を立てている。

両親への根回しは完了済みだ。

「そうなのよ。リリに会いに行くにしろ、来てもらうにしろ両親やら親族やらの説得が

大変になりそう。」

純血の聖28一族であることを恨むことになるとはダフネは思っていなかった。

「私はその点何も問題ないわね。両親は海外だし。」

リリを膝の上に載せながら満足そうに言うクラウディア。

クラウディアの両親はマグルでなおかつ海外で仕事をしているため一人暮らしなのだ。

膝の上のリリは豊満な胸をクッションに可愛い子たちとの別れの寂しさを癒している。

それを羨望のまなざしで見るとリリ嫁とハーレムメンバーは自分たちも胸を大きくすることを決意した。

「ハーミーちゃんはすぐにリリちゃんのお屋敷で同棲かしら？ 羨ましいわあ。」

「ええ。一度家に帰ってからすぐにリンリー家でお世話になる予定です。」

クリスマス休暇のうちにハーマイオニーの両親にはご挨拶済みナリリ。

同性愛に対しては理解がある人たちであり、リリのことでもハーマイオニーを幸せにする<sup>と誓えるのなら</sup>ば認めると言ってくれたのだ。

「やっぱりハーミーとは一日だって離れたくないしね。皆も大丈夫になったらすぐに手紙ちようだい。メイドがあつという間に連れてくるから！」

夏休みの予定を立てながら時間が過ぎていく。

リリアン・リンリーの一年目のホグワーツは最愛の嫁ができ、それ以外にも多くの愛しい女の子と仲良くなれた。

2年生もきつと素敵なホグワーツになるだろうと確信しながら家族の待つ家に戻っていった。



## 2章 秘密は女には必要な要素

### 13. 夏休みとお買い物

夏休みが始まった。

リンリー邸はいつも以上に賑やかだ。

当主のロザリンド。その妻レイラ。メイド兼ロザリンドの愛人が5人。

娘のリリアン、その恋人のハーマイオニー・グレンジャー。

更にはリリアンのハーレムメンバーのパチル姉妹とクラウディアが加わっていた。

総勢12人の女たちがここで生活している。

家のことは基本的にメイドがまとめているが、時折リリのハーレムメンバーにも手伝いをさせている。ゆくゆくは彼女たちがリンリー家を支えることになるので今の内から鍛えておくことにしたのだ。

家事、勉強、作法、交渉、金策、ハーレムの心構え、女としての在り方、あらゆることを先輩であるメイドたちから伝授されている。

そして夏休みも後半に突入したある日。

最後のリリハーレムの一人が到着した。

メイドに案内されて少女が玄関から入って来る。

上質な生地で作られた可愛らしいワンピースを纏ったダフネ・グリーングラスは出迎えてくれた愛する人やその両親に優雅にお辞儀をした。

「お初にお目にかかります、お母様方。私はダフネ・グリーングラスと申します。リリアンの愛人として満足させられるように精進いたします。」

「相変わらず聖28一族の貴族様は堅苦しいねえ。ま、自分の家だと思つてリラックスしな。」

リリのハーレムの一員なら私らは家族だ。」

「はいっ！ お母様！」

ダフネは用意された部屋に案内される。

リンリー邸は豪華である。

リンリー家が代々ハーレムとして大人数の女と暮らすことが多いため広大な屋敷が必要であった。

メイドやリリのハーレム一人一人に個室を用意しても問題ないだけの数の部屋がある。

ダフネは部屋についてすぐに準備を整え、リリの部屋へと突撃した。焦る気持ちを落ち着かせドアをノックする。

「どうぞ。」

約一カ月ぶりのリリの声。それが鼓膜を刺激するだけで鼓動が速くなる。

「お邪魔します。ああ……！」

声だけであそこまで体が火照ったのだ。実際に目にし、部屋に充満する香りを感じてしまつては抑えが聞かなくなってしまう。

気が付いたらリリを抱きしめていた。

「ふふふ。ダフネは甘えん坊さんになっちゃたのかな？」

「こ、これはっ！……そうよ、寂しかったの。」

ハーマイオニーも残りのメンバーも黙っている。

自分たちも一カ月近くリリと離れていたらあなつてしまうのは想像に難くないからだ。

リリはダフネを抱き返しながら髪を手漉きしている。

ダフネは至福の時を過ごしていた。

その後は我慢しきれなくなった全員がリリからの愛を受け取ることになる。

「満足した？」

「ええ。でもちよつと恥ずかしいわ……。」

「ダフネは大変だったわね。」

「やつぱり私たちみたいなの庶民とはまた違ったことが多いんでしょね。」

そう言うパチル姉妹は両親にはこの関係ハーレムを話してはいたが、父はしょうがないと諦めたがマグルの母が理解不能だとしてちよつとぎくしゃくしている。

クラウディアは両親からほぼ放任されている状態なので何も気にしていない。

「本当に純血主義に貴族主義、頭が固くてもう嫌になったわ。ま、もう関係ないけどね。」  
ダフネは両親や親族一同と揉めに揉めて最終的には勘当となつてしまった。

最低限の金だけを与えられ追い出される形でリンリー家へとやつて来ていた。

だが、ダフネはこれっぽちも後悔などしていない。

全ては愛するリリアン・リンリーと共に生きるため、ならば両親や聖28一族の事など何の問題もない。

~~~~~

リリハーレムが集合してからは賑やかで楽しい日々が続いた。

ハーマイオニー、パドマ、ダフネという真面目がハーレムの半分を占めているため宿題などの勉強はとつくに終えている。それ以外にも必要最低限の勉強はハーマイオニー主導の元行っていた。

ハーレムメンバーは先代ハーレムメンバーであるメイドたちから引き続きリンリー家のハーレムの心構えについて聞くことも怠っていない。

それ以外は基本的にリリとイチヤイチャした時間を過ごしている。

着せ替え、髪型をいじる、お茶会、ただ黙って一緒にいる、ハグにキス、そしてそれ以上も……。

毎日、食事をして、勉強して、家事をして、イチヤイチャする。

これだけで毎日が楽しい、他に何もいらぬ至福の時間。

「ああ……。もうこのままでもいいんじゃないかな？」

リリはそう呟く。

しかしそうは世界が許してくれないらしい。

ホグワーツから新しい教材のリストが届いたのだ。

新しい教科書、呪文学の二年生用の基本呪文集とその他の備品はまだ良い。

だが、それ以外の闇の魔術に対する防衛術の大量の教科書の意味が分からない。

『泣き妖怪バンジーとナウな休日』

『グールお化けとクールな散策』

『鬼婆とオツな休暇』

『トロールとのとろい旅』

『バンパイアとバツチリ船旅』

『狼男との大いなる山歩き』

『雪男とゆつくり一年』

合計7冊になる中身は防衛術など関係ないような事実を元にしたという冒険譚。

著者は全部が全部ギルデロイ・ロックハートという人物。

リリたちは誰も知らなかったが、メイドのアンだけが知っていた

「取引先で良く聞く名前なので調査したのですが、それなりに功績を上げているよう
して闇の力に対する防衛術連盟名誉会員、勲三等マリーリン勲章授与されるなどしてい
ます。『週刊魔女』チャームिंगグスマイル賞を5連続受賞していますがこれはどうでもい
いですね。後、噂では今年からホグワーツの闇の魔術に対する防衛術の教師に就任する
とか。」

それだけの功績を持つ人間なら去年のニンニク^{クイ}ターバル^レよりはマシだろうと少し期
待できるかなとリリは思った。写真を見たがリンリー邸にいる全員がなぜこんなのが
人気なのかは理解することができなかった。

~~~~~

リストが届いた次の日。

ロザリンドとレイラ、リリとハーマイオニー、そしてパチル姉妹、クラウディア、ダフネはダイアゴン横丁にやって来ていた。

目的は勿論ホグワーツ新学期の準備である。

今回メイドたちは仕事や、あまり大人数でも行動しづらいのもあり不参加だ。

リンリーがやって来たこともあつて多くの店が臨時休業だが、目的の店は活気に満ちていた。

「なんだこりゃ?」

ロザリンドがそう言うのも無理はない。

フローリシユ・アンド・ブロッツ書店には大々的にギルドロイ・ロックハートサインと書かれた横断幕が張られ、女性客でごった返している。

店の奥ではギルドロイ・ロックハート本人が女性客に次々とサイン本を渡している。

無駄に歯を見せた笑顔で。

サインを貰えた女性たちはみんな幸せそうであつた。

サイン待ちの行列を無視して必要な本を買うために店に足を踏み入れる一行。

ロザリンドが店内に入るとキヤーキヤーうるさかったのが静まり返つた。

女性は一人数らずロザリンドを凝視している。

先程までのロックハートへの熱気は霧散し、全ての熱がロザリンドに向けられてい

る。

どんどん女性客が寄って来ては名前を聞いたり握手を求められたり、食事に誘われたりとどんどん状況はカオスになっていった。

ロザリンドは平然と次々と女たちの対応を行っていたが、周りの子供たちが身動きを取れないと判断すると女性客全員を連れて店外に出ていった。

「ああ、待つてください！ 皆さん！ ギルデロイ・ロックハートはこっちですよ!」

そんなサイン会の主の声が木霊するが残ったのはほんの数人だ。

狼狽えるロックハートは一人の少年を目にとめた。

生き残った男の子ハリー・ポッターであった。

自分ともう一つのネームバリューがあればきつと女性たちも戻って来る!

「皆さん! 私、ギルデロイ・ロックハートは今年からこの生き残った男の子ハリー・ポッターがいるホグワーツ魔法魔術学校で闇の魔術に対する防衛術の教師をすることになりました!」

カメラマンにハリーとのツーショットを撮るように呼び掛けるが、そのカメラマンすらロザリンドの虜となつて仕事に身が入っていないかった。

結局女性客が戻ることはなくサイン会はお開きとなつた。

けれど、ロックハートは最後は笑顔で、私のスマイルに皆照れてしまったのでしよう



！ などと言っているのであった。

その間にリリたちは目的の本を入手して店から出ようとしていた。

しかし入り口ではハリー・ポッターや赤毛の集団と青白い親子がみ合っていた。

言い争っているだけならともかく父親同士が殴り合いを始めてしまつて店を出ることができなくなつてしまつた。

だが、その殴り合いも唐突に終わった。

「邪魔だ。」

女性たち全員とデートの約束を付けてきたロザリンドがそう言い放つだけで男二人はその場に膝をついて動けなくなつた。

ハリーやドラコ、ウィーズリー兄弟たちも同様に動くことができない。

ウィーズリー母のモリーは必死に自分を律し出来る限り末娘のジニーを引き離している。

そのジニーは一人の少女に釘付けになっていた。

「教科書は買えたか？ こつちも終わったし帰るか。それともみんなはデートでもしてくる？」

「『『『デートで！』』』』」

そのまま書店の状態を無視してデートに繰り出したハーレムメンバーたち。屋敷の中でのイチヤイチャも良いがたまには外でのデートも最高である。

クラウディアから聞いたホグズミード村への外出も今から楽しみだ。

夏休みもあとわずか。それが終わればホグワーツが待っている。

そこには新しい一年生がいる。後輩にお姉さまと呼ばせることができるとワクワクしているリリであった。

## 14. 初めての妹

1992年9月1日 キングス・クロス駅 九と四分の三番線  
この日のホームはホグワーツに向かう生徒とその親たちでごった返すのが恒例だ。

そこへある集団が入って来る。

それを見るなり生徒たちに二つの動きがあった。

一つは我先へと蒸気機関車に乗り込む男子。

もう一つは入ってきた集団に向けて集まって来る女子たちだ。

言わずもがなその集団はリンリー家とその女たちである。

親であるロザリンドの呪いは強いがそれでも強く接しているリリへの想いが上回る。

リリの両親とメイドたちは一歩下がって我が娘と取り囲む女の子たちを見守ることにした。

「ああ、ああ！ 生リリちゃん！」

「長かった……！」

「選ばれた人たちが羨ましい！」

発車五分前まで出来る限り多くの女子たちと触れ合った。

そして残りの時間は家族との別れの挨拶をするようにして解散となった。

もちろんリリたちもロザリンド達の元に挨拶に駆け寄った。

ちなみにハーマイオニー以下ハーレムメンバーの両親は色々あつて誰もいない。

そういう意味でもロザリンド達は彼女たちの親代わりであるともいえる。

「ママ、お母様！ 今年も行つてまいります！」

「勉強にナニに何でも頑張つてこい！」

「節度は守つて頑張つてください。ハーマイオニー、それに皆さんリリをよろしくお

願います。」

「任せてください！」 嫁のハーマイオニーは期待に応えるように気合を入れる。

「リリは私たちが守ります！」 パチル姉妹はどんなことがあろうと護る決意を固め

る。

「はい。」 クラウディアは短く、しかし魂を込めて返事をした。

「当然です。」 当たり前前なことだが敢えて口に出すことで自身の想いを伝えるダフネ。

その頼もしい返事にロザリンドとレイラは嬉しく思った。

最後にリリたちは二人とメイドたちに抱きしめられて送り出された。

~~~~~

リリたちは大きめのコンパートメントに全員で占領していた。

リリの隣はハーマイオニー。その反対側は順番に入れ替わって全員が平等になるようにしていた。

蒸気機関車が走り出してしばらくするとハーレム以外の女子たちがやって来て順番待ちの大行列ができていた。もちろん女性の頼みは断らない主義のリリはその全員を受け入れるつもりだ。

クラウディアの膝に座り、一人一人女子を招いて夏休みの事やこれからのホグワーツのことなどおしゃべりをする。

女子生徒の数は一学年平均40人。それが2〜7年生までの大よそ8割が並んでいる。

200人近くもの女子たちがいる計算だ。

全員が平等な時間にするために一人当たりの時間は1分程度の極僅かな短い時間。

だが、たったそれだけの時間でも会話をして触れ合えることで女子たちは満たされていた。

「ふう。さすがに体力が持たないわね。でもこれも幸せの代償ね。」

最後の一人とハグをして別れて一息つく。

女の子が大好きなリリであつても流石にノンストップで3時間以上は体力を消耗していた。

それでも最後までそんなことは顔に出さず全員と真摯に向き合った。

だが、それもハーマイオニー^嬢たちの前では見栄を張らずにぐだぐだとした体勢でクラウディアの胸に頭を押し付けている。

「よしよし。お疲れ様でした。」

大抵の女子たちはリリに癒される側であるがクラウディアは逆にリリを癒す方が多い。

今もリリの頭を撫でて、どちらもうつとりとした表情をうかべている。

残りのメンバーはそれを見て焦ることも無くなっていた。

ハーレムメンバーはハーマイオニー^嬢含め、それぞれ出来ることや出来ないことがあることを知っている。だから競うのではなく自らの良さでリリの為になるようにするだけだ。

((…))とはいえ、あの胸は羨ましい…((…))

しばらくして落ち着いてからコンパートメントがノックされる。

リリが許可を出して扉が開いた。

「あの……。ここに、リンリーさんがいるって聞いたんですけど……。」

女子のことに關しては抜群の記憶力を持つリリも聞いたことの無い声であった。

だが、誰であろうと女の子だ。拒む理由など微塵もない。

だらけ切った態勢をしつかりして入室の許可を出す。

「お邪魔します。」

入ってきたのは豊かな長い赤髪ととび色の瞳を持った子だった。

年下、つまりは今年ホグワーツに入学する後輩だろうか。

「あ、あの！ 私、ジニー……ジネブラ・ウィーズリーです！ ここにリンリーさんがいると聞いて会いたくて、あつ！ お招きいただきありがとうございます！」

緊張しているのか、かなりガチガチであった。

そんな彼女を見てリリは悪戯心が芽生えた。

クラウディアの膝から降りて入口から一步の所で固まっているジニーを抱寄せ寄せでコンパートメントに引きずり込んだ。

初めて接するリンリーの魅力に顔を真っ赤にして口をパクパクしている。

ジニーを膝にのせて綺麗な赤毛を手漉きしてあげる。

「お姉さま……。」

「んぐっ！」

腕の中のジニーが目を潤ませて発した言葉に轟沈するリリ。

今までメイドやロザリンドの愛人、先輩などの年上と接する機会は数えきれないほどあるし、ハーマイオニーをはじめとした同級生とも経験豊富だ。

しかし年下から好意を向けられるのはこれが初めてであった。

溢れそうになる鼻血を我慢してジニーを隣に座らせる。

「ふう。初めましてジニー。リリアン・リンリーよ。こっちが嫁のハーマイオニー・グリーンジャー。そして順番に、パーバティとパドマの双子の姉妹、クラウディア・エンジェル、ダフネ・グリーングラス。皆私の大切な人たちよ。」

「ハーマイオニーよ。よろしく。ウィーズリーってことはフレッドやジョージ達の妹かしらっ。」

「よろしく、ジニー。あの双子の妹かあ、苦勞してない?」

「妹は苦勞するものよ。ちなみにこっちのパーバティが姉で私パドマが妹ね。」

「よろしくねジニーちゃん。私のことはお姉ちゃんって言っているのよ?」

「ダフネ・グリーングラス、リリの愛人をやっているわ。ところでどうしてここに来たの?」

ダフネの発言は皆が思っていたことだった。

リリと接触していない女の子がリリ目当てで来る可能性は低いと思っていたのだ。

「えっと……。その、去年兄たちの見送りで駅のホームにいたんですけど、そこでリリさんを見て……一目惚れしました！ ずっと想ってました！ この前ダイアゴン横丁の本屋でまた目にするのができて、このコンパートメントにいると聞いて気が付いたらここにいました！」

リンリーの呪いはたまに波長が合うとでもいうのか一発で深く魅了されてしまう女が現れる。ジニーがまさにその例なのだろう。

「リリさん、いえお姉さま、リリお姉さま……。そう呼んでもよろしいですよ？ そう呼びます。」

発情した顔でじりじりと距離を詰めてくるジニー。

年下、今までにないくらい積極性、リリも彼女の事を気に入っていた。

だが、嫁たちは面白くない。

「ジニー。ちょっと近過ぎよ！」

ハーマイオニーがリリの腕を抱きしめて最大の愛を受け取っているのが自分だとアピールしだす。

そして残りのハーレムメンバーがジニーに嫁やハーレムの在り方について言い聞かす。

「分かりました！ 私もハーレムに入ります。私のこともいっぱい愛してください！」

分かったのか、分かっていないのか。変わらず積極的にリリに絡みに行くジニー。それに対抗してハーマイオニーもリリを強く抱きしめる。

メンバーたちも触発されて次々と主に愛してもらうために突撃していく。

昼食を食べることも忘れてコンパートメントの中でたくさんイチャイチャした。

お腹は減ったが心は大満足なりりであった。

~~~~~

ホグズミード駅に蒸気機関車が到着する。

今年はマクゴナガル先生が出迎えに来ており一年生たちが連れて行かれる。

ジニーは最後までリリと離れようとせずマクゴナガルに引きずられていった。

その時のマクゴナガルの顔は早くも疲れの色が見えていた。

二年生以上は馬がいなくとも動いている馬車で城まで移動である。

その馬車をハーマイオニーは興味津々に見ていた。

到着後は大広間のテーブルに座って新入生が入って来るのを待つ。

流石に昼食を食べなかったからお腹がペコペコである。

しばらくするとマクゴナガルに率いられた新入生がやって来た。

リリは新たにやって来る女の子たちを今年はどうな娘たちかなと楽しく見ていた。

「リリお姉さま〜」

緊張している新入生の中でジニーだけが元気にリリに手を振っている。

リリが振り返すと満面の笑顔になった。

組み分け帽子が歌い、組み分けが始まった。

新入生のほとんどはリリを知らないため組み分けはスムーズに進んでいく。

ジニーは帽子が触れた瞬間グリフィンドールになった。

そしてテーブルにやって来てリリの隣に座ろうとするが流石にガードされて近くに座ることしかできなかった。

「リリお姉さま！ 私も一緒です！ 嬉しいです！ ああ、ホグワーツ最高！」

そして宴が始まった。

久しぶりに食べるホグワーツの料理はやはり別格に美味しかった。

デザートまでお腹いっぱい食べ後はゆっくり眠るだけ。

昼間に体力をいっぱい使ったりりはすぐに部屋に行きたくなっていた。

だが、ダンブルドアから挨拶と新任教師就任紹介があった。

闇の魔術に対する防衛術の教師に就任したギルデロイ・ロックハートが立ち上がって

挨拶をする。

だが、男子はもとより一年生女子以外の女子たちもほとんど見向きもしていない。

それでもめげずにいつもの様にイケメンスマイルをするがほぼ誰からも拍手も歓声もないままだ。

「あ、あれ？ どうしました皆さん？ この私！ 闇の力に対する防衛術連盟名誉会員！ 勲三等マリーリン勲章授与！ 『週刊魔女』チャームングスマイル賞を5連続受賞のギルドロイ・ロツクハートですよ！ ……ははあ、分かりました！ どうやらホグワーツの皆さんはシャイの様ですね！」

そんな勘違いをして笑顔で着席した。

その後は毎年の注意事項を伝えて解散となる。

寮に分かれる前にパドマ、クラウディア、ダフネにはおやすみのキスをする。

そして寮に入ってからパーバティにキス。せがまれてジニーにもキスしたら流れで寮の女子全員とすることになってしまった。

そしていつもの様にハーマイオニーと一緒にベットの隅に入って眠りについた。

## 15. 苦手な教師

新しいホグワーツが始まって一夜明けた。

リリが目覚めると隣にいる最愛の人はまだ夢の中であった。ハーマイオニー

時計を見ればいつもよりちよつと早い時間に目が覚めてしまったようだ。

きつちりとした行動をしたいハーマイオニーはきちんと朝早く起きて一日の準備をしたり、授業の予習などをしている。

なのでほとんどリリがハーマイオニーに起こされる側なのだ。

「ハーミー……。寝てるよね？」

眠っているのを確認してその綺麗な唇に自らの唇を重ねた。

それでも起きないので抱きしめてあげる。ハーマイオニーが起きるまでこのままでいようと思っていたら、寝たままのハーマイオニーが手を背に、足をこちらの足に絡めてきた。

流石に起きているのかと思つたが、どうやら無意識でこちらを求めてきた結果のようだ。

しかもキスからの舌が侵入してきた。

「んん!? んむっ! はあ、ハ、ハーミー?」

いつもはこちらが攻めなのに無意識の攻撃にこちらがやられそうになる。

結局目覚まし魔法が発動するまでハーマイオニーの成すがままにされてしまったリであった。

~~~~~

なんだかんだで大広間での朝食の時間。

朝からいささか体力は使ってしまったが、その分気力は充実している。

朝食のメニューはイギリス式である。朝食だけはイギリスも他国には負けていない。

今日はグリフィンドールのテーブルで食べる日なので隣は勿論ハーマイオニー。

反対はパーバティである。

ジニーがそれを羨ましそうに見ているが、ここで甘やかしてしまうと彼女の為にならないと考えたりりはあえて隣には座らせなかった。

仮にジニーの要望を叶えてしまうと周りのハーレム以外の女の子に対しては不公平であるし、ジニーの成長にもならない。

可愛がりたい衝動をぐっと抑えて朝食を食べていた。

フクロウ便が届く時間になり、数十羽ものフクロウが大広間にやって来た。

リリは特に新聞を読むわけでもないし、手紙もあまり利用しない。

隣のハーマイオニーは日刊預言者新聞を購読しており今日も読み始めている。

「ほ、吠えメールだ！」

誰かがそう叫んだ。

そつちを見るとグリフィンドールの男子が吠えメールを爆弾か何かの様に絶望的な表情で見ている。

震える手で真つ赤な封筒を開けると大広間中に声が響き渡った。

耳を押さえても聞こえてくる爆声によるとその男子、ロン？ とハリーというのが車を盗む、マグルに見つかる、学校の木に突っ込むといったあり得ないことを一気にやらかしたらしい。

吠えメールは最後にジニーの入学を祝って燃え尽きた。

というか件のロンはジニーの兄ということになるのようだ。

「……恥ずかしい！ こんな情けない兄がいるってリリお姉さまに知られてしまったわ！」

非常識すぎる身内がいることに耐えられなくなってジニーの目から涙が出てきそうになる。

それを止めたのはリリだ。いつの間にかジニーの隣にやって来て頭を撫でている。

「泣かないで、ジニー。せつかくの顔が台無しよ。女の子は笑顔が一番！ 私はあなたの兄がどんなのでも気にしてないわ。あなたはあなたよ。」

たつたそれだけでジニーの気持ちは有頂天であった。

だが、そこに妹を女たらしで最悪の女子と勝手に思っているリリに取られたと思ったロンがやって来た。

「おい！ ジニーから離れろよ！ お前なんかジニーに近づくな！ どうせジニーのこと嫌いらしい目でしか見てないんだろ!? ジニーもそんな奴とは離れるんだ！」

累積される兄の愚行にジニーは耐えられなかった。

ジニーはロンの目の前にやって来てその顔を真つすぐ見据える。

ロンは自分の元に行って来たジニーを見て最初はリンリーより兄である自分を選んでくれたと思ひ幸福と優越感に満ちた顔になっていた。

しかし、ジニーのその目を見た瞬間、何かが崩れたことを悟った。

兄である自分を見るその目には怒りも嫌悪もなく、逆に親愛といったものも皆無、全くの無関心。決して兄を家族を見る目ではなくなってしまうている。

「ジ、ジニー……？　なんでそんな、おい！　あいつに何かされたのか!？」

「ロナルド・ウィーズリーさん。黙ってください。朝食時間なのですから。」

それだけ言うのと元の席に戻って周りの友達と一緒に朝食を再開し始めた。

こうしてロナルド・ウィーズリーは学校中の女子から無視されるだけでなく、唯一の妹も失ってしまった。

~~~~~

授業は去年と変わらずに行われる。

変身術、呪文学、薬草学、魔法薬学。

これらは授業内容は少し難易度が上がっているが、最優秀なハーマイオニーや勤勉なレイブンクローのパドマ、真面目なダフネがそばにるのでリリも勉強でそこまで苦労することはない。

唯一つの例外は闇の魔術に対する防衛術である。

担当教授のギルデロイ・ロックハートがとにかく不快なのである。

人気者か何か知らないが女子たちにわざとらしい笑顔を振りまいてくるのだ。

無視されていても照れているだけだと一向に止める気がない。

授業以外でもハリー・ポッターに話しかけたりしているので、同じ寮であるリリやハーマイオニーがそれに遭遇する頻度が高いおまけ付き。

おまけになぜかロックハートはリリにまで近寄って来る。それも目の前、ほんの1メートルも離れていない距離に。

「やあやあ！ ミス・リンリー！ 君も女子に人気見たいですねえ。ええ、分かります！ あなたは美しいですからね。しかし！ 私の活躍の前ではそれも霞んでしまうでしょう。じきに周りの女の子たちと一緒に私のファンになってしまいかもしれませんね！ では、授業で会いましょう！」

一方的に話しかけてきて理解不能な言葉を発して去っていく。

普通であれば男はよほどのことが無い限りあそこまでリンリーの近くに来るなどありえないことだ。

それを何事もないように笑顔で話す男など見たことが無かった。

理解不能な言動や、男が近くに来ることからリリは本格的にロックハートが苦手になった。

そんなロックハートの授業が始まってしまった。

普段の行動はともかく教科書という名の冒険譚が事実であるのならば優秀な魔法使いなのだろう。

教室には7冊もの分厚い教科書が生徒の数だけ積み上げられた中々お目にかかれな  
い光景が広がっている。

ロックハートは教室に入るなり最前列の生徒の教科書を手に取り表紙の写真とピツ  
タリ同時にウイंकをして話始めた。

「私だ。ギルデロイ・ロックハート。勲三等マリーリン勲章、闇の力に対する防衛術連盟名誉会員、『週刊魔女』五回連続『チャーミング・スマイル賞』受賞。」

それに続く自慢の冒険の話になると男子も女子も誰も聞いていない。

そして気が付いたらテストをすることになっていた。

テストということで隣にいるハーマイオニーは気合を入れているが無駄に終わった。

問題は全部で54問。内容は以下のようなものだ。

問1. ギルデロイ・ロックハートの好きな色はなに？

問2. ギルデロイ・ロックハートの密かな大望はなに？

問3. 現時点までのギルデロイ・ロックハートの業績の中で、あなたは何が一番偉大

だと思うか？

こんなのが延々と54問。正直最初の授業で自分の事を知って欲しいと思っ  
てこんなことをしているのかと思ってしまう。

リリは興味もないので名前すら書かず白紙のままだ。

もちろん女子たちは全員がテストに取り組んでいる様子ではない。

ロックハートは答案用紙を回収してペラペラとそれをめくっている。

めくるごとにロックハートの笑顔は消えていった。

それでも全部見終わった時にはいつものスマイルが張り付いていた。

「これはびつくりだ！　ほとんど誰も私の事を知っていないようだね。それとも実物の私を前にして緊張で羽ペンを動かさなかったのかな？　よく私の本を読んでおくように！」

もちろん私の部屋にきてもOKですよ。それでは授業を始めましょう！」

覆いのかかった籠を教卓の上に用意するロックハート。その顔はどこまでも得意げで先ほどもでのテストのことなど既に頭にないのだろう。

「気をつけなさい！　魔法界で最も穢れた生物との戦う方法を授ける！　それが私の使命なのです！」

芝居がかった動作で覆いを取り払い中を見せる。

中にいるのはピクシー妖精であった。

「先生。そいつらのどこが危険なんですか？」

男子の一人がそう尋ねる。他の生徒もピクシー妖精の事を脅威に感じておらず笑いをこらえている。

「思い込みはいけません！　連中は厄介な小悪魔になり得ますぞ。」

では諸君らの対処のお手並み拝見としましょう！」

ロックハートはいきなり籠の扉を開けはなつた。

途端にピクシー妖精がものすごい勢いで教室中を飛び回る。



オニーに膝枕をしてもらっている。

あまりの心地よさに眠ってしまいそうになる。頭を撫でる嫁ハーマイオニーの手がそれを促進させている。

周りの女子はその光景を見守っているが、今年入ったばかりの一年生たちがこちらに近づきたいのか様子を窺っているのが見えた。

せっかく可愛い後輩たちがこちらと仲良くしたいと思っっているのだ、誘わないなんてありえない。

「一年生の皆、こっちに来て。」

そう言う和我先へとこちらに集まってきた。

一人一人と仲を深め全員の顔と名前を覚えた。

一日が終わって後輩たちにどんな感じか聞いて回る。

皆初めてのホグワーツに戸惑ったりしながらも楽しめているようだ。

「お姉さま、リリオ姉さま！ ホグワーツは凄いですね。私やつぱりここに来てよかったです！」

特にジニーは終始興奮しっぱなしであった。

リリは後輩も新たに加わってホグワーツの生活はますます楽しくなるだろうと思わずにいられなかった。

## 16.

新学期が始まってしばらくの時間が経過した週末。

アンジェリーナ、アリシア、ケイテイの三人からクイディッチの練習を開始するから応援に来てくれないか乞われたリリはハーマイオニーを連れて練習の見学に来ていた。ついでにこつそりついてきたジニーも一緒だ。

クイディッチ競技場に着いた時間は早朝、まだ日が昇ったばかりだ。

それでもまだ選手たちは練習を行っていない。どうやらクイディッチ狂いのキャプテンオリバー・ウッドが未だに作戦会議を行っているようだ。

「ジニー……。」

観客席で練習が始まるのを待っているとロナウド・ウィーズリーがやって来ていた。

ジニーに名を呟くがジニーは見向きもしない。

ロナウドはひどく落ち込み何も言わずにリリたちから離れた観客席に腰を下ろした。

それから10分ほどして練習を開始するチェイサー三人に頑張つてと応援すると遠目から見てもやる気に満ち溢れるのが分かった。

そして、ようやくという時に乱入者が現れた。緑のユニフォームを着こんだスリザリ

ンチームだった。

いきなりの登場にオリバー・ウッドは怒り心頭でスリザリンチームに突撃していく。そのまま箒でひき殺さんと言わんばかりだ。

それに続いてクイディッチチームの残りのメンバーとリリたちも続く。

どうやらスリザリンはスネイプから新しいシーカーの育成として許可をもらっているようだ。

「新しいシーカー？ 誰だ？」

姿を見せたのは青白い顔の男子だった。

リリはよく知らないがそのシーカー、ドラコ・マルフォイはどうかやら金持ちの一族の息子で最新式の箒ニンバス2001をチーム全員に与えることでシーカーの座を勝ち取ったらしい。

それに呆れたハーマイオニーがきつぱりといった。

「呆れるわね。少なくとも、グリフィンドール選手は誰一人としてお金で選ばれたりしてないわ。こっちは純粋に才能でなったのよ。」

それを聞いたドラコ・マルフォイが言ってはならない言葉を放った。

「誰もお前の意見なんて求めてない。この、生まれそこないの『穢れた血』め！」

その瞬間、競技場が凍り付いた。



一人の少女から発する怒気がそうさせている。

男子は恐怖によって指一本動かすができない。それほどの呪いが競技場を充満している。

そんなものを集中的に受けているドラコ・マルフォイは股間から尿を垂れ流していることも気づかず震えるだけであつた。

全員が動けない中、リリの口から呪文が発せられる。

『終わる。その血はここで終わる。潰えよ。消えよ。その罪はその血脈の終焉を持って濯がれる。』

その発せられる単語一つ一つが男にとって致命的なもの、いやそれ以上のものと本能で理解させられる。男たちは恐怖でいうことを聞かない体を何とか動かしてゆつくりとその場から離れていく。

それでも全力の呪いを受けているドラコ・マルフォイは身動き一つとれないまま。

リリの持つ杖がゆつくりとドラコに向けられる。

「絶えよ。ルール去ルス勢。」

リリの杖先から漆黒としか言い表せないものがドラコの股間に向けて真っ直ぐに射出された。

~~~~~

くくくく

恐怖で動けない。体にいくら逃げようように命令してもどうにもならない。

僕は言つてはならないことを言つてしまったようだ。

恐らく僕は死ぬ。

死の恐怖さえ、今日の前にいる化物から解き放たれるなら何の怖さもない。

いつもの僕だったら死ぬような目にあつたら喚いて泣き叫んでいただろうな……。

それができないほどに僕の心は恐怖でいっぱいだ。

……父上、母上。先立つ息子を許してください。

リンリーの杖から真つ黒な何かが、僕を殺すものが飛んでくる。

それは僕の股間に命中し体を犯し始める。

次の瞬間には僕は死ぬのだとしか思えなかつた。

でも何も起こらなかつた。

……変だ。何かが変だ。

さつきまで感じていた恐怖がない！

それだけじゃない。妙に静かだ。それに……なんだこれは？

周りの人間が動いていない？ いや、ものすごくゆっくりになっている？

予感していた死は訪れない。感覚がおかしくなっている。

困惑するしかできない僕が次に感じたのは、かつてない喪失感。

自分が、自分の未来が、何もかも失ってしまふ感覚。

死ではない。それ以上に何かを失ってしまふ。

気が付いたら僕は涙を流していた。頬をつたう涙さえ魔法がかかったようにゆつくりだ。

そして……それは突然やって来た。

僕の股間にある男子の象徴。それが突然、大きくなった。

何だこれは!? 僕の身体に何が!?

(あああああああ! いたいいたいいたい! 死ぬ! 死んじゃう!)

大きくなったそれが根元からねじ切られる。トロールに踏みつけられているような力で押しつぶされながら回転を始めた。

当然それはそのような動きをするようにできてはいない。

回転角が大きくなるにつれ、力が大きくなるにつれ、激痛が走る。皮膚が裂ける。血が噴出する。

(やめてたすけておねがいとめてしぬ。あああああああああ!)

絶叫しようにもなぜか声が出ない。それどころか身動き一つとれないままだ。

それなのに感覚だけが鋭敏になり続ける。

最悪なことに回転も力の増加も非常にゆっくりだ。

その分地獄が長く続いた。

体感時間にして10分以上はかかってようやく解放された。

痛みはあるが、もう……ない……。

僕の一部はねじ切られ押しつぶされ……。パンツの中に肉の残骸が残るだけだ。

ちぎられた痕から鮮血が止まらずパンツやせつかくのクイディツチユニフォームを汚していく。それでも僕は安堵していた。

(終わった……。痛い……。早く誰か助けて。ぎぎ!?)

終わってなかった。

股間に残る最後の二つ。

生物の雄にとって命の次に大事なもの。次に繋げるためのもの。

本能で察する。これが無くなれば僕が生きる意味がなくなると。

(やめてくれ! もう嫌だ! 止まって! お願いします! どおおいがああうおあ!)

袋に包まれた片方に激痛が走る。

いくつもの種類の痛みが襲い掛かる。

鈍器で殴打される痛み。

徐々に潰される鈍く長い痛み。

刃物で切り刻まれる痛み。

炎で焼かれる痛み。

薬品で溶かされる痛み。

それらが同時に、しかしどれもハッキリと感じ取れる。

脳が認識を拒否するがそれを上回る痛みが永遠とも思える時間続く。

最早痛いなどと思うこともできなくなるほどにそれは続いた。

痛みがなくなるころには袋の中はグチャグチャになった何かだけになっていた。

(………………。あ、父上…………。母上…………。)

脳裏に浮かぶのは尊敬する父と敬愛する母。

それもすぐに脳から消えた。ただ痛みと後悔と恐怖、ありとあらゆる負の感情だけが

残っていた。

そして終わりがやって来た。

ドラコ・マルフォイの中の魔力がたった一つ残った鞆丸に集まっていく。

全魔力が貯まったそれは爆発した。

比喩でも何でもなく爆発。

炎を上げ、股間を焼き尽くし、かろうじて残っていた残骸すらも残さず炭へと変え、消
失させた。

ようやく意識を失うことを許されたドラコ・マルフォイは股間から溢れた血だまりの
中に倒れこんだ。

~~~~~

競技場にいた全員が見た。

リリアン・リンリーから放たれた漆黒の何かがドラコ・マルフォイの股間に命中する  
と、

一瞬のうちにあり得ない程にそこが腫れあがり、ありえない動きをした後……爆発し  
た。

マルフォイは噴出した血の海に倒れこんだ。

その光景を見て男たちは絶叫を上げて走り去っていった。

本能でドラコ・マルフォイが受けた痛みと恐怖を理解してしまったのである。

女たちはそれに恐怖しなかったが、汚物をこれ以上見たくないのかりりを連れて競技  
場から去っていった。

リリはすすきりした気分ですれについていく。隣にいるハーマイオニーは

さつき<sup>織</sup>の言葉<sup>れ</sup>がどうい<sup>た</sup>う意味であるのか知<sup>血</sup>つてはいたが特に気にも留めてい<sup>な</sup>かつた。リリが怒<sup>り</sup>つてくれた、自分の事を大切に思<sup>っ</sup>てくれていると分<sup>か</sup>つたので嬉しいぐら<sup>い</sup>だ。

血の中に横たわるドラコ・マルフォイ以外誰も競技場にはい<sup>な</sup>くなつた。

新品のユニフォームも、チームの為に手に入れた最新式のニンバス2001も何もかも血にまみれたまま放置されていた。

校舎内を狂つたように走<sup>つ</sup>て逃げる男子生徒たちを不審に思<sup>つ</sup>た教師が理由を聞<sup>い</sup>てマルフォイを発見するまで大よそ10分間。

その10分間<sup>が</sup>ドラコ・マルフォイという男にとつて致命的な時間になつた。

魔法界の正しく純血の一族、聖28一族の一つマルフォイ家は断絶の未来が決定した。

## 17. 開く部屋

競技場での惨劇から一夜が過ぎた。

ドラコ・マルフォイは奇跡的に処置が間に合い命は助かった。

応急処置はしたが、医務室の設備や魔法薬、マダム・ポンフリーの力ではどうすることもできない程の酷い状態であり、即座に聖マンガ魔法疾患傷害病院に運び込まれた。

現場を目撃していたスリザリンとグリフィンドールのクイディッチチーム男子から話でホグワーツ中の男たちの股間は震えあがった。

ますますリリアン・リンリーを怒らせてはならないと胸に刻み付けられることとなった。

~~~~~

惨劇の被害者であるドラコ・マルフォイの父親のルシウス・マルフォイはスケジュールを全て白紙にしてホグワーツに急いだ。

ルシウスはホグワーツの理事の一人である。今回の事を受けて相手がリンリー家だろうと何であろうと必ず報いを受けさせてやると心に誓っていた。

だが、ホグワーツに着いて彼を待つていたのは予想もしない展開だった。

「アズカバンどころか退学にすら出来ないだど!? どういうことだ、ダンブルドア!!」

「そのままの意味じゃ……。リリアン・リンリーを罪に問うことも退学にすることはできぬ。できて精々が罰則を与えること、大幅な減点ぐらいじやろう。」

ルシウスは目の前の老害ダンブルドアの言うことが理解できなかった。

なぜ、息子をあんな目に合わせた奴を退学にもできないのだ。

その答えはすぐに知らされる。

「お主を除く全ての理事たちが彼女の擁護に回った。」

「は……?」

今度こそ本当に理解ができなかった。

更に追い打ちが掛けられる。

「それにわしも校長として彼女を退学にするのは反対じゃ。なぜなら、彼女がここを去るならば大半の女子生徒もそれに続く恐れがある。そうなってしまうえばホグワーツはお終いじやろう。」

「馬鹿な……。そんな馬鹿なことがあるか!? 息子は、ドラコがどんな目にあつたのか知らぬとは言わせんぞ。生徒がいなくなろうが、理事が反対しようが知つたことか!

私が直接裁きをくれてやる!」

「ルシウスよ、無駄じゃ。これを見ると良い。」

校長室から出て行くとうとしたルシウスの目の前に羊皮紙の束が現れる。

それを破り捨てて、とつとつここから出ていくつもりだった。

だが、そこに記されていた名を見て、流石に動きが止まってしまふ。

「コーネリウス・ファッジ……だと!?!」

「それだけではない。魔法省の多くの有力者、他国の魔法省までもがリリアン・リンリーの退学を望んでおらん。」

何がどうなっているのか理解が追い付かないとはまさにこのこと。

ルシウスは一連の出来事がまるで悪夢ではなかと、全てがあり得ないことだとしか思えなかった。

そしてかつての主の言葉が脳裏によぎる。

『ルシウスよ。リンリーには手を出すな。アレは敵対するよりもっと有効に使うものだ。』

ここで全てを無視してリリアン・リンリーにドラコの痛みを味合わせることは可能だろう。

だが、その結果どうなるのか。

恐らくはマルフォイ家は周囲から孤立する。

魔法大臣も、多くの権力者も、他国も、全てが敵に回る結果が待っている。
下手すれば闇の帝王すらも……。

ルシウスはその場に立ち尽くした。

悩みに悩む。10分以上はそうしていただろう。

「……すまぬドラコ。臆病者の父を許してくれ。」

ルシウスは息子とマルフォイ家の未来を天秤にかけ、一族を選んだ。

ルシウス・マルフォイは Hogwartz に来た時の覇気は一欠けらもなく、自らへの嫌悪と後悔がにじむ顔で校長室を後にした。

~~~~~

ドラコ・マルフォイは三日後に意識を取り戻した。

あれだけの傷、それも体だけでなく心にもひどい傷を負ったにもかかわらずである。

同じ聖28一族の男子たちは家族から情報を得ようとしていたが、目が覚めたとは聞かされていたがずっと面会謝絶のままであるとのことであった。

それから更に一週間が経過する。この日にドラコが戻って来るとの噂が流れている。

一限目のグリフィン・スリザリン合同での魔法薬学の授業で復帰するらしい。

スリザリン男子は心配、グリフィン・スリザリン男子は興味と僅かな同情を持ってドラコが

姿を現すのを待つ。女子は言わずもがな。

魔法薬学の担当であり、スリザリンの寮監でもあるセブルス・スネイプが教室である地下牢に入ってきて来る。その後ろには銀髪の少女が顔を俯かせたまま続く。

それを見て一部を除いて全員が疑問に思った。

ドラコ・マルフォイはどうした？ あの子は誰だ？ と。

「静かに。……ドラコ・マルフォイは本日をもって復学する。簡潔に事実だけを言おう。我輩の隣にいるのが、ドラコ・マルフォイだ。」

教室は数秒静かになった。

その後爆発した。

「静かにせんか！ 全員から2点減点！ もう一度言う、今言ったことは事実だ。リンリー、説明しろ。」

興味深くその少女を観察していたリリは突然の要求に驚く。

「何ですか？」

「マルフォイがこうなったのもお前が原因であろう。さっさと説明をしろ。」

「分かりました。えーと、簡単に言うとその子の身体の中の男を殺しました。去勢ですね。」

なので後は女の子になるしかないわけです。これでドラコちゃんは女の子になります。

した。男が減って女の子が増える、喜ばしいことですね。」

この発言で男子はドン引きである。女子はリリが幸せそうなのでOKである。説明を終えたりりはドラコの前に移動する。

ドラコは自分をこんな身体に変えたりりへの嫌悪や恐れと女子になったばかりでリリーの呪いへの抵抗が碌にできないので、もの凄い魅了によって混乱の中にあつた。「女の子の気分はどう？ ハーマイオニーに言ったことを謝るなら……もつといい気持ちにさせてあげるわよ。」

「や、やめろ！ こっちに來るな！ 僕を見るな！ 戻せ、僕は……僕は！」

「あら、いい声ね。前の声は忘れたけど今の声は好きよ。」

銀髪の美少女、声も綺麗。更には一人称が僕というのもギャップを感じてグツド。

怒りか恐怖か歓喜か何なのか分からない感情で震えるドラコの頬に撫でるように触れる。

「あつ……あ、うん。」

リリがそばにいただけでもいっぱいいっぱいだつたドラコは刺激に耐えられなくその場にへたり込んでしまった。

ドラコは再び医務室に連れて行かれることになった。

リリはまた一つホグワーツでの新しい楽しみができたところ満悦であつた。

あの少女はこれからどんな反応をしてくれるのか非常に楽しみだ。

~~~~~

日時は過ぎてハロウイーン。

この日のホグワーツはかぼちやお菓子の香りに包まれている。

だが、そんな事よりもっと重要なことがある。

昨年のリリアン・リンリーを中心としたトリックオートリート事件だ。

今年はあるな騒動にならないようにあらかじめ公正な抽選会を行っており、選ばれし者だけがリリへの悪戯を許されていた。

そのおかげで今年は落ち着いたハロウイーンとなるはず……だったのだが。

昨年鬱憤を晴らすかのようにウィーズリー双子が悪戯に全力になってしまったのだ。

とは言え、他人が嫌がることより笑顔になるような悪戯をする双子なので生徒たちは大いに盛り上がった。

頭と胃が痛くなるのは教師と用務員のフィルチだけであった。

夕食のパーティーはかぼちや尽くしであった。

かぼちやのポタージュ、かぼちやのグラタン、かぼちやコロッケ、かぼちやプリンに

かぼちゃパイ。飲み物ですらかぼちゃジュースである。

海外のものではかぼちゃのテンプラなるものもあった。

そんなカボチャしかないようなメニューではあったが、どれもこれも絶品で飽きずに楽しめた。

デザートを食べ終え宴は終了した。

それぞれの寮に戻る途中でなぜか生徒の移動が止まってちよつとした騒ぎになつていた。

寮に戻つたりり、ハーマイオニー、パーバティは騒ぎの原因が何か知つている子に聞いてみた。

どうやら用務員のフィルチの猫のミセス・ノリスが呪いをかけられたとか。

それでそこにはいつものグリフィン^ハドール^トの馬鹿^ク二人^ンがいたそうだ。

またもや兄が馬鹿な事を起こしてしまつて辛いだろうジニーが可哀そうだなと思ひ、慰めるため探すが見当たらない。

そういえば、いつもならすぐに近寄つて来るのに今日はあまりこつちに来なかつたことに思い至つた。

「でね、リリちゃん。壁にはなんか落書きがされてたつて。」

「あ、それ私見た！ えーと……『秘密の部屋は開かれたり。継承者の敵よ、気をつけよ』

だったかな？」

「秘密の部屋？　ハーミー知ってる？」

「確か……ホグワーツの歴史で見たような。確認してみる。」

ハーマイオニーは即座に自室に戻って『ホグワーツの歴史』を取ってきた。

それを見るため、という名目でリリに近づくためにハーマイオニーを中心に女子たちが集まりだした。男子も興味あるのか遠巻きではあるがハーマイオニーの話を聞いている。

『秘密の部屋』とは要約するとこんな伝説であった。

ホグワーツの創設者4人。ゴドリック・グリフィンドル、ヘルガ・ハツフルパフ、ロウエナ・レイブンクロー、サラザール・スリザリン。最初のうち、4人は仲良くやってきたのだが、じきに意見の相違がでてきた。純血主義者のスリザリンはマグル生まれは相応しくないと考え始めた。残りの三人と反目し、グリフィンドルとの決闘に敗れたスリザリンは学校を去った。だが、スリザリンは他の創設者に知られない、隠された部屋を作ったという。学校に真の継承者があらわれるまで、何人たりともあけられなくした。スリザリンの継承者として認められた者のみはその部屋の封印を解き、その中の『恐怖』を解き放ち、ふさわしくないものを追放する。

その『恐怖』が封印されているのが『秘密の部屋』であるという。

それを聞いたみんなの反応は様々であったがとりあえず注意するということでは落ち着いた。

リリも女の子たちには危険な目にあつてほしくない。特にハーマイオニー嫁はマグル出身だ。どんなことが起こるか分からないが気を引き締めていくことにした。

18. 激闘と決闘

ミセス・ノリスが襲われてからホグワーツでは変化が起きていた。

ハーマイオニー他優秀な生徒が『秘密の部屋』の伝説について伝えた結果、マグル出身者や混血の生徒たちは注意深く行動するようになった。

純血ならば襲われないという憶測から出来る限りそういった生徒と一緒に行動するようにしている。

だが、こんな変化は些細な事である。問題なのはリリアン・リンリーの周りだ。

リリアン・リンリーの生みの親はマグル出身、つまりは混血である。マグルの血が流れているゆえにスリザリンの継承者の敵に該当するのではないかと女子たちは恐れられたのである。

リリが移動するたびにその周りを護るように腕の立つ上級生が取り囲み、更にはリリのお近くにはどんな時でも聖28一族の女子が張り付くようになっていた。

移動だけでなく、授業や、食事、睡眠、トイレに至るまでずっと周りに誰かしらいる。そんな状態ではリリが廊下を通るだけで大渋滞が発生する有様である。

流石のリリも女子に囲まれて幸せだがこれでは他の女子にも迷惑が掛かってしまう

と止めるように言うが返ってくる返事は決まっただけである。

「リリちゃんのためなら何の問題もなし！」

特にすぐ近くにいられる聖28一族、ハーレムメンバーのダフネを除いた、女子たちは不満のかけらもないのであった。

パンジー・パーキンソンやミリセント・ブルストロードといったスリザリンの純血女子たちはダフネに一步先を行かれていたためここぞとばかりにリリを守るため周囲に目を光らせている。

~~~~~

それから特に事件も起こらずクイディッチシーズンが到来した。

初戦は因縁の対決。グリフィンボールとスリザリンの試合だ。

スリザリンのシーカーは女になったからとはいえドラコ・マルフォイから変わっていない。

ニンバス2001という最新鋭の箒をプレゼントしたという効果もあるだろうが、それ以上にドラコの箒の腕もシーカーに値するだけのものがあるということだろう。

リリたちが観客席に行く途中に競技場に向かっているスリザリンチームの姿が見えた。

大柄な男たちの仲で一人だけ小柄な少女が緊張でガチガチになっている。それを見たリリはスリザリンチームの元に歩を進める。

「うえあ!？」

「に、逃げろ!」

リリはただ近づいただけなのに全速力で逃げ出す男たち。

唯一人残ったのは少女、ドラコ・マルフォイである。

「こんにちは、ドラコ。」

「う、あ……何しに来た。」

「何って、応援しに。初めての試合なんだよね? 頑張つてね!」

「なつ何だよそれ! 意味が分からない! 僕は敵じゃないのか!? こんな体にしてその上!」

リリは激昂するドラコの顔を両手で包み真つ直ぐに目を見る。

リリが真つ直ぐ見つめてくるだけでドラコは身動き一つとれなくなってしまう。

「ドラコ、あなたはどうかあがいても何をしても、もう女の子。私は全ての女の子の味方だからあなたの味方でもある。何もおかしなことはないわ。」

(ふざけるな! 僕は男だ!)

そう言いたいドラコだったが、声は出せず体も動かない。



張つてはいるが、ブラッジャーの一つがシーカーのハリー・ポッターばかりを狙うためビーター<sup>双</sup>子の片割れがそれに対処するため思うようなプレーができていない。

試合が開始して一時間が経過した時点で50対70とスリザリンがややリードしている。

グリフィンボールはそこで賭けに出た。

暴走しているブラッジャーをハリーに任せることにしたのだ。

ハリーは巧みな筈さばきでブラッジャーを躲しながらスニッチを探す。

そうしているうちに同じようにスニッチを探すドラコの近くまでやって来ていた。

「どうしたんだい、ポッター？　いつからそんなにブラッジャーに好かれるようになったんだい？」

「うるさいぞマルフォイ！　それともドラコちゃんと言った方がいいかい？　君こそあんなリンリーに好かれるようになって最高だろう？」

互いに罵り合いながらもスニッチを探し続ける。

そしてほぼ同時に金色の小さな光を見つけた。

「！」

スニッチに向けて二人が風になって飛び出す。

（勝つ！ 絶対に勝つ！ 僕だってやれるんだって証明してやるんだ！）

ハリーは焦っていた。

ホグワーツ入学が決まってから出会う魔法使いたちは皆が皆、自分の事を生き残った男の子を言う、両親も凄いな魔法使いだったと言ってくれ。期待に満ちた魔法界での暮らしが始まるとばかり思っていた。

しかし、いつの間にか悪いことばかりが起こっていた。

マルフォイの罠にはまって大量の減点に始まり、父さん譲りの箒の才能だと言われたのに初戦では箒に遊ばれるだけで良いところ無し。ドラゴン騒動で魔法界で最初の友人のハグリッドはホグワーツを去ってしまった。おまけに罰則と大量の減点だ。

期末に宿敵のヴォルデモートと対決したがほとんどダブルドア任せでせっかく勝ち取った寮杯も感動なんてありはしなかった。

今年も最初からホグワーツ特急に乗れなかったり、ロックハートがうざかったり、謎の声に秘密の部屋とうんざりだ！

今の周りからのハリー・ポッターの認識は『生き残った男の子』ではなくただの『謎題児』である。

だからこそ、この試合には負けられない！

僕の手で勝って皆の認識を変えたい！

そのためにも全力で飛ぶ！

反対にドラコの心は落ち着いていた。

身体が女になってからは何もかも忘れるためにひたすら箒の練習に打ち込んできた。箒に載っている間は全てを忘れることができる。

今の自分はただスニッチを掴むだけの存在だ。

そこに男も女も関係ない。

ただただ真つ直ぐに黄金のボールに向けて進むだけ！

二人はほぼ互角のまま徐々にスニッチとの距離を詰めていく。

その速さにブラッジャーはハリーに追いつくことができない。後は二人の実力が勝負を決する。

箒の才能はハリーが上。箒の性能はドラコが上。

そしてともに練習量では負けていない。

全くの互角と言っているいい勝負。

「頑張れ！ ドラコ！」

耳に聞こえるは憎き敵の声。同時に体を熱くさせる愛しい声。

「いっけえええええええ！」



僅かにドラコが前に出る。

そして。

『試合終了——ドラコ・マルフォイがスニッチを掴みました！ スリザリン220対グリフィンボール50。スリザリンの勝利！』

最後に勝敗を分けたのはリリの声援だけではない。

女体化したことによる身体の軽量化でほんの僅かにドラコが上回ったのだ。

歓喜に包まれるスリザリンチーム。全員でドラコを胴上げしている。

反対にグリフィンボールチームは失意に沈んでいる。

特にハリリーの落ち込み様は酷い有様だ。

そんなハリリーに追い打ちでブラッジャーが襲い掛かって腕の骨を砕いてしまった。

ダメ押しでロックハートが腕の骨を消失させるおまけ付きであった。

~~~~~

クイディッチ試合の翌日の話題の大半がプレーの内容であつたり選手を称えたり貶したりといったものである。

しかしこの日は違った。

とうとう秘密の部屋の怪物による生徒の被害者が出てしまったのだ。

グリフィン・ドールのマグル出身者のコリン・クリービーが石になって発見された。

この知らせはホグワーツ生徒を恐怖に陥れた。

特にマグル出身者や混血の生徒は今まで以上に恐れ団体行動をするようになってしまった。

他には怪物の正体を推理したり、継承者は誰なのか、ホグワーツの警護体制はどうなっているのかなどと話題は尽きそうになかった。

もちろんリリアン・リンリーの周りは今まで以上の警戒態勢である。

もはやどこぞの王族の身辺警護のような有様である。

リリは今回の事件については女の子が襲われなくて良かったと心の底から思っていた。

もし仮に女の子が、ハーレムメンバーが、ハーマイオニーが襲われでもしていたら……。

そう思うだけでとても恐ろしい。

「大丈夫よ、リリ。」

そんな風に思っているとハーマイオニーが優しく抱きしめてくれた。

何も言わずに抱きしめかえす。暖かくて優しい香りがする。

それだけで恐怖も吹っ飛んでしまった。

「ありがとう、ハーマイオニー。でも危ないことはしないでね。もちろん皆もよ。」

そんなおねがいをされてしまつては危険なことなどできるはずがない。

女子たちは寮の垣根を越えて情報共有と防衛について連携することを誓つた。

~~~~~

事件から2週間ほど経過した週末。

掲示板にある報せが張り出されていた。

『ギルデロイ・ロックハート主催 決闘クラブ』

ロックハート主催というのはどうかと皆が思つてはいたが僅かでも戦いの練習になれば良いとしてとりあえず参加することにした。

その日の夜。

大広間は長机は撤去され生徒たちでいっぱいであつた。

リリが参加をするということは必然としてほぼ全ての女子が参加するのと同義だ。

その女子生徒の多さに主催者のロックハートは満足そうである。

「みなさん、良く集まつてくれました！ 私が見えますか？ 私の声が聞こえますか？

……大変よろしい！」

そしてロックハートはいつものように自慢話を繰り広げ始めた。

その横ではスネイプがうんざりした顔で立っている。

「では、助手のスネイプ先生をご紹介しましょう！ スネイプ先生がおっしゃるには、決闘についてほんのわずかご存じらしい。模範演技のために、勇敢にもお手伝いいただけるとのことです！ ご心配めさるな、私と手合せしたあとでもみなさんの魔法薬の先生はちゃんと存在します！」

誰の目にもスネイプが激怒しているのはよくわかった。

それに気が付かないロックハートは模範戦を始めた。

杖を構え、3つ数えたら術をかける、という説明がされ、二人が相對する。

結果はスネイプのエクスペリアームス<sup>武裝解除</sup>が炸裂し、ロックハートが吹き飛んでいった。スリザリン生から歓声があがったがロックハートを心配する声は皆無だ。

その後は二人組を作つて模擬戦をすることになったのだが、以外にもリリと組みたがる女子は少なかった。

本気ではないとはいえ愛すべき守るべき存在に向けて杖を向けることなど出来るはずがない。結局はハーマイオニーとペアを組んで模擬戦をすることになった。

決闘とは言つても魔法を派手に魔法を打ち合うようなことは出来ずただ単に知っている魔法を使う程度の事しかできない生徒が大勢いた。

リリとハーマイオニーも簡単な魔法を使つてそれをお互いに避けるということを繰

り返していた。

なんだかんだと真剣にやっていたらいつの間にかロックハートに連れられてハリー・ポッターが舞台の上へ上がってスリザリンの男子と模擬戦をすることになっているようだ。

「それじゃあ、杖を構えて！ 1、2、3！」

ロックハート先生の開始の号令で決闘が始まった。

スリザリン男子が呪文を唱える。

「サーペンソーティア！ 蛇よ出よ！」

杖の先から黒蛇が現れる。

周りを囲んでいた生徒から悲鳴が上がったり、後ずさりしていく。

「動くなポッター。私が追い払ってやろう……」

スネイプは蛇を追い払おうと前に出るが、それをロックハートが阻む。

「私にお任せあれ！」

ロックハートが杖を振るうと大きな爆発音がして蛇が空中に弾き飛ばされる。

その衝撃で蛇は怒り狂ったよう近くにいたハッフルパフ女子に襲い掛かろうとする。

恐怖でなのか動けない彼女を見てリリは咄嗟に蛇との間に入って守ろうとする。

その次の瞬間、ハリーが何かを叫んだ。

何か、そう言葉では無かった。ハリーの口からはシューシューといったような音が漏れているだけであった。

そのシューシューによって蛇は襲うのをやめとぐるを巻いて大人しくなった。

得意そうな顔をしているハリーだったが、大広間中の女子から敵意を向けられていることに気が付いて動揺し始めた。

「リリちゃんに何するつもり!？」

「リリ逃げて!　そいつは継承者よ!」

「早く引き離すのよ。皆杖を構えて!」

次々にリリとハリーの間にも女子たちが壁を作る。

最前列にいる者たちは今にも魔法を放つ勢いだ。実際ハリーが何かしたらそうなるだろう。

そこへロンがやって来てハリーの袖を掴むと大広間の外へと逃げるように引つ張っていった。

「リリ平気!?!　あのポッター……。」

「これからはポッターに対しての監視も必要になって来るわね。護衛シフトの見直しね。」

「パーセルタンク蛇語使ということは……怪物は蛇なのかしら?」

既に女子たちはハリー・ポッターを継承者、そうでなくてもリリの敵としか考えていない。

これが他の女子や男子が襲われていたらここまでにはならなかつただろう。

リリは周りの女子の事よりも先ほど襲われかけていた女の子を心配する。

「アンジー、大丈夫？」

「怖かつた……本当に怖かつたわ。リリちゃんが襲われてしまうかもしれないかつた……。」

アンジーは自分が襲われかけたことよりもリリが守ろうとして自分の代わりに傷ついたかもしれないという事実に涙していた。

そんな彼女を優しく泣き止むまで抱きしめ続けた。

こんなことになっては決闘クラブなど続けられるはずもなくお開きとなった。

## 19. 推理と聞き込み

クリスマス休暇が目前に迫っていた。

決闘クラブの一件以来ハリー・ポッターはホグワーツ女子の多くから継承者だと、そうでもなくてもリリを狙ったように見えたことから敵であると認定されていた。男子もグリフィンボールに一部以外はするように思っている有様だ。

その後が発生したほとんど首なしニックとハッフルパフ生、ジャスティン・フィンチ―フレッチリーが襲われるという事件が起こり、第一発見者がハリー・ポッターということもあつてハッフルパフからの疑いはほとんど確信へと変わっていた。

ハリーは余りの敵意から授業中も廊下での移動も身を隠すようにこつそりとしか行動できない。

唯一心休まるのは自室にいるときだけとなっていた。

そんなホグワーツでリリアン・リンリーとハーレムメンバーは特にハリーの事を疑つてはいなかった。ハーマイオニーとパドマの推理から違うのではないかということであつたがリリにとつては興味が無い。それはハリーの周りの環境も同様だ。リリがハリーの事を継承者だと思つていないといえれば疑いは即座に晴れるだろうに。



そんな事よりクリスマス休暇である。

今年はホグワーツでお祝いしようかと計画している。

理由として去年は実家に帰ったのでホグワーツでのクリスマスを体験していないのとリンリー邸でクリスマスパーティーをするには人数の制限があるからである。

ホグワーツでパーティーをすれば全女子生徒と一緒にパーティーができる。

そう気が付いてしまつては残る選択しか頭には無かつた。

しかし、これには当然ハーマイオニーやハーレムメンバー、女子生徒から猛反対された。

「リリ危険なのよ。戻つた方が良いに決まつているわ。」

ハーマイオニーは理論的にいかに今のホグワーツが危険なのかを説いていった。

「私たちもクリスマスはリリの所に行くから、ね?」

「そうよ。それに他の皆だつて誰もリリが危険を冒してまで一緒にパーティーをしたくなつて思つていないわ。」

パチル姉妹も必死である。

「駄目。リリちゃんが危険なのは駄目。」

普段のおつとりした感じもなくなつてきつぱりとクラウディアは断言する。

「スリザリンでも誰が継承者が判つていないのよ。」

ダフネはスリザリンだからこそ分かる危険性を材料に説得しようとする。「ダメ？」

上目使いでお願いをする。自分の力を理解しているからこそ全力である。

これにはハーマイオニー<sup>嫁</sup>たちは落ちそうになるがリリの為にもぐつと耐える。

学校女子全員でのパーティーをしたがここまで想ってくれているのを無視してまで断行するつもりはないので引き下がることにした。

しかし、今までそこまで関心が無かった継承者に対しての怒りが湧いてきた。

「はあ、分かったわ。でも継承者は邪魔ね。ダフネ、本当にスリザリンの誰かとかも分からないの？ まさか本当に噂のポッターだったり？」

「ポッターはないわね。もしそうだったら行動が迂闊すぎる。第一発見者、自分のお見舞いの後輩、大勢の前で蛇語使いだとばらす、そしてまたまた第一発見者になって見つける。どう考えてもあり得ないでしょう。正直これでポッターが継承者だったら何がしたいのやら。で、スリザリンだと半分以上はポッターの事を継承者だとは無いと思っ  
ているわ。それとは別にリリに危害を加えそうだから敵意はあるけどね。かといって誰が継承者だなんて知っている子はいないわ。皆の方はどう？」

「グリフィンドールもポッターの事はリリの事を蛇で襲わせたってほとんど敵扱いね。でも継承者だとまでは考えてないかな。」

「レイブクロウも大体そんな感じ。ただ、確証がないから容疑者ではあると。」  
「うーん。ハツフルパフだとほとんどポッター君が犯人扱いかな。何せこつちから被害者が出ちゃったし。」

皆の意見や情報を整理してハーマイオニーは打開策について考える。

「何にしてもスリザリンの継承者だから純血もしくはスリザリンに所属している可能性が高いと思うわ。誰か有力な情報でも持っているの良いのだけど。」

聖28一族であったダフネも知らないととなるともつと有力な貴族ならば知っているのだろうか。だが、パンジー・パーキンソンやミリセント・ブルストロードも家柄で言えばグリーン格拉斯家とそこまで差はない。

「あー」

悩むリリに閃きが降りてきた。

「リリ？ 何かいい手が見つかったの？」

「いるじゃない。最近可愛くなった銀髪の子が。」

~~~~~

スリザリンの談話室。

スリザリンの寮は地下牢にある。とは言え活気が無いわけではない。

今日も談話室では何組かがおしゃべりしたり、魔法について論議していたりしている。

そんな談話室の一角。

そこには憂鬱な表情で窓から見える湖底を眺める銀髪の美少女がいた。

その様も非常に様になっている。

だが、女子も男子もその少女に声をかけるところか近づくのもためらっている。

その少女の名はドラコ・マルフォイ。

かつて男だった少女である。

性転換をしてから既に数カ月。

男子も女子もドラコとどう接したらいいのか未だに分からないのだ。

「ド、ドラコ！ お菓子だ。」

「うん、一緒に食べよう！ うまいぞ！」

男だった時には一緒に行動していたグラップとゴイルは籠いっぱいのお菓子を持って傍までやって来た。

二人ともドラコとは小さい時からの仲だ。そこに何事にも揺るがせない友情があったわけではない。だからと言って落ち込んでいるドラコを放っておくほど二人は薄情でもなかった。

二人は自分でも頭が悪いとは分かっていた。だから自分の欲しいものを相手と分け合うことぐらいいか思いつかない。

「……ありがとう。でもいいよ。僕はもう少し一人でいたい。」

振り向いて力なく微笑むその顔は美しかった。

男だった、友達だった、そんなことは分かっているが二人は、いやドラコの様子を見ていた男子はその顔に釘付けになるほどの威力を持っていた。

もちろんドラコにそんな自覚はない。

また、窓の外を眺めながら憂鬱な表情に戻ってしまったている。

(……どうすれば良いのだろうか。こんな体になってしまつて。こんな、子供を産むことさえできない出来損ないの身体に。父上や母上とどう接すればいいのだろうか……)

何百回と繰り返してきた問。

だが、今回も答えは出そうにない。

(もうすぐクリスマス休暇か。……残るしかない、か。会いたい、けど会えない。

はあ、これも全部リンリーのせいだ。)

そうは思いつつも男だった時の恐怖や嫌悪感、怒りなどそういった負の感情は塵ほどしか湧いてこない。

（僕はどうしてしまったのだろう。あいつのことを思うと怒りではなく暖かな気持ちになつてしまう。クイディッチの試合の時の事を思い出すだけで動機が激しくなる。まさか、他の女と同じように？　ばかばかしい。）

そうは思つてもどうしても考えてしまう。

リリアン・リンリーの隣にいる自分を。

笑顔を向けてくれる彼女を。

色々な光景が頭に浮かんで消えていく。ドラコはつい口からその名を出してしまった。

「リリアン・リンリー……。」

「呼んだ？」

横から聞こえた声にもものすごい勢いで振り向く。

そこにはここにはいるはずがないリリアン・リンリーがいた。

周りにはリンリーハーレムがいるだけで誰もいない。

時計が目に入ると時刻はかなり経っているのか夜遅くになつてしまつている。

「何で……!?!」

「あなたに会いに。」

「ふえ？」

いきなりの言葉に疑問も何もかも一瞬で消えてしまった。

「あなたなら秘密の部屋や継承者について知っているかもってことになってね。ダフネに合言葉を聞いてここに来たの。何か知ってる？」

ドラコは落胆していた。自分に会いに来たと言いつつただ単に情報が欲しいだけなのかと。

（待て、なんでがっかりしているんだ。）

そうは思いつつ思いは口から出てしまう。

「僕に用があるのはそれだけ？ だったら帰ってくれ！」

「それだけじゃないわ。せっかくの機会だしもつと仲良くしましょう？」

そう言つて隣に腰掛けるリリ。ドラコの心拍数が急上昇する。

動きが固まるドラコに寄りかかり腕を、指を絡めて知っていることを聞き出している。く。

服従の呪文にかかったかのように知っていることをしゃべってしまうドラコ。

（でも、こんないい気分なら……。ああ……。リリ。）

「ありがとね、ドラコ。また来るわ。」

最後に頬にキスをしてリリたちはダフネを残して帰っていった。

しばらくぼーっとしていたドラコは我に返ると真っ赤になっていた。

羞恥、怒り、様々な感情が渦巻く。

自分はどうなってしまったのか。いったいどっちなのだろうか。

「ドラコ。無理しなくても良いんじゃない？ こっちは良いわよ。」

その様子を見ていたダフネはドラコにそれだけ言うと部屋に去っていく。

それからしばらくドラコは頭を抱えていた。

~~~~~

ドラコからの情報では50年前に誰かが秘密の部屋を開け一人死人が出てしまったこと、そしてその時の犯人は退学になったということが分かった。

しかし、今回の件については何も手がかりはなかった。

クラウディアやパドマと別れてハーマイオニー、パーバティとグリフィンドール寮に戻って来る。太った婦人の肖像画をくぐって談話室に入る。

夜も遅いので誰もいないだろうと思っていたが、一人だけいた。

ジニーだ。ソファアーに座ってぼーっと外を眺めていた。

「はあいジニー。早く寝ないとお肌が悪いわよ。」

私たちもでしょ、とハーマイオニーとパーバティからのツツコミが入る。

それでも最近のジニーは調子が悪そうなのだ。



相変わらずぐいぐいと懐いてくるが、日に日に無理をしているのが、目に見えて分かかってしまう。目に隈があることもあり心配だ。

「あ……。リリお姉さま。」

たつた今リリたちに気が付いたのか、ぼーつとしていたのが嘘のようにぼつと立ち上がってリリに近寄ってそのまま抱き着いてきた。

このような行動は別段珍しくないのだが、今回は少しおかしかった。

いつもならそのままリリの胸に顔を埋めて香りを堪能したり、ひたすらお姉さまと連呼したりといった行動がプラスされるのだ。

だが、今のジニーは震えていた。

「ジニー？ 何かあったのね。話してくれない。」

そう言うのと震えはピタリと止まりリリから離れていった。

「ふふ、お姉さま成分充填完了！ おやすみなさいお姉さま！ ハーマイオニーとパーバティモ。」

そう言つて女子寮に駆け上がっていった。

その様子をリリは心配な顔で見ているしかできなかった。

## 20. 幽霊少女や邪悪な日記

ドラコから情報を入手したが決定的なものは何一つ分からないままであった。つまりはホグワーツから危険を排除できないということである。

よって、リリはハーマイオニーらに連れられてクリスマス休暇は実家で過ごすことになった。

去年はハーマイオニーの紹介を兼ねていたので彼女だけを招待したが、今年はパチル姉妹にクラウディア、ダフネを当然の様に招待している。

ダフネに至っては実家に帰れる状態ではないので必然としてリンリー邸にいるしかないのだが。

今年はそれだけでは収まらない。

日替わりで複数人の女子たちを呼んではパーティーを開催しているのだ。

本当はホグワーツでみんな一齐に楽しむ予定が、こんな小分けな感じになって申し訳なく感じていたが、女子たちにとってはリリに誘われリンリー邸でのパーティーなど訳のような体験であった。

そんなこんなで毎日のようにお祭り騒ぎでクリスマス休暇は過ぎ去っていった。

~~~~~

クリスマス休暇も終わり、新年になった。

相変わらずリリが移動するたびに物々しい警戒態勢ではあるが、前回の襲撃以降特に事件は起こっていないので一応は平和な日常であった。

ちなみにリリを警護するのは何も生きている人間だけではない。

女性ゴーストも生身の人間ではできないような壁抜けなどの方法で警備体制に一役買っている。

マートル・エリザベス・ウォーレンもその中の一人だ。

彼女は比較的最近ゴーストになったらしく、更には Hogwartz の生徒であつたらしい。

今までは3階の女子トイレで痲癩を起していることや泣き叫んでいることが多かったのだが、リリが入学してきてからは比較的穏やかになってリリやかつて所属していたレイブンクロー生とも上手くやっているらしい。

今回の騒動からはリリを護るゴーストの会を立ち上げて女性ゴーストを率いる存在にまでなってしまった。

「リリ、安心してね。いざとなつたら私たちが盾になってあげる。どーせ死んでるし

ね。」

「ありがとね、マートル。でもゴーストも被害にあっただけで言うしそう考えると怪物って何なのかしらね。」

「さあ？ でも私が死んだときも特に痛くもなかったし大丈夫じゃないかしら？」

「えっ!？」

マートルの発言はリリやハーマイオニー、その周りの護衛隊の全員を驚かせた。

「なに、どうしたの？ さっさと教室に行くわよ。」

マートル本人は特に意識せずさっさと教室に行くように促している。

ハーマイオニーがすかさず待ったをかける。

「ちよ、ちよつと待つてマートル！ あなたが前に秘密の部屋が開かれたときの犠牲者なの!？」 詳しく教えてちょうだい!？」

「え、言つて無かつたつけ？ まあ良いわ。それに……なにに皆してそんなに私が死んだときのこと聞きたいの？ 聞きたいのね！ 他ならぬリリが聞きたいみたいだし特別に教えてあげる!？」

マートルが語る50年前の秘密の部屋が開かれた当時のこと。

その時もマグル生まれや俗に言う血を裏切る者たちが何人か石になるといふ事件が起こっていた。恐怖に震える生徒たち。事件解決の糸口も見つからずホグワーツは閉

鎖に聞きであったとも囁かれていた。

そして最後に、マートルが死んだ。

「で、私は死んだあのトイレに今もいるってわけ。面白くもなんともない話でしたとや。」

その後はドラコの話にあったように誰かが退学になって、その後の被害はなく事件は一応の終わりを迎えたようだ。

マートルの話はすぐにホグワーツ中に知れ渡った。

この話を聞いた女子たちはそれぞれ色々と考えている。

ある者はこの情報を多くの仲間に分らせようとしたり、教師に情報提供したり、あれこれ推測を話し合ったりしている。

女子トイレは特に危険だとして決して一人では入らないようになった。

特にマートルのいる3階トイレは死人が実際に出了たということで要注意な場所に指定されている。

マートルはあれから先生や色んな女子に話を聞かれてすっかり人気者である。

本人としては最初のうちは嬉々として死んだ当時の話をしていたが、だんだんとうんざりしだした。

最初に話をしてから初めての週末。

マートルはぐったりとしてリリのそばを漂っている。

死んだゴーストであっても精神的には疲弊するのだろうか。

「リリ。死ぬ。死んでるけど。」

「お疲れみたいね。でも、あれだけいっぱいの子供たちが話を聞きに来てくれるなんて最高じゃない？」

「あゝリリならそうなるわね。私はそうじゃないのよね。」

その後もしばらくお疲れのマートルと喋っていた。ほとんどが愚痴であったがその中には日記帳の様なものがトイレに投げ込まれたことなどがあつたそうだ。

「日記？　どんなの？」

「黒くて古ぼけた感じの日記。嫌がらせだろうからトイレに流してやったわ。多分途中で詰まっているでしょうね。」

「ふーん……。ん、ジニーどうかした？」

何やら嫌な気配を感じて見ればジニーがもの凄いい形相でマートルを見ている。

「驚愕？　憤怒？　侮蔑？　嫉妬？　そんな感情が混じった顔と目だ。」

それを見たリリは感じたままの事を口に出した。

「あなた、誰？」

ハツつと一瞬正気に戻ったように見えたがすぐにおかしな感じになる。

近づこうとしたがすぐに寮から飛び出てしまった。

「……マートル。マクゴナガル先生に連絡をお願い。」

「え……。はあ、分かったわよ。」

少しでも異変に気が付いたら教師に連絡することになっていたが、気が付くのが遅かった。

ジニー・ウィーズリーはその日を境に行方不明となった。

~~~~~

ああ、ああ！ お姉さま！

初めて見た時からその美しさに心を奪われたわ！

ホグワーツに入学するまでずっと、ずっと！ お姉さまに会うのだけを楽しみにしていた。

そして。

今年の入学準備の フロリーシユ・アンド・ブロッツ書店でまた目にするのができ  
た。

美しかった。可愛かった。尊かった。気高かった。素晴らしかった！

どんな称賛も陳腐に感じるほどお姉さまはお姉さまだった。

ホグワーツ行きの列車でお姉さまのコンパートメントに行つてからますます私の気持ちは抑えられなくなつた。

組み分けもお姉さまと同じグリフィンドール！　帽子さんも即座に選んでくれた。

つまりこれは運命！

何もかもが最高だった。

パパからのプレゼント、書きこんだら返事をくれる日記帳にこの気持ちを毎日毎日必ず書くようにしていた。トム・リドルというこの相手は私にとつていいアドバイスをくれる良い相手だった。

（毎日毎日、忌々しいリンリーの事を聞かされるのは本当に不愉快だ。だが、我慢すればその分この小娘の魂が僕に流れてくる。それにしても、こいつはこれ以外の話題はないのか？）

同じグリフィンドール1年生のコリンが不愉快だ。

お姉さまの事を有名人だとかなんとか言つてこつそり写真を撮つていたのだ。  
（それにマグル生まれだ。排除対象だ。）

そう思つたらコリンが石になっていた。正直、良い気味だった。

今日もお姉さまの事を目で追つてしまう。はあ……、最高だわ。



(だが、あれは僕の障害になりうる。)

ああ、お姉さまお姉さま。とてもいい香りだし、肌も綺麗、髪も素敵、近くにいますだけで幸せ。

(僕にとつてはとても不快だ。いい加減そろそろこの体を自由に動かせる頃合いなのだ……。予想以上に魂が強い。)

最近、何かおかしい気がする。お姉さまを見ても幸せにならない。むしろ苦しい。

どうしたのだろうか？ 最初の内はお姉さまの事を書き込んでいた日記帳もお姉さまの事を書こうとすると嫌な気分になる。

(ああ、やつとあの女の事を書き込まなくていいようになった。)

日記から嫌な感じが。そう、無能な兄と同じ男のような感じがしたのでマートルのトイレに投げ捨ててしまった。

(小娘<sup>ジニー</sup>には困ったものだ。だが、既に半分以上は魂を取り込んだ。この体に乗っ取るのも時間の問題だ。)

マートルが日記を流してしまつたらしい。これであの日記とは永遠におさらばだ。

(あのゴーストめ！ 僕を誰だと思つている！ もう一度殺してやろうか！)

ああ、僕の今の怒りでジニーの魂をほぼ支配することができたようだ。

だが、あいつ。リリアン・リンリーが感づいたな。

危険だ。やはり排除する必要がある。

あれもマグルの血が混ざった出来損ないだ。この僕が続べる世界にはふさわしくない。  
い。

消えてもらおうとしよう。

ひとまずはトイレから日記を回収して秘密の部屋に隠れて残りの魂を喰らうその間にバジリスクでリンリーの排除だ。

完璧に力を付けたらホグワーツから脱出、僕の本体と合流するとしよう。

(させない、させるものですか！)

!?! まだ抵抗する力があつたのか。だが、無駄だ!

お前のような男がお姉さまに危害を加えていいはずがない! 私を返せ!

(なっ!?! 身体の主導権が元になっ!?! このクソガキが!?)

それから私たちは、僕たちは体の中で戦いを繰り広げた。

ああ、ごめんなさい。お姉さま、どうか無事で。

## 21. 孤独の蛇王を癒すは

ジニー・ウィーズリーが消息を絶つて二日が経過した。

ウィーズリー兄弟たちだけでなく、グリフィンドール生は全員が無事を祈っている。他の寮でも女子たちは心配ではない。

それに純血の聖28一族であるウィーズリー家の子が継承者によつて消息を絶つたという事実は純血の生徒たちにも衝撃をもたらした。

今までの石化と違つて行方不明ということ、直前の様子がおかしいということから何かしら継承者の情報を得ていた、もしくは継承者に洗脳されていたのではないかと考えられている。

教師たちは必ず廊下の移動に付き添つて警備することになった。

ホグワーツの理事や魔法省からは一度生徒を全員避難させ、大規模な捜索を行うべきという案も出ている。これには多くの保護者も賛成しており、ホグワーツが閉鎖されるのも時間の問題であるようだ。

ちなみに闇の魔術に対する防衛術の教師にして闇の力に対する防衛術連盟名誉会員、勲三等マリーリン勲章授与のギルデロイ・ロックハートは諸事情で急遽退職すると言つて

ホグワーツから去っていった。

~~~~~

そんな暗いホグワーツの中、リリアン・リンリーも暗く落ち込んでいる。

最後にジニーと会っていたのは自分だ、あの時無理やりにも止めていれば、そんな思いが彼女の気を重くさせている。

「リリ。元氣出して、あなたのせいじゃないわ、なんて言葉は言わないわ。これからどうする？ 私はあなたについていくわ。たとえ地獄であつてもね。」

ハーマイオニーはこんなときは優しくするわけでも慰めるわけでもなくただ、リリがどうしたいかだけを確認してきた。

ハーレムメンバーも黙ってリリの行動を待っている。

「……助ける。ジニーを助ける！ でも、私一人じゃ何もできない。だから、力を貸してほしい。」

その言葉を待っていた皆は声を揃えて言う。

「「「もちろん！」」」

とはいったものの学生の身であるリリ達に出来ることなどたかが知れている。

それでも何か出来るはずだと、とりあえずは図書室で秘密の部屋へのヒントがあるか

もしれないともう一度情報を探すことにした。

昼食後の休み時間、全員揃って図書室に向かう。教師の警護体制として万全ではないのでゴーストたちに手伝ってもらって監視の目をくぐって図書室に急ぐ。

その途中で全員がおぞましい気配を感じた。

「な、何これ？」

廊下の曲がり角から何かが、恐ろしい何かが来る。そう全員がはつきりと感じた。恐怖で動くことができないでいるとそれが現れた。

巨大な、人を丸呑みに出来そうな蛇だった。

「あ、ダメ……。」

「これがスリザリンの怪物……。」

動けないリリたちに向けてゆっくりと近づいてくる。

目の前にまで迫ったそれはゆっくり口を開けて……リリを舐めた。

その行為にリリはなぜか嫌悪を感じない、むしろ好意を向けられている？

大蛇はその後リリの前で動きを止めた。

まるで主人の前で大人しくしているペットのようだ。

「……なにこれ？」

リリは困惑した。いきなり現れた秘密の部屋の怪物を思わしき大蛇が、勘違いでなけ

れば自分の事を好いているようだ。

もちろんハーマイオニー達もどうしていいか分からない。

しばらく彼女たちは動くことができなかった。

ようやく思考が回復したハーマイオニーは大蛇が瞳の部分に何か貼り付けているのに気が付いた。

その瞬間今までの被害者、状況、大蛇、全てが繋がった。

「こ、この蛇！ バジリスクだわ！ 皆目を見たら死ぬわ！」

それを聞いて視線を決して大蛇の顔を見ないようにする。

そしてゆっくりと刺激を与えないようにその場から離れようとする。

だが、リリが動くとき大蛇もゆっくりと動き出した。

リリたちが止まると、大蛇も止まる。再び動くと、動き出す。

「……………どうしようっ！」

色々やってみた結果、リリの動きに反応しているようだ。

なのでパチル姉妹が教師を呼びに行き、残りがリリの護衛として残ることになった。

~~~~~

リリアン・リンリーとそのハーレムたちがスリザリンの怪物に遭遇したという情報は

すぐにホグワーツ中を駆け巡った。

教師に知らせるといふことはどうしても生徒の耳にも入ってしまう。

それからパニックだった。

リリが死んだと勘違いして泣く、反応すらできない、酷ければ失神する女子が大勢。救出兼討伐隊を結成する一団まであった。

教師もそんなパニックを収めるので精いっぱいであった。

怪物はバジリスクであるということも伝わりより混乱は激しくなる。

ひとまずホグワーツ最高の実力者である校長のダンブルドアがリリとスリザリンの怪物がいる廊下へと向かうことになった。

用心に用心を重ね。即死の魔眼対策も施しいざその場に向かうと拍子抜けしてしまった。

リリアン・リンリーの前でとぐろを巻くバジリスクからは敵意も何も感じない。

「これはいったいどういうことじゃ……?」

「あ、ダンブルドア校長。」

更にダンブルドアを混乱させるのは毒蛇の王の前で呑気にお茶を飲んでいるリリたちの存在だ。彼女らはほとんどがマグルの血が流れている、いわばこの蛇のターゲットといつていい者たちだ。それなのに蛇は動きもしない。

「ダンブルドア校長。この子、私に懐いちゃったみたいなんです。とりあえず蛇語を使える通訳を誰か呼んでください。何となくこの子の感情は分かるんですけど何を伝えたいとかまでは正確には分からないので。」

ひとまず危機は無いと判断して蛇語を使える者、ホグワーツではハリー・ポッターしかない、を読んで通訳させることになった。

連れてこられたハリーも始めのうちは恐る恐る会話をしていたが、だんだんとうんざりした感じになって通訳を行っている。

バジリスクの言葉によると現状はこうらしい。

『ああ、幸せじゃ……。千年の孤独が癒されていく。妾の主様。あなた様に全てを捧げよう。』

何だ、蛇語使い？ なに？ 知っていることを話せだど!? 知るか！ 妾はこの愛すべき存在の元にずっといるのだ。

ん？ この方が知りたがっているだと！ 速く言わぬか！

さて、妾はかつての主、サラザール・スリザリンにいずれ現れるその血を受け継ぐ蛇語使いに従うように呪いを刻まれておった。

50年ほど前にその継承者が現れて色々と命令に従った。今回も継承者が現れて襲ったりしたが……。妾は運命に出会った。その者の存在を認識した瞬間！ 妾はに



掛けられた呪いは吹き飛んだ。自由になった。そう、目の前の愛くるしい存在のために  
 妾は千年もの間孤独に生き続けたのだ！

秘密の部屋がどこにあるか？ 管を通って地下深くにあるぞ。

継承者は雌だったが、前回と同じ人間だった。詳しくは知らんし興味もない。

それでこのお方は何という名なのだ？ 知っていることを言え蛇語使い！ 早くせ  
 ねば殺す！』

ということであつたバジリスクはすっかりリリに魅了されていた。

ハリーによる通訳で秘密の部屋の場合が判明したのでダンブルドアを中心とした教  
 師陣が継承者の打倒とジニー・ウィーズリーの救出に向かうことになった。

ジニーを助けたい一心でリリも一緒に行こうとする。ハーマイオニーもそれに賛同  
 する。

もちろんこれには教師たちは止めに入った。

だが、ダンブルドアだけは同行を許可した。

安全は最優先としているが、バジリスクを案内とするため必然としてハリー・ポツ  
 ターも同行することになった。

~~~~~

マートルがいた女子トイレにあった入口から地下深くに潜った場所。バジリスクの案内で教師とハリー、リリにハーマイオニーは秘密の部屋へと到達した。

『……が秘密の部屋だ。リリアン様は喜んでいるか？ そうかそうか！』
部屋に入ると蛇の彫刻やサラザール・スリザリンの像がある中、一人の少女がポツンと立っている。

「ジニー！」

リリは駆けだそうとするがマクゴナガルに止められる。

それだけでなくダンブルドアがジニーに向けて杖を構えてる。

「……その体に入っている者よ。姿を見せよ。」

俯いていたジニーが顔を上げる。その顔面から薄いぼやけた男の顔が浮かび上がった。

可愛いジニーの顔からそんなのが出てきてリリは嫌悪感を露にする。

「トム……！ やはりお主だったか！」

「ああ、お久しぶりですねダンブルドア先生。今回は色々と誤算だった。まさかこの小娘がここまで抵抗するとは。それにバジリスクまで僕を裏切るなんて！ だが、これで終わりじゃないぞ！ 僕は「ジニー帰ろう。」

醜い寄生虫を無視してリリがジニーに話しかける。それだけで顔がいつもの可愛い顔に戻った。

「お姉さま……。逃げて！ 私は……！」

そのまままうづくまうてしまふジニー。

それに動揺したマクゴナガルの抑えが緩んだ隙にジニーに向けて走るリリ。

「お姉さま、来ちゃダメ……。」

「頑張ったねジニー。ずっと辛かったんだよね。今、そいつを追い出してあげる。」

ジニーの唇に己の唇を重ねる。同時に魅^{呪い}了を全力で放つ。

ジニーの身体が痙攣する。最初の内は抵抗しようと腕で突き放そうとしていたが、次第にその力は弱まりリリの背に腕を回して積極的に抱き寄せ始める。

顔色も真っ青だったのが、徐々に血色が良くなり生気が溢れ出す。

口を離す時には荒く息をして涎が垂れた蕩けた表情をしていたが、いつものジニーに戻って来ていた。

「お姉さま……。ああ、お姉さま……。」

「お帰りジニー。帰ったら続き……。ね。」

「はうっ」

その先を想像したのか鼻血を出して気絶してしまつたジニー。

そのジニーをお姫様抱っこして呆然としている教師たちの元に戻っていった。

マクゴナガルの簡単な検査でとりあえずジニーに外傷や呪いは無いとの事だったが、急いでマダム・ポンフリーの所に運ぶことになった。

一人調査のために秘密の部屋に残ったダンブルドアは先程の呪いに震える体を何とか抑える。

そしてサラザール・スリザリンの像の口に隠されていた黒い日記帳を見つけたのだった。

「これは……。やはりトム、お主は……。」

こうして怪物はリリに魅了され、継承者の脅威も去り事件は終結を迎えた。

22. ハーレム二年目

地下深くにある秘密の部屋から戻ってきたリリたちはすぐにマダム・ポンフリーがいる医務室へと急いだ。

マダム・ポンフリーによる的確な診察によると、ジニーには栄養失調と脱水、興奮による鼻血以外に特に異常はなく呪いや魔法薬による害は無いとの事だ。

皆がホツとしていると、バタバタと廊下を走る音が聞こえてきた。

それを聞いたマダム・ポンフリーの顔が怒りで歪む。

彼女の聖域である医務室ではたとえリンリー家の者であろうと静かにしなくてはいけないのだ。

やがて走る音は医務室の前で止まり扉が勢いよく開く。

そこにいたのは赤毛の集団とリリハーレムたちであった。

「あああ！ ジニーー！」

「ジニー!? ああ、ジニーー！」

「そんな……。」

「おい、冗談だろ!?!」 「起きてくれよー！」

「いやだ！ 目を開けて！」

赤毛、ウィーズリー家がベッドで眠るジニーを見て死んでしまったと勘違いして嘆き悲しむ。

「リリ！」

「リリちゃん！」

「怪我はない!? 大丈夫?!」

リリハーレムはリリを抱きしめながらベッドに倒れこんだ。

リリが皆に無事だと言う前にマダム・ポンフリーから雷が発せられた。

「ジニー・ウィーズリーは無事です！ 外傷、呪い一切なし！ 休息を取れば問題なし！」

これ以上騒がしくするのなら出て行ってもらいます！ そっちの羨ましい人たちも

全員です！」

その声は決して大きくは無かったが全員の動きを止めるだけの迫力があつた。

ジニーが眠るベッドから離れ、ウィーズリー家はジニーに起こつたことを教師たちから聞いている。

末娘に起こつたことを知って顔を青ざめたり、感情がそのまま顔に出ていた。

全てを聞き終えたウィーズリー夫妻は少女に囲まれてベッドに座っているリリに近づいていった。

「マクゴナガル先生から聞いたよ。君がジニーの中からあの人の魂を追い出してくれたみたいだよ。」

「ジニーを助けてくれて本当にありがとう。」

二人は深々と頭を下げる。

後ろにいるパーシーも両親にならない腰を折っていた。

双子でさえ、いつもの態度ではなく真摯にリリに対して感謝している。

ロンは渋々といった感じに一言だけ、「ありがとう。」と言っただけだ。その目はリリの事をジニーを手に入れるためだけに助けただけに決まっていると考えているようにしか見えなかった。

「う、うんは……？」

そうしているうちにジニーが目を覚ました。

家族がそれに気が付いてジニーの周りに集まっていく。

家族から心配した、得体の知れないものに手を出してはダメだ、良かった、そんなことを次々に言われるがジニーの関心はそんな事には無い。

「リリお姉さまは？ お姉さまはどこ？」

家族の言葉も耳に入らずリリの事を探すジニー。

少し離れたベッドから身を乗り出してジニーに見えるようにすると目覚めたばかり

とは思えぬ機敏な動きでリリの前まで移動していた。

「お姉さま！ あ、あの！ ごめんなさい！ それと、ありがとうございます。この命はお姉さまに助けていただいたもの。もう、魂の全てに至るまで私、ジネブラ・ウィーズリーはあなた様のものです。」

「謝罪もお礼もいらないわ。私はジニーが幸せだったらそれだけで満足よ。」

頭を撫でられながらそんな事を言われてしまつてはますますジニーの事を惹きつける。

家族やマダム・ポンフリーがベッドに戻るように言つてもリリのそばを離れようとなない。

「あ、あの……お姉さま。秘密の部屋での言葉覚えていますか……？」

「……………ここでする？」

「ええ!! いや、でも皆に見られるのもいいかも。私たちのよりみんなの方がリードしているわけだし見せつけるのもありかな。いや最初はもつとムードがあるところが！ いやいやこんな機会はめつたにないし、でも……。」

その後もブツブツとリリとの情事に思いを馳せて思考が彼方に旅立ってしまった。

その様子を見たウィーズリー家は娘が色々な意味で遠い世界に行ってしまったと確信した。

そして諦めた。

両親直々からリリへ娘^{ジニー}をよろしくお願いしますと言われてしまった。

ロンを除く兄たちも半分諦め、半分呆れて、ジニーが幸せならばと何も言わなかった。ただ一人ロンだけがそれを不満そうに睨みつけている。

ちなみに両親の言葉を結婚承諾だと受け取ったジニーの意識を更なる高みへと昇華させありとあらゆる未来のシミュレーションを開始してしばらく戻ってこなかった。

~~~~~

秘密の部屋の問題が終結したことで部屋の怪物であるバジリスクは処分すべきとの声も上がっていたが、リリが反対したことで却下されることになった。

そうでなくても蛇の王が相手では、抵抗されれば被害を出さずに処分することなど出来るわけがないので誰も文句を言えるわけもない。

バジリスクはリリのペットとして目に封印を施され秘密の部屋で暮らすことになった。

リリと定期的に会えることを条件に再び秘密の部屋へと戻っていった。

1000年を孤独に過ごしたのに比べればリリに会えるだけで何の問題もないこの事だ。

事件の事後処理も終わり、学年末がやって来た。今年の寮杯もグリフィンドールが獲得した。

といつても去年と違って最後の最後で大きな逆転するようなことは起きていない。

秘密の部屋の解決に貢献したりリアン・リンリーとバジリスクとの通訳をしたハリ・ポッターにホグワーツ特別功労賞と大量の得点が与えられたためだ。

これがハリ・ポッターだけであつたら去年の二の舞だったが、リリが受賞するだけで女生徒たちには最高過ぎる結果となつた。

学年末パーティーは平和が戻つたことで盛大に行われた。

石になつていた生徒も元に戻り、終わつてみれば何一つ失われることの無い一年だ。

結果といえば、今年のリリたちの学年の最優秀生徒はハーマイオニー・グレンジャーである。

~~~~~

リリたちは現在ロンドンに向けての蒸気機関車のコンパートメントにいる。

メンバーはリリ、ハーマイオニー、パーバティ、パドマ、クラウディア、ダフネ、そしてジニーだ。

女の子との約束は違えないリリは勿論ジニーと最後まで楽しんだ。

リリもジニーの事は最初から気に入っていたのでこれで晴れてハーレムの一員となったのだ。

ジニーは両親や兄たちにこのことを認めてもらうため必死に説得するつもりでいたが

、既に家族は諦めていたのですんなり認めてもらえることになり拍子抜けであった。

ハーレムに加わるだけでなく家族にも認めてもらってご満悦なジニーは満面の笑みでリリの腕を抱きしめている。

「ふふ、ふふふ。リリお姉さまあ……。」

「ジニー、そろそろ交代よ。」

「はい。最後に……。」

ジニーは離れる間に思いつきリリの香りを肺に貯め、堪能した。

まるで危険な薬物を摂取しているかのようだとはリリ以外は思ったが、自分たちも同じようなものだと思いなおし口には出さなかった。

「ハーレムがこれ以上増えたら、コンパートメントに全員っていうのも難しくなるわね。」

「大丈夫よ。これ以上は増やさないから！ 多分、きつと、恐らく……絶対！」

ダフネの言葉にリリは返すが絶対を最初に言わないあたり信頼性は低いであろう。

「ま、私たちもこれ以上メンバーが増えても色々頻度が減っていやね。」

「パーバティは同じ寮なんだからまだいいじゃないの。」

「私とパドマちゃん、ダフネちゃんは別の寮だしね。」

「ま、私はリリが愛してくれるだけで幸せよ。」

「もちろんみんなの事は平等に愛してあげる。どこでもいつでも、何があっても、この先ずっと。」

流石はお姉さま！ と興奮しているジニー。

逆にハーマイオニーはちよつと不満気だ。

手を強めに握って自分の方に振り向かせる。

「リリ、私がせ、正妻なんだから私を一番にしなさいよ！」

自分の口から正妻なんて言葉を出して顔を赤くするが、決して顔をそらさない。

「皆ゴメン！ ハーマイオニーが一番。平等に愛するけどやっぱり特別はハーマイオニー。これはどんなことがあっても変わらないわ。」

「はいはい。知ってるわよ。」

パーバティの言葉に皆がうんうんと頷く。

今更であつた。

~~~~~

くく

ロンドン、キングス・クロス駅 九と四分の三番線ホーム。

紅い蒸気機関車が到着し、続々と生徒たちが家族の元に戻っていく。

リリの出迎えはロザリンド、レイラの両母とメイドのキャロルであった。

ハーマイオニーとクラウディアの両親は仕事で、パチル姉妹は一応の挨拶をしてすぐに去ってしまっている。ダフネに至っては勘当扱いなので顔も見せていない。

ジニーは兄たちを迎えに来ていた両親と挨拶をしてすぐに戻ってきた。

「お！ その娘が新しいメンバーか。うんうん、我慢は良くないぞ。私の時はなもつと「そこまでに。初めましてリリの母のレイラです。これからよろしくお願いしますね。」同じく母親のロザリンドだ！」

「リンリー家メイド、警護担当のキャロルです。」

「は、初めましてお姉さまの愛人5号のジネブラ・ウィーズリーです！ が、頑張ります！」

新しくジニーを迎えてより賑わいをみせるリリアン・リンリーのハーレム。

来年度はどんなホグワーツが待っているのかと早くも期待に胸を膨らませるリリであった。

### 3章 囚人、なんだ男か

#### 23. 脱獄囚

荒れ狂う北海を黒い影が進んでいく。

それは大きな黒犬だった。

死に物狂いでひたすら泳ぎ続けている。ただただ真つ直ぐに。その目には狂気が宿っていた。

ひたすら泳ぎ続けた黒犬はついに陸地にたどり着く。

普通であつたらその場で死んでもおかしくないだろう疲労がその身に襲い掛かる。そうでなくても疲労と寒さで動くことも困難なはずだ。

だが、その犬は動き出した。

それだけではない。犬の輪郭が崩れ、一瞬で男の姿に変わった。

ボロボロの服、ボサボサの髪、やせ衰えた体軀、伸ばし放題な髭。

どれをとつてもまともな人間ではない。

その中で最もその男をまともでは無いと断言させるのは目だ。

血走った、犬の時と同じく狂気を宿した目。

その目にはただ一つの事柄しか見えていない。

「……殺す。殺す。ピーター……。ジエームズ、リリー、すまない、俺が愚かだった。ハリー……。ああ、ハリー！ ネズミ、鼠、ねずみ！ 殺す殺す殺す何としても殺す仇を取る。ホグワーツ待っている待っていてくれ行くな来い止まれ止めろ死ぬ助ける助けられなかった……。……。ああ、今行くぞ。」

その後も口からはブツブツと物騒な単語が紡がれ続ける。

そのまま男は暗闇の中へと消えていった。

~~~~~

『大量殺人犯シリウス・ブラックがアズカバンより脱獄する』

そのニュースは瞬間にイギリスだけでなく世界中の魔法界に広がり、多くの魔法使いたちを恐怖させた。

アズカバンは魔法界最高最悪の監獄だ。

未だかつて脱獄したものはただの一人もおらず、そんな者が現れるなど想像することさえできなかった。そんなところから脱獄囚が現れるだけでなくその脱獄した囚人が更に問題だった。

彼の一族のブラック家は聖28一族の中でもとりわけ純血主義が強く、例のあの人が

健在だったころには多くが帝王の下で恐怖を振りまいていた。

そしてシリウス・ブラックは中でも最悪の一人。

たった一つの魔法で、魔法使い一人とマグルを20人近く吹き飛ばした狂人だ。

脱獄が発覚してすぐにイギリス全土が捜索されたが影も形も見つからない。

これには魔法省や魔法大臣への批判も殺到している。

しかし、魔法省もどうやってブラックが脱獄したか見当もつかないので心労が溜まる一方である。

街の商店にはそこら中にシリウス・ブラックの顔写真が張り出され、誰も彼もがブラックを恐れている。

たった一人の脱獄囚でイギリス魔法界は大きな影響を受けていた。

それはリンリー家も例外ではなかった。

~~~~~

「あーもう！ まだシリウス・ブラックは捕まらないのかしら!」

リリアン・リンリーはご機嫌斜めであった。

連日の日刊預言者新聞は見たくもない凶悪犯が叫んでいる顔写真を一面に掲載しているし、記事の内容もシリウス・ブラックが犯した罪、経歴、ホグワーツでの同級生の



インタビュー、更にはイギリスのいたる所での目撃情報。

これだけなら見なければそれでいいのだが、シリウス・ブラックが脱獄してからはリリー邸で缶詰状態なのだ。

過保護なメイドたち（ロリコンを筆頭）や嫁（ハーマイオニー）たちが外は凶悪犯がいる可能性がわからなくてもあるということまで外出を禁止したのだ。

何とか時間をかけて籠絡しようと計画していたが、お母様の「ダメです。」の一言で諦めるほかなかった。お母様はどうあっても意見を曲げることはないのを知っているためだ。

外出ができない、つまりデートができないのだ。

いくら愛する嫁やハーレムたちと毎日イチャイチャできたとしても少しぐらい刺激が欲しい。他の女の子もリリーたちと同様の理由でほとんど外出できないらしくリリー邸に招待することも不可能だ。ホグワーツの教科書リストが届いた時はやっとダイアゴン横丁に行ける！なんて喜んだが、メイドたちが全部あつという間に全員分を揃えてしまったので一步も踏み入れることなく終わってしまった。

「う〜う〜。」

「可愛く唸つても駄目よ。」こういう時は容赦が無いハーマイオニー。

「よしよし。もうすぐ夏休みも終わるからみんなにも会えるわよ。」いつもの様にリ

リのソファアーになりながら撫でて癒すクラウディア。

「はい、リリ。あ〜ん。」

「リリ、次こつち。」 パチル姉妹はそんなリリにお菓子で餌付けしている。

「はいその三人！ あまり甘やかさないの。ハーレムがただ単に主人を甘やかすためじゃないって教わったでしょうに。新人も見てるのよ。」 ダフネがそこに厳しく突っ込む。

「ああ……お姉さま。お姉さまには悪いけれどシリウス・ブラックには感謝ね。こうして夏休みの間中ずつとこの閉鎖空間で一緒この館全てにお姉さまの吐息が染み込んでいるハーレムと家族以外は誰もいない本当は二人つきりがいいけどこれ以上の贅沢は神罰が当たってしまうわねいや待ってお姉さまは女神つまり神……ということは神罰はお姉さまからの贈り物!? 待って待つよジネブラ・ウィーズリーいやジネブラ・リリー！ お姉さまからの罰って何かしら鞭？ 蠟燭？ いやいやそんなありきたりなものダメもつとこう高貴で素敵な何かああ私の想像力ではお姉さまの素晴らしさの1%も想像できない！」

ジニーは平常運転だった。

ふてくされているリリにメイドの一人、警護担当のキャロルが進言する。

「お嬢様。シリウス・ブラックは善悪がどうあれ優秀な魔法使いというのは確かな事実

です。それにアズカバンに10年もの間いたのならば確実に精神がおかしくなっているはず。

そのような狂人とどこで遭遇するかもわからないのならここにいるのが安全です。」  
キャロルの言葉に他のメイドたちも同調する。

「そうですよ！ あいつは確かに優秀だったのは事実です。」

「それに例のあの人の部下なんですよ？ 怖いわ。」

「おいおい心配する必要なんてないぞ。お前たちは主たる私が必ず守ってやる。何も心配する必要はない。安心して私の愛を受け取り愛を与えてくれ。」

リンリー家の主たるロザリンド・リンリーがキャロルを除く不安そうにしているメイドに力強く宣言する。何の根拠もないのに自信たっぷりなその言葉にメイドたちの中には不安が嘘のように消え失せていた。

「では、私はこの命に代えてもロザリンド様とリリ様をお守りしましょう。」

警護担当のキャロルだけは嬉しさを隠しながら自分の責務を全うすると改めて誓った。

ロザリンドもキャロルを信頼しているのでここが世界一安全であると思っ

「それではお嬢様、ハーレムの皆様にもこれをお渡ししておきましょう。」

キャロルからペンダントが手渡される。

何の変哲もないただのペンダントだ。だが、見る人が見ればそこに付与されている魔法が凄いものだとして理解するだろう。

「お守り？」

「はい。もしお嬢様方が助けを求めらならこれに念じてください。私が力になります。」  
キャロルだけでなくママたちからも言われシリウス・ブラックの件が片付くまで、いやそれが終わっても出来るだけ身に付けておくようにと言われた。

その後は今日一日どう過ごすかリリは悩んだ。

宿題はハーマイオニーとパドマの指導によつて既に完璧に片付いている。

家でやることもあらかたやりつくしている。

外にも出られないのでフラストレーションがたまる一方だ。

ならば、普段はしないことをしてスッキリするにかぎる。

「よし！ 皆、部屋に行きましよう！」

「お！ 私たちも久々に全員で楽しむぞ！」 同調するロザリンド。

この後、全員で色々と楽しんだ。

そうして何だかんだとハーレムたちと楽しんでいるうちに夏休みは終わり、三年目のホグワーツへと旅立つ日がやって来た。

## 24. 吸魂鬼

1993年9月1日 キングス・クロス駅 九と四分の三番線  
子供たちがホグワーツに旅立つこの日は大勢の魔法使いで溢れかえる。

だが、今年は少々違っていた。

普段は見えないガード魔ンがいるのだ。

これも脱獄囚のシリウス・ブラックの影響だろう。

リリ達はロザリンドとレイラ、警護担当のキャロルに見送られて蒸気機関車に乗り込む。

「ママ、お母様、キャロル。行ってきました！ 今年こそはホグワーツでパーティーするから次は夏休みまで会えないと思うわ。」

「楽しんで来いよ！ 大人数でのパーティーなんて学生時代だけだからな！」

「無病息災であるのなら何の問題もありません。気を付けてください。」

「お嬢様、何かあればペンダントを躊躇なく使ってください。次の夏休みまで更に美しく成長成されるのを楽しみにしております。」

三人はハーマイオニー達にも同じように気を付けるように言う。

もう家族同然なので実の娘、お嬢様として扱うのが当然になっている。

他の生徒たちも家族との別れの挨拶を済ませ、紅い蒸気機関車はホグワーツへと走り出した。

~~~~~

リリたち7人は最大サイズのコンパートメントを占領している。

昨年は蒸気機関車が動き出してからリリを求める女の子たちで長蛇の列ができた。

もちろん今年も同じようになることは想定済みである。

なのでハロウィンと同じように選ばれし者だけがリリと触れ合える機会を得られるように夏休み前にひと騒動あった。

学年末試験を終えた女子生徒たちはもう一つの戦いを始めようとしていた。

女子生徒の数は一学年平均40人。それが卒業する7年生を除く6学年、その内8割程度の200人近くの女子たちが大広間に集まっている。

休み明け、つまりは長い間お預けだったリリと触れ合える機会を得るための絶対に負けられない戦いを前に闘志をみなぎらせていた。

選ばれる人数はそれぞれの寮から各学年一人ずつ、つまり24人。過酷な戦いにな

る。

「ソノーラス^響！ 皆！ 聞こえるかしら!? これよりリリアン・リンリーとの触れ合える権利を賭けての大勝負が始まるわ！ 準備はいいかしら!」

リリとの触れ合い争奪戦、通称リリ杯が開催される。

司会進行はパチル姉妹だ。案外二人はノリノリで進行していく。

「競う項目は三つ!」

「学力、戦闘力、そして魅力!」

学力はそのまま、学年末試験の総合結果である。教師には根回しをしてあらかじめ女子生徒の分のランキングは入手済みである。

戦闘力は魔法戦闘の技量を競う。秘密の部屋騒動があつたことからリリを護るためには力が必要ということからこの項目が選ばれた。競う方法は対一の決闘で、トーナメント形式で順位を決める。

最後の魅力、これはいかにリリをときめかすことができるかの勝負だ。

ちなみにハーマイオニーをはじめとしたハーレムのメンバーは関係が無い。彼女は既にリリによって選ばれた精鋭の愛すべき人なのだから。

「さあ! それではリリ杯スタート!」

まずは学力。

学年別、寮別に一齐に学年末テストの順位が表示される。

その結果に一喜一憂する女子たち。特にレイブンクロー生は他の寮に比べてハイレベルの、それこそたった1点の差での争いである。

こんなことになるなら勉強をしておくんだつと嘆く声があちこちから聞こえてくる。

続いて戦闘力。

皆が密かにリリを護るために練習していたのか決闘クラブの時と比べて格段に上達している。上級生などは様々な呪文が飛び交いそれを躲すという成人同士の決闘でもなかなか見られない決闘となっている。

最後に、魅力。リリ杯の目玉とっていいものだ。

どんなに賢く強くてもリリに気に入られなければ意味がない。前二つの項目などはおまけでしかないのだ。

審査するのは言わずもがなりリアン・リンリーその人である。

女子たちは限られた制限時間でいかにリリへの熱い想いをぶつけ、愛されることができるかアピールする。

リリは女子たちに色々な方法でアピールされてご満悦である。

~~~~~



くくくくくく

こうして激闘を征した各学年4人、計24人の精鋭たちは久しぶりのリリとの時間を満喫している。

去年は一人当たり数1〜2分だったのが今年は10分近くリリを独占できる。

その分魅了されるが、彼女たちにとってこの上ない幸せな時間である。

そうして最後の一人との時間を過ごし、リリのいるコンパートメントはハーレムだけがいるいつもの状態となった。

「はあく……。堪能したわ。やっぱり女の子との触れ合いは癒し、生きるうえで必要不可欠な要素だと再確認できた気がする。」

「私たちだけじゃダメ？」

ハーマイオニーがリリを抱きしめながら聞く。言葉とは裏腹に不安など感じていないような声色だ。

「みんなは別格。でも最上級の料理でも毎日じゃね。やっぱり色んな娘と、それこそ世界中の女の子と親密になりたいわ。」

リリの言葉はある意味、『あなた達だけじゃ満足できない』という宣言にも聞こえる。

だが、それを聞いたハーマイオニー達はまだまだこの女主人<sup>リリ</sup>に対して自分を磨いて満足させることが、成長する余地が残されていると解釈した。

「リリ、私頑張る。他の娘たちがいなくても私だけであなたの事を満たせるような女になるわ。」

「もちろん。」「私たちもね。」

「私も負けないわよ。」

「当然ね。他の娘が目に入らない程になってみせる。」

「わ、私も！」

それを受けたリリも皆にハーレムの主としての答えを返す。

「私もみんなの愛を受け止めるだけじゃなく、皆の事をもっともっと満足させて……幸せにする。これは絶対よ。どんなことがあっても！」

お互いの想いを改めて伝えあう。

ハーレムの皆も全員がリリを幸せにしたいという思いは共通だ。それだけでなく他のメンバーを蹴落としたりなどせず、競い合い高め合う良い仲間、共にリリを愛し愛される共同体だとも認識している。

リリもその愛に応え全員を幸せにすると約束してくれた。

それが何だか気恥ずかしくなってみんなで笑い合った。

~~~~~

リリたちが幸せでいると、蒸気機関車が速度を落とし始めた。

だが、ホグズミード駅に到着する時間ではない。

ついには停車し、灯りも全て消えて真っ暗になってしまふ。

「何かトラブルかしら？」

「私が見てきます！」

ジニーが少しでもリリの為と思ってコンパートメントの扉に手をかける。

だが、そこで動きが止まった。

動きが止まったのは何もジニーだけではない。

コンパートメントにいる全員が動くことができないでいる。

いきなり真冬になったかのように気温が下がり、凍えるような冷気が室内を満たす。

全員がガタガタと震えるが、それは寒さのせいではない。

怖いのだ。

得体の知れない恐怖が沸き上がる、いや扉の向こう側に立っている。

「いや……。」

リリがそう呟く。それだけでここにいる女たちは憤怒した。

最愛の人を怖がらせる存在が、敵がそこにいる。変わらず体は恐怖に震え、心も恐怖に屈してしまいそうになるが、それを上回る怒りが体を動かした。

ハーマイオニーがリリを抱きしめ安心させようと、残りのハーレムが二人を囲って盾となろうとする。

扉の向こうの何かが腐った死体の手としか言いようがないもので開けようとする。

全員が覚悟を決める。

「エクス・ペクト・パトローナム！」
守 護 警 備 隊

たった一つの呪文で恐怖は去っていった。

同時に温度も元に戻り、緊張が解け全員が座り込んだ。

「大丈夫かい？」

コンパートメントの扉を開けてリリハーレムに声をかけたのは……みすぼらしい格好の男だった。

「あ……。もしかしてリンリー家の子かな？ うん、とりあえずもう大丈夫だ。チョコレートを食べると良い。」

皆に特大の板チョコを渡して去っていく。

今まで見た中で一番頼りになる男性だなと凍える心でそう感じたリリ。

言われた通りチョコレートを食べると冷え切った身体が熱を取り戻す。

しばらくして列車は動き出した。

列車全体から先程までの冷気と恐怖が去ってはいたが、それでもリリのいるコンパ

トメントはリリを中心にみんなが抱きしめ合つて一塊になつていた。

まるで先ほどまでの事を忘れようとするかのように。

そんな中でリリは考えていた。

(さっきの男の人……。あの人が使つていた呪文、それを唱えた後、あのナニかがいなくなつて元に戻つた。私もあの呪文を覚えなくっちゃ。もう一度あんなことになつたら皆に護つてもらふんじやなくて、私が皆を護らなくっちゃ！)

護られるだけなんて嫌だ、私が皆を護らなくてはと考えるリリ。

そんな思いを乗せ列車はホグズミード駅に到着する。

こうして予想外の展開を迎えながらリリアン・リンリーの三年目のホグワーツが始まつた。

25. 新任教師

せつかくの新学期がよく解らない不気味な存在によつていきなり出鼻をくじかれたようになつてしまつたが、それでも女子たちは太陽に等しい暖かきをもたらすリリと触れ合えるだけで芯まで冷えていた体が暖かくなつていくのを実感していた。

リリもより多くの女の子に囲まれることで大広間での組み分け儀式をする頃にはすつかり元気になつていた。

組み分け儀式は特に何事もなく進み最後の一人の寮が組み分け帽子によつて告げられる。

ダンブルドアが立ち上がり御馳走の前の注意事項を話始める。

「新入生は入学おめでとう！　そして二年生以上は新学期おめでとう！　さて皆にいくつかお知らせがある。大事な事じゃからお腹いっぱいウトウトする前に済ませてしまおう。」

「まずは……皆もホグワーツ特急で遭遇したじゃろう存在についてじゃ。あれは、デイメンター吸魂鬼。この世で最も忌まわしき存在の一つだと言えるものじゃ。なぜあのような存在がホグワーツ特急に入り込んだのか……大変申し訳ないのじゃが、今年は魔法省の

要請によりホグワーツは現在、吸魂鬼デイメンターを受け入れておる。ホグワーツ特急の件もその関係じゃ、わしはそこまでの許可を出しておらんのだかの。吸魂鬼デイメンターは学校の入り口を固めておる。あやつらは決して話を通じる相手ではないぞ。透明マントも意味がないからむやみに近づかないことじゃ。」

リリは話を通じないという点に大いに共感していた。

あれは男とか女とか、雄雌そういう類のものではない。

もつと違う分け方をされたものだ。

続いて新しい教授が紹介された。魔法生物飼育学のウィルヘルミナ・グラブリー＝プランクと闇の魔術に対する防衛術のリーマス・ルーピンの二人だった。

プランクはシルバヌス・ケトルバーンの後継とやって来た魔女だ。

リリとしては女性というだけでポイントが高い。

だが、プランクと比べるとツギハギだらけのローブ、痩せこけて青白く、白髪がある髪、そんなリーマス・ルーピンはどうにも大丈夫なのかという疑問が湧いてくる。

周りが不安そうに見ている中、珍しくリリが注目していた。男性なのになぜなのか？やはり先ほどのコンパートメントでの出来事から少しでも力を付けたいということ。闇の魔術に対する防衛術の教師というだけで気にはなる。

既に詐欺師ロクソクトとニンニクターバンクワイよりは有能であることは分かっているのではなおさら

である。

その場面を見ていない他の生徒たちはこんなのが闇の魔術に対する防衛術の教師で大丈夫か？ また一年で交代しそう、そういつた反応をする生徒が多い。

~~~~~

(懐かしい……。ここは変わらず素晴らしいところだ。)

新任の闇の魔術に対する防衛術の教師リーマス・ルーピンは教職員の席でここ数年一番の幸福を感じていた。

自身のある秘密の為、まともな職にも就けずハッキリ言えば貧乏な生活を送らざるを得なかった。

それが尊敬する恩師であるアルバス・ダンブルドアからホグワーツで働かないかと誘われたのだ。

呪われた一年で教師が入れ替わる闇の魔術に対する防衛術だが、そんなことは大した問題ではなかった。

今でもありありと思いだせる輝かしい学生時代。

親友3人と一緒に学び、遊び、時に喧嘩し、笑いあつた日々。

そんな青春時代を過ごしたホグワーツで今度は教える立場で戻ってこられるとは



思ってもみなかった。

ホグワーツ特急ではトラブルもあったがこうして無事にホグワーツ城に入り、初めて教員テーブルに着いて組み分け儀式を見てみると自分が教師になったという実感がわいてくる。セブルスの殺気が込められた視線すらも実感を際立たせている。

ダンブルドアに紹介され緩んでいた気持ちを引き締める。

「みんな初めまして。今年から闇の魔術に対する防衛術を教えることになった、リーマス・ルーピンだ。教師は初めてだから頑張っっていくけど、皆が楽しんで学んでくれればうれしいかな。」

まばらな拍手を受けて席に着く。まあ、こんな反応も当然かなと思ってしまう。

拍手をしている子を見ると親友の生き写し、ハリー・ポッターがいた。

(ハリー……。本当にジエームズそっくりだなあ。でも目はリリーだ。)

そんな親友の息子を見ながら自分のもう一つの仕事を思い出す。

ホグワーツに来たのは教師を任せただけではない。ダンブルドアからはハリー・ポッターを護り導くということも頼まれていた。

ダンブルドアはシリウス・ブラックがハリーを狙う可能性もあると考えていた。

もちろんホグワーツは万全の態勢で生徒を護るが、シリウス・ブラックを知る者としてルーピンが選ばれた。



男子はたとえばグリフィンホール生であろうと存在はしないのだ。

新入生の自己紹介に始まり、夏休みの出来事、ホグワーツ特急や新任教師についての話など話しつくすには時間が足りない。

だが、女子たちは、特に同学年の彼女らはリリに聞きたいことがあったのだ。

「ねえ、リリちゃん。授業は何を選択したの?」

「占い学取ったわよね!」

「魔法生物飼育学は?」

「教えて!」

3年生になると今までの授業に加えて選択式の授業があるのだ。

占い学、マグル学、数占い学、魔法生物飼育学、古代ルーン文字学である。

2年生の最後に希望の科目を選択するのだが、リリが選んだものについてはハーレム以外には学校側から秘匿とされていた。

もちろん理由は女子生徒の偏りを防ぐためである。リリが選んだ科目しか女子は選ばうとはしないだろう。

結果として女子は皆、自らのリリ観察眼と運が試されることになった。

ここで同じ授業を選択できればより一層触れ合える機会が増えるし、同学年でなくても先輩たちは勉強を教えるという名目で勉強会が開けるかもしれない。

後輩だけはリリの選択を知ってから選べるので完全有利になると思われたが、もちろん学校側から対策が施されることになるのであった。

「えーつと、魔法生物飼育学と数占いに占い学ね。」

「いいよっしっ!」

「キヤー! 全部一緒よ?!」

「女神よ最大の感謝を。」

「そ、そんな……。」

「だ、大丈夫大丈夫……。これは夢そう夢よ。目が覚めたらリリちゃんが横にいるのよ。」

「ははは、落ち着きましょう。グリフィンドールってだけで他の寮よりいいもんね。泣いてなんかないもん!」

「あばばばばばばば……。」

談話室は喜びと悲しみに満ちる。

リリは本音を言えば全員一緒に受けたかったのだが、色々と許しが出なくてこんなことになってしまった。一つも同じ授業を選ばなかった子には慰めとしてたつぷりと抱きしめて撫でてあげた。

吸魂鬼デイメンターや喜びと悲しみで皆体力も精神力も使っていたのでこれでお開きとなり寝るこ

とになった。

リリも久しぶりの自室でハーマイオニーとベッドに入って眠る。

授業といえば気になっていたことを思いだしてハーマイオニーに聞いてみた。

「ねえハーミー。本当に逆転時計タイムターナーは使わなくて良かったの？」

二年連続でトップの成績を取るほどの優秀なハーマイオニーはマクゴナガルからある提案を受けていた。逆転時計タイムターナーという時間を戻せる魔法具を使えば全部の教科を受けることができるというものだ。

だが、ハーマイオニーはこれを断った。

「確かに全部の授業を受けてみたいわ。マグル学は魔法使いからの視点を学べるし、古代ルーン文字学も面白そう。でもそんな事よりもリリとの時間を共有する方が大切なの。」

逆転時計タイムターナーを使う者は過去の自分と遭遇してはならないという制約が課せられる。

ハーマイオニーは常にリリと一緒だ。

つまり過去に戻ればその間だけはリリと一緒にいられなくなる。

たった数時間だがそんなことは絶対に嫌なのだ。これはハーマイオニーに限ったことではない。

授業も魅力だが、リリアン・リンリーという存在を無視できるほどの誘惑は皆無である。

「私の時間はあなたの時間。ずっと一緒に約束したわよ。」

「正直ハーミーが私の知らない時に違う授業を受けているのは嫌だね。」

でも……、逆転時計タイムターナーで二人になったハーミーにはさまれるのも想像したら興奮してきた。」

「もう！ いけないことよ。それにあなたの事は私一人でも満足させてあげるわ……。」

「ふふ……。お手柔らかにね？」

こうして初日なのについつい夜更かししてしまう二人であった。

## 26. 新授業

新学期が始まった。

初日から夜更かしをしてしまったりリリとハーマイオニーだが、体は精神に引つ張られるのか二人そろってツヤツヤとした肌をしている。

それを見てハーレムたちや女子たちは察した。

こればかりは同室である正妻の特権だと諦めるしかない。  
ハーマイオニーはそれでなくても元氣いっぱいであった。

3年生になって増えた選択授業が楽しみなのだ。

こういったことはリリには共感は出来ない。リリは授業が増えて楽しいとは感じないが、ハーマイオニーの興奮する姿を見られるだけでも良しとしよう。

朝食も食べ終えて今年初めての授業は占い学であった。

クラウディアに聞いたところ北塔のてっぺんでやるらしく遅刻しないように急いで向かう。

梯子を上って教室に入るとそこはシェリー酒の匂いで充満した空間だった。

室内には一人ずつ座る丸テーブルに、水晶やティーカップその他いかにも占いで使う

様な物が数多く揃っていた。

全員が席に座ると部屋の隅から瘦せて大きな眼鏡をかけた女性が現れた。

「占い学へようこそ。あたくしがシビル・トレローニー。皆様に占い学を教える者です。たぶん、あたくしの姿を見たことがある生徒は少ないでしょうね。俗世の騒々しさから離れたここで日々、未来について考えていますもの。」

トレローニーは生徒たちを見渡し、占い学について話していく。

「占い学は未来を見通すもの。魔法という存在の中で最も難解で不可解なものですわ。未来をハッキリとした形で口に出すことはほとんどの魔法使いにとって不可能と言えるでしょう……。」

一呼吸おいてトレローニーが告げる。

「あたくしでさえ未来を予言することは非常に困難なのです。未来とはあやふや……。夢や幻の様なもの。理論や数字では理解できない。直感や第六感……そういったものが重要なものなのです。今までの「勉強」と同じようなものではございませんの。」

それゆえに未来を見通す才が無いものには、教えることはほとんどありませんのよ。書物ではある程度のことしか教えられません……。それでも真に占い学を学びたいというのであればこの場に残る選択をなさいませ。」

トレローニーの言葉に何人かの生徒は動揺する。男子生徒の内、数人が去っていつ



た。

「よろしいですね？ それでは今日は占い学とは、未来とは何なのか、そこから始めていきましよう。」

その後の授業は一般的な考え方とトレローニーの持論による占い学と未来についての講義が始まった。

所々で質問や生徒たちとの議論をすることで常に考えさせる授業であった。

「それでは最後に簡単な占いをやってみましよう。」

お茶の葉占いというカップに紅茶を注いで飲み終わった後に残った葉を見て占うというものだ。

リリは当然ハーマイオニーとペアを組んでやる。

「教科書を見るだけでなく自らの直感を第一にするのです。」

トレローニーのアドバイスが飛んでくる。

それぞれのペアは葉っぱを見て悩んだり話し合ったりしている。

何人かの女子生徒は真剣に葉を睨んでいるが、悩んでいるのが大半だ。

「……ダメね、全然わからないわ。」

ハーマイオニーがお手上げ宣言をした。

理論や数字といったものを中心に考える彼女にとってはこういった公式やきまりが

当てはまらない分野はとことん苦手なのであった。

そこにトレローニーがやって来る。

「あなた……。悪いことは言いませんわ。向いていませんことよ。ここで占い学を学ぶよりは他の授業を選択する方が良いかと。」

トレローニーの「あなたには才能がない」という宣言にハーマイオニーは一瞬かつとなる。

しかし、トレローニーに真つ直ぐ見られると怒りは静まっていった。

その目には哀れに思うような視線はなく、ただ単にハーマイオニー・グレンジャーという少女を見ていた。

「トレローニー先生。ここを出ていくか決めるのはハーマミーよ。」

「ええ、その通りでしょう。ですが彼女の為を想えばここにいることは有益にはならないでしょう。それよりも、カップの葉はどうです?」

リリはカップを手渡す。

じつとそれをトレローニーが見る。

「大小二つ……。この二つに何か意味が……。良くない印です。」

カップをリリに戻しながら忠告する。

「気を付けなさいませ。大きいもの、小さいもの、そのどちらもあなたに不幸をもたらす

……。ですがこれが絶対ではありませんこと、それも心に留めておくのです。」  
それだけ言つて他の組を見に回つていった。

「リリ信じる？ 私には信じられないわ。」

「えーと……。分かんない！ けど、正直トレローニー先生は面白いかな。占い師つて未来はこうだ！ とかこれがあれば安心！ なんて人かと思つていたけど、未来について独自の考えを持つているし、それが絶対とも思つていない。それに未来を考えるのつて楽しいわ。」

「ふーん……。ま、リリが楽しそうならいいわ。」

そうしているうちに授業は終わり、続々と生徒が出ていく。

リリもそれに続こうとしたがトレローニーに呼び止められた。

「リリアン・リンリーさん。お母様はお元気？」

「お母様？ どっちですか？」

「ああ、ごめんなさい。ロザリンドさんですわ。」

「ええ、元気ですよ。毎日楽しんで生きていますよ。」

「それは何より。あなたたちの未来に幸あれ。」

それだけ言つて奥に戻つていくトレローニー。

リリとしてはこのように女性にママロザリンドについて聞かれることは何回かあるので昔ママ



予習レポートを書くようにしますのでしつかり学んでくださいね。」

そう言うところプラUNKは手を上げて何か合図を送る。

なんだ？　と思っていた生徒たちは驚愕した。

2メートルほどのドラゴンがこちらに飛んできたのだ。

それはリリの前に降り立ちその頬を舐めたのだ。

かつての森番ハグリッドが違法取引をして生まれたノルウエーリッジバック種のドラゴンだ。

生まれてから2年は経過してすっかり人より大きくなっている。

それでもリリにとってはちよつと大きな犬程度の認識でカワイイものであった。

「ここ」まで懐くドラゴンは異例ですが、魔法生物飼育学を極めれば様々な魔法生物と触れ合えることができるようになります。皆さんが魔法生物に携わる仕事を希望するならば私は全力で応援します。」

次回の授業はデイリコールを扱うことになって授業は解散となった。

城に戻る途中でドラコ・マルフォイと目が合った。

「……何か用か？」

「ん？　モフモフに囲まれた銀髪美少女がなかなか良かったかなって。ああいうのが好きなのかしら？」



目的地までの間のポルターガイストのピースへの対処から見た目からの不安も拭きされ生徒たちは入学してから初めてまともな闇の魔術に対する防衛術を受けられると期待に胸を膨らませた。

目的地は職員室であった。そこに篩箒が置かれているが、時折ガタガタと揺れている。不安を覚えた生徒が質問をするとルーピンは落ち着いて返答した。

「大丈夫、心配ないよ。中にはまね妖怪のボガートがいるだけだ。」

それからルーピンはボガートについて質問しハーマイオニーが答える。いつもながら満点回答である。

「これからみんなにはボガートと対峙してもらおう。一人ずつだ。複数人で相手するとボガートが何に変身すればいいか混乱しておかしな結果になってしまうからね。ボガートを退散させるのは簡単だけど精神力が必要になる。退治させる呪文はこうだ、私に続いて言ってみようリディクラス。」

生徒はルーピンの言った呪文を繰り返す。

「うんうん、とっても上手だ。だけどね、本当に必要になるのは呪文じゃなくて笑いなんだ。さっきの呪文だけじゃ意味がない。君たちがボガートの相手をするとき一番怖いものに変化するだろう。リディクラスを唱える時にその怖いものを滑稽だと思えるものに変化させるようにイメージしながら唱えるんだ。そうすればその通りボガートが変

化するはずさ。ちよつと時間をとるからみんな怖いものとそれをどうおかしくさせるかイメージするんだ。そしたら順番にやってみよう。」

リリは何かが怖いか考える。

すぐに頭に思い描いたのは愛するハーマイオニーが死ぬ光景だった。

血まみれで倒れ伏すその光景を想像して嫌な気分になるが、すぐにそれを振り払いどうすれば良いか考える。

すぐに妙案を思いついた。

「それじゃあ、ネビル前へ。」

それからスネイプがハゲタカのついた帽子をかぶつて緑色のドレスを着て赤いハンドバッグを持った姿に、血まみれのミイラはほどけた包帯で転がり、巨大な蜘蛛は足をもぎ取られ、切断された手首はネズミ捕りに挟まれるといった喜劇が職員室で演じられた

「さあ、お次はリリアンだ。」

リリが前に出るとボガードはその姿を変える。

予想通りにハーマイオニーの死体が現れた。

リリは覚悟をしていたのでそこまで動揺はしなかったがそれでも気持ちのいいものではない。即座にこれを最高のものにしなくては。



「リディークラス！」

リリが呪文を唱えると血まみれの死体は綺麗になり普段と何ら変わらないハーマイオニーの姿になる。

ボガードは変身したモノの特性を得る。吸魂鬼デイモンタイに変じれば完全でなくとも幸福を吸い取る力を得る。

ならばハーマイオニー、つまり人の女性に変身したボガードはどうなるか？

「おいで。ハーマイオニーも。」

もちろんリンリーの呪い魅了の影響を受けてしまう。

初めて感じるその魅了に抗う術はなくふらふらとリリに近づき抱きしめられるボガードハーマイオニー。そして呆れながらも本物のハーマイオニーもそれに続く。

こうして両手にハーマイオニーという最高の幸せを実現することができて最高に幸せを感じるリリであった。

その後も授業は盛況のうちに終了した。

今年の闇の魔術に対する防衛術は過去最高だと皆が認めざるを得ない出来だった。リリも最後まで楽しくできて満足である。

ちなみにボガードをお持ち帰りしようとお願ひしたが、他の寮の授業でも使うとの事で断られてしまった。

## 27. ホグズミードデート

イギリスで唯一の住民が魔法族だけの村、ホグズミード。

ホグワーツの生徒たちは3年生になるとこの村に行くことが許可される。

ホグワーツは広大な土地を持っている。

競技場に、図書室、各寮の談話室、校庭などなど。

多くの仲間にもいるし、クイディッチの試合や休暇もあるにはあるがそれでも閉鎖空間から解放されたいという欲求は生徒のほとんどが少なからず持っている。

そうなのでホグズミードへの外出許可というのは生徒たちにとつて一大イベントなのである。数カ月に一度だけのこのイベントはよほどのことが無い限りほとんどの生徒が参加するのである。

もちろんリリアン・リンリーも例外ではない。

むしろ楽しみにしている生徒の上位に入るほどだ。

ベッドの上で明日に迫ったホグズミードへの外出にワクワクが止められないといった様子。

「どこから回ろうかしら。やっぱりハニーデュークスは外せないわね。それにマダム・

パティフットの喫茶店……いえここは三本の筭かしら？ 迷うわ。」

手にしたホグズミード観光案内を見て悩むリリ。

ちなみにこの観光案内は先輩のお姉さまたちの特製である。

最初は一人の生徒が自分とリリがデートしたいという欲望から造り始めたのだが、その情報が広がるにつれどんどんと作成人数が増えていき、洗練され平等に精細に造りこまれた売りに出しても問題ないレベルの物が完成していた。

「ハーミーはどこに行きたい？」

「リリが行くところならばどこへでも。でもそうねえ……ハニーデュークスは全員が行きたいんじゃないかしらね。とりあえずは一通り見て回ってから決めましょう。」

「そうしましょう！ ああ、興奮で寝られないかも！」

~~~~~

翌日 天気は外出を祝福するかのように雲一つない晴天である。

生徒たちは列をなして続々と校門からホグズミードへと出発している。

これで吸魂鬼デモンターさえいなければ最高なのだが、リリたちはさっさと通って忘れることにした。

ホグズミードに到着した一行がまず行ったことは順番決めであった。

一通りホグズミードにある店舗を案内されて歩いた。

その間ははずつと腕を組みっぱなしである。

「さてと……。これで案内終了！ せっかくの二人きりだしゆつくりお茶にしましょうね。」

二人はマダム・パディフットの喫茶店に入る。

ピンクを基調としてフリルで飾られた華やかな店であった。

中には幾人かのカップルがいるが二人が入店するとそそくさと出て行ってしまった。

代わりにリリのそばにいたい女子生徒が続々と入店してきたため店にとってリリは幸運の女神のようだ。

テーブルに着席するとクラウディアはメニューも見ずに注文をする。

「まずは私のオススメよ。美味しいのよ。」

「ふふ、期待しているわね。」

運ばれてきたのは大きなパフェだった。

イチゴを中心に様々なフルーツがトッピングされアイスやチョコにたつぷりの生クリームがふんだんに盛り付けられた特大の一品。

「お、大きいわね……。」

リリは甘いものが好きである。だが、流石にこの大きさにはちよつと引いていた。

「ふふくん。大丈夫、はいあくん。」

スプーンでフルーツとクリームを掬ってリリの口に運ぶ。

フルーツの酸味とクリームの甘みが絶妙に絡み合い絶品としか言い表せない程の美味しさであった。

「気に入ってくれたみたいね。それじゃあ、私も。」

当然のようにリリの口に入ったスプーンでクラウディアもパフェを食べる。

「いつもより美味しいわ。リリちゃんの味がする。」

「もう。次ちょうだい。」

クラウディアはリリに食べさせ途中からリリに食べさせてもらうということを続ける。

パフェが半分ほど無くなった時にリリは気が付いた。

お腹が全然いっぱいにならないのだ。

「どう？ 特別な魔法がかけられてあるから満腹にならないの。その代わり予約は必須だけどね。」

その後も二人の食べさせ合いは続いた。

そして最後の一口をリリが食べて無事完食となった。

「美味しかったわ！ こんなに多かったのに飽きもしないなんて思わなかった。」

「私のお気に入りがリリちゃんも気に入ってくれて嬉しいわ。最後に……。」

クラウディアはリリの顎に手をやり上に向かせる。

そのまま唇を奪う。二人の舌が官能的に絡み合う。

二人のキスはこれが初めてではない。

それでもクラウディアから積極的にキスをしてきたのは初めてかもしれない。

周りの視線も気にせず深いキスを続ける。

いつもは自分が食べる側であったため、捕食されるようなキスに感じたことの無い高揚を感じるリリ。

「……はっ。ふう……。御馳走様。パフェよりリリちゃんの口の方が甘いわね。」

「はぁ……。食べられちゃった……。」

しばらくリリは放心状態になってしまった。

そんなリリをクラウディアは膝枕十などで時間をいっぱい続けていた。

~~~~~

次はパーバティの番である。

予想外の口撃を喰らったリリはパーバティがどんなデートをしてくれるのかドキドキであった。

「お待たせ！ 待ったかしら？」

「ううん、今着たところ。」

定番のやり取りをして手を繋いで歩き出す。

クラウディアから全体の案内をもらったということを聞いたパーバティはリリが行きたいところを優先することにした。

やって来たのはハニーデュークス。

お菓子で溢れているここには百味ビーンズや蛙チョコといった魔法界での定番のお菓子からマグル世界のお菓子まで扱っていないものはないかのような様子である。特にマグルのお菓子は魔法的なものは無いにしろ様々な国のお菓子が集められ見えていて飽きなかった。

「今日はいっぱいお菓子を買っちゃいましょう！」

クラウディアのようにリードをする感じではなく二人で楽しむことに重点を置いたデートをする。パーバティ。

魔法界特有の様々な効果があるお菓子を買ってはイートインスペースで楽しんで続けた。

リリもパーバティも笑顔で楽しみ続ける。

外出期限のギリギリまで二人はハニーデュークスを堪能した。



「あく楽しかった!」

「私も! 次はハーマイオニーや皆と来ましょう!」

ホグワーツへの帰り道でも二人は笑顔のままであった。

リリは早くも次のホグズミードの日を待ちきれないといった様子である。

「リリ、こっちに來て。」

パーバティはリリの手を取ってそのまま木陰に進む。

そしてリリを木を背にした状態で迫る。

「パーバティ?」

「リリ。今は私だけを見て。他の女の子、ハーマイオニーやパドマも考えないで。」

そのまま本日二度目になる唇を奪われてしまった。

クラウディアのように貪るような激しいキスではないが、片手が肩に、もう片手が腰

に回され非常に密着した状態である。

まるで溶け合ったように二人の体温、鼓動が重なる。

口を合わせたまま、ゆっくりとパーバティの手がリリの服をはだけさせていく。

腰の手はゆっくり下に向かっていき撫で始める。

「ま、待って……! パーバ、うんむ!」

声を出そうとするリリの口を再度塞ぐ。

「声出しちゃうと聞こえちゃうわよ？ でもここでこれ以上すると風邪ひいちゃうかしらね。」

「……馬鹿。今日は寝かさないんだから。」

「あら、火が付いちやった？ ふふ、受けて立つわよ。」

乱れた服を戻して急いでホグワーツに戻った。

時間ギリギリであつたので心配されまくった。

~~~~~

ハロウィーンの宴を全員が堪能し、後は就寝するだけとなった。

リリとしてはこれからパーティとの一戦も控えているが、それもまた楽しみみの一つである。

他のグリフィンズ生たちに続いて階段を上り、入口の太った婦人の肖像画の近くまで来た時に急に前の生徒が動きを止め、列が渋滞した。監督生が列をかき分けて進んでいく。

「何かあつたのかしら？」

リリたちの前の方が騒々しくなる。太った婦人が何か訴えているようだ。

ちらりと見えた夫人の肖像画は切り裂かれていた。

「ダンブルドア先生を呼ぶんだ。早く！」

監督生が叫ぶとすぐにダンブルドアがやって来ていた。

ダンブルドアは無残な絵から必死に話す婦人の話を聞いてすぐに行動を移した。

「監督生！　すぐに皆を連れて大広間に戻るんじや！」

大広間に戻ったりリリたちは前の方にいた女の子に何があったのかを聞いた。

驚くべきことに凶悪な脱獄囚のシリウス・ブラックがグリフィンドール寮に侵入しようとして婦人の肖像画を滅多切りにしたようだ。だが、婦人は脅しには屈せず決して開けようとはしなかったようだ。

結局その日は全校生徒が大広間で寝ることとなってしまった。

大広間の中心にはリリがいる。その周りに壁を作るかのように女子が固めている。

教師たちだけでなく数人ずつの交代制でいつシリウス・ブラックが襲ってこようとリリだけは守るように目を光らせている。

男子は更にそこからもつと離れた壁際に来るだけ離れている。

（はあく最悪……。皆と一緒に寝るのはいいけど、余計なのがいっぱいだわ。皆も寝ないなんて言い出すし。）

リリは見張りの女の子の睡眠時間が削られるなんてダメと言ったが聞き入れてもらえなかった。

おまけにパーバティとの約束もダメにされてしまったし最悪だった。お詫びとして隣はいつものハーマイオニーからパーバティに代わってもらっている。

それでも眠気はやって来るのでパーバティに抱きしめられながら眠りについた。

翌朝までダンブルドア校長や先生たちが総力をあげてシリウス・ブラックを探したが、どこにも見つからず、結局ブラックの侵入方法も居場所も謎のままこの騒動は終わってしまった。

28. 嵐

ハロウィーンに起こったシリウス・ブラック侵入から一夜が明けた。

最悪の監獄から脱獄を果たしたブラックを見つけることはダンブルドアでさえできなかつたようで誰一人痕跡を見つけられなかつた。

それから一週間ほどは多くの生徒が不安そうにしながら日々を過ごしていた。

人間はどんな環境にでも慣れるというが、魔法使いでもそれは変わらないらしい。

殺人犯が出現した場所での生活でさえ時間が経ってしまえばそれは日常になつてしまふ。

リリ達も流石に身近に殺人鬼がいるかもしれない中では落ち着かない時もあったが、そういう時ほど誰かと一緒にいれば自然と心が回復するものだった。

むしろいつも以上に女子たちとくっついて行動できるいい機会だった。

侵入は一度だけ、目的は不明だし、被害にあつたのも絵画一つだけ。

学校としても見回りや防衛魔法の強化をするぐらいで警戒態勢も徐々に緩めていった。

そして授業はまるで襲撃が無かつたかのようにつきも通りに進んでいった。

しかし教師たちが関与しないところではグリフィンドール寮の入口だけは魔境のよ
うに防護されていた。もちろんリリの安全の為である。

全女子生徒総出での保護呪文、女ゴーストによる見回り、深夜のみスリザリンの怪物
たるバジリスクによる徹底警護、おまけにグリフィンドール塔の外にはドラゴンが飛ん
でいるのである。

これではいかにシリウス・ブラックでも侵入は難しいであろう。

~~~~~

侵入からしばらくしてからの闇の魔術に対する防衛術の授業でそれは起こった。

教室に入るとそこにはいつものルーピンの姿はなく、代わりに見慣れた、しかし場違  
いなセズルス・スネイプ教授の姿がそこにはあった。

「早く席に着くように。」

驚いて立ち止まっている生徒たちに短く言い放つスネイプ。

リリが代表としてスネイプに尋ねる。

「ルーピン先生はどうしたんですか？」

「……ルーピン先生は体調が悪い。よって代わりに我輩が授業を執り行う。これは校長  
の許可も取った正式なものだ。……他に聞きたいことが無いならさっそく授業を始め

る。教科書の390ページを開くのだ。」

指定されたページを開く。そこに記されていたのは……狼人間であった。

狼人間は危険で確かに闇の魔術に対する防衛術で取り扱うべき怪物であろう。しかし今までのルーピンの授業のペースで考えればこれを扱うには早すぎる。

「ルーピン先生はどのような内容を教えたのか記録に残していなかった。よって今回は我輩が諸君らに必要なものを教える。我々が今日学ぶのは……人狼である。」

生徒の戸惑いなど無視してスネイプは授業を開始する。

それに待ったをかけたのは勉強に対してはホグワーツ一の熱量を誇るハーマイオニーである。

「先生、これまで授業でやったのはボガート、カッパ、グリーンデローです。それからこれからの予定ではヒンキーパンクです。」

「黙れミス・グレンジャー。今は私の授……。」

それ以上はリリからの圧で何も言えなくなるスネイプ。

だが、狼人間を授業で取り扱うことは絶対に止めず、羊皮紙5枚以上という特大のレポート作成の宿題のおまけ付きであった。

ハーマイオニーも最初の方は不満気であったが、授業が進むにつれより深刻な顔に代わっていった。

それを無視するなんてリリには出来るはずが、次の授業への移動途中に聞いてみた。

「まだ、確証はないけど……。もしそうだとしたらリリに危険が及ぶかもしれない。ハッキリしたらダンブルドアに直訴するわ。それまでもうちよつと時間を頂戴。」

ハーマイオニーはそう言うと考え込んでしまった。こうなれば答えを出すまでそう簡単には話してくれないと経験則から分かっているのでそれ以上は追求しなかった。

~~~~~

今年もクイディッチのシーズンがやって来た。

初戦はグリフィンボールとハッフルパフの試合だ。

天候は残念なことに酷い嵐である。

だが、嵐に負けないぐらい激しい情熱を燃やしている男がここに一人。

ホグワーツの誰もが認めるクイディッチ狂いのオリバー・ウッドである。

「俺は今年で卒業する。この意味が解るか？ そうこれが最後だ。俺は優勝杯という最高の榮譽を持ったままここを卒業したい。去年はあと一步の所でスリザリンに優勝杯を持つて行かれた……。だが！ 今年はそうはいかない！」

ケイティ！ アンジェリーナ！ アリシア！ 最高のチエイサーたちだ！

フレッド！ ジョージ！ この二人に敵うコンビネーションはプロでもない！

ハリー！ 抜群のシーカーだ！

そして俺！

更にはグリフィンボールには勝利の女神がいる！」

試合前の控室ではいつもの様にリリがチェイサー三人娘の応援に駆け付けていた。

もちろん男子たちには恐怖の呪いがかかっている。

ウィーズリー Twins はそもそもあまりリリに対して恐怖を抱いていない方であつ

たし、この状況には慣れてしまっていた。

しかしハリーとウッドはそうではなかったが、今日は違っていた。

ウッドの熱意はリンリーの呪いを凌駕するほどであった。

リリとしてはまさか自分が男に女神と称される日が来るとは思っていなかったので

びっくりして固まっている。

それを無視してウッドの熱のこもった演説が続く。

会場への選手入場までそれは続けられた。

~~~~~

『さあ！ 今年もやってまいりました寮対抗クイディッチトーナメント！ 実況はお馴

染みリー・ジョーダンがお送りします！ 解説は勿論我らがグリフィンドール寮監マクゴナガル先生です！ 今年の見所は去年優勝チームのスリザリンに他の寮がどこまで対抗するかというところでしよう。おおつと選手が入場してきました！』

ウツドを筆頭に両チームの選手たちは雨でずぶ濡れになりながらも闘志を燃やしている。

そして試合が始まった。

観客席では生徒たちも雨でぐっしりになりながらも応援をしている。

リリは過保護なまでに防水の呪文を施された雨具やその他の道具で濡れてはいないがこの悪天候ではなかなか試合をよく見ることができていない。

いつものリリの応援によるグリフィンドールチェイサーのやる気もこの悪天候では効果半減なのかそこまでの点差ではない。もちろんそれだけでなく新たなハツフルパフのキャプテンであるセドリック・デイゴリーの的確な指示で力量差を埋める連携を取っていることも大きな要因である。

30分も過ぎたところに一度タイム・アウトのホイッスルが聞こえてきた。流石にこの雨ではなかなか試合の要のスニッチを見つけられないようだ。

試合が再開し、各選手がそれぞれ飛び回る。

しばらくして試合が動いた。両チームのシーカーが急上昇をしたのだ。

観客たちもそれに気づき一気にヒートアップする。

その熱はしかし、すぐに霧散することになる。

ホグワーツ特急、ホグズミード訪問、そして今回。

三度感じた言い表せない恐怖。吸魂鬼<sup>デイメンター</sup>だ。

競技場に今までの比にならないくらい、数百もの吸魂鬼<sup>デイメンター</sup>が集まって来ていた。

リリたちハーレムはリリを中心に抱き合って心の安定を図る。

女子生徒たちはリリが近くにいることで奮起する。

だが、選手たちはそうはいかない。

一人の選手が箒から落ち、地面に向けて真つ逆さまに向かつていく。

ダンブルドアが地面との激突を防ぐと同時に杖から白銀の何かを出現させ吸魂鬼<sup>デイメンター</sup>を

退散させた。

吸魂鬼<sup>デイメンター</sup>には自分の呪いなど無力だと改めて思い知らされると同時に、ルーピンが使った

魔法と同じものと思われるものを使ってダンブルドアが吸魂鬼<sup>デイメンター</sup>を撃退したことからそ

の魔法を習得することが何よりも優先であるとしリリは感じた。

試合はハツフルパフの勝利で終わった。

スニッチに向かつていたシーカーで箒から落ちなかったセドリック・デイゴリーが勝

利を手にしたのだ。

これには不服であったセドリックは再試合の申し出たが聞き入れられることはなかった。

試合の結果が残念なことになったので試合終了後にチエイサーの三人を慰めに行く  
と悔しそうだったが、それ以上に次への決意を高め、リリが来てくれたことに対して高  
ぶっていたので一安心だ。

後日、改めて吸魂鬼デイメンターやそれを撃退する魔法についてハーレムと一緒に調べることにし  
た。

見つけたのは守護霊の呪文。

数ある魔法の中で唯一吸魂鬼デイメンターを撃退することが可能な魔法だ。

高度な呪文だろうが何だろうがこの呪文だけは絶対習得すると心に誓ったりりだっ  
た。



前回のうちから既にデートの順番が決まっていたことや前二人から話を聞いてデート内容を把握、今回のダフネとも相談してデートプランが被らないように作成をしているとの事だ。このあたり流石は知恵の者が集まるレイブンクローならではのであろう。

リリとパドマはプランにそって調べつくされた穴場スポットやそれぞれの店についてのおすすぬ情報を元にただ単に店を見て回っただけではなかなか知ることができないことを楽しんでいった。パドマとしても自分のプランがリリを楽しませていることに満足そうだ。

一通りのスポットを巡りデートの終わりに際してパドマはリリに喜んでもらったか聞く。

「リリ、楽しめた？」

「もちろん！ 前来た時もクラウディアに一通り案内されたけど知らないことも多くて楽しかったわ！」

「良かった……。」

それを聞いてホツとするパドマ。

パドマは自分に対して自信が持てなかった。

自分は双子のパーパティのように楽しくさせられない。

クラウディアのように甘えさせる包容力も持っていない。

ダフネのように貴族らしきもない。

レイブンクローナーのハーマイオニーには頭脳で勝てない。

ジニーのように周りを見ないほどの愛を与えているかどうかも不安になる。

その不安と今の安堵が顔に出ていたのかりりに頭を撫でられていた。

「リリ?」

「大丈夫。パドマが何を思っているかはつきりとは分からないけど、大丈夫。私はあなたを愛しているわ。もっと私に全てをぶつけて、ね?」

その言葉で今までの、心に隠してきた不安をリリに話してしまう。

「そっか。でもパドマはパドマ。他の誰でもないあなた。それだけで私はあなたが好きよ。」

それを聞いたリリは改めてハーレムの主としてそのままでもいい、そのままのパドマを受け入れる。

「ハッキリ言った方があなたにはいいと思うから言うね。パドマ・パチル、あなたはその命のある限りリリアン・リンリーのそばにすることを誓いなさい。私もあなたの事をずっと愛し続けると誓うわ。」

ずっとそばにるようにとあえて命令する。しっかりと口にすることでパドマの事を愛していると心から伝えるためだ。





ない。

二人だけで着せて着せられを繰り返して、鑑賞し鑑賞され楽しい時間は過ぎていく。誰もいないことをいいことに更衣室で二人で脱がし脱がされといったこともあったが二人だけの秘密である。

その後、大量の服を買った二人は厳選した新しい服でティータイム中である。

「普段は見られないリリも見られたし役得だったわ。」

「ふふ、私もダフネのあんな姿を見られて大満足よ。顔を真っ赤にするダフネなんて初めてじゃないかしら？」

「……そうだったかしら？」

ダフネは常に余裕たっぷりだねとリリが言うが、ダフネとしてはそんなことはないと思う。常にいっぱいいっぱいである。

今までの貴族の慣習でそうなっているだけで本当はもう少し自然体になりたいのだ。

「ねえ、リリ？ 私も……その、ジニーみたいに甘えたりしても、いえ何でもないわ。」  
「来てダフネ。」

魅了全開でダフネを誘うリリ。こんなのに曝されて抗える女の子なんていないだろう。

誘われるままにリリの胸に飛び込んでいくダフネ。周りにいる女の子もそれに続き

たそうにしているがリリが呼んだのはダフネだけだ。無断で行くわけにもいかない。

「ダフネ、甘えた時にはいつでも来ていいのよ。もちろん私が甘えたいときにはいつでもダフネに甘えるわ。私たちは愛で繋がった仲。遠慮なんていらないわ。」

しばらくダフネはリリの胸に抱かれその鼓動に包まれていた。

落ち着くまで母親に抱かれたかのような安らぎを感じる。

しばらくしてダフネは我に返って姿勢を正すが、リリの記憶にはバツチリ保存されている。

「……またお願いするわ。」

結局その日の夕食はダフネがもう一度甘えたいと甘々な空間を作っていた。

他のハーレムメンバーもそれを見越して見守るだけになっていた。

もちろん次の機会には自分たちもイチャイチャタイムを堪能するつもりでいるのだが。

こんな幸せな想いをしている彼女たちの陰で生き残った男の子は脱獄シリウス・ブラック囚と自らの関係、両親の仇であるということを知り憎しみを募らせていった。

~~~~~

ついに待ちに待ったクリスマス休暇がやって来た。

多くの生徒が家族の元に帰る長期休暇。

ホグワーツ特急は満員……ではない。

今年は例年と違って生徒の半数以上がホグワーツに残るというのだ。

男子生徒はほぼ全て家に戻っていった。逆に女子生徒はほぼ全てホグワーツに留まっている。

理由は言わずもがなりリアン・リンリーである。

一昨年は実家にハーマイオニーを紹介するために戻り、昨年は秘密の部屋騒動のせいで戻らざるを得なかった。

3年目にして初めてのホグワーツで迎えることになったクリスマス。

本当は去年やるはずだった全校女子全員での特大クリスマスパーティー。

それを開催できるとリリは新学期が始まってから学校側や屋敷しもべ妖精にプランを伝えていたのだ。

クリスマス当日。

大広間には女性しかない。

生徒も、教師も、ゴーストに至るまで男という存在はここには存在していない。

「メリークリスマス！」

「「「メリークリスマス!!!」」」

リリの乾杯の音頭でパーティーが始まる。

参加者それぞれに特別に用意された好物で構成されたメニューに舌つづみを打つ参加者。

席はいつもの寮ごとではなくバラバラに座っている。リリはそこを忙しく移動しながら参加者全員と交流している。

料理もほぼ食べ終わり、残りはデザートを残すだけになったところクリスマスらしくプレゼント交換会が開催される。

本当は全員がリリに対してプレゼントを渡したかったのだが、交換会をしたというリリの意向に従ったのである。

参加者全員での持ち寄ったプレゼントをランダムで交換するというものだ。

この場にいる全員の目当ては勿論リリのプレゼントである。

抽選は公正にくじ引きで選ばれる。

リリのプレゼントの番号は1番だ。

全員にくじが配布され、そして一斉にそれが開かれる。

一瞬の静寂の後、一人の女子が叫び声を上げた。

「わ、私だわー!」

くじによる公平な結果、正妻のハーマイオニーでもなくハーレムの誰でもない女子生徒が選ばれた。

他の女子たちもそれぞれに記載されたプレゼントが配られ最後にリリのプレゼントが見事引き当てた生徒にリリのプレゼントがリリの手によって手渡される。

興奮しながらその中身を開ける。そこには紙が一つ入っているだけだった。

疑問に思いながらそれを手に取って確認した幸運の女子は驚愕した。

「リ、リリちゃん一日自由権んんんん?!?!?!」

その紙に記載されていたのは『リリアン・リンリー一日自由権』という文字だった。

裏面には詳細に条件が記載されているが、要約すると命や怪我をさせない限りどんなことでも、それこそ性的な事でも自由にできるといふ夢のようなものだった。

それを知った周りの嫉妬はどれほどのものだったか言うまでもないだろう。

そして幸運な生徒はクリスマス休暇中にそれを使って一日中、朝から夜まで24時間誰にも邪魔されずにイチャイチャして愛してもらうことでこの世のものとは思えない幸福を味わいつくしたと後日語っていた。

その他にクリスマス休暇での出来事としてはハリー・ポッター宛てに現在の最高峰の箒ファイア・ボルトが送られてきたことぐらいだったがリリたちにとってはそこまで重

要な案件ではなかった。

まあ、ケイティたちチエイサーの三人がこれでグリフィンドールの優勝が決まったも同然と言ってはしやいでいたのでそれだけは送り主の正体不明さんには感謝である。

ホグワーツで過ごすクリスマス休暇は幸せの一言で表せるものだった。

30. 守護霊は嫁

クリスマス休暇が明けて1994年になった。

休暇中は女子たちとクリスマスパーティーを楽しんだり、新年を皆で祝ったりと楽しい時間を共有したが、それ以外にリリにとってはある課題があった。

それは守護霊の呪文である。

図書館で調べたりして詳細は分かったが、いざ実践してみるとなかなかうまくできない。

上級生でも扱える生徒はほとんどおらず結局、杖先からわずかな霞が出る程度にしか進展していない。

魔法が決して得意な方ではないリリだからそうなのではなくハーマイオニーやパドマ、上級生のクラウディアでさえあまり変わらない結果である。

これがリリにとってクリスマス休暇の唯一の心残りである。

(こんなのじゃ皆を護れない……。)

リリが悩んでいても時間は過ぎていく。休暇が明けて授業が始まりしばらくした時、ふと噂でハリー・ポッターがルーピン先生と守護霊の呪文について特別授業をしている

というのが耳に入った。

善は急げと言う。次の闇の魔術に対する防衛術の授業が終わった途端、リリはルーピンの前に行き、頭を下げている。

それにはルーピンは困惑するしかできない。

女子生徒はリリに頭を下げさせるルーピンに怒りと困惑の視線を向けている。

男子たちはあのリリアン・リンリーに頭を下げさせる男としてルーピンの株が急上昇である。

「ルーピン先生、お願いがあります。」

「え!? いやいやとりあえず頭を上げてくれ。このままじゃ視線だけで殺されてしまうよ。」

混乱する場を何とか治めようとするルーピン。

ひとまずリリをどうにかして話を聞くことにする。

「先生! 私に守護霊の呪文を教えてください! あんな奴らに私の皆が幸せを奪われるなんて嫌なんです。」

熱意が伝わって来るかのような真つ直ぐな視線。

こんな目をされてお願いされてしまつては相手がリンリーであろうと教師として断るわけにはいかない。

とうか断つたら女子から闇討ちされそうな気がする。

「分かったよ。日程や場所は後日調整するからちよつと待つてね。」

後日、土曜日に空いている部屋でルーピンによる守護霊の呪文の特別授業をすることが決まった。

~~~~~

その次の土曜日。

ルーピンが空き教室で待つていると参加者がやつて来た。

リリアン・リンリーだけかと思つたらそのハーレムまでも参加だとは予想外だった。

同じく守護霊の呪文の特別授業を受けているハリーとは別時間にしたのは正解だったとルーピンは確信した。

「よく来たね皆。守護霊の呪文を教わりたいつてことだけど概要ぐらいは知つているつてことでいいのかな？」

「はい。吸魂鬼デイスンターを撃退できる唯一の呪文で、幸せを元に各々独自の守護霊を創り出す……というのは調べて分かりました。」

代表してハーマイオニーが答える。

「うん、その通りだね。知識があるなら後は実践で覚えるしかない。本当は吸魂鬼デイスンターと相

対して守護霊の力を見るのが最適だろうけどいくら何でも危険すぎる。実際に吸魂鬼テイメンターに効果が発揮できるかは分からない。というか本当は生徒が守護霊の呪文を使う様なことになるだけでダメだけどね。」

特別授業はまずはルーピンが手本を見せアドバイスをする。

ルーピンの創り出した守護霊は……ただの霞だった。

「この状態はしっかりと幸福を心に思い浮かべていないとなる。ここまでだったら大抵の魔法使いならできようになる。この次のステップが難しいんだ。」

次にルーピンが呪文を唱えると杖の先から白銀の狼が現れた。教室内をぐるりと一周してルーピンの元に戻って消える。

これには参加者全員が驚いてそれを見ていた。

「完全に使いこなすところのようにちゃんと守護霊は形をとって現れる。私なんかより熟練者だと守護霊に伝言を託すなんて使い方をできるようにする。さて、ここに至るまでのアドバイスだけはね、落ち着いてしっかりと守護霊に集中することだ。心が乱れてはどんな魔法使いもこれを使いこなすことは出来ない。次に、自分にとって幸せが何かをしっかりとイメージすることだ。魔法は心の在り方で思った以上に変わってくる。呪文を唱える前にしっかりと心を調整するのが大事になってくるよ。」

それを聞いてリリは考える。自分の幸せとは何か。

女の子に囲まれていること？ ハーレムの皆？ ハーマイオニー？

色んな想いが現れ思考が混沌としてくる。

一つ深呼吸して頭を空っぽにしよう、そして最初に幸せをイメージして出てきたものが自分の幸福の形なのだ。

脳裏に現れたのはハーマイオニー・グレンジャーと一緒にいる自分の姿だった。

その光景を思い浮かべたままリリは呪文を口にする。

「エクス・ペクト・パトローナムー！」

リリの杖からは今までの消えそうな霞ではなく確かな実体が出現していた。

くしゃくしゃな髪、少女の身体、色こそ違えどそれは確かに最愛の人だった。

守護霊はリリのそばに寄り添いまるで守っているかのようだ。

「これは……驚いたな。」

ルーピンだけでなくここにいる全員が驚いていた。

まさか一回で成功するとは誰も思っていなかった。

「あ……、消えちゃった。」

守護霊はすぐに消えてしまった。それでも確かな実体を出現させるなど驚異的な事だ。

リリ以外はルーピンに指導されながら徐々に霞は濃くなっていき確かな上達を感じ

られる結果になっていった。

隔週で行われるこの特別授業以外ではクイティッチや宿題などあるが平和で脱獄囚が侵入することも、吸魂鬼デイモンターが現れることも無く穏やかで平和な日常が流れていった。

~~~~~

三度目のホグズミード訪問の日がやって来た。

生徒たちは軽やかな足取りでホグズミードへと向かっている。

しかしそこにはリリアン・リンリーと今日のデート相手であるジニーとハーマイオニーの姿はなかった。

楽しそうな女子たちの列を見ながらリリは隣にいる二人に聞く。

「本当にいいの？」

「ええ。むしろこっちの方がいいわ。」

「お姉さまと二人つきり、誰もいない……。ふふふ。最高です。」

この本来の趣旨に反した行動は二人による提案だった。

ホグズミードにはまだまだ行く機会がある。前二回のデートで目ぼしいところは大体回ってしまっただろうし同じようなデートはつまらない。

そこで考えた二人はあえて生徒が殆どいない校内デートを計画したのだ。

「それで、どんなことで楽しませてくれるの？」

「はいっ！　まずは私から！」

ジニーが勢いよく取り出したのは漫画本だった。

日本出身の友達から借りた物の様で内容は……学校内での先輩後輩の少女二人の恋愛ものだった。

「マグルつてすごいですね。正直文化面では魔法使いは遥かに遅れていると言わざるを得ないと思います。」

マグルというより日本がおかしいのだがツツコミを入れ事ができる存在はここにはいない。

「今回は今までにないシチュエーションのプレイを楽しみたいと思います！　具体的にはこの本のようにお姉さま……いえ先輩にしてみたいんです！」

流石ハーレム一の上級者変態である。

リリもその漫画を読んで気に入ったのか嬉々として空き教室へと向かっていった。

ちなみにちゃんと人払いの結界をマクゴナガル先生に張ってもらっているのが間違えて入ってくる心配はない。

それこそ教師でもない限りは。

今までにない時間をたっぷりと楽しんだりリリはジニーを教室に残してハーマイオニーが指定した場所に急ぐ。ジニーはダウンしているのが、しばらくしたら復活するだろう。

ハーマイオニーが待っていたのは8階の石壁の前だった。

本当に何もなく、ただの壁があるだけだ。

「? ハーミー? ここは何するの?」

「ふふ、まあ見せて。」

そう言うとうハーマイオニーは石壁の前で3往復する。

すると今までは無かった扉が急に現れた。

ビックリするリリにハーマイオニーは得意げだ。

「驚いた? 中に入ったらもつと驚くわよ。」

中に入るとそこは……予想に反して普通だった。

キングサイズのベッドが一つといくつかの棚があるだけだ。

「ここね、何でもそろそろ部屋なの。今は私がリリとゆつくり過ごしたいって思ったからこんな部屋になったけどね。」

リリは棚を見て回る。中には色んなお菓子や本、アクセサリーなどなど。

その棚の一つを見た時、リリは固まってしまった。

中は媚薬と書かれた瓶やママロザリントのコレクションを見た、大人なグッズがいくつあつたのだ。

「ハ、ハーミー……。コレって……。」

ベッドの上で待機していたハーマイオニーは顔を赤くさせながらこつちを潤んだ目で見ていた。

「リリ……。今日はゆつくりと明日の朝まで、ね？」

愛する彼女がこういうのだ。リリアン・リンリーは覚悟を決めた。

~~~~~

私が教師になってから数カ月が経過した。

色々なことがあつた。ああ、本当に色々なことが。

良いことばかりではないが楽しいことは多い。

授業をするのは新鮮だし、ハリーに一对一で守護霊について教えられるなんて思つても見なかつた。

それにリンリー家の子とも特別授業をするなんて思つても見なかつた。

去年の私に言っても信じてもらえないことばかりだな。

……悪いことも、もちろんあった。

シリウスがまさかここに現れるとは。

やはりハリーが狙いなのだろうか。頭が痛くなる。

頭痛の種はそれ以外にもある。シリウスの一件があつてから露骨にセブルスからの敵意が増している。どうやらシリウス侵入の手引きを私がしたと思つていろいろだ。

嫌われているとは知つていたが、狼人間について授業で教えることまでとは思わなかった。

脱狼薬を煎じてくれていたから強く言えないが流石に厳しく言うか……無理かな。

今日も良いことと悪いことがあつた。

ハリーが私たち四人が創つた忍びの地図を持つていたのだ。

ジェームズの息子のハリーがそれを持つているのに運命を感じたが、セブルスにそれを見られたのは良くなかつた。

過去のことを思いだした彼がまた私に嫌がらせしてくるのではないかと今から胃が痛い。

とりあえず忍びの地図は言いくるめて没収して手元にあるのでハリーに害がないようにしたのだけでもよしとしよう。



それにしても久しぶりにこの地図を眺めるなあ。

創った当初は四人でこれを眺めて先生やファイルチがどんな動きをするか観察しまくったけ。

プジエーロンムズグズ、パッッドリフツット、ワームムターテール……。

……なんだこれは……？

なぜこの名がここにある!?

どういうことだ!?

そんな、まさか……。

シリウス！ シリウスに会わねば……！

## 31. 試験と小さなネズミと大きな犬

イースター休暇も終わり今学期も終わりに近づいてきた。

ハロウィーン以来シリウス・ブラックが再度ホグワーツに姿を見せたことはなかった。

そのせいなのかホグワーツに配備されていた吸魂鬼デイトンターの数が少しずつ減っているようだ。

リリたちが練習した守護霊の呪文が無駄になりそうだが、そもそも使う場面にならないことが一番なのでこれで良いと納得はしていた。

去年のように大きな事件は他にはなく、しいて言えばクイディッチの試合でハリ・ポッターが世界最高最新の箒、ファイアボルトを手に入れ一気にグリフィンドールが優勝したことだろうか。

特に最終戦であるスリザリンとの一戦は盛り上がった。

絶好調のグリフィンドールを前にして一步も引かないスリザリンはすさまじかった。

特に箒の性能差を感じさせないプレーをした白銀の美少女に多くの男子が目を見奪われていた。彼女が元は男ということも忘れて。

もちろんリリもその勇姿に大興奮であった。

負けはしたがその勇姿はリリだけでなく寮を超えて多くの生徒が讃えていた。

試合後リリが向かったのは勝負に勝ち優勝を手にしたグリフィンドールではなく、スリザリンの控室であった。

リリが近づいてきたのを本能で察知した男たちはあつという間に控室から出ていき着替えて寮に戻っていった。残っていたのはリリが入ってきたことにも気が付いていないドラコだけだった。

「ドラコ。」

リリが声をかけてようやく気が付いたのか肩がピクリと動く。

だがそれだけだ。いまだに座ったまま顔を上げようとしない。

その落ち込み様を見ればドラコがこの一戦に力を入れて臨んだのかがわかんというものだ。

リリはドラコに近づき優しく抱きながら頭を撫でる。

ドラコはそれを黙って受け入れる。

「……何でここにいるんだ？ グリフィンドールが優勝したんだからそっちに行つたらいいだろう。」

「優勝のパーティーは後でもできるから。今はあなたに会いたくてね。」

「……勝手にしろ。」

「うん、する。」

その後も会話することなくリリはドラコの事を撫で続けていた。

しばらくして心の整理がついたのかドラコは着替えに戻っていった。

(何なんだあいつ。負けた僕を笑いに來たわけでもないし……。)

「でも何だか楽になった。」

誰もいない更衣室で一人ドラコは呟いていた。

リリとしては負けて落ち込む銀髪美少女がこのままだと誰にも褒められず、慰められないと思つての行動であつた。

ドラコはリリ好みではあるが、他の女子とは違い自分とは距離を取っている。

普通では味わえない微妙な関係ということでの距離感がリリには楽しいものだった。

嫌悪と恐怖、魅了に抗いながらも惹かれる。そんなドラコの様子を見ているといじりたくなつてくるが我慢している。

多分、リリが本気で迫つたら他の女の子と同じになつてしまう。

それはつまらないなと思つているのだ。

徐々に、少しずつ自分の方に来るといふ過程を楽しんでいた。

~~~~~

クイディッチも終わると残すところは期末試験だ。

ハーマイオニーが燃え、パドマも静かに打倒ハーマイオニーで燃えている。

ダフネも真面目な方なので試験に対しては苦に感じている様子はない。

クラウディアはO・W・L試験があるため今年力は入れている。

リリ、パーバティ、ジニーの三人だけが試験に消極的だが、他のメンバーからの圧力で渋谷図書館の机に座って教科書との戦いを繰り返している。

期末試験はその年に学んだことの総仕上げである。

変身術であれば年々変身させるものの難易度が上がっていく。

より細かく、より大きく、より精密に、より正確にといった具合である。

呪文学や魔法薬学も似たようなもので基本的には1、2年生の試験が難しくなったただけとも言える。

闇の魔術に対する防衛術はそれらと違って2年生まではまともな授業ではなかったためどんな試験が出るかは過去の傾向などは不明だが、推測することは出来る。おそらく

く学んだ闇の生物や呪文についてどう対処するかを採点するのだろうか。

これらと違って全くもってどうなるか未知なのは占い学である。

そもそもが普通の授業からしてよくわからないことが多いのにどうやって試験をするのだろうか、と多くの生徒が悩み中にはぶっつけ本番で特に何もしていない生徒までいる。

そしてとうとう試験がやって来た。

変身術、呪文学、魔法薬学はそれぞれ筆記と実技。これは予想通り。

闇の魔術に対する防衛術は実技のみであった。生徒ごとにランダムで選ばれた魔法生物に対処するというものであった。これもまあ、想定内の範囲内である。

想定外だったのは魔法生物飼育学だった。なんと筆記試験のみである。

曰く、『知識の無い者は魔法生物を飼育する資格なし』とのことだ。

そして問題の占い学はというと、

「皆様には自身について占ってもらいましょう。どのような結果であれ……点数に優劣はつけませんわ。そんな評価など占い学には不要ですことよ。未来に点数を付けることなど無意味ですもの。」

トレローニーが言うにはホグワーツの方針だからテストということにしているだけでこんなこと無意味だとハッキリ断じた。

少々拍子抜けしたが簡単だし良いかと思っていけない生徒が大半だった。ただ一人ハーマイオニーだけが不満そうにしているのみだ。

そんなこんなで期末試験も終わった。

真面目組のおかげでどうにか乗り切ったリリはハーマイオニー、ジニー、パーバティの三人と校庭の湖の畔でゆったりとくつろいでいた。

「あ〜……。終わった〜！」

暖かいお日様の下でゴロンと横になる。

試験から解放されポカポカの陽気ではお昼寝タイムとなるのも当然だ。

ちなみに枕はハーマイオニーの膝である。言うまでもなく最高級の枕なんて目じやない。

ハーマイオニーはリリの頭を撫でながら静かに幸せそうにしている。

パーバティとジニーは眠りそうなりりのため静かにしながら両隣に横になる。

このまま夕食までゆったりとした時間となるだろうなと思われた空間は突如として破られた。

「チューー！ という耳障りな鳴き声が聞こえてきたのだ。

「んもお、何？」

不快な音のせいでリリは起き上がる。
そこへ小さな何かが飛び込んできた。

「んん……ネズミ!?!」

残っていた眠気も吹き飛んだ。別段ネズミが苦手というわけではないが意識が覚醒していないところに急にネズミが現れたらリリでなくても驚くだろう。

隣にいたジニーがそのネズミは驚掴んでリリから引き離す。

リリに飛びつくなんて羨ましい……いや下等生物には不相応な事をしたのだ、今すぐにも目の前の湖に放り込んでやろうとしたところでジニーは気が付いた。

「これ……スキャバーズ?」

小指が一本かけたそのネズミはかつての兄のペットだったネズミであった。

元々はおさがりだったこともあってウィーズリー家にはかなりの期間一緒にいた存在だ。

流石にそんな存在を投げ捨てるほどジニーは冷血ではない。
とは言えどうしたものか。

悩むジニーがいきなりに吹き飛んだ。

黒い大きな何かがジニーに体当たりをしたのだ。

「ジニー！」

「ダメよリリ！」

「見て！」

リリが駆け寄ろうとするが、ハーマイオニーとパーバティの二人に止められる。

黒い何かは……大きな犬であった。

それは最初の激突で気を失ったのか動かないジニーを噛み殺そうとでもしているのか大きく口を開けていた。

「止めて!! エクスぺリアームス！」

咄嗟にリリは武装解除の呪文を使う。慌てていたこともあり呪文は見当違いの所に飛んで行くが、黒犬の動きは止まった。だが、それも一瞬。

されど、一瞬。その間にジニーの手からネズミが抜け出してリリの方に向かってきた。

そして黒犬がそれを追うように突撃してくる。

「ス、ステューピファイ！」

「エクスぺリアームス！」

ハーマイオニーとパーバティがリリを護るため黒犬に呪文を放つが巨体に似合わぬ俊敏な動きで避けられる。

それでも回避によってスピードが落ちた結果、その隙にネズミはリリの足元から遠くへと走り去っていった。

次々に放たれる呪文を避けながら黒犬は苛立った様子で唸り声をあげる。

次の瞬間にはその輪郭が歪み、一人の男がその場に立っていた。

手配書よりは整った髪で髭こそ剃ってはいるが狂気を隠そうともしない眼はそのまま。

その人相はこの一年嫌というほど見たものだ。

脱獄囚シリウス・ブラックがその場にいきなり現れた。

「どけ……どけえええー！」

リリたちはその怒声に動きを止めてしまう。

ブラックは懐から杖を取り出し……。

「待て！ 待つんだシリウス！」

そこに現れたのはリーマス・ルーピンであった。

その手にはネズミが握られている。

教師、それも闇の魔術に対する防衛術の担当のルーピンが来たことで絶望的だった状況から希望が少し出てきたと思った。

「リーマス！ 捕まえたんだな！ 良かった！」

先程の怒気と狂気が充満した顔から一転、喜色満面になって親しげな様子でルーピンに近づいていく。

どう見ても敵対している様子はなく、まるで親友と話しているかのよう。

いや、実際に仲間なのだろう。

「そんな……ルーピン先生がシリウス・ブラックの仲間なんて……。」

男性にしてはそこそこ信頼していたリリリにとつては少しショックであった。

「誤解だ。リリアン、信じて欲しい。私は「騙されちやダメよりリリ！ この人は狼人間なの！」

そのハーマイオニーの言葉に明らかに驚いているルーピン。どうやら真実であるようだ。

「リーマス、速く早くしろ！ もう待てない！ こんな子供たちなんてさっさとどうにかしろ。」

「……そうだね。ゴメンね。大丈夫、痛くしないから。」

二人がリリたちに杖を向ける。立ち向かおうにも逃げようにも体が動かない。

せめてリリだけは守ろうとハーマイオニーとパーバティが前に出る。

リリも二人を守ろうと前に出ようとする。

(神様、いえ誰でもいい！)

「助けて！」

その願いを消し去るかのよう凶悪犯と人狼の杖から光が放たれる。

「もう大丈夫です、お嬢様。」

3 2. 捕縛

最強の魔法使いは誰か？

こう問われて魔法使いは様々な答えを返すだろう。

ある者はホグワーツ創設者であるゴドリック・グリフィンドール、ヘルガ・ハツフルパフ、ロウエナ・レイブンクローそしてサラザール・スリザリンの中の誰かと言う。

凄腕の闇祓いであるマッドアイ・ムーデイも候補だろう。

またある者はかつて歴史上最も危険な闇の魔法使いのリストの頂点に君臨していたゲラート・グリンデルバルドを上げるだろう。

今ではその名が霞むほどの最悪の存在、闇の帝王、名前を言っただけいけない例のあの、ヴォルデモート卿を想像する者が多くいるのも当然である。

そしてその例のあの人が唯一恐れられた今世紀最高の魔法使いと呼ばれるアルバス・ダンブルドアの名もそれに連なる。

だが、今を生きる最強の魔女は誰かという問いに対しては彼女を知る者ならば満場一致だろう。

その魔女の名は

~~~~~

「キャロル……!」

「はい。お助けに参りました、お嬢様。」

その女性はどこからともなく、それこそ姿現しの音もなくリリたちと犯<sup>ブラックヒルレーベン</sup>罪者の間に姿を現した。

短くそろえた黒髪にツリ目、軍人を想起させる雰囲気を持ったメイド服の女性。リリたちが良く知るリンリー家の警護担当のメイド、キャロルである。

「でもどうやってここに?」

「話は後に。先にあの不届き者を叩きのめします。」

リリ達の周りにプロテゴ<sup>最</sup>・マキシマ<sup>護</sup>を張りながらシリウス<sup>脱</sup>・ブラック<sup>囚</sup>とリーマス<sup>狼</sup>・ルーピン<sup>間</sup>の方を向く。

その眼には一瞬前までのリリお嬢様やハーマイオニー達に向けていた慈愛の眼差しは既になく、そこには零下の殺気しか宿っていなかった。

~~~~~

一方のシリウス・ブラックとリーマス・ルーピンはいきなり現れたその女を警戒していた。

だが、警戒しつつも事を構える気は微塵もない。

既に裏切り者ピーター・ペティグリュウの確保という最大の目的は達成したのだ。後はシリウスの無罪を証明するためにこの男を生存と裏切りの証明をするだけだ。

今ここで無駄に争う必要はない。生徒などは放っておいて逃げる決断をした。

しかし、この場を離脱しようとするが不可視の壁に阻まれここから、正確には新たに現れた女から距離を取ることができなかった。

魔法を使って突破しようした時、身を凍えさせるような殺気を受け振り返る。

女がこちらを向いていた。殺気を込めて。

その顔は知っていた。同年代のホグワーツにいた者ならば知らぬものはいないだろう化物女だ。

「キャロル・フォード……!」

シリウスは苦々しく呟く。こいつが現れてしまったてはこの場からの離脱は著しく困難なものになってしまった。まだ死喰い人^{デスイーター}イダースの方がマシというものだ。

「や、やあフォード。元気かい? ちよつとでいい! 私たちの話を聞いてくれ!」

ルーピンが元同級生ということで話しかけるが殺気は微塵も収まることはない。む

しろ増加する一方である。

「無駄だらりーマス。こうなったら何としても逃げるぞ。」

「そうだな。二人でかかれば何とか……！」

二人は杖を構え、臨戦態勢となる。相手が一人、しかも女性だからと言つて手加減をするつもりなど無い。シリウスは殺す気でさえいた。

「ステューピファイ！」

シリウス・ブラックの杖から赤い閃光がキャロルに向けて発射される。

全力でのそれは並みの魔法使いの魔法と比較して強く、そして速かった。

盾の呪文プロテゴで防げばその隙にルーピンが周囲の障壁を破壊する、避けてもやはりルーピンがキャロルを仕留める。仕留めきれなくても隙は出来るはずだ。

魔法使いの戦いは呪文の打ち合い、そしてそれを防ぐまたは避けるといったものになる。

キャロルが取る手段もその二択であるとしかなはずだが、身動き一つしないでじつと迫りくる光線を見ているだけだ。

キャロルの目前まで迫った呪文を見てシリウスは勝利を確信するどころか逆に警戒を強めた。ルーピンも同様だ。こんな簡単にいく相手ではない。

「」

キャロルが眩くと同時に目の光線は消滅した。

更に同時にルーピンが地面に倒れ伏す。

「リーマス！ くそっ！」

シリウスは一目散に駆け寄ろうとするが、ぐつと我慢する。

この化物の前でそれは命取りになる。

（冷静になれ……！ アバダケダブラ呪文は使っていない、つまりリーマスは生きています。

ここで私がやられればリーマスまで無実の罪で……！）

杖を構えたままキャロルを睨み続ける。無暗に呪文を放てば先ほどの繰り返しの恐れがある。

だとしても何もしなければ不利になるのはこちらの方だ。今は幸いなことに他の生徒の姿はないが、誰かがこの場を見てしまえば増援は必至。そうなつてはどうしようもない。

「フリペンド！」

近くにあつた石を射出するも、やはり目の前で消失する。

（盾の呪文プロテゴではない？ 魔法も物体も消す何か。まさか触れただけで消滅するのか？

まさかそんな。）

かつてホグワーツでトップクラスであつた頭脳をフル回転させる。

あと一步で答えが出てこようという時にシリウス・ブラックの脳内は一つの事柄に支配された。

眼の端にネズミが走り去っていくのが映ったのだ。

「ピーター!!」

復讐という名の狂気に吞まれたシリウス・ブラックは目の前の敵も、倒れ伏す友も、何もかも忘れてネズミに向けて杖を向ける。

そんな無防備を晒せば当然どうなるかなど分かり切っていたことだが、今のブラックの頭には裏切り者の事しかない。

いきなりの衝撃で吹き飛ばされながらも眼だけはしっかりと去っていく小さなネズミだけを見続けていた。

「があっ!」

5メートル以上吹き飛ばされながらも急いで立ち上がりネズミを追いかける。

再び吹き飛ばす。

二度目になつてようやくネズミを追うにはこの障害物を排除しなければならぬと理解する。

「退け、どけ! どけええ! 邪魔をするなあ!!」

次の瞬間、シリウス・ブラックの目に見えた風景は青空だった。

「は？」

疑問の答えは落下する感覚が教えてくれた。体は大地を離れ空高く放りだされていったのだ。

「くそがあああー！」

シリウス・ブラックの心が最初に感じたことは死の恐怖でも、こうなった疑問でもなく、このままでは裏切り者を取り逃がしてしまうという焦りとこんなことをした相手への怒りであった。

そんな怒りなど物理法則には関係ないとばかりに落下速度は上昇し、地面が近づいてきた。

このままでは死、良くても動くことは出来なくなるだろう。

「スポンジファイ！」

どうにか落下速度を低下させ、地面をスポンジのように柔らかくする。

後は受け身を取って一刻も速くこの場から離れるつもりだった。

キャロル・フォードという女が慈愛に満ちていたらそうなっていただろう。

「いっおはあっ！」

シリウス・ブラックは固いままの地面に激突した。

受け身を取ろうにも予想外の硬さにくまなくかかったのだ。

衝撃は凄まじく骨が何本も折れ、内臓にも深刻なダメージが入っている。

肺が酸素の受け取りを拒否しているのか、息を吸っても苦しいままだ。

それでも執念で立ち上がり、動き出す。

それも一歩で終わる。

一歩踏み出した瞬間に体が動かなくなる。

正確には首から下の動きができなくなった。

その体が地面に埋まっていたのだ。

もちろんキャロルの仕業ではあるが、それをシリウス・ブラックは理解する前に

ステューピーファイで気絶させられた。

その隣には同じく気絶したリーマス・ルーピンが地面から首だけを出して埋まってい

る。

時間にして5分とかからずに凶悪な脱獄囚と人狼の教師の捕縛が完了した。

~~~~~

ことが終わるとキャロルは逃走妨害用の障壁を解除し、リリ達の元に急ぐ。

リリ、ハーマイオニーとパーバティは無傷の様子であったがジニーだけは意識がなかったはずだ。

もしものことがあればリリだけでなくロザリンド達にも合わせる顔がない。

リリ達は呆然とした様子でキャロルを見ていた。その中にいつの間にか目を覚ましたジニーもいたことでキャロルはホッと胸をなでおろす。

「リリお嬢様、皆さまご無事ですか？」

「え、ええ。大丈夫よ。ありがとうキャロル。」

「ジニーお嬢様はちゃんと検査した方がよろしいでしょう。私におつかまり下さい。」  
全員がキャロルに触れたことを確認してキャロルは医務室へと姿くらましをした。

残されたのは地面に埋まっている二人の首だけであった。

## 33. ハーレム三年目

キャロルはリリ達を連れて医務室に姿あらわしをした。

突然現れたリリ達にマダム・ポンフリーは驚くがキャロルが事情を説明すると無駄のない動きでジニーの診察に入った。

「それでは私はあの下種どもの事を伝えて参ります。念のためここから動かないように。」

そう言い退出すると同時に多重に防御結界と感知魔法を医務室に施した。

向かうは校長室。一刻も速くダンブルドアに伝えた方が良いだろうとの判断だ。

ホグワーツ内での姿現しが可能なキャロルだが、校長室に直接、またはその付近ともなると不可能ではないが難しい。失敗するリスクを冒すぐらいならば足を使って走った方が速い。

その日、ホグワーツに生徒の間をすり抜けながら猛スピードで走るメイドという不思議が新たに追加されたのだった。

~~~~~

「失礼します。」

校長室でダンブルドアが副校長であるマクゴナガルや各寮の寮監の教師達と来年度行うとあるイベントについて話し合っていると聞き覚えのある声と共に女性が入ってきた。

校長室にいる全員が驚いた。女がメイド服をその身に纏っているからというのもあるがそれは最大の要因ではない。

かつてホグワーツに在籍していた時にロザリンド・リンリーの最強の護衛だった、あの意味ロザリンドよりも問題児であったからだ。

「キャロル・フォードではないですか！ どうしてホグワーツに？」

皆の総意を代表としてマクゴナガルが尋ねるが返ってきた答えは更なる驚愕をこの場にもたらした。

「シリウス・ブラックおよびその仲間を捕らえました。場所は「なんだと!? どこだ!?!」……湖のそばに埋めてあります。迅速な処分をお願いします。」

セブルス・スネイプは誰よりも速く校長室から飛び出ていった。

一瞬遅れてダンブルドアがフリットウィックにスネイプの後を追うように、マクゴナガルとスプラウトには生徒たちやホグワーツ全体の混乱を抑えるように指示を出し、自らは魔法省へと迅速な連絡を取るため動き出す。

キャロルは伝えることはもう無くなったので愛すべきリリお嬢様の元へ戻る。

「待つのがじゃ。」

それを止めたのはダンブルドアであった。

「君からも詳しく話を聞きたい。いつどうやってここに来たのか、どういった経緯で今回のようなことになったのか。わしらには知る必要があると思うのじゃが。」

「お断りします。そんな些事よりもリリお嬢様の方が遥かに優先度が高いので。」

無言で閉められる扉を見ながらダンブルドアは10年以上前と同じようなことがあったことを思いだした。

闇の帝王の全盛期、不死鳥の騎士団を率いて対抗していたが僅かな戦力でも欲しい、彼女が必要だった。

キャロル・フォードという魔法使いはどちらの陣営にとっても魅力的な戦力だったのだ。

もちろんダンブルドアも自ら出向いてキャロルを勧誘した。

だが、返ってきたのは断るといっただ一言のみ。

結局はリンリーの一族そのものを味方に付けなければならぬという大前提があったのだ。

その前提自体、どの陣営にも不可能な事柄であるのだ。

無理だったものを後悔しても意味がない。

ダンブルドアはこれから起こるであろう魔法省や世間とのやり取りに頭を切り替えて行動を再開した。

~~~~~

シリウス・ブラックとリーマス・ルーピンは杖を取り上げられ、縄で縛られたうえで魔法による更なる拘束がされるといふ状態で空き教室に閉じ込められていた。

ルーピンはこれから訪れる最悪の未来を想像して蒼白を通り越して色のない顔をしていた。

逃げようにもその手段も力もない。すでに諦めきっていた。

対してブラックは体を動かし続け少しもこの場から逃げることを諦めていなかった。

絶望的な場所、アズカバンで10年以上も耐えて耐えて耐えきった先にこのチャンスが巡ってきたのだ。

この程度で諦めるような精神はどうに捨て去っている。

とは言えそれは精神面での話。

どうやっても二人がこの場から逃げることは不可能である。

他に協力者でもない限りは。

二人がいる空き教室の扉が開かれた。

裁判など無しにとうとう刑の執行かと覚悟を決めたルーピンと、もがき続けるブラツクの前に現れたのは今世紀最高の魔法使い、恩師でもあるホグワーツ校長、アルバス・ダンプルドアであった。

「……久しいの、シリウス。それに残念じゃ。」

「ダ、ダンプルドア先生待って、待ってくださいー！」

「聞いてくれー！ あいつが、ピーターが!!」

「もちろんお主たちには聞きたいことが山ほどある。だが時間は限られている。そこでこれじゃ。」

ダンプルドアは記憶を見ることができる憂いの篩を持ってきていた。

「これでお主たちの記憶を見る。改竄があればすぐに気が付けるはずじゃ。真実をわしに見せてくれ。」

二人から必要な部分のみを取り出した記憶を即座にダンプルドアは体験した。

秘密の守り人、ピーターの裏切り、追走、更なる裏切りと冤罪、脱獄、親友との再会、そして真実。

追い詰める、キャロルの登場、再びの逃亡。

シリウス・ブラックが投獄される前から今日起こった出来事までの10年以上の時間の要点を僅かな時間で体験したダンブルドア。

即座には信じられることではない。だが無視できぬことも多い。

それにこれを完全に否定することもできない。

だが、時間はない。

しばらく考えた結果、ダンブルドアは一つの結論を出す。

「……分かった。お主たちを信じよう。」

「先生……！」

「ダンブルドア！　じゃあ、この縄を解いてくれ！　今すぐにもあいつを追いかけね

ば！」

「時間がない。もうすぐファツジが直々に吸魂鬼を連れてくるじやろう。もちろん

ディメンター吸魂鬼の接吻の為じやろうな。このまま逃げたら……わしが逃がしたと疑われる、それ

くらいは承知の上じや。すぐに逃げて身を隠すのじや。」

「先生！　私は……！」

「ありがとうございます……！　いくぞ！　リーマス！」

ダンブルドアはこれが正しかったと言い聞かせながら窓から逃げていく二人を見ていた。

これからファッジや世間から厳しい声が来るだろうと覚悟を決めた。  
 (その前にセブルスが荒れそうじゃのお……。)

~~~~~

その日の夕方。

脱獄囚シリウス・ブラックと協力者であったホグワーツ教師リーマス・ルーピンが捕縛されたという情報が魔法界に日刊預言者新聞の号外として大々的に報じられた。

魔法省が今までの失態を挽回しようと即座に情報を広めた結果であったが、結果としては逆効果であった。

ホグワーツが吸魂鬼デイメンターの接吻の刑に処する前にまたしても逃げられるという失態を犯したのだ。

これには魔法省だけでなく、ホグワーツひいては校長であるダンブルドアへの批判と不信感が魔法使いたちの間で高まることになった。

不信感で言えば魔法大臣であるファッジは自らの失脚の可能性を増したという理由で表立って批判こそしていないが、ダンブルドアに対しての信頼はほぼ無くなっている。

杖まで奪って拘束した相手が逃げられるものなのか？ しかもダンブルドアという

最高峰の魔法使いがいるというのに。 そんな思いを抱くのは当然であった。

魔法省とホグワーツに対する不信感と同時に逃げおおせたシリウス・ブラックとリーマス・ルーピンのことを魔法使いたちは恐怖した。

杖も無しにアズカバンだけでなく安全だと言われていたホグワーツでさえ侵入し逃げる事ができる。 更に片方は狼人間だというのだ。

これによつて世間からの狼人間に対する風当たりが強くなる結果となつてしまった。

~~~~~

当然ホグワーツの生徒たちも困惑と恐怖を感じていた。

再度の凶悪犯の侵入と取り逃がし。 更には信頼していた優しく頼りがいがあったリーマス・ルーピンが協力者だったのだ。

中には人間不信になる生徒まで出てしまっている。

そんな中で一番ショックを感じていたのはハリー・ポッターだ。

父親の友人で自分の事を気にかけてくれていたルーピン。

だが、それも今になって思えば両親を裏切つてヴォルデモートに殺される原因となつたシリウス・ブラックと協力して自分の事を殺すための芝居だったとしか思えない。

（ブラックもルーピンも僕の事を殺そうとしていたんだ。それにブラックだけじゃなくてルーピンも父さんと母さんの事をあいつに売ったんじゃないのか？ あの二人さえいなければ……。あいつらさえいなければ！ 僕は両親と一緒に！ あんなダースリーの家で嫌な思いもしないで幸せだったのに！）

ハリーの様子は見るからに殺気立っており親友のロナルド・ウィーズリーでさえ声をかけるのを戸惑うほどの様子であった。

夏休みに入るまでそれは収まることはなく、ハリーは距離を置かれるようになっていった。

~~~~~

一方のリリ達とはと言うと、大きな変化はない。

ルーピンが協力者というのは少しショックだがそこまで騒ぐほどの事ではない。

それに休みに入るまでは護衛としてキャロルがリリのそばにいることになったのだ。あつという間に苦も無くあの二人を撃退したキャロルがそばにいるのだ。

闇の帝王でも現れなければ安心できない方がおかしいぐらいだ。

残りの僅かな時間をリリたちは普通に過ごしていた。

そして今年度のホグワーツでの最後の日がやって来た。

いつもの様に休み前の最後の宴が催される。

それでも例年に比べていくらか活気に欠ける。中にはダンブルドアや教員の方を疑惑の目で見ている生徒までいる。

それでもこれが終わって休みに入ってしまったえば長期休暇、すなわちリリアン・リリーと触れ合える時間が減ってしまうのだ。女子たちは最後のリリー分を摂取しようとしてこの時間を楽しむことに専念することにした。

そしてホグワーツからロンドンに向かういつもの紅い蒸気機関車。

コンパートメント内はキャロルも加わり8人という大所帯だが、キャロルが空間魔法を使ってコンパートメントを広げたことで狭苦しい思いをせず帰りの旅を楽しんでいる。

「ありがとうキャロル。でもずっとこっちにいたけどお母様たちの警護は大丈夫だったの?」

「もちろん抜かりはありません。リリーリーの屋敷半径5kmに許可のない侵入者があった場合即座に私が感知するようにしておりますので。」

改めてこの護衛メイドの実力がデタラメであると実感したりり達だった。

あの襲撃の後、勉強家のハーマイオニーを筆頭に色々と聞いてみたのだが、どれもこ

れ

も凄すぎる魔法で正直に言えば参考にすらならないものだった。

「来年はキャロルの出番がないような一年になればいいなあ……。」

リリがポツリと呟く。

去年の秘密の部屋と言い、今回の脱獄囚と言い、また4年生になっても何か起こるのではないかと不安になってしまったのだ。

「大丈夫よ、リリ。私たちがそんな不安なんか吹き飛ばしてあげる。」

そう言いながらハーマイオニーや他のメンバーに抱きしめられ愛でられまくるリリ。

そんな幸せ状態では漠然とした不安など言葉通りどっかに飛んで行ってしまった。

来年もこの幸せが続くように願いながらリリアン・リンリーの3年目のホグワーツは終了したのであった。

4章 炎のゴブレットは良い選出をした

34. クイディッチワールドカップ

クイディッチ。

それは魔法界で最も人気があるスポーツである。

魔法使いにとってはマグルのように球技、陸上競技、水中競技、雪上競技などなど、多彩なスポーツはない。

だが、魔法使いたちはこのクイディッチに老若男女夢中になっている。

7人の選手が箒に乗って3種のボールで競い合うスポーツだ。

ルールはシンプルに見えて奥深く、見る者を魅了し続けている。

そんなクイディッチのワールドカップが1994年にイギリスで開催される。

歴史は古く1473年から続いており、これはマグルの世界で言えばワールドカップや世界大会、それとオリンピックが同時に開催されるのと同じぐらいビッグイベントなのだ。

当然、開催する国の魔法省は万全の準備と対策をすることになる。

英国もまた例外ではない。むしろ、闇の帝王が消え去って10年以上たったことで国

内外に魔法省の力を示すいい機会になると全部署が必要以上に気合を淹れさせられていた。

決勝戦のためには魔法省の特務隊5500人が1年かけて作り上げた10万人は入れるスタジアムで行われる予定だ。このスタジアムにはマグル避け呪文が過剰と思われるほど施されており、マグルが迷い込む可能性はほぼ0だ。

盛り上がるのは当然ながら選手や運営側だけで収まらない。

いや、観客こそ観戦チケットを獲得するために試合が始まる前から熾烈な競争を繰り広げている。

チケット1枚とるだけでガリオン金貨がどれだけ消え去るか分からない。

非正規のルートでは価値も日ごと、時間ごとに上がっていく始末だ。

結局は良い観客席は金持ちの貴族や魔法省のエリート官僚たちから埋まっていくのが世の理と言わんばかりである。

さて、リンリー家はクイディッチワールドカップに対してはどうなっているかと言うと。

「じゃーん！ クイディッチワールドカップ決勝戦の特等席！ もちろん全員分！！ 良いとこ纏めて私たちが占領したぜ！」

その周りには世界各国から集まった観客たちの様々なテントがいたるところに建てられている。

マグルが使う様なテントは極僅かであり中途半端にマグルの文化を理解してへんてこなものになっていたり、全く隠す気が無いような魔法使い丸だしなテントまで様々だ。

リリ達リリー家のテントもその中にある。

レイラやメイドたち、ハーマイオニーがマグル出身ということもあり見た目だけならば普通のテントである。

しかし中身はまるで別物。空間をいじって見かけの何十倍にも広くしてある特別製だ。

試合開始までまだ時間があるということでロザリンドとリリは外にいる女たちと仲良くなるために出かけようとしている。特にリリはほとんどイギリスの女の子としか接したことが無いので世界中の女の子がいるこの機は逃すなど選択肢にはない。

「それじゃあ、行ってきます!!」

「待ってください。」「待ちなさい!」

予想通りの行動を止めたのは二人の嫁たちであった。

ここでこの二人を解放したらワールドカップどころではなくなってしまうかもしれない

ない。

いつもは見逃しているが流石にここではそれは良くない。

「さて、ロザリンドはこちらで対処しますのでリリの事は任せました。」

「はい！ 任させました。」

「ちよつと待つて、マイハニー！ ほら！ せつかくここには世界中の美女がいるんだよ?! お近づきになるぐらいいいじゃん！」

「ハーミー？ 私、ママと違って本当に友達になりに行くだけよ？」

聞く耳持たれずテント内の各部屋に連行されるロザリンドとリリ。

それぞれの部屋にはメイドたちとリリのハーレムメンバーが待ち構えていた。

「それじゃあ、皆でおもてなしね。」

リリのおねだり全開も間に合わずまず、ハーマイオニーからの熱烈な口づけが待つていた。

たつぷり数分にかけて唾内を舌で嘗め回されてすっかり息が上がってしまいうりり。

休む暇もなく残りのハーレムの娘から可愛がられる。

あきらめて外の未知の女の子と会うことなど忘れて今は、愛すべき女との時間を楽しむことにした。

一方のロザリンドはメイド全員を倒して（性的な意味で）、脱出しようとしたがレイラ

には敗北し叶わぬ願いとなった。

試合が始まる直前まで二人は解放されずに新たな女の子との出会いは無しになった。

~~~~~

第422回クイディッチワールドカップ決勝戦　ブルガリア対アイルランド

クイディッチの決勝は女の子が出場していなければあまり興味を持たないリリでさえすごいとしか言えなくなるようなプレーだった。

今まで見てきた学生のプレーなんかお遊びとしか表現できない程のスピードとテクニク。

それがコートにいる14人全員が持っている。

クアツフルが右へ左へ、上から下そしてまた上。ゴールに入ったと思つたらまたすごいスピードで移動している。

ブラッジャーも選手に狙いすましたかのように打ち出され、それを正確にはじき返す。

キーパーが何度も四肢の全てを使ってクアツフルを止める。

観客たちはそれらに魅了されていた。

だが、トップレベルでは僅かな差が命取りになる。徐々にアイルランドチームの点数



表現できないものだった。

何はともあれ圧倒されたその試合も終わり後は一泊して国に帰るだけだと思った。ここまでだったらただのラッキーな一人の女の子で話は終わっていただろう。

テントでは寝るだけという時に、ふと外が気になってテントから出て月夜の散歩に繰り出したのだ。

そこで私は女神に出会った。

比喩でも何でもない。本当にその少女は女神だった。

月の光に照らされながら歩くその姿はただひたすらに美しかった。

共に歩く少女たちは女神に付き従う天使なのだろうか？

私はその光景に釘付けになった。

息をするのも惜しい。全能力をあの人を見るだけに費やしたい。

あの人に近づきたい。触れられたい。どんなことでもしてあげたい。

そんな欲望が徐々に湧き出してくる。

ふらふらと近づくと向こうも私に気が付いた。

『いんばんは。いい夜ね。』

恐らく英語だろう。母国語ではないので聞き取れなかったが、何となく少女の言葉が理解できた。





ると視界の端に気になるものを捕らえた。

少女たちが散歩している。

おおかた、先ほどの試合の興奮が冷めないで寝られないのだろう。かく言う私もそうだからだ。

別におかしな光景ではない。周りのテントでも寝ている人は皆無でそこら中に語り合ったり、出歩いている。

ビクトールトークを再開しようとしたら、友人が呆けた顔をしていた。

「どーした?」

「あ……あれ。」

「ん〜?」

さっきの少女たちの方をだらしなく口を開けっぱなしにしながら見ている。

距離が近づいたせいなのか少女たちの顔や姿がはつきりと見える。

(うん、カワイイね。可愛いよ。……可愛すぎないかしら!?)

女の子の中心にいる金髪の娘。楽しそうに話しながら歩いているそこだけがまるで太陽に照らされているかのように輝いて見えた。

さっきまで頭を占めていたビクトール・クラムが霞んでいく。

頭の中がああ少女でいっぱいになる。

でもそんな事しようがないじゃない。

カッコイイよりカワイイが尊い、それがこの世の心理なんだから。

少女が去っていったからは友人とクイディッチやクラムではなく少女についての話で盛り上がったのは言うまでもない。

~~~~~

リリたちがテントに戻って眠りについてしばらくしてからそれは突然起こった。

あえてテント内の部屋にあるベッドではなく寝袋を体験していたのだが、体が急に落下しているような感覚で目が覚めた。

「わっ!?! んぶっ!」

落下は短く、落ちた先は柔らかい。驚きはしたが怪我はないようだ。

混乱して周りを見ると……。

「私の部屋……?」

見知った自分の部屋のベッドの上に落ちてきたようだ。

何が起こったのか分からずにいるとドタドタと走って来る音が聞こえてきた。

「リリ!?! いる!?!」

「大丈夫!?!」

「お姉さま！」

ハーレムのみんながリリの部屋に飛び込んできた。

ハーマイオニーとジニーにベッドに押し倒される。

このままお楽しみといきたいが、クラウディアとダフネの真剣な顔を見たらそうもい
かないと諦めた。

「えっと、何があつたの？」

「分からないわ。ただ非常事態だとは思う。」

ダフネの言うことはもつともだ。

とりあえず動きやすい格好に着替えようとするとママとお母様がやって来た。

「皆無事か？ ……よし、大丈夫そうだな。後でキャロルにはご褒美をやろう。」

「混乱しているでしょうが大丈夫です。今日はもう休みなさい。」

せつかくのワールドカップとキャンプだったのに最後にケチが付いてしまった。

釈然としない気持ちを忘れるために全員がリリのベッドで眠りについた。

~~~~~

リンリー邸のリビングにはキャロルを除くメイドたちも揃っており、皆真剣な顔をして  
いた。

「さてさてどうなることやら。お？」

キャロルが音もなく現れる。

「御主人様、ただいま戻りました。問題ありません。」

「お疲れ様。それとありがとうございます。」

いつも護つてくれる愛するメイドを撫でる。

「んっ……。」

びくりと一瞬震えるが目を閉じてロザリンドの撫でを堪能する。

これだけで馬鹿どもの襲撃など大したことに感じ無くなつて来る。

「念のため私たちは徹夜かなー。あーあ、お肌に悪いぜ。」

## 35. 三大魔法学校対抗試合

英国で開催されたクイディッチワールドカップの決勝戦は最後の最後で大きな問題が発生してしまった。おかげで英国魔法省は他国からの非難されっぱなしである。

決勝の試合終了までは良かった。あのまま何事もなければ素晴らしい大会だったという印象だけを残して終わっていただろう。

それをぶち壊した馬鹿どもがいたのだ。

死喰い人<sup>デスイーター</sup>。

例のあの人が全盛期だった頃にその信奉者だった者たちだ。

ほとんどはアズカバンへと幽閉されたが、中には服従<sup>インペリオ</sup>の呪文で洗脳されていただけ、家族を人質に取りられて従っていたが犯罪は犯していない、などの理由で無罪もしくは軽い罪で今では自由になっている者も大勢いる。

その裏には純血筆頭である聖28一族が多かったことから金や権力による強引な手で魔法省と裏取引した結果の自由を獲得した者も多い。

どういった者だろうと共通しているのはマグルを下に見ている根っからの純血主義者ということだろう。

今回のバカ騒ぎも被害にあったのはキャンプ場の管理者だったマグルだけである。

それだけなら純血主義者が死喰い人デスイーターの振りをして純血主義万歳！ とでも騒いでいるだけで済んだのかもしれない。

それで終わってはくれなかった。

騒ぎとは別に夜空に闇の印が打ち上げられたのだ。

闇の印は例のあの人のシンボル、誰かを殺すという誓いでもある。

言い訳、嘘、金、権力、そんなもので自由を手にした軟弱な死喰い人デスイーターはそれを見ただ

けで姿をくらませた。

闇の印を使えるのは死喰い人デスイーターのみ、つまり野放しになっている闇の帝王の忠実な部下がいる可能性があるのだ。

このことは日刊預言者新聞に連日報じられ、毎日嫌な噂で魔法界のどこもかしこもいっぱいである。イギリス魔法省も対応でんやわんやである。

今年はそれだけでなく大きなイベントが控えているというのに。

~~~~~

リリアン・リンリーとそのハーレムの少女たちはホグワーツ特急内のコンパートメントでゆったりとホグワーツまでの旅を楽しんでいる。

リリ達にとってはクイティツチワールドカップの出来事は噂や新聞でしか知らない出来事なのでいまいち実感がわかない。

キャロルの魔法ですぐにリンリー邸に戻ったのは良かった。

まあ、世間がどれだけ騒ごうがホグワーツで楽しい時間を過ごせることには変わりはない。

今年はどうなことがあるのかワクワクしている。

4年目になってもそれは変わることない。

ホグズミード駅に到着していつもの様に馬車に揺られてホグワーツ城に到着。

門をくぐって、大広間で新入生の組み分け儀式を眺める。

新たにやって来た初々しい娘たちはカワイイものだ。

組み分けも終わって宴が始まる。周りの話題にはちらほらとクイティツチワールド

カップであるようだ。

リリが自分たちもそこにいたことを話すと女子たちが一齐に詰め寄って来る。

リリの事を心配したり、死喰い人憎しと闘志を燃やしたりと反応は様々だ。

特に3年以上一緒にいる4年生以上の反応は過激である。

「心配してくれてありがとう。でも、私は皆が怒った顔や心配そうな顔をするより笑顔でいてくれる方がいいわ。」

「リリ……。」「リリちゃん。」「そうね、私たちもリリが笑顔でいた方が幸せだもね。」

やはり1年の始まりの宴なのだ。辛気臭い話なんかなしにして笑顔で楽しくなくては台無しだ。

美味しい料理にデザートまでしつかり堪能して後は毎年恒例の校長の話で終わりだろう。

そう皆が思っているタイミングで図つたかのようにダンブルドアが立ち上がった。

「皆よく食べ、よく飲んだことじやろう。さていくつかわ知らせる事柄がある。今年はこちらよとしたサブライズ付きじや。」

悪戯グッズなどの持ち込み禁止の品、危険な禁じられた森への立ち入り禁止、守られているかは別としてこれらは毎年のことだ。

だが次にダンブルドアの口から出た言葉はほとんどの生徒に衝撃を与えた。

「さて、これから伝える内容は皆にとつて非常に残念になるじやろう。今年のクイディッチ大会は中止することとなった。」

大広間に男子も女子も関係なくどよめき上がる。中には叫んで立ち上がる生徒もいる。前年卒業したクイディッチ狂いで有名なグリフィンドールのオリバー・ウッドがいなくてよかつたと、男子に興味がないリリまでも含めたグリフィンドールの生徒全員

が思った。

ブーイングまで飛び交う大広間が静かになるまで待つてからダンブルドアは続きを話し出す。

「なぜクイデイチが取りやめるのか？ 説明をしなければ納得してくれんじやろう。答えはの、10月から今学期の終わりまであるイベントが続くからじゃ。クイデイチにも劣らぬほど皆が楽しむであろうとわしは確信しておる。」

ダンブルドアは大広間を見渡し、ほとんどの生徒が注目しているのを確認して発表する。

そのとき、突如として大広間の扉が音をたてて開いた。

扉から入ってきたのは黒いマント、長い杖に寄りかかっている男性であった。体がいくらか不自由なのか身体を大きく上下させながら大広間を教職員テーブルに向かって進んでいく。

「何あの人……。」

「知ってる？」

「あれは……。」

大広間の反応は様々だ。

リリが知っている女子に聞いたところ名はアラスター・ムーディ。

マッドアイ・ムーデイとも呼ばれる、数多くの闇の魔法使いを逮捕したということ
 で有名な魔法使いだそう。なんでもアズカバンに投獄されている囚人の半数は彼が
 埋めたというのだから、その実力は凄まじいものがあるのだろう。

ムーデイはダンブルドアと言葉を交わしたあとは空いていた席に座り、持参した酒瓶
 を傾けながら残っていた夕食をもそもそと食べていた。

「ごほん、気を取り直して……今年、ホグワーツで、トライウィザードトーナメント三大魔法学校対抗試合を開催する！」
 「ご冗談でしょう！」

グリフィンボールの双子、フレッドとジョージの声が響く。大広間のほとんどの生徒
 がそれに反応して笑う。

ダンブルドアが詳しい説明を始める。

「その昔はボーバトン、ダムストラング、ホグワーツで共催して5年ごとに持ち回りで
 行っておった。だが、悲しいことに夥しい死者が出てしまい中止になってしまっていた
 のじゃ。だが、それぞれの学校の校長と魔法省の魔法ゲーム・スポーツ部と協力して今
 年、数世紀ぶりに再開されることが決まった。」

「立候補するぞー！」

どの寮からも代表への立候補の声が上がる。大半は男子だが、女子も少なからずい

る。声を出さなかった者も自分が代表になって活躍する姿を思い浮かべている様子だ。

だがダンブルドアの次の一言は彼らに衝撃を与えた。

「今大会からは、参加選手に年齢制限を設ける。成人、つまり17歳になっておらん生徒では立候補は出来ないのじゃ。」

この宣言には大ブーイングが巻き起こった。特にギリギリ成人になっていない者は納得がいていないようだ。一番激しいのはウィーズリーの双子だ。

ダンブルドアはそれを無視して説明を続ける。今までの競技では死傷者が多数出てしまったことから成人してないような未熟な魔法使いでは課題をこなすだけの実力が無いことから今回のような制限が付けられたようだ。

ダンブルドアの話が終わり各寮に戻る生徒。寮への道中話題はどうやったたら未成年でも出場できるか、誰がどの寮から出場するのか、他校はどんななのか等々トライウィザード・トーナメント三大魔法学校対抗試合の話題しかなかった。

クイディッチワールドカップでの暗い事件についてなんかはすっかり吹き飛んでいた。

~~~~~

「クラウディアは出るの？」

グリフィンドールの談話室で女子の集まりの中心のリリがハーレムの一人のクラウディアに尋ねた。

「私たちの中じゃクラウディアだけが資格ありだもんね。でも正直羨ましくはないわね。」

周りが浮かれる中でハーマイオニーは冷静に言う。夥しい死者が出たなどという物騒男子な発言が出てはそう思う生徒はかなりの数がいた。

それに同調して何人かがうんうんと頷く。

「私は興味ないわね。そんなのに出たらリリちゃんと一緒に時間が減るもんね。」

ギューツとリリに抱き着きながら当然のように言う。

クラウディアは6年生。リリとのホグワーツ生活も残すところあと今年を入れて2年。

余計なことに使う時間など無いのだ。

ちなみにハツフルパフのクラウディアがここにいるのはキャロルに師事したことによってホグワーツ内で姿現しができるようになったからである。

まだ完全な姿現しは不可能だが、魔法道具を使ってハツフルパフ寮とグリフィンドル寮の間を行き来するぐらいならはできるようになっていた。

「未成年の私たちは出ようにも出れないしね。今年はクイディッチの代わりに観戦を楽

しみましよう。ま、私はポーバトンとダームストラングから来る代表候補たちの方が楽しみだわ。少しぐらい女の子がいると思うし。」

ポーバトン魔法アカデミーはフランス、ダームストラング専門学校は北歐にあるらしい。

ホグワーツでも他国の子供を受け入れているが、大半は英国の子だ。

この外国の2校が来るということは、ホグワーツにはいないタイプの女の子との出会いのチャンスである。

男子も女子も思いはそれぞれだが、今年のメイニンイベントである  
トライウィザード・トーナメント  
三大魔法学校対抗試合は好意的に受け入れられていた。

## 36. 許されざる呪文

次の日はどこもかしこも<sup>トライウィザード・トリナメント</sup>三大魔法学校對抗試合の話でもちきりであった。

リリが入学してからの hogwatts では女子の話題と言えば リリアン・リンリーであることが殆どであることから、今回の件は相当に関心を引いているのだろう。

試合が開始するまで数カ月、ポーバトンとダームストラングがこちらにやって来るまでも一カ月はあるというのに今すぐにでも始まると勘違いしたかのような気分である生徒もそれなりにいる。

そんな hogwatts であるが本来の存在理由である生徒への教育は全く待つてはくれない。

リリ達グリフィン・ドール生は担当の教授が来るのを待つている。

授業は闇の魔術に対する防衛術。毎年担当教師が入れ替わるこの教科は呪われているとささやかれている。

更には去年は凶悪犯を手引きした人狼リーマス・ルーピンが教えていた教科であることからますます引き受ける人がいなく、生徒にとつてもいい思い出が少くない。

おまけに今年の新たな教師は見るからに怪しい。

凄腕の闇祓いだろうが見た目の段階で人を選んでいる。もちろんリリリにとつてはダメである。

しばらくして問題のアラスター・ムーデイ、通称マッドアイがやって来た。

「そんなものは仕舞ってしまえ。教科書だ。そんなモノはこの授業には要らん。」

ムーデイが教卓に向かいながら唸るように言った。

生徒たちが一齐に教科書を鞆へと仕舞った。

ムーデイは生徒の出欠を確認し授業に入っていく。

「ふむこの嫌な気配……リリアン・リンリー……。ああ、リンリー家の小娘か。相も変わらず恐ろしいものよ。」

リリの番になってあからさまに嫌な顔をして出席を取ったため、ただでさえ高くなかった女子たちからの好感度は一気に最底辺になった。

「去年までの闇の魔術に対する防衛術の内容は把握しておる。基本的なことについては大よそ学んだようだ。だが！ お前たちには呪いの扱い方が著しく遅れている！

ワシが教えるのは闇の魔法に対する反対呪文だと魔法省は決めているようだ。

それだけでは足りぬ！ 実際に闇の魔法を知り、見て、体験しなければ反対呪文など無意味だ！」

その力説する歴戦の闇祓いの圧に生徒たちは圧倒される。



「さて……魔法法律により、最も厳しく罰せられる呪文が何か、知っている者はいるか？」

何人かの生徒が手を上げる。リリの隣のハーマイオニーもいつもの様に真つ直ぐに手を伸ばしている。

ムーデイは一人ずつ指名し、答えさせる。

返ってきた呪文は三つ。

まずは服従の呪文、インペリオ。

ムーデイは実際に効果を見せると言つて瓶から取り出した蜘蛛を服従させた。

蜘蛛はムーデイの手の平の上で踊りだす。その可笑しな様子に教室の生徒が笑うが、

ムーデイが、もし自分が同じ立場だったらどうなるか問うと一瞬で静かになった。

「服従の呪文は対象を完全に支配する。誰かを殺すように命令しようが、自ら命を絶つように命令しようが術者の意のままに動く。だが！服従の呪文には抵抗することができない。特にここにいる半数はワシでさえ容易にはいかぬだろうな。今後の授業でそれについて教えていこう。最も呪文に掛けられないようにするのが最良だがな。油断大敵！次！」

次は磔の呪文、クルーシオ。

またもや蜘蛛を対象にムーデイが杖を振るう。

呪文が唱えられた途端、蜘蛛は身を振りもがき苦しみ始める。

まるでこの世全ての苦痛がその身に襲い掛かっているかのような見ただけでこちらも苦しくなってくるような悲痛な姿だった。

それを見て嫌な気分になる生徒たちだったが、特にネビル・ロングボトムが尋常ではない様子でそれを見ている。だが、誰もそれを笑ったりできない。

「苦痛……。この磔クルシオの呪文が与えるのはそれだけだ。だが、その効果は絶大だ。どんな拷問よりも手軽で相手を苦しめることができる。ダンブルドアだろうとこの呪文を受けてしまえばまともに動くこともできなくなるであろう。」

最後の呪文は最悪の呪文。

死の呪文、アバダ・ケダブラ。

ムーティが新たな蜘蛛を取り出す。そしてその呪文を唱えた。

「アバダ・ケダブラー！」

緑の閃光が教室中に広がる。

閃光が治まった時には蜘蛛は死んでいた。その体には何一つ傷は無いにも関わらずただ死という結果だけがもたらされていた。

「これが死の呪文、アバダ・ケダブラ。気分が良いものではない。これは相手を問答無用で死に至らしめる最悪の呪文だ。この呪文が真に最悪なのは反対呪文も存在しないこ



もう間もなくボーバトンとダームストラングの両校がやって来る。それは三大魔法学校対抗試合の開始が近いということでもあった。

生徒たちは日に日に興奮していき、ウィーズリー双子などはギリギリ未成年であるために出場権が得られなかった腹いせもあつて悪戯の頻度も上がっていった。

相変わらず魔術に対する防衛術は過激だが、その日は今まで以上なことになつてい

た。  
ムーデイが生徒に許されざる呪文である服従の呪文イェンペリオをかけるという教師、いや人としては考えられないことをすると言ひ出したのだ。

もちろん生徒は反対するが、ムーデイのダンブルドアの許可を取つていふという発言で男子は黙り込んでしまった。

「お前たちは呪いをかけられたことがあるのか？ 経験無くして進歩無し！」

経験は大事だ。それが服従の呪文イェンペリオでなければ納得できるような言葉を述べる。もちろん女子は反対を続ける。自分たちはまだしも愛しのリリアン・リンリーにそんなことはさせられない。

「お前たちは知らんのか？ こやつらリンリーを男が服従させることは出来ぬ。また逆もしかりだな。」

それには生徒たちは驚く。知つていたハーマイオニーとパーバティだけは平然とし

ている。

「まあ良い。そこまで言うならリンリーには使わぬ。では始めるとしよう。」

ムーデイは一人ずつ生徒に呪文をかけていく。まずは男子生徒からだ。

生徒たちは逆立ちを続けたり、踊ったりと珍妙な行動をとらされる。

唯一ハリー・ポッターだけはムーデイの服従インペリオの呪文に抵抗していた。

それを絶賛して何度も服従すると、とうとう完全に打ち破っていた。

「よくやったぞ、ポッター！ お前は強い意志がある！ お前たち、意志だ！

服従インペリオの呪文を打ち破るのは強靱な意志の力だ！ 次は女だな。男たちはよく見ておけ。

これがリンリーの影響というものだ。」

男子と同じように女子にも一人ずつ服従インペリオの呪文を使つていく。

しかし効果は男子の時ほどは発揮されなかった。どれも中途半端に実行したり、中に

は全く動こうともしない生徒までいる。

ハーマイオニーの順番となった。

「服従せよインペリオ！」

ムーデイの一言でハーマイオニーはトロンとした幸福な表情になる。

（私のハーマイオニーにそんな顔をさせるな！ 私だけのものよ！）

自分以外にそんな幸せそうな表情をさせるなんて、それも男が！

そんな嫉妬と嫌悪の感情から出たリンリーの呪いが一瞬教室に広がる。それだけでハーマイオニーは正気を取り戻していた。

「わ、私は……。リリ！ ごめんなさい！ 私、わたし……。」

「大丈夫、大丈夫よ。ほら、こっちに來て。」

さつきまでの嫉妬の炎も消えハーマイオニー<sup>最</sup>の<sup>愛</sup>を受け入れる。

授業中だということも忘れて二人は抱き合っていた。

「まったく！ 授業妨害だ！ ……聞いておらん。お前たち今ので解つたと思うがリンリーの呪いは服従でさえ跳ね除けることができる。逆を言えば女限定だがリンリーは服従を上回る影響を与えることができるということだ！ それを忘れるな！」

男子は改めてリンリーへの恐怖を刻む。

女子はそんなムーディの言葉など聞こえておらず、二人の事を羨ましそうに見ているだけだった。

その同じ空間にいるのに男女で全く違う光景がリンリーの呪いというものを如実に表していた。

そして10月30日。

とうとうポーバトンとダムストラングが到着する日がやって來た。

## 37. 他校到着

トライクワイザード・トーナメント  
三大魔法学校対抗試合でホグワーツと競い合う二つの魔法学校、ボーバトンとダームス  
トラングを出迎えるため生徒と教師一同は城の前に集合していた。

あちらこちらでどんな魔法使いがやって来るのか、どうやって来るのか、どんな学校  
なのかといった話が上がっている。

リリアン・リンリーも例外ではなく初めて会うであろう女の子の存在に心が弾んでい  
る。

「ほっほ！ どうやらボーバトンの代表選手たちが来たようじゃの。」

ダンブルドアの言葉に生徒たちは反応するが辺りには変化が無い。

だが、ダンブルドアの指さす方向を見ると徐々に何か近づいてきた。

12頭もの5m以上はあるう巨大な天馬がさらに大きい館ほどある馬車を引いて空  
を飛んできていた。

そして地響きを立てホグワーツ城の横に着陸。

馬車から出てきたのはこれまた大きな女性だった。

リリアンはあそこまで大きな女性を見るのは初めてだった。

どうやらボーバトンの校長でマダム・マクシームというらしい。隣のハーマイオニーがいつもの様に教えてくれた。

3 mを越そうという巨体では小柄なりりなどは本当にお人形扱いされてしまうだろう。

(それはそれでちよつと経験してみたいかも……。)

ダンブルドアとマダム・マクシームが校長同士の挨拶を終えると馬車から続々とボーバトンの生徒たちが降りてくる。男女合わせて十数人ほどだろうか、薄めのローブを着ており気候の違いがあるためか寒そうにしている。

そんな中、一人の少女が降り立った瞬間にホグワーツ生の注目はその一人に注がれた。

腰まで伸びたシルバープロンドの髪に深い青色の瞳を持った美少女だった。

リリに魅了された女子たちでさえ美しいと認めざるを得ないその美貌に男たちはほとんどが虜にされていた。

薄着での寒さなど感じさせないように振舞いながらホグワーツ生に向けて手を振り微笑んでさえ見せた。

それにヒートアップした男たちはもつとよく見ようと醜い場所争いまで起こり始めた中、リリはその少女と目が合った。



お互い瞬きもせずに見つめ合い、そして笑顔を作った。

先程までの微笑などではなく、例えるならば獲物を見つけた獣の顔だった。

そしてそれはリリアン・リンリーも同じ。

気が付いたハーマイオニーは溜息をついた。リリが考えていることが分かっ  
てしまったのだ。

「はあ……。聞くけど何してるのよ?」

「うーん……。勝負前の挨拶かな?」

「はいはい、そんな感じだと思った。」

嫁ハーマイオニーの自分への理解力が凄くて感心してしまう。

大きな天馬もプランク先生に任せられ、マダム・マクシームと寒さに震えるボーバトン代表たちはスプラウト先生に連れられてホグワーツ城に入っていく。

男子生徒はそれに付いていきたくそうにしていたが、ダムストラングがまだ到着して  
いないので当然ながら待機である。

もう一校のダムストラングはどうやって来訪してくるのか皆で予想し合っている  
と、

湖の中から大きな船が浮上してきた。

天馬による空飛ぶ巨大馬車にも劣らぬ派手で注目を集める。

「なんで二校ともまともに来れなかったのかな？」

「多分アピールじゃないかなあ？ 戦う前から舐められないようにって感じで。」

「無駄な努力ですね。どんなに派手だろうと、立派だろうとお姉さまの前では霞んでしまっただけなのに。」

リリの疑問にパーバティが答え、ジニーがいつもの様にリリの素晴らしさを口にす  
る。

周りもほぼジニーの意見に同意している。

その時周囲が先ほどの美少女の時と同じぐらいざわめいた。

「ク、クラムだ!」 「嘘だろ……。」 「ワールドカップのMVPのビクトール・クラム選  
手!」

ダムストラングの帆船から最初に出てきたのは男にもかかわらずリリでも覚えて  
いた。

クイディッチワールドカップで大活躍したビクトール・クラムその人だった。

男子たちは世界クラスの有名人の登場に大盛り上がりだ。

逆に女子は「ああ、あの有名人の。」程度の反応である。

クラムはそれに対して特に何も反応せずにダムストラング校長のイゴール・カルカ  
ロフと共にホグワーツ城へと向かっていった。

ホグワーツ生もそれに続いていく。

ちなみに、ダームストラングは女子の代表が一人もいなかったためリリは早々に興味を無くしていたのだった。

~~~~~

二校とホグワーツの生徒、教師が大広間に集まっている。

これから歓迎会と正式に三大魔法学校対抗試合の開始が宣言される予定だ。

ボーバトン代表はハツフルパフのテーブルに、ダームストラング代表はスリザリンのテーブルに着席している。

男子はボーバトンの美少女とダームストラングのクラムに夢中になっている。

ダンブルドアが立ち上がる。

「こんばんは、紳士淑女、そしてゴーストの皆さん。そしてボーバトンとダームストラングの皆さん、ようこそホグワーツへ。心から歓迎いたしますぞ。本校での滞在が皆さんにとって快適で楽しいものになることをわしは希望し、確信しておる。」

「三大魔法学校対抗試合は宴の後に正式に開催となるが、その前に大いに飲み、食らい、楽しんでください！」

宣言を終えると、テーブルの上の大皿が料理で満たされる。

いつもの宴の料理だけでなく二校の代表選手のためにか、様々な他国の料理までテーブルいっぱい並んでいる。

一通りの料理を楽しんだリリは今日の順番だったレイブクロウの席から移動し始める。

いく先は当然、例の美少女がいるハツフルパフのテーブルだ。

例の美少女とは言えば、周りの男子生徒にちやほやされている。

だが、リリがそこへ近づいただけでその男子たちは蜘蛛の子を散らすかのように離れていった。

『こんばんは。』

リリはこの日の為に練習してきたフランス語で挨拶する。

負けじと相手の美少女は流暢な英語で挨拶を返す。

「こんばんは。」

リリは美少女の隣に座る。

『私はリリアン・リンリーです。あなたのお名前は？』

「私の名前はフラワー・デラクールよ。よろしくね、カワイイリリアン。」

二人は微笑み合う。そして示し合わせたかのように抱きしめ合った。

これには周りの女子は大いに動揺する。男子はまた一人美少女がリンリーの餌食

なつてしまったと悔やんでいる。

「どう？ 私のものにならない？」

でリリを誘惑するフラア。

それに真つ向から答えるリリ。

「恋人は間に合っているわ。あなたが私の愛人にならないかしら？」

二人は抱擁を離れても笑顔のままだ。

「次はデートしましょう。」

「ええ。望むところよ。」

二人の間でお互いに自分の魅力で相手を墮とすという勝負が始まっていた。

~~~~~

フラア・デラクールという少女は自他ともに認める美を持っていた。

祖母がヴィーラということもあって幼いころから綺麗だ、カワイイと言われ続けていた。

ヴィーラ由来の魅了もあつて男たちには可愛がられ、囲まれ続ける日々だった。

魔法学校に入学してもそれは変わらない。

フラアにはヴィーラの特長由来なのか相手がどう感じているか分かる力があつた。

そのせいで相手の好き嫌いに敏感になり、嫌われるのが嫌で、常に自分を最高である状態を保っていた。

そうして周りにチャホヤされ全肯定される日々。楽しくてしようがなかった。

だが、ある時疑問に思った。思ってしまった。

周りの男たちは自分の事を見ているのかと。

そして観察した結果、一つの結論に至った。

(彼ら……いえ、こいつらは私を見ていない。)

男たちはフラーの外見や身体、魅了という特性だけで群がっているだけに過ぎなかった。

誰も、フラー・デラクールという少女の事を見ていない。

それを確信してから、フラーは男という存在を人間と見られなくなっていた。

男が望む美貌を提供する代わりに相手も自分に貢ぐ。そんな都合のいい道具でしかない、決して恋や愛する存在では無いと判断した。

誰かと特別親しくなることも無く全ての男と等しい距離を置いて必要以上に近づかないことを徹底した。

代わりに自分に魅了されない女と親密になろうとした。

しかし壁は高い。男を魅了する自分では嫉妬という厄介なものもあって友達になる

ことさえ困難だったのだ。特に相手の感情に敏感なフラァはそれが必要以上に感じてしまっていた。

まして、恋人など夢のまた夢。

いつしかフラァは周り全ての事を軽蔑するようになっていった。

男は年を重ねるにつれ自分の事を劣情を秘めた目で見るようになっていった。

女の嫉妬も大人になるにつれて醜く陰湿になった。表面上は友人と振舞うが裏では陰口など当たり前だ。

そして周りに失望しながらも男を魅了してしまい、誰かと恋人に、愛する人を見つけたいと未だに思い続けて美を高めることを止められない、嫌われることを恐れて男も女も遠ざけないでいる自分に絶望しかけていた。

真に信じられるのは同じ境遇の妹のガブリエルだけになっていた。

そうして17歳となったフラァ・デラクルはトライウイザード・トーナメントに三大魔法学校対抗試合の代表としてホグワーツにやって来た。

自分を高めることを続けていた、今までの習慣からフラァは優秀な魔女になっていた。

馬車から降りてホグワーツの出迎えの生徒を見る。

(ハハハ……同じね。)

男は今初めて見た私の事を、何も知らない他人の事を見て口々に美しいなどといった。

女は……、なぜか嫉妬は薄いが向けられる感情に差異はない。そしてそれらに向ける自分の造り笑顔も。

「っ!!」

衝撃が走った。

その少女を見た時に、いや見つけられた時に。

自分から見ても可愛らしい金髪の小柄な少女。

目が合った。そう、目があったのだ。

(ああ……! 私が見られている!)

今までの創り笑顔もなくして熱い視線を見ている少女に送る。

(欲しい! 欲しくてたまらない。そうなのね、これが!)

フラー・デラクールは初めて真に他人を欲した。

自分を見てくれる彼女を、自分だけのものになりたい。心からそう願った。

国も、性別も、何もかも超えて相手を自分のものになりたいという強烈な想いが芽生えた。

宴の席でも常に少女を見ていた。



目が合うとしつかりと私の事を認識してくれる。そこに嫉妬も何も無い。その少女、リリアン・リンリーがやって来た。

外見上は平静を保ってアプローチしたが、内心では狂喜乱舞していた。

早速デートの約束までして気分は有頂天である。

もはや三大魔法学校対抗試合トライウィザード・トーナメントなどどうでもいい。

ここにはホグワーツには彼女リリアンと会うためだけにやって来たのだ。

## 38. 選出

デザートまで食べ終わりテーブル上の金の大皿が空になる。

二校の代表候補たちがいる、いつにもまして大勢での宴が終わった。

そのタイミングを計っていたかの様に大広間に二人の人物がやって来た。

ダンブルドアたち校長が立ち上がり二人を迎え入れる。

そして注目が集まる二人の紹介がされた。

一人は魔法省の国際魔法協力部の部長であるバーテミス・クラウチ。

もう一人は同じく魔法省の魔法ゲーム・スポーツ部のルード・バグマンである。

この二人が奮闘したことで今回、トライウィザード・トーナメント三大魔法学校対抗試合が数世紀ぶりに再開することになったようだ。

各校の校長と二人を加えた五人で審査を行うことも説明される。

「さて、それではフィールチさん箱をここに。」

持ってこられた木箱をダンブルドアが杖で叩くと中身があらわになる。

大きな荒削りの木のゴブレットであった。ただ一点普通とは違っていたのはゴブ

レットの縁からは青白い炎が舞い踊っていることだろう。

このゴブレットがどのようなものなのか真剣に、興味深そうに見る目が集まる。

トライウィザード・トーナメント

「三大魔法学校対抗試合を再開させるにあたってわし、マダム・マクシーム、カルカロフ

校長、クラウチ氏とバグマン氏で議論や検討を重ねに重ね、代表選手たちが取り組むべき課題を決めた。」

バグマンはドヤ顔で私たちの功績なんだと無言でアピールしている。

クラウチは対称的に表情を顔に出すことなくダンブルドアの説明を聞いている。

「みんなも知つての通り、試合を競い合うのは三校の代表一人ずつじゃ。課題は三つ。

選手たちは課題の一つ一つをどのように乗り越えていくかをあらゆる角度から採点され、最終的に三つの総合得点が最も高いものが栄光を勝ち取る。」

ダンブルドアは炎が燃え続けているゴブレットを掲げ、全員が見えるようにする。

「そして、代表選手を選ぶ公正なる選者……それがこの炎のゴブレットじゃー！」

栄光と名誉、そして金。それがその炎の先にあるかのように多くの者が炎を見つめていた。

「代表選手に名乗りを上げる者は、羊皮紙に名前と校名を記載して、24時間以内にこのゴブレットに入れればよい。明日、つまりハロウィーンにゴブレットが各校代表に最もふさわしい三人の名が記された羊皮紙が戻って来るであろう。」

ゴブレットは玄関ホールに置かれる。もちろん資格を有せぬものがゴブレットに近

づけぬようにわし自らが年齢線を施す。」

ダンブルドア直々の妨害に資格を有しない者が嘆いている。中にはやる気になって  
いる者もいるが。

「最後に、この試合で競おうとする者にはつきりと言っておこう。軽々しく名乗りを上げぬことじゃ。炎のゴブレットがいったん代表選手と選んだ者には、最後まで試合を戦い抜く義務が生じる。ゴブレットに名前を入れるということは、魔法契約によつて拘束されるということじゃ」

それで説明が終わり宴は解散となった。

~~~~~

「それじゃあ、行つてくるね！」

「私がリリちゃんに優勝杯を持つてくるから！」

次の日は朝から玄関ホールは資格も無い者たちも含めて多くの人が集まっていた。

男子も女子も魔法の腕に自信のある者たちは念じるように羊皮紙を炎の中へ投じていく。

それを見守る中にリリたちの一団もあつた。

「本当は女の子には止めて欲しいんだけどねえ……。」

安全対策をしつかりしたとはいえ危険な事には変わりはない。

それでも女子の中で活躍||リリにいい姿を見てもらえるといった図式が広まってしまっていた。特にリリハーレムの中で唯一参加資格があるクラウディアは不参加ということもあつて、ハーレムのメンバーには無いアドバンテージを得ることも含めてやる気に満ちていた。

あわよくば優勝してそのままリリのハーレムの一員に、などと夢を見ている女子もある。

「あら、出迎えてくれたのかしら？」

リリが心配そうに見守っていると透き通るような声が耳に入ってきた。

振り向くとフラァー・デラクールを先頭にポーバトンの一団がやって来ていた。

「おはよう。ふふ、これを入れ終わったら早速デートでもしましょうか？」

フラァーはさっさと羊皮紙を投げ込んでリリに近づいていく。

いきなり現れた女がひよいひよいと近づいてきてデートに誘うなどと、周りは許せなかった。今もリリとのデートは順番待ちで予定は数カ月先までいっばいなのである。

フラァーはそんな殺気さえ込められた視線を余裕で受け流す。

「あら、怖い怖い。なら代表選手に選ばれたらデート、ね？」

自分が選ばれないと微塵も思っていない圧倒的な自信。事実周りのポーバトン代表

もとりあえず炎のゴブレットに投じてみたがフラァーほどの自信はないようだ。

「いいわよ。」

リリはその申し出を断らなかつた。 Hogワーツにも美人は多くいる。その全てとデートやそれ以上は体験済みだ。

だが、この人とは思えぬほどの美人とのデートなどこちらからお願ひしたいほどだ。

他の女の子には悪いが後で埋め合わせすればいいなんてかなり最低な事を想いつつ目の前の美女をどうやって墮とそうかと思案を楽しんでいた。

「じゃあ、またね。」

フラァーに率いられてボーバトン代表団は去つていった。

「ちよつとリリ?」

流石にハーマイオニーからの怒りの追及が始まろうとしていた。

「だつてえくすつごい美人なんだもん!」

「ふくん……。へえ……。私とどつちが?」

「もちろんフラァーが。」

周りが動きを止めた中リリの言葉だけが続く。

「フラァーはこの Hogワーツの誰よりも美人だと思う。でもね、ハーマイオニー。私が一番愛しているのはあなた。あなたが例え、この世で一番醜くてもそれは変わらない。」

愛の前には美醜は関係ない。私は魂からあなたを欲しくなったの。それは外見や性格じゃなくて……運命だと思ったの。」

フラーの事の方が美人といった次の瞬間にはリリに一番の愛を受けられると知ってハーマイオニーは気分が一気に高揚したのを感じていた。

(分かつてはいたけど、もうダメね、私。)

自分がいかにリリを中心に物事を考えて、どれだけリリを想って、リリに想われないか改めて実感した。

そう実感してしまつたら、周りが見えていようが何だろうが抱きしめられずにはいられなかつた。

「まつたく……私もリリに弱くなつたものね。……私が一番ならもつと愛をちようだい。」

「ええ、無限の愛をあげるわ。」

その後、ダムストラングの代表たちが炎のゴブレットに羊皮紙を投じるためにやって来たが、そこにいたのは二人の少女が抱き合つて、周りが羨ましそうにしているという初めて見る光景だった。

ホグワーツではよく見る光景ではあるのだが。

その異様さとリンリーの呪いに臆したダムストラング代表たちは足早に去つてい

く。

ただ一人、ビクトール・クラムだけがそれを見て「尊い……。」と何かに覚醒していた。

~~~~~

ハロウィンパーティーが終わり、いよいよその時がやって来た。

生徒たちは各々誰が選ばれるか予想してワクワクしている。

リリは女子が選ばれなければ良いと思っている。

金の皿の上の料理がきれいさっぱり無くなると、ダンブルドアがゆっくりと立ち上がる。

それを見て大広間にいる全員が何が始まるのかを察し、ぴたりと声が消えた。

「炎のゴブレットは代表選手の選考を終えたようじゃ。さて、名前が呼ばれた者は一番前に来るがよい。隣の部屋で、最初の指示が与えられるであろう。」

ダンブルドアが杖を一振りすると、大広間の灯りが全て消え、大広間を照らすのは炎のゴブレットの光だけとなった。

生徒、教員、他校の代表、そしてゴーストにいたるまで大広間の全ての存在がゴブレットへ視線を注いでいた。

次の瞬間ゴブレットが赤く燃え上がり焦げた羊皮紙を一枚吐き出す。



その落ちてきた羊皮紙をダンブルドア先生が掴み取った。

「ダームストラングの代表は……ピクトール・クラム！」

「やったぜ！」 「流石にクラムだ！」

クラムのファンたちが声を張り上げた。

大広間中が拍手の嵐、歓声の渦に包まれる。

クラムはスリザリンのテーブルから立ち上がるとダンブルドアの方に歩いていき、隣の部屋へと入っていった。

歓声が止んだ数秒後に、ゴブレットはまた赤く燃え上がり羊皮紙を吐き出す。

「ポーバトン代表は……フラー・デラクール！」

ポーバトンから選ばれたのは宣言通りフラーであった。

フラーは自信満々にリリの方を見ながらゆっくりと前に進んでいった。

わざとリリの横を通ってデートね、なんて言ってくる。女子からはブーイングこそないが拍手もなし、クラムと比べて寂しいものになっているが当人はまるで気にしていない。

リリは惜しめない拍手を送る。

フラーが隣の部屋に姿を消し、三度ゴブレットが赤く燃え上がる。

「ホグワーツ代表は……セドリック・デイゴリー！」

セドリツクが立ち上がって前に進む。

ホグワーツ生はあまり脚光を浴びないハツフルパフからの選出に驚いているが、それでも拍手を力の限り送る。特に男子はリリアン・リンリーがいるから辛い立場になることも多いのでセドリツクには是非とも活躍して欲しいという願いも込められている。

立候補した女子は残念そうにしているが、ある意味リリの希望を叶えたのだからとポジティブに考えを切り替えた。リリは女の子が選ばれなくてホツとしながらも近くにいた立候補した女の子を慰めている。

「結構、結構！ さて、これで三校の代表選手が決まった。選ばれなかった者も含め、全員が代表選手にあらん限りの応援をしてくれることを信じておる。代表選手へ真摯な声援を送ることで、君らは真の意味で彼らに貢献でき……。」

ダンブルドアの言葉に待ったをかけるように、三校全ての代表選手を選び出し、役目を終えたはずの炎のゴブレットが赤く燃え盛った。

その予想外の光景に、生徒だけでなく教師、クラウチやバグマン、ダンブルドアさえ普段と変わって啞然としている。

リリも何が起きたのかは分からないが、とりあえず女の子に危険が及ばなければどうこうすることも無い。

赤く燃え上がった炎から新たな羊皮紙が出現する。

「……。」

ダンブルドアはゴブレットから吐き出された羊皮紙を無言で手に取り、それをじつと見つめている。たった数秒という短い時間だが、大広間の全員がそれを見ている。

緊張に包まれる中、ダンブルドアの口から名前が発せられた。

「……ハリー・ポッター。」

## 39. 悲劇な四人目

「ハリー・ポッター……。」

ダンブルドアの口からあり得ない名前が告げられる。

存在しないはずの四人目。しかも未成年だ。おまけに魔法界では知らぬものはいないであろうハリー・ポッターときた。これでは騒ぎにならないはずがない。

大広間のざわめきは今までの比ではなく、生徒教師例外なく皆一様にハリー・ポッターに視線を注いでいる。

「ハリー・ポッター！ 前へ！」

ダンブルドアが再び名を呼び我に返ったハリーは他の三人が入っていった部屋に急ぐ。

それに続いて各校長やバーテミス・クラウチ、ルード・バグマン、教師たちが入っていく。

その後に残された生徒たちの憶測や妄想を止める者など誰もいない。

残された生徒の内スリザリン生はグリフィンボールからあり得ない代表が選ばれたのが面白くないのかハリーの批判を大声で叫ぶ。

普段はグリフィンドール寄りの立場が多いハッフルパフ生らは自分たちの寮から選ばれた代表のセドリックがいるにも関わらず選ばれたハリーの事が認められないのかスリザリンに同調する。いやむしろスリザリンよりも強く非難している。

グリフィンドール生も事態が事態だけに強く反論することもできず、困惑することしかできない。

唯一、レイブンクロー生だけは未成年がどうやってダンブルドアの年齢線を突破できたのかという方向で考えを巡らせており寮間の諍いなど気にもしていなかった。

これらはほとんど男子生徒だけでヒートアップしており、女子に関してはそもそも四人目が出ようが男だったことでそこまで重視していない。

ただ単に何かしらの事故でも起こったのか程度の認識だ。

ポーバトンとダームストラングはホグワーツが不正をしたのだと騒いでいる。

大広間は少しのきっかけで暴動でも起きてしまうかのような雰囲気だ。

そこにマクゴナガルが部屋から戻ってきた。

「ホグワーツの生徒たちは寮に戻りなさい。監督生！ 引率は任せました！ ポーバトンとダームストラングからお越しの方たちもそれぞれ馬車と帆船に戻るようにとマダム・マクシームとカルカロフ校長からの伝言です！」

リリがグリフィンドールの寮に戻っても男子の興奮は治まるはずもなく未だにあれ

これと話している。

それを傍目に立候補していた娘たちが残念そうにしていたのでリリは慰めている。

そこに話題のハリー・ポッターが戻ってきた。

急いで自室に戻ろうとしていたが、男子たちはそれを許すはずもなくあつという間に囲まれる。

「なあなあ！ どうやったんだ!？」

「すつげえな！ 四人目だぜ！」

「まあまあ、皆落ち着け。」「それではスーパードミラクルな四人目となったハリー・ポッター選手のインタビューと参りましょう！」

騒ぐ男子を纏めてウィーズリー双子がハリーを男子の前に立たせて次々に質問をする。

「どうやって名前を入れたのか？ 年齢線はどうしたのか？ 今後の意気込みは？」

優勝賞金は何に使う？ 注目のライバルは？」

それに対してハリーは何も答えなかった。ただ段々と顔が険しく歪んでいくだけだ。

何も答えぬハリーに腹を立てた誰かが言った。

「どうせダンブルドアかマクゴナガルあたりの鼻根だろ？ クイディッチの時みたいに

さ！ なにせ英雄の生き残った男の子だからな！」

「黙れ!!」

男子はおろか騒ぎに無関心だった女子たちでさえ驚きハリーに注目する。

それだけの声量と怒気が声にはあった。

「僕はやっていない、やっていない! なんて誰も信じないんだ! どうして僕がこんな目に合うんだ! なんてどうして!」

眼に涙を貯めながら、延々となんでどうしてと繰り返すハリー。

「お、おい……ハリー? 大丈夫か?」

「うるさいうるさいうるさい! 黙れ黙れ黙れ! もう嫌だああ!」

近くにいたロンが声をかける。

しかしハリーは罵倒し泣き叫んで自室に走っていつてしまった。

後には何とも言えない重苦しい空気だけが残った。

~~~~~

次の日からハリー・ポッターに対しての興味と非難の日が始まった。

しかしそれは二日と持たなかった。

一日目、ハリーは相手がスリザリンであろうと、ハッフルパフであろうと誰であろうと何かを言われるたびに暴言を吐いて回っていた。挙句の果てには監督生や、教師であ

に選ばれたフラァー・デラクールが待っていた。

「約束通りデートよ！ 次の休日の午前10時に玄関ホールで待ち合わせよ！ デートプランは任せるわ！」 ドヤ顔での宣言である。

「もちろん。楽しみにしていてね。」

周りの女子は反対したいが、リリが了承してしまつては意見することもできない。

ちなみにフラァーは朝食は別の場所で食べていた。何でも、デートまでに極力会わない方が盛り上がるんじゃないかなということらしい。

そしてデート開始の10時ピッタリにリリに声がかけられる。

しかし、その言葉はありきたりな『おはよう』や『待った？』なんてものではなかつた。

「そのの女！ お姉さまは渡さないわよ！」

「はい？」

いきなりの言葉にリリは訳も分からず声の方を向く。

そこに立っていたのはフラァーに負けず劣らずの美少女であつた。フラァーを数年幼くしたらこのような少女になると思わせる美しさだつた。

「お姉さまの事は私が世界で一番愛しているの！ なので！ 今日のデートはあなたの妄想よ！ いいかしら!? 分かつた「止めなさい！」

そこに現れるは完璧に仕上げてきたフラワー・デラクールであった。

ホグワーツにやって来た時のような魔法使いのローブではなくしつかりとおしゃれな恰好である。頭のとっぺんからつま先にいたるまで心を込めているのが解る。

「ああ！ お姉さま……。美しい。」

「ガブリエル。今日はこの子とデートだからあなたはお留守番！」

「でも！」 「約束破ったら一週間口を利かないからね。」 「はうっあっ！」

フラワーの妹というガブリエルはその場で硬直し、顔を色々淑女としてお見せできない程歪めながら葛藤してやっとなげた。

「はあ……。ごめんなさいねりり。それじゃあ、デートを楽しみましょうか。」

「妹さんはいいの？」

「良いの。ちょっと甘やかしたせいで姉というより一人の女として見られているのよねえ……。」

「ふむ……。姉妹……。そう言うのもありなのね。」

「それはともかく、エスコートお願いね？」

差し出された手をリリが取って二人はデートに出発した。

それに膝について見送るガブリエル。

そんな彼女の肩をポンと叩くものがいた。

その無念を理解したジニー・ウィーズリーがそこにはいた。

ここに姉を慕う者の同盟が締結した。そして姉たちのストーキングを開始した。

リリのデートコースはホグワーツの観光というものだった。

大広間や各教室といった普段使う場所から始まり。

各寮の談話室を巡り、クイディッツ競技場や禁じられた森のそばに湖。

秘密の部屋でバジリスクを見せたり、大きく成長したドラゴンの背にのせて空を翔けたりと最後までホグワーツという場所を堪能させた。

いつも過ごしている場所でもこうして初めて訪れる人を案内するのはとても新鮮で楽しい時間であった。

フラワーも談話室の違いに興味津々だったりバジリスクに恐る恐る触ったりドラゴンに載ってはしゃいだりといろんな顔を見せていた。

「あく楽しかった！ ドラゴンに毒蛇バジリスクの王まで見られるなんて思っても見なかったわ。とっても刺激的な一日だった。」

「楽しんでもらえて良かったわ。夕食はしもベ妖精に頼んでフラワーの故郷の料理にしてあるわ。」

夕食も楽しんでデートも終わり。

それぞれの寮と馬車に戻る。デートのスタート地点の玄関ホールでお別れだ。だが、フラーが繋いだ手を放してくれなかった。

「フラー？」

「リリアン……。今日は楽しかったわ。ええ、本当に。あなたは私の事を見てくれた。私の事を考えてデートをしつかりと計画してくれたし、デート中もずっと私を見てくれていた。ねえ、リリ。今日は私の部屋に泊まらない？」

私、あなたが欲しいわ。あなただけが欲しい。私だけを見て欲しい。私もあなただけを見るわ。ダメ？」

リリは真っ直ぐ向けられた目を見る。

「だめ。私の一番はもう決まっているの。でもあなたを見ないわけじゃない。これから仲良くしてね。」

「私だけのものにはなってくれないの……？」

「ええ。」

しばらく二人は無言で見つめ合う。

「……そう。それなら私の事だけしか見られないようにもつと高めなくちゃね。」

「それは無理だと思うわよ。」

「ふふん。私を誰だと思っているの？」

手始めにトライウイザード・トーナメント三大魔法学校対抗試合は優勝するから

！ 優勝杯をもってリリの所まで行くから待つてなさい！」

「楽しみにしてるわ。それじゃあ、またデートしましろう？ おやすみなさい。」

「おやすみなさい。今度のデートは私がエスコートするからね。」

最後にキスをして二人は戻っていった。

フラァと別れて寮に戻る。

談話室ではフラァとのデートで何かされなかったか質問攻めだ。

もちろんあつてもキスぐらいだったが。

自室に戻るとハーマイオニーが両手を広げて待つていた。

そこに飛び込んで抱きしめ合いながらベッドにダイブする。

「お帰りなさい。とりあえず上書きね。」

そのままキスをされる。

「私が一番っていうのは分かっているけど、嫉妬はしちゃうのよ。」

「ごめんなさい……。」

「いいわよ。知ってつてこうしているんだから。」

その夜は更なる上書きをされたリリであった。

40. 第一課題

フラアと親密になって、フラアの妹のガブリエルからの楽しいちよつかいもあったり、ガブリエルがジニーと親友となったりとポーバトンが来てから新たな刺激が多くて楽しい毎日である。

ダームストラング？　女の子を連れてこなかった無能など知らないとはリリの言である。

リリ達一般生徒が授業をしたり、デートをしたりと楽しんでいる間にも
トライウイザード・トゥーナメント
三大魔法学校対抗試合は着々と進んでいるらしい。

フラアから聞いた話ではついこの間には杖調べという儀式もあったそうだ。内容はその名前のまんま代表選手の杖を調べるといったものだったらしい。

フラアは祖母のヴィーラの髪を芯材に使っていると自慢していたが、リンリー家も代々一族の髪を芯材に使っていると話すと共通点ができてうれしそうにしていた。

ちなみにその時リータ・スキーターなる記者が色々取材をしていたらしく、リリについても尋ねられたのでその内取材に来るかもしれないと注意された。

「何か色々としつこくて大変だったわ。特にハリー・ポッターは可哀そうになるぐらい

色々と聞かれていたわねえ……。生徒の声も聞きたいとか言っていたからそのうちリりの前にも来るかもしれないから注意しなさいよね。」

その注意はすぐに役立つことになった。

昼食を終えたりりたちの前を見たことない女性が待ち構えていたのだ。

「あなたがリリアン・リンリーさんですか？ あたしはリータ・スキーターというものざんす。さつそくでわるいのだけど取材いいかしら？」

いきなりの申し出に周りの女子たちはいい顔をしなかったが、これも経験ということでもりりはOKを出した。もちろんスキーターが女性ということだからだろう。

次の授業が始まるまでの時間を考えて10分程度の短い時間だがインタビューを受けることになった。場所はスキーターが準備していたのか近くの空き教室で行われた。

「時間も少ないことですし早速聞いていきましよう！ 世にいる女性は今代のリンリーについて色々知っておきたいのは確実！ ならばその美貌や素晴らしさを広めるのはあたくしの使命というもの！ それでは！」

質問はありきたりなもの、学校生活、恋人、これからについてといったものだった。

それをスキーターは必至に文字に起こし、文章を紡いでいく。

リリは簡単に質問に答え、ちよつと話すだけなのにあつという間に文章がすらすらと出来ていく様は仕事人としての実力が確かにあると感ぜられた。

「ふう……。こんなものかしらね。清書ができたら一番にあなたに送るから感想をお願いします。」

「ええ、新鮮で楽しかったわ。それにプロの仕事っぷりも見せてもらったし良かったわ。」

「こちらこそありがとうございます。リンリーの魅力が読者にす腰でも伝われば万歳ざんす。それではまたの機会に！ できれば写真撮影なども是非！」

そう言う足早に部屋を出て行ってしまった。

フラァーが言うほど警戒するような記者ではなく、真摯に真実を伝えたい人だと感じていた。

~~~~~

リータ・スキーター。

真実を暴く記者。

そんな風に言われている彼女も昔はでっち上げの嘘100%も珍しくない酷い記事を書く記者として有名だった。

それが変わったきっかけはとある女性との出会いであつたがそれは割愛する。

リータ・スキーターはあらゆるコネを使って今回のトライウィザード・トーナメント三大魔法学校対抗試合の記事を書



く権利を得た。人気記者というのも理由の一つではあるが、何はともあれスキーターはホグワーツに来る権利を得た。

もちろんトライウイザード・トリーナメント三大魔法学校対抗試合について正しい情報を伝え、読者の心に潤いと刺激を届けるのも重要だが、リータの真の目的はたった一人の女生徒にインタビューすることだった。

(やっぱり、リンリー家はいいざんす……。この記事でリンリーについて世間がもつと知るきっかけになれば良いざんすが……。)

前もつてその特性を体験していなければ取材どころではなかつただろう。

だが、自分の使命、すなわちリンリーの素晴らしさを世に広めることを心の支えにして耐えた。

後は自分の腕次第だ。

「さあ、やるざんすよー!」

その後発行された、『トライウイザード・トリーナメント三大魔法学校対抗試合の光と闇』、『ホグワーツの生きる至宝』という二つの記事は絶大な支持を得た。

トライウイザード・トリーナメント『三大魔法学校対抗試合の光と闇』は開催するまでに至つた魔法省や各校の努力を余すことなく伝えると同時にハリー・ポッターが代表として選ばれることを中心とした問題を扱っている。ハリー・ポッターのインタビューも本人の苦悩が実際に体験したかのよ

うに感じるほどの文章力で、今までただの生き残った男の子としか見ていなかった世間の目を覚まさせることになった。

もう一方の『ホグワーツの生きる至宝』、すなわちリリアン・リンリーのインタビューと写真集だが、表紙がリリーの笑顔ということもあり、当たり前のように女魔法使いが殺到して売り切れ続出、即重版となった。

これによってリータ・スキーターの名は更に広まることになるが、本人的にはリンリーの素晴らしさを広めたことだけで大満足の模様。

~~~~~

そんなこんなでとうとう第一課題の日がやって来た。

現在時刻は午後1時30分。あと30分もすれば開始時刻だ。

観客席は既に満員。各校の生徒だけでなく、多くの観客たちが試合開始を今か今かと楽しみにしている。

そんな中でリリとハーレムの少女たちは特別な観客席で試合開始を待っていた。

「どうして私たちだけこんな場所に？ これじゃあ、皆と楽しめないじゃないですか。」

ここに連れてきたダンブルドアに避難の視線と強めの呪いを送る。

それから目を背けながらダンブルドアは言い訳をする。

「すまぬ。第一課題の内容から君の呪いが悪影響を及ぼす可能性があるからなのじゃ。本当に済まぬ……。じゃからこれ以上それをやめてくれんかのお……。」

ダンブルドアは説明の続きをマクゴナガルに丸投げして距離を取ってしまった。

詳しく聞くと第一課題の内容はある生物と代表が争う内容になっていくらしく、リンリーの呪いがその生物に影響を与えることで課題が乱れることを恐れたらしい。

雄であれば逃げ、雌であれば惹かれて観客席に向かつてしまうなどのトラブルが予想される。

この特別に設置された観客席は呪いの類を広めないようにするためのものらしい。

それでもリンリーの呪いを押さえつけるには常時熟練の魔法使いが魔力を込め続けなければならず、その範囲も非常に小さい。なので限られたハーレムメンバーぐらいしか呼ぶことができなかったらしい。

「分かりました。さてと、気分を切り替えて楽しみましょう。」

リリを中心にハーレムが集まる。

クラウディアをクッションに右横をハーマイオニー。左にダフネ、両足元にパチル姉妹。

ジニーは小さくなってリリに抱きかかえられている。マダム・マクシームに人形のように抱きしめられたらどんなかなあ、というリリの言葉をヒントに変身術を応用し

そして最後はこいつです！ ハンガリー・ホーンテール種！

以上4体！ いずれも一筋縄ではいかなないドラゴン達！

ドラゴンの詳細はお手元の魔法省スポーツ部がドラゴンキーパーと共同で作成した特性パンフレットに載っているのは是非読んでください！』

トライウィザード・トーナメント
三大魔法学校対抗試合の観客にはこの催しの歴史や楽しむためのポイントがまとめられたパンフレットが配布されていた。

ルード・バグマンの思いつきで作ったものだったが、観客には高評価だ。

『さて、お次はルール説明に参りましょう！

ドラゴンに挑む勇者達は強大な彼らが守る金の卵を奪わねばなりません！

時間や方法に制限はありません！ 持ちうる知恵と力を発揮し、運も味方につけ！

卵さえ手にすればその時点で試合が終了だ！』

『一番手はこの人！ ホグワーツ、ハツフルパフ寮から選ばれし者！ クイディッチチームのキャプテンでもあります！ セドリック……デイゴリイイイイ!!』

ハツフルパフ生徒から爆発のような拍手と声援が送られる。

セドリックの相手はスウェーデン・シヨート・スナウト種だ。

まずセドリックが行ったのは周囲の岩を魔法で犬に変え囿に使う。

ドラゴンの注意がそちらに向くが、なかなか動かさず隙を見せなかった。

試行錯誤の末、犬を一斉に卵に向けて走り出させてドラゴンが怒り動いた僅かな隙に卵を奪う作戦を取った。

最初こそ失敗したが次には成功して見事卵はセドリツクの手の中である。

『セドリツク選手！ 卵を取りました！ 一番手から手に汗握る戦い！ 見事です！
それでは得点です！』

マダム・マクシーム——8点

イゴール・カルカロフ——6点

アルバス・ダンブルドア——8点

ルード・バグマン——8点

バーテミウス・クラウチ——8点

合計——38点

セドリツク・デイゴリーの試合はリリにとっては男の試合なのでそこまで注目してはなかったが、あそこまで見事に立ち回るとそれはそれで見ごたえがあった。

それに女子からの話ではかなりいい人でリリほどではないが女子からの人気はそこそこらしい。

『さて！ 次に参りましょう！ お次はポーバトン代表にして紅一点！ フラー・デラクール選手の入場だ！』

今度はボーバトン生からの声援が上がる。ホグワーツやダームストラングの男子生徒も力の限り声援を飛ばす。

フラーはそれを見向きもせず目の前のドラゴンだけを見つめていた。

今までであれば笑顔を振りまいて周りの子どもを魅了していただろうが、今フラーが意識しているのはリリアン・リンリーただ一人だ。

「フラー！ 頑張れー!!」

その唯一の想いを届ける人からの声援。それが鼓膜を刺激した瞬間、フラーの全身から覇気が迸る。

声の方を向き笑顔を見せて、天高く人差し指を伸ばした。

まるで自分が一番を取るといふ宣言のように！

『おおっと！ フラー選手トップを取るといふ宣言か!? 相手をするのはウエールズ・グリーン普通種！ 彼女がどう魅せてくれるのか大いに期待できます！ それでは

……開始いい!』

フラーはゆったりと見せつけるようにドラゴンに向かって歩を進める。

魔法の射程に入るかという瞬間、ドラゴンが炎を吐いた。

「イン^防。パー^火ビアス^せよ^よ！」

防火の呪文を唱えながらも踊るように華麗に炎を避ける。

その様子に会場は魅了される。

一方のドラゴンはそれに怒り更なる炎を連発する。

これを躲し続けつつ隙を見て呪いをドラゴンの弱点たる目に命中させる。

当てたのは魅惑の呪文。フラーに流れるヴィーラの血によつて常人より強力な魅惑がドラゴンを犯す。

そして眠つたドラゴンに対して最後まで油断することなく無事に金の卵を手にした。

『やった！ やりました！ フラー選手会場とドラゴンを魅了しながらの勝利です！』

これは高得点が期待できそうだぞ！』

マダム・マクシーム——10点

イゴール・カルカロフ——7点

アルバス・ダンブルドア——9点

ルード・バグマン——9点。

バーテミウス・クラウチ——8点

合計——43点

セドリックを大きく上回る得点だが、会場は納得のものだった。むしろカルカロフの7点が低いぐらいだと文句が出ているぐらいだ。

これにはリリも大喜びでフラーの名を叫んでいる。

『そして次はこの人の出番だ！ 世界のスーパーシーカー！ ビクトーロール！ クラアアム！』

前二人の比ではない歓声が爆発する。流石にスーパースターと言うべきであろうか。それに対するはチャイニーズ・ファイアボール種。

試合が開始すると同時にクラムは走り出しドラゴンへ呪文を放つ。

ドラゴンの爪も炎も持ち前の身体能力と反射神経で躲しながら最もドラゴンに有効な結膜炎の呪いを目に見事命中させる。

ここまでは完璧だった。

だが、不運なことに暴れたドラゴンが目的の金の卵以外をを潰してしまったのだ。無事に金の卵を手に入れたが苦い顔をしている。

『これは運が無かったとしか言えない！ ですがそれを含めての三大魔法学校対抗試合です！ さあ、得点は!？』

マダム・マクシーム——7点

イゴール・カルカロフ——10点

アルバス・ダブルドア——8点

ルード・バグマン——8点

トライウィザード・トリナメント

バーテミウス・クラウチ——7点

合計40点

あからさまな鼻唄があつても合計40点。

そしてリリにとつてはフラーより下なら何も問題はない。

ついでに言えば次のイレギュラーも興味がない。

『それでは最後はこの人！ 本大会最大のイレギュラーにして皆様ご存知生き残った男子の子！ ハリイイイ！ ポッター！』

入場したハリイに対して拍手が起ころうが今までで一番小さい。

どこか同情した視線させおくれる有様だ。

そんなハリイは殺意のこもった視線でハンガリー・ホーンテール種を睨んでいる。

『試合開始いいい！』

「アクシオ！ ファイアボルト！」

ハリイが選択したのは自身が最も得意とする箒での戦いだつた。

ドラゴンの周りを縦横無尽に飛び回りドラゴンを苛立たせ自分に付いてくるように仕向けたのだ。そうして戦いは空へ。

炎も躲しながらハリイは驚いたことにクラムと同じく結膜炎の呪いを目に命中させたのだ。

クラムと違って空中で暴れたため卵が割れる心配もなく猛スピードで金の卵を取り最短での試合終了となった。

『うおおおお！ これは凄い！ 箒の技術も魔法の腕もとても未成年とは思えない！なんと最短でのクリアです！ さあ得点は!?』

マダム・マクシーム——8点

イゴール・カルカロフ——5点

アルバス・ダンブルドア——10点

ルード・バグマン——10点

クラウチ——9点

合計42点

入場と変わり会場が揺れんばかりの歓声と拍手に包まれる。

だがリリはそんな会場を後にしていた。試合が全部終わったということは代表選手に会っても何の問題もないということだ。

フラリーに対して労いの言葉を伝えるためにその場をさっさと後にしていたのだ。

41. クリスマスダンスパーティー

第一課題が終わりリリは選手たちがいる控室の前でフラールが出てくるのを待っていた。

中では第二課題の説明でもされているのなかなか出て来てくれない。

しばらく待つてようやく選手たちが出てきた。

初めにハリー・ポッターが疲れた顔で、その次にセドリックが同様に疲れた顔をしてこそはいるが満足気な顔でもあった。その次はクラムだが前二人と違って体力に差があるのか疲れは見せていない。

ホグワーツの二人はリリを認識すると足早に去っていったが、クラムは男にしては変であった。何かに期待したかのような顔で少し離れたところでリリの方を見ているのだ。

そんなクラムは既に意識の外にあるので気が付いていないリリは最後の一人であるフラールが出てくるのを待つ。

「あら？　待つてくれたの？」

「ええ！　一位おめでとう！　すごかったわ！　踊るように炎を避けるなんて本当に妖

授業の合間にパーバティとキス。

昼食でクラウディアと食べさせ合い。

図書室でパドマに膝枕される。

夕食はジニーが猫になる。

休日は誰かとデート。

いつもの通りのリンリーがいるホグワーツである。

しいて言えば女の子の中にフラウがいて、遠巻きにクラムの姿がよく見かけることぐらいであろう。

そんなホグワーツに激震が走った。

『クリスマスダンスパーティー開催のお知らせ』

このような見出しの張り出しが各寮談話室や大広間などの掲示板に張り出されていたのだ。

伝統ではこのダンスパーティーは男女のペア、代表選手が必ず最初に踊る、などの決めごとがあった。

それでもリンリーという存在がいる以上は男女ペアで限定したところでほぼ全ての女子がリリの元に殺到するのは目に見えている。

それなのでダンスパーティーは異性、同性問わず、どこるかペアの入れ替えさえ自由

というルールと言つていいのかわからないルールが取り決められた。

当然のように女子たちは自分がリリをリードする、あるいはリードされている光景を思い浮かべて脳内麻薬がドバドバである。

ちよつとイキすぎている者はダンス中のちよつとしたアレなハプニングやその後に起きるもはや想像ではなく妄想をして鼻血を垂らしている。

「で？ リリはどうするの？」

周りからのいつも以上の熱視線を浴びながらも平然としたリリにハーマイオニーは尋ねる。

答えは分かり切つてはいるが一応正妻として聞かざるを得ないのだ。

「もちろん女の子全員……いいえ訂正。ホグワーツにいる女性全員と踊りたいわね。」

ハーマイオニーやハーレムは当然として。

ホグワーツの生徒、ボーバトンの生徒、そしてマダム・マクシームまで含めた全員と踊るのが当日の目標である。

だが、リリは一人しかない。対してホグワーツにいる女性は200人を超えている。

一人当たり一分としてもダンスパーティーは終了してしまうだろう。

つまり、選ばれた者しかリリとは踊ることができないのである。

リリも頭ではそれを理解しているが、本能として全員と踊りたいと願っている。「ふふん。リリは代表選手、つまり選ばれた私とだけ踊ればいいわ!」

そこに現れたのはいつも通りに自信満々のフラワーであった。

周りもすつかり慣れてしまったのか「はいはい」といった感じでスルーをする。

とは言えフラワーの言う選ばれた者だけがリリと踊れるというのは当然な流れだ。

ということとで正妻たるハーマイオニーが全員を纏めるため立ち上がった。

「ソノーラス^響! はい! 女子は全員注目! いいかしら? リリと踊れる娘を選別する必要があるわ。そこで! 各寮から最もダンスが上手い人を代表として選びましょう!」

これには大広間も大盛り上がりである。男子は逆に女子と踊る機会が無いと絶望だ。食事も切り上げて早速ダンスの練習をするために走り出す娘も出始める。

こうは言ってもリリに選ばれたハーマイオニーやハーレムは必然としてリリと踊れると皆が確信していた。

「ふふふん! 私はボーバトンの代表だからそれだけで決定ね! ところでリリ? あなたダンスの経験は?」

「あ……。」

頭の中では既にハーマイオニーや他の女の子と華麗に踊っている自分を妄想してい

「だが、フラーの一言で現実に引き戻される。

リリには踊った経験など皆無であったのだ。

「ハーミー！ どうしよう!？」

「はいはい、落ち着いて。とは言え私も経験がないのよね。皆はどう?」

「私たちはないわね。」 「一般家庭だしね。」

「私も経験ないわ。」

「すいませんお姉さま!」

「一応はあるわ。」

唯一の経験者のダフネに皆が期待の目を向ける。

「一応貴族の家系だったから何回かは習ったっていう程度よ。それに他の聖28一族に上手い人がいるんじゃないかしら。」

その日からリリたちは授業終わりにダフネの指導でダンスの練習に取り組みようになった。

その他の生徒もそれぞれが必死に練習している。

それでも経験者と未経験者では雲泥の差であり日がつにつれダンス代表は絞られていった。

~~~~~



ドラコ・マルフォイは談話室で静かに本を読んでいた。

本は良い。一人で静かに過ごすには最適だ。

こうしていれば余計な干渉はないのだ。

ドラコが少女に成つてから丸二年が経過していた。家族や友人との関係やこの体にも一応は慣れたが、それでもたまに一人で静かにしたい時がある。

「ドゥラコ！ ダンス教えて！」

そんな静かな時間は台無しにされる。よりによつてこんなことになつた原因によつてである。

「リンリー！ いったい何なのよ……何なんだ！」

本を閉じ声の主、リリアン・リンリーに向き直る。とつさに女言葉が出てしまった気がするが気のせいだ。

「ダフネからドラコがダンスが上手いつて聞いたから。教えて？」

隠すことなく溜息を吐き出す。スリザリンでも女子たちがダンスの猛特訓をしているのは知っていたし、パンジーやミリセントからの頼みもあったが自分には関係ないと断っていた。

しかし、この少女の場合そう簡単にはいかないだろう。

断れば何をされるか分からないし、受けても自分の中の何かが失われる気しかな



その効果はいつも以上に女の視線を釘づけにしている。

周りにいるハーマイオニーやハーレムもそれと相乗するように仕立てられた最高級のダンスローブを着ている。

大広間は豪華に飾り付けられ中央にダンスホール、そしてその周りには望んだ料理が出てくる金の皿が乗ったテーブルがある。

「綺麗ね。それでこそリリよ。」

「フラーもいつも以上に輝いているわ。」

伝統では三大魔法学校対抗試合の代表がまず踊ることになっている。

いるのだが、男三人は結局パートナーを見つけないことは出来ずフラーだけが全員の前で踊りを披露することになった。もちろんパートナーはリリである。

年上であるフラーがリリの手を引き中央に進む。

音楽が流れ二人が踊り出す。

ヴィーラの血を引く人外の美貌を持つフラーと魅了という名の呪いを振りまくリリ。

その二人が踊ることで相乗効果が発揮され会場の全員が男女問わず眼を離すことができなくなっていた。

そしてダンスをしている二人は目の前の女しか見えていない。

「ふふ。いっぱい練習したみたいね。もっと上げられるわよ。ついて来られるっ。」

「ちよつときついわ。でも、もう少しこうしていたい。」

「私はずつともいいのに。」

二人が踊り終わるとハーレムや寮から選ばれた女の事代わる代わる踊るリリ。

一周した時には体力が限界に近く待っていたハーマイオニーの膝で充電することになる。

リリがダウンしている間は女の子たちが楽しそうに踊り、好きに食べて飲みパーティーは盛り上がる。

男子たちは踊ることはせずひたすら食事を楽しむことに専念することになっているようだ。

というか先生たちに許可を取って各寮に金の皿を持って帰ってそっちで男だけのバカ騒ぎをするらしい。

「お疲れ様リリ。はい甘いスイーツよ。あくん。」

「あ。ん、美味しい。」

ハーマイオニーの膝の上で体力を回復させながらごろごろする。いい香りがする。

周りを見るとちらちらとまだリリと踊りたそうにしている。

「よっし！ 嫁パワーも充填できたし頑張つて来るわ！」

リンリー家の者として女の子が求めるのならば断わる理由など無いのだ！

## 4 2. 第二課題

クリスマスダンスパーティーの後は休暇になる。

ポーバトンとダムストラングの代表たちは一時的に戻ることになるそうだ。

その際にリリはフラアから一緒に来ないかと熱烈に誘われたが流石に家族と過ごしたいと言って断った。むしろ逆にフラアの方がこつちに来ないかと誘ったのだが、ハーレムメンバーがハーレムの一員にならないのならダメと言ひ、フラアもできるなら二人つきりが良いと言うので残念ながら実現しなかった。

休暇はリンリーの屋敷でいつもの様にハーレムやメイドたちと甘く蕩けるような時間を楽しんだ。

トライウィザード・トーナメント  
三大魔法学校対抗試合やフラアのことなど話題は今年も多くあったが、ロザリンドはフラアについて興味を示していた。

「いやあくヴィーラか。あいつらプライドが高くてなかなか手強いんだよな。リリも頑張れよ。」

そんな事を言うロザリンドはレイラに叩かれた。

そして休暇が終わり年も明けていつもの日常が再開する。

ボーバトンとダームストラングも休暇終了と同時に再びの来訪だ。

今回はホグワーツ生全員での出迎えを行っておらず、各自が自由である。

リリはボーバトンの方だけを出迎えることにした。当然である。

そして相変わらずサイズ感が狂いそうになる天馬に引かれた馬車が到着する。

扉が開かれて飛び出してきたのは銀髪をなびかせながら疾走するフラァ・デラクール

であった。

「リリ！ 久しぶり会いたかったわ。」

「はあい、フラァ。調子はどう？」

「リリを見た瞬間から絶好調よ。」

実際馬車から飛び降りたフラァは一直線にリリへと走って来ていた。

これで不調であるということなどできない。

二校の再来訪ということで今日はちよつとしたパーティーが催されることになった。

とはいってもちよつと豪華な食事になる程度でハロウィンやクリスマス様にはな

らない。

それでも娯楽に飢えている子供にとってはちよつとしたイベントでも盛り上がるもの。

それを教師たちも理解しているのか少しぐらいは羽目を外すのを大目に見ていた。



リリもその空気を楽しみながらハーマイオニーとパーバティを両隣りに待らせ食事に舌つづみを打っていた。そこに近づくのはもちろんフラァー・デラクール。

ホグワーツでの暗黙の了解になっていくハーマイオニー、ハーレム、その他の女子という優先度などお構いなしにリリとの食事をするために来たのだ。

もちろん両隣りはがっちりガードされているため真ん前に座ろうとするがそこにいるのはジニー・ウィーズリーである。

「ちよつと退いてくれないかしら?」

「嫌です! ここは私の席です! 変わりたかつたらお姉さまに選ばれてからにしない!」

「まあ、怖い。いいわ、今日はあなたの隣で我慢してあげる。でも油断していると私がお姉さまに選ばれるどころか逆に私に魅了されちゃうかもね?」

「ふふん! そろそろお姉さまに陥落させられそうになっているのに強気ですね。」  
「なつ何言ってるのかしら? 逆よ逆!」

「それも違います! フラァーお姉さまは私が魅了するんです!」

更に加わったフラァーの妹ガブリエルの存在で一気にリリの周りが騒がしくなる。

何だかんだとジニーもフラァーもそしてガブリエルも本当に嫌い合っているわけではないので決して険悪な雰囲気になるわけではない。

普段はリリのハーレムは全員がお互いを尊重して穏やかな空気であるが、たまにはこんな刺激的なものかもしれないとリリは思っている。

賑やかな雰囲気のままパーティーは終わりに近づいていく。

ふとりりはフラーに気になったことを聞いてみた。

「そう言えば対抗試合の第二課題ってどんなものなの?」

「あ、それ私も気になるわ。」「私も。」 学術的な好奇心が旺盛なハーマイオニーとパドマがそれに便乗して聞いてくる。

「知りたい? なら今日は一緒にお風呂に行きましょうか。」

「へ?」

「はあああ!?! どういうこと!?! まさかお姉さまとあんなことやこんなことを!?!」

「だめですだめです! フラーお姉さまの裸体はガブリエルだけのものですううう!」

騒ぐ妹コンビをなだめながらフラーから詳細を聞くがはぐらされてしまった。

流石に一对一では何かあるかもしれないということでハーレム全員(+ガブリエル)でフラーと裸の付き合いをすることになった。

ちなみにこの会話が聞こえていた某クイティッチワールドカップ MVP は実に良い笑顔で鼻血を出していた。

~~~~~

くくくくくく

パーティーも終わりリリりたちはホグワーツの監督生やクイディッチキャプテンだけが使用できる大浴場に来ていた。

普段はあまり気にしていないがクラウディアがハツフルパフの監督生であるのでここを自由に使うことができるのだ。

今脱衣所には九人の少女が裸を晒している。

同性ということもあるし、裸を見られるということを通り過ぎて色々とやっているがやはり若干の羞恥はある。ただ二人、リリとフラアだけは堂々と恥ずかしげもなく見せつけるようにして裸体を晒している。

「さあて……リリ？ その綺麗な金髪を私が隅々まで手入れしてあげるわ。ふふふ……。」

ジニーやガブリエルが色々とやってきそうだが鼻血と血涙を流しながらぐつと耐えている。

リリの髪や体を誰が洗うのか、またリリに誰が洗ってもらうのか。

それを決めたのは運。すなわちじゃんけんであった。

結果はこうだ。

髪はフラアが、体はダフネが、そしてリリによって洗われるのはクラウディアだ。

まずはフラーが髪を洗ってくれる。

丁寧で、優しく、それでいて自分もリリの極上の髪の質感を楽しむ。

その黄金の髪はまるでフェリックス・フェリスを微細に編み込んだ糸のようだ。触れているだけで下腹部に熱が帯びる。

「はあ……。綺麗ね。」

つい言葉が口から出てしまった。

リリは聞こえていなかったのか反応はない。

自分は無意識にそんな言葉が出てしまうほど目の前の少女に入れ込んでいると認識してしまっただが、それでもまだこの少女の気持ちを全部自分に向けさせることは諦めない。

とりあえずはサービスでもしてあげよう。

「仕上げよ。」

最後に泡を流してあげると髪に想いを込めて口づけする。

自分のありつただけの想いでリリの心が自分に向くことを祈って。

次はダフネによる体の洗いだ。

「えっと……。ダフネ。んっこれじゃあ……。はあ、我慢できなくなっちゃおうよ……。」

リリとダフネは体をこれ以上なく密着させていた。

ダフネはスポンジやタオルではなく魔法で体中を泡だらけにしてその身を使つてリリを清めていた。

リリの後ろから手で体中を弄り、足を絡め、胸を含めた体全体でリリを抱くように洗う。

「リリ……気持ちいい……？ 私は気持ちいいわよ。ほら……もつと楽にして？」

いつになく積極的になしかも二人きり出ない空間でダフネがこんなことをするのは非常に珍しい。

だが、触れられるが体を洗われるだけでそれ以上はされずリリとしてはお預けを喰らったも同然だ。

最後に泡とそれ以外の液を洗い流された時に、ダフネがこつそりリリに耳打ちした。

「今日は私の所に来てね……。」

浴場の高温だけの理由でなく体が火照てしまうリリであった。

なんだか体力を使つたりリリはそれでもハーレムの主として女の子を疎かにすることなどできるわけがないのでクラウディアの事を全力で磨いた。

先ほどの弄ばれた鬱憤もあったので必要以上にその豊満な胸を触りながら洗った気

がするが気のせいだ。

「リリちゃん、今日は乱暴ね。でも……そんなリリちゃんも好きよ。」

そんな事を言われてしまつてはますます熱が入つてしまう。

時折クラウディアの嬌声が浴場に響くがハーレムたちは気にせず、フラーが羨ましそうにし、ガブリエルだけは流石にあわあわと赤くなつていた。

~~~~~

色々あつたが一通り洗い終えた全員は湯船に浸かっている。

フラーの手には第一課題で手に入れていた黄金の卵が持たれている。

その美しさと普通ではありえない黄金の卵の組み合わせは一つの芸術品の様だった。

「金の卵……第一課題の時のよね。何かが生まれるなんて安直なものじゃないだろうし

……。何かしらね。」

「魔法具かしら？ 何かが封じてあるとか。でもお風呂つていうのが解らないわ。」

ハーマイオニーとパドマが興味津々で卵を見ている。

「ま、とりあえずこれを聞いてもらつてからかしらね。」

フラーが金の卵の蝶番を開ける。

途端にキーキーと不快な騒音が浴場に鳴り響く。

分かつていたフラァがすぐに閉じたのでほんの数秒だが、それでも耳が痛くなつてしまふ。

「じゃあ次はお風呂の中で聞いてみて。」

全員がお風呂に潜つて先ほどと同じようにすると騒音が全く違つて理解できる音になつていた。

探しにおいで 声を頼りに

地上じゃ歌は 歌えない

探しながらも 考えよう

われらが捕らえし 大切なもの

探す時間は 1時間

取り返すべし 大切なもの

1時間のその後は——もはや望みはありえない

遅すぎたなら そのものは もはや 二度とは戻らない

「ぷはっ。これが次の課題の内容なの？」

「そ。調べられたこの騒音つて水中人の言葉らしいのよ。多分次の課題は大切なものを水中から取り戻すんでしようね。それも一時間で。ま、もう用意はしているからあとはゆつたり心を落ち着かせて臨むだけよ。」

その後はもう用済みになった金の卵を調べるハーマイオニーとパドマ。ジニーとガブリエルは何か話し合っている。

パチル姉妹はゆつたりとくつろぎ、ダフネは今頃恥ずかしくなってきたのか顔がのぼせた以上に真っ赤だ。

クラウディアは胸に当たるリリの頭を幸せそうに撫でており、フラァが自分の胸と比較して負けないと呟いていた。

~~~~~

第二課題の前日に迫った変身術の授業の終わりにリリはマクゴナガルに呼び出された。

リリだけでなくハーマイオニーとパーバティも一緒だ。

心当たりはないがとりあえずマクゴナガルについていくとそこにはハーレムメンバーが全員揃っていた。

「ミス・リンリーとあなた方に来てもらったのは^{トライクイザード・トーナメント}三大魔法学校対抗試合の第二課題について話があったからです。一から説明しましょう。」

マクゴナガルから聞いた第二課題の内容はフラァの金の卵の解説と同じだった。

そしてフラァの大切なものとしてリリが選ばれたということらしい。

「先生！ それじゃありりが湖に沈められるってことですか!？」

「お姉さまにそんなことさせられません！ ましてあの人の大切な人なんて！」

ハーマイオニーとジニーが声を荒げる。他のメンバーも声こそ出していないが同じ思いでマクゴナガルを睨んでいた。

「話は最後まで聞きなさい。いいですか？ もし最初に許可なくミス・リンリーを人質に使っていたらあなた達は暴走したでしょう。なのでミス・リンリーだけでなくあなた達を含めて許可を取るためにこうして集まってもらったのです。さて、ミス・リンリー。どうしますか？」

「先生、安全ですか？ フラーも含めてです。」

「もちろんです。私たちが責任をもって選手と人質の安全を約束しましょう。」

ただ口から言っただけでは全員が納得するわけではないので第二課題のより詳細な内容や人質に施される魔法について確かめる。

そして、最終的にはリリの意志に委ねられた。その全てをよく考えてリリは結論を出した。

「では……やります。」

囚われの姫が選ばれた存在に助け出されるなど物語の様な経験をしてみたかったことと、マクゴナガルの真剣な目を信じたのだ。

ハーレムメンバーもリリに説得されては渋々ながらも納得するしかない。

もしもフラーが失敗したら即座に自分たちが助けに行くことを決め、全員が泡頭の呪文をたつた一日でマスターしたという苦労して泡頭呪文を習得した代表選手が可哀そうなことになってしまった。

~~~~~

とうとう第二課題の日がやってきた。

代表選手たちは湖のそばの待機場所に集合している。

観客たちも特製の観客席に詰めかけてすでに満員だ。

代表選手全員が準備は万全の様であり自信に満ちているが分かる。

その姿は今から水の中に入るために水着姿である。

まだ気温も低いため寒いが代表に選ばれた誇りからか堂々としている。

『さあ、紳士淑女の皆さんお待ちせいたしました。選手の準備が完了しましたので第二課題開始いたします。』

バグマンの杖から開始の合図の号砲が響く。

代表たちは一斉に湖に飛び込んだ。

そして20分もかからずにフラー・デラクールがリリアン・リンリーを腕に抱えて湖から姿を現した。

この速さには流石に三校長やクラウチ、バグマンも驚いている。

湖の中の所要所に設置された観察用の魔法具からの映像ではまだ残り三人が人質の場所にたどり着いていないことがわかる。

あまりの速さに観客たちは状況がなかなか飲み込めなかったが、復活したバグマンのゴール宣言で一斉に歓声が爆発した。

その中でフラーは悠々とリリをお姫様抱つこの形でスタート地点まで歩いていく。

そんな様子を見て女たちは歓声ではなく妬みと羨ましきから出る怨念の声を上げる。

「ん、あう……。フラー?」

「おはよう、お姫様。気分はどう?」

「んゝ悪くないわね。」

スタート地点に戻った二人は暖められたタオルで包まれ魔法で体の熱も取り戻していく。

ゆつたり一緒のタオルに包まりながらぬくぬくと待っている。

残りの代表たちもフラーから大分遅れて順次人質を連れて戻ってきた。

ハリー、クラム、セドリックの順番だ。

『さあさあ！ 全員が戻って来て得点も出そろったぞ！ と、その前にデラクル嬢がなぜあんなに速かったか説明しておきましょう！ カルカロフ校長から不正をしているんじゃないかとしつこかったからね！ 水中人<sup>マレーブル</sup>の話では人質の性質で速く解放した女と呪いを恐れた男の意見が一致してデラクル嬢の妨害が少なく、積極的に助けた結果だそうです。』

『それでは得点！ 順番に発表だ！』

フラー・デラクール

マダム・マクシーム——10点

イゴール・カルカロフ——6点

アルバス・ダンブルドア——9点

ルード・バグマン——9点

バーテミウス・クラウチ——8点

合計42点

ハリー・ポッター

マダム・マクシーム——9点

イゴール・カルカロフ——7点

アルバス・ダンブルドア——9点

ルード・バグマン——8点

バーテミウス・クラウチ——8点

合計41点

ビクトール・クラム

マダム・マクシーム——8点

イゴール・カルカロフ——10点

アルバス・ダンブルドア——8点

ルード・バグマン——8点

バーテミウス・クラウチ——8点

合計42点

セドリック・ディゴリー

マダム・マクシーム——9点

イゴール・カルカロフ——6点

アルバス・ダンブルドア——8点

ルード・バグマン——8点

バーテミウス・クラウチ——8点

合計39点

この時点でフラー・デラクルが最も優勝に近い選手となった。

## 43. 混戦乱戦な第三課題

第二課題が終わり、リリはハーレム全員に心配されてもみくちやにされていた。

普段はあまり感情をむき出しにしないパドマやダフネでさえうつすらと目に涙を浮かべている。ジニーだけは大粒の涙を流しながらリリの胸に飛び込んでいる。

こんなのを見せられては割り込むこともできずフラアは静かのその場を後にした。

その夜はハーレム全員でこっそりと寮を抜け出して必要の部屋で全員揃ってリリを求めて一緒にベッドで夜を共に過ごした。

第二課題も終わり束の間の日常が戻って来る。

今度の第三課題には第二課題とは違って特別準備することはないらしい。

ただ、万全にどんなことにも対応できるだけの力を備えるようにとのお達しということで心身の健康のためにとフラアはリリとの距離をこれまで以上に詰めて来ていた。

それ以外に特に何かが起こるわけでもなくいつものリリを中心とした騒がしくも楽しい日常であった。

ホグズミードに行ったり、ハーレム＋フラアで一緒に仲を深めたり、試験結果に一喜

一憂したりと学生らしい楽しい日々だった。

この間に順調にフラーとも仲を深めてはいるが、中々に最後の最後までは堕ちてくれない。

ママが言ったようにかなりプライドが高いようだ。またそれも一興で楽しんでいるりりであつた。

そしてとうとうトライウィザード・トーナメント三大魔法学校対抗試合最後の課題の日がやって来た。

試合の会場はつい先日まではクイデイツ競技場だった場所だ。

それが今は巨大な生垣で作られた迷路になっていた。

パンフレットによるとこの迷路の最奥に置かれた優勝杯を手にしたものが勝利者となるようだ。今までの課題での得点が多いものから順に迷路に入つて競い合いがスタートする。

迷路には様々な罫や魔法生物が配置され挑戦者を阻む。

よりゴールに近くなおかつ容易な道を選ぶ運と障害を乗り越える実力が必要になって来る最後の課題にふさわしいものだった。

迷宮の障害の場所には観客用の魔法具があり、巨大水晶に投影された映像で挑戦者が障害に挑む戦いが観戦できる。そしてゴールの優勝杯も映し出されている。



スタート順はフラー、ハリー、クラム、セドリックの順だ。それぞれポイント差×1分の間隔をあけてのスタートとなる。トップのフラーと最下位のセドリックでも8分差。十分にセドリックにも優勝を狙うチャンスはある。

現在、既に一番手のフラーが迷宮入口で待機している。

リリがフラーの勝利を願っているとお馴染みのバグマンの実況が聞こえてきた。

『さあ〜て！ 皆さん大変お待たせいたしました！ 長かった三大魔法学校対抗試合も  
トライクワイザード・トーナメント  
 いよいよ今日をもつて決着となります！ 歴史に残る栄光と羨ましい1000ガリオ  
 ンを手にするのはいったい誰になるのか!?

ここで各選手の現在の得点を振り返ってみましょう！

一位！ ボーバトン代表！ フラー・デラクール選手！

第一課題 43点。 第二課題 42点。 合計85点！

二位！ イレギュラー代表！ ハリー・ポッター選手！

第一課題 42点。 第二課題 41点。 合計83点！

三位！ ダームストラング代表！ ビクトール・クラム選手！

第一課題 40点。 第二課題 42点。 合計82点！



観客からは選手が障害と対峙したところしか見ることができない仕様だ。

それでも選手たちが知恵と勇気でそれらを乗り越えていく様に大いに盛り上がる。今もフラワーが巨大な蜘蛛を吹き飛ばした瞬間が映り男どもの歓声が爆発している。

今のところは全員が特に怪我や呪いでリタイアすることなく順調に進んでいるようだ。

ただ、ハリー・ポッターだけは運がいいのかあまり障害に遭遇していない。

観客の中でそれに気づいている者は少ない。そしてその少数でさえ会場の熱気と他の代表の活躍に意識が割かれほとんど認識しているとは言えなかった。

『おおっと!? ーここで予想外の出来事だ！』

なんと広い迷宮内ではったり選手同士が遭遇だ！ これは一波乱ありそうだ！』

バグマンの宣言と同時に観客用の巨大水晶に写されたのはまた一つ障害を突破したフラワーとセドリツクが鉢合わせたところだった。

この課題は選手同士の妨害が認められている。よほどの傷害や殺害でなければ相手を気絶させて課題事態をリタイアにさせることも可能だ。

もちろん安全対策として行き過ぎないように監視付いているし、気絶したら即座に迷宮から回収する手はずになっている。

これまでの課題は目標をクリアするというもので代表選手同士の直の戦いは無かつ

た。

それが今まさに真つ向勝負で互いの実力差がはつきりするという場面である。

これには観客も大興奮だ。

フラーとセドリックはお互いに眼を離さず隙を伺っている。

リリも固唾をのんで見守っていると思わぬ展開となった。

『おお!? これは誰が予想しただろうか！ 睨み合う両者に更なる混沌のプレゼント！

ビクトール・クラムの参戦だ！』

実況の通りに現れたのはクラムだった。しかもこの状況を見て逃げるそぶりなどせず、迷いもせずに二人の所まで進んでくる。

これにはますます会場も盛り上がる。

イレギュラーだったハリー・ポッターを除いた三校の代表が一堂に集まっている。

これから始まるのはまさに選ばれた代表の力比べだ。

三者がそれぞれ自分以外を打倒し勝つつもりでいる。負けるつもりなど微塵もない。

三者のにらみ合いが発生して時間にして僅か一分ほどだろうか。ようやく膠着状況が崩れた。

~~~~~

最初に仕掛けたのはクラムだった。

自身の全力最速の失神呪文。ステュービファイそれがセドリックに強襲する！

並みの学生であればそれで失神KOだ。

だが、これまで再開とは言え代表に選ばれたセドリックは並みではない。

呪文も使わず、最小限の動きだけでこれを避けた彼はお返しとばかり失神呪文をクラステュービファイ

ムに飛ばす……と思いきやフラーに向けてそれを放った。

クラムの攻撃に合わせるようにフラーがセドリックを狙っていたのだ。

自身の攻撃のタイミングを失ったフラーはセドリックからの攻撃を避ける。

その次の瞬間にはクラムを自由にさせまいと攻撃を放つ。もちろんクラムもそれを

余裕で躲す。

この三者の攻防は僅かな時間。その一瞬の出来事に観客も実況も更に盛り上がる。

「やるじゃない。少し見直したわ。」

「ぼーくはまけませーん。」

「まあ、これまでビリだったからね。全力でやるだけさ。」

三人は短く言葉を交わすがすぐに魔法での打ち合いに発展した。

一人が誰かを狙えばその隙に別の誰かに狙われる。時に二人同時に攻撃されるもそれを凌ぎ切り反撃を受けた一人が他の二人と戦う。

三人の戦場は巡るめく移り変わる。時に1対1対1。また、2対1になったりと実況が追い付かない程だ。

それだけでなく魔法生物が強襲し三人で力を合わせこれを撃退するなど観客たちを飽きさせることなく戦いは激しさを増していった。

そうして一進一退の攻防が10分ほど続いた。

誰も彼もが肩で息をして戦闘当初の勢いはない。

ここでセドリツクが杖を降ろして提案を投げかけてきた。

「二人ともちよつといいかい？」

「なに？」

「なんでーすか？」

「このまま続けていても消耗するだけだと思うんだ。ほら、ハリーがこのまま独走しちやんうじゃないかな？ それは本意じゃないだろ？」

「それは……。」

「……。」

セドリツクの言うことももつともだ。ここで他二人を潰してもまだ、ハリー・ポッターが無傷で残っている。下手をしたら優勝杯のすぐそばにいるのかもしれない。

三人はにらみ合いながらも別々の道へと進んでいった。

~~~~~

そのハリー・ポッターは順調に、いや順調すぎるほど迷宮を進んでいった。

出くわした試練はスフィンクスとボガードぐらいのものだ。

ハリー自身も僅かながらの違和感を感じていた。

だが、それももうすぐ訪れるだろう栄光で吹き飛んでいた。

そう、ハリーのほんの10メートルほど先には煌めく優勝杯がある。

(あれを手にしたら……僕が優勝だ。これで誰にも文句は言わせない！ 僕だってちゃんと力があるんだ！ 鼻屑でも何でもない！ 僕の、僕の力で勝ったんだ！

これで周りの奴らに僕の事を見返してやる！ クソなスリザリンやあのスネイプに！

……ああ、そうだ。ダーズリーの屑どももどうかしてやろう。そうだ、僕は選ばれし者なんだから！)

心の奥から湧いてくる暗く、濁った感情のまま優勝杯に触れる。

その瞬間ハリー・ポッターはその場から消えた。

観客たちの歓声が会場に広がる。

ここまでは問題ない。勝者は優勝杯と共に迷宮の入口に姿を現すことになっている

からだ。

だが、いくら待ってもハリー・ポッターの姿が現れることはなかった。

~~~~~

会場と観客はざわめきに満ちていた。

教員や魔法省の職員があわただしく行き来している。

迷宮から出てきたハリー以外の残りの3人も何が何だか分からない。

ただ一つ分かっているのは優勝したはずのハリー・ポッターが消えてしまったという事実だけだ。

普段は冷静で、何もかも分かった風なダンブルドアもスネイプやマクゴナガルらと何かを真剣に話している。

そうして何も分からないまま1時間ほど経過したとき、唐突にハリー・ポッターが現れた。

手には優勝杯。

だが、体はボロボロで泥だらけ。見るからに疲労困憊で立ち上がることもできないでいる。

会場中が驚き見ており、ダンブルドアやマクゴナガル、親友のロナウド・ウィーズリー

が駆け寄る中、選ばれた少年の口から聞きたくなかった最悪の言葉が発せられた。

「ヴォルデモートが戻ってきた！ あいつが帰って来たんだ！」

その言葉は魔法界に嵐がやって来ることを宣言していた。

44. ハーレム四年目

期末試験も終わり、リリアン・リンリーの四年目のホグワーツ生活も後僅かで終わるだ。

「はあ……。」

普段であれば休みの間にどうやってハーマイオニーやハーレム、他の女の子と楽しむかと計画している時期なのだが、楽しい話し合いの代わりにリリの口から出てくるのは溜息だ。

それも仕方がない。ホグワーツを包む暗い雰囲気がそうさせるのだ。

トライクワイザード・トーナメント
三大魔法学校対抗試合は終わった。

栄えある優勝者はイレギュラーな代表のハリー・ポッターだ。

別にこれだけであつたなら大きな問題ではない。

問題なのは優勝したハリーが行方不明になつたかと思えば、しばらくしてポロポロになつて現れたこと。

そしてそのハリー・ポッターの口から出た言葉なのだ。

「ヴォルデモートが帰ってきた！ あいつが蘇ったんだ！」

ハリー・ポッターの叫びは決してソノラスを使っていたわけではない。

周囲の喧噪を考えればかき消されてもおかしくは無かった。

だが、魔法使いたちはその言葉……ヴォルデモートという恐怖そのものと言える名を決して聞き漏らすことはなかった。

一瞬前までの観客の話し声も、教師や魔法省役人のあわただしい動きも何もかも停止していた。

そして次の瞬間から徐々にざわめきが拡大していった。

「おい……。ハリーが何か言ってるぞ……。」

「例のあの人が？ 嘘だ！」

「でも見ろよ！ あんなにボロボロだ！」

「いやっ！ いやあああああああ！」

一度始まった恐怖と混乱は次から次へと隣に、周囲に、伝播していく。

魔法省役人もホグワーツ教師も混乱を収めるのに必死だ。

「戻りましょう、リリ。」

マグル生まれということもあって一番冷静であったハーマイオニーが混乱する場から離れるためリリの手を取って歩き出す。

それに残りのメンバーも続く。

心の安定に影響していたリリがこの場から離れたことで徐々に会場の女たちの混乱度は高まっていった。

ハーマイオニーもそれは予見していたが、何よりも大事なのはリリであるので罪悪感を無視をして進んでいった。

「ここまですればいいかしら。とりあえずまだ誰も戻ってないみたいね。」

集まったのはリリのホームでもあるグリフィンホール寮の談話室だ。

ハーマイオニーが確認したようにまだ誰も戻ってきてはいない。

緊急時ということもあるし、そもそも他寮の談話室に入ってはいけないというルールなどというものは存在しないのでここにダフネたちがいても問題はない。

一息ついたところでジニーとダフネが抱き着いてきた。

普段はそこまで積極的ではないダフネもさすがのようにリリに抱き着いている。

二人とも震えていた。

ヴォルデモートという名はそれだけ魔法界に恐怖を植え付けていたのだ。

「大丈夫。大丈夫よ。」

唯一の年下のジニーの頭を撫でながら、ダフネをもつと力を入れて抱き寄せる。

リリの呪い魅力を感じて幾分か落ち着いたのか震えが止まってくれた。

パチル姉妹もその後お願いして結局ハーレム全員がリリの回復ハグを受けることに。その後は戻ってきた生徒たちを順番に抱いて落ち着かせる。

その日はリリハーレムとグリフィンドール女子は全員が談話室でリリの周りに集まって眠ることになった。

~~~~~

次の日からしばらくは授業も休講となった。

トライウィザード・トーナメント  
三大魔法学校對抗試合の後処理……名目上はそうなっている。

だが、生徒は馬鹿ではない。

本当は教師が慌ただしく出ては戻っていることに気付いている。

日刊預言者新聞や魔法省からは闇の帝王が復活したという情報は何一つない。

だが、あの場にいた全員は聞いてしまったのだ。

それにハリー・ポッターから話を聞くことを禁止していたりと、あの時の発言が嘘では無いと言っているも同然であった。

そんないつもと違ったホグワーツに不安がっている生徒だったが、更に闇の魔術に対する防衛術の教師であり、凄腕の闇祓いでもあったマッド・アイ・ムーデイがいなくても影響していた。

あのマッド・アイは偽物で実は死喰い人<sup>デスイーター</sup>であったなどという馬鹿馬鹿しい噂まで流れている。そして今のホグワーツではそれを100%否定できる根拠もまた無いのだった。

だが、リリにとってはそんな噂や、それどころかヴォルデモートの復活も重要ではなかった。

問題なのは女の子から笑顔が消えてしまっていることだ。

いつもは自分がいればそれだけで笑顔になってくれる女の子たち。

それがあの時、ハリー・ポッターの口からあのどうでもいい名前が出てから心から笑顔を向けてくれる女の子の数が減ったのだ。表面上は楽しそうにいてくれるのだが、どこか心の中で何かを溜めている、そんな感じなのだ。

愛すべき女の子の不安も取り除けない自分に嫌気がさした。周りの空気が悪いのも合わさってため息が増えるというものだ。

「はあ……。」

またもや口から漏れる溜息。

隣に座るハーマイオニーが頭を撫でてくる。子供に対する行いじゃないかと思つたが気持ちいいのでそのまま受け入れる。

「リリ、そんなに気にしないの。皆が不安に感じているのは本当だけどそれ以上にリリ

がいるおかげでその不安が大分緩和されているのよ。」

うんうんと周りが頷いている。だが、大分ではダメなのだ。全部が良いのだ。

それでも根本的な解決をするにはリリには力も知恵も足りなかった。

そうして学年末のパーティーが行われるまでそれは変わらなかった。

~~~~~

学年末パーティーは^{トライウィザード・トーナメント}三大魔法学校対抗試合が終了したお祝いや明日で去る二校の平

和を祈って盛大に行われた。

豪華な食事に、羽目を外すウィーズリー双子、それでもどこか一抹の影が全体にあつた。

恒例のデザートタイムも終えてダンブルドアが立ち上がった。

皆いつも以上に偉大な魔法使いから告げられる言葉を待っていた。

「皆よく食べ飲んだかの？ ^{トライウィザード・トーナメント}三大魔法学校対抗試合も一応は無事に終わりボーバトンとダームストラングは明日には戻られるので再会の約束はしっかりするのじゃぞ。

……さて、皆が聞きたいのはこんなことでは無かろう。

ハッキリ言ってしまうおう。

ヴォルデモート卿は復活した。これは事実じゃ。」

最初、大広間の全員は声を出すことができなかった。

しばらくしてようやくダンブルドアの言葉を認識し、脳が理解を始めてから行動を起す。

周りに聞き間違いではないのかと、すぎる思いで確認し合う。

その後によりやく嘘ではなかったと理解し始める。

恐怖と動揺から奇声を発する者、声すら出せず固まり続ける者、祈る者、隣の生徒と色々と推論を話す者。大広間は静寂から一転混沌に包まれる。

ダンブルドアは静かにその混沌が治まるのを待った。

ひとまずの落ち着きを取り戻した全員が次のダンブルドアの言葉を聞き漏らさない
と真剣に見る。

「魔法省はこの件を認めようとはせんじやろう。これから魔法省はわしの事を嘘つきの狂った老人とでも言うことだろう。」

だが、それでもわしの言うことは真実ということを知っていて欲しい。
そして何よりも大事なものは団結することじや。

これから魔法界は困難に直面する。だからこそ我々が手を取り合って立ち向かう必要がある。家族、恋人、仲間……。代えがたい者との絆は大きな力になる。」

リリはそれを聞いてハーマイオニーの手を優しく、しっかりと握る。

ハーマイオニーもそれに応えて握り返してくる。

ダンブルドア男の言うことも正しいことがあるのだなとリリは痛感した。このぬくもりを守るためならば闇など怖くはない。

それほどの力が湧いてくる気がする。

~~~~~

翌日。

ダームストラングは校長のカルカロフが行方不明になっているため代表としてクラムが率いている。世界的スター選手の姿を最後まで見るため熱心なクイディッチファンが見送りに集まっている。

リリたちの姿は勿論ない。最後までリリ達とダームストラングは接することはなかった。

それでもクラムは百合に満ちた世界魔法界の危機には力になることを胸に誓い、帰っていった。

そしてポーバトンの巨大な馬車と天馬はいつでも出発できる状態になっている。

最後に残った一人が乗り込めば準備完了だ。

その最後の一人にしてポーバトン代表選手のフラー・デラクールは遠い異国の地で出

会った初めて愛することができた少女と抱き合い熱烈な口づけを交わしていた。

「ぷはあ……。」

たつぷりとお互いを味わい名残惜しそうに口を離す。

互いの口の間には二人の少女の唾液が混ざり合った液体の橋ができています。

「また来るわ。すぐにね。それまでにもっと魅力的になつていくから今度こそ私だけに魅了されるが良いわ。」

「楽しみに待つているわ。ハーレムはいつでも歓迎だからね。」

もう一度お互いの存在を確かめ合うように抱擁し合う。

ボーバトン校長マダム・マクシームが割り込むまでそれは続いた。

~~~~~

ロンドンに向かう紅い蒸気機関車のコンパートメント内でいつもの様にリリとハーレムは集まっていた。

去年までのリラックスしたゆるくも甘い空間はそこには無かった。

闇の帝王の復活。それはリリハーレムにも必ず影響が及んでくるだろう。

この夏休みは二人の母親とメイドたちともしつかり今後を話す必要があると感じていた。

その前にハーレムともしつかり話し合うことにしたのだ。

これから何が必要なのか、どう行動するのか、

その全ては女の子の幸せのために。

そしてもうすぐキングス・クロス駅に到着する時刻になってリリはハーレムを一人ずつ見て、いつも思っていることを改めて言葉にした。

「ハーマイオニー。」「ええ。」

「パーバティ。」「うん。」

「パドマ。」「ん。」

「クラウディア。」「はい。」

「ダフネ。」「ええ。」

「ジニー。」「はいっ!」

「みんなの事は絶対守る。リリアン・リンリーの名に懸けて。」

「私たちもリリの事を守る。何があろうとね。一緒に幸せになりましょう。」

ハーマイオニーが正妻として皆の言葉を代表する。

そしてみんなが笑顔でリリを抱きしめた。

トライクワイザード・トリーナメント
三大魔法学校対抗試合やら色々あった。

そして闇が動き出そうとしている。

それでもリリアン・リンリーは愛すべき女たちとなら何も怖くは無かった。
こうしてリリアン・リンリーのハーレム生活四年目が終了した。

幕間 男たちの舞台裏

○セブルス・スネイプの憂鬱

我輩の名はセブルス・スネイプ。

ホグワーツ魔法魔術学校の魔法薬学教師にしてスリザリンの寮監を勤めている。

あれは忘れもしない、運命が加速し始めた1991年。

その年の夏休みが後一カ月で終わるといふ頃、マクゴナガルから緊急の職員会議をす
るとの連絡が来た。

何があったのだろうかと考えれば思い当たるのは今年入学するあの男とリリーの子
供の事だ。

ハリー・ポッター

魔法界に生きる者ならば誰もが知る子供だ。

そして我輩が今を生きる理由の一つでもある。

過去の後悔リリーとこれからの憂鬱ハリーを考えるとめまいを起こしそうになるが、とりあえずは
職員会議の議題に目を通す。

先程までの精神ダメージから立ち直る前に追撃を喰らった。

そこに書かれていた『リンリー』の文字で緊急職員会議の理由は理解できた。「うっ。」

学生時代のトラウマが蘇る。

汚物を見るような眼をした最愛の人。それどころか見向きもしてくれなくなっていく。

闇の帝王を上回るような恐怖を与えるリンリー。アレはダメだ。

糞メガネなど大したことに感じなくなるほどはつきり覚えている。

おまけに最悪なのはあの男たちにまで同情されてしまうという屈辱。

「はぁ……。」

確実にこれからの7年間は胃が休まることはないだろう。

下手したら安らぎの水薬を毎日服用することになりそうだ。

溢れ出る不安と倦怠を飲み込んでこれから先の7年間で平和であることを願った。

結論から言えば母親ロザリンよりは分別が付くし、十分常識がある少女だった。

女子生徒を侮蔑や差別などしなければ特にこちらの事を見向きもしないだけで、実害はほぼない。

ドラコは……残念だった。男子たちには近づくな、刺激するなど言っておいたのだが

な。

あの時のルシウスの怒りとその後の落ち込み様はすさまじかった。

理事だからと言って毎週のように呼び出して酒に付き合わせるな！　と言ってやりたい気持ちがあるほどの沈鬱な顔だった。

リンリーより問題なのはあの男に生き写しだ。

教師の事を舐めている、校則違反はする、それにクイデイツチが上手いからと言って規則を捻じ曲げてまで選手にするのは流石に我輩も驚いた。

だが、あんな生意気な父親に似ているからと言っても守るべきリンリーの子供。

その証拠に目だけはリンリーのものだ。

それが……段々と不安定になっているのが気がかりだ。

特に代表選手に選ばれた後は明らかに異常だった。

ダンブルドアにも相談したが、閉心術を教えて欲しいと言うだけで何も語らない。明らかにあの老人は何かを隠している。

隠し事と言えばあの二人！

脱獄囚に共犯の裏切りの狼男！

ダンブルドアはあいつらを匿っていた。

騎士団本部としたブラック邸であいつらがいた時にはついに狂ったのかと本気で

思ってしまった。冤罪だとか何だと言っていたが、信用ならん。

特にブラック。あいつは狂っている。いまだに過去に囚われて我輩に対して否定的な事しか言えんのか。

……過去に囚われているのは我輩も同じか。

教師と騎士団の生活、リンリーにポッター、ブラックとルーピン。

当然、我輩は魔法薬が手放せないようだ。

~~~~~

○ウィーズリーツインズの十一

「ホグワーツは最高だよな兄弟！」

「ああ、兄弟！ 皆俺たちの悪戯を楽しんでくれている！ それに」

「怒鳴るママがここにはいない！」

「まあ、1カ月に1回ぐらいは吠えメールが来るけどな。」

「言うな兄弟。ま、最近はおちよつと変わっちゃまったけどな。」

「リリアン嬢が入学してきてからだろ？ まあ、しょうがないんじゃないか？」

「まあな。あれから女子連中はみくんなりリリアン嬢に夢中だ。」

「だけど」



「ああー！」

「だからこそ悪戯しがいがあるー！」

「女子は夢中で男子はビビりまくり！」

「そんな中で俺たちに注目させてやるんだ！」

「もちろん最初は上手くいかなかったさ。」

「それでもやりがいはあったし、だんだん前みたいに俺たちのパフォーマンスを見てくれるようになったな。」

「まあ、ある意味リリアン嬢のおかげで俺たちの悪戯スキルアップ！」

「更におまけでグッツ制作ノウハウも獲得！ いいことづくめ！」

「でもなあ……。」

「ああ……。」

「失恋は辛いぜ……。」

~~~~~

○パーシー・ウィーズリー 監督生として

リリアン・リンリーはどういう生徒か？

もちろん知識としてリンリーの事は知っていたよ。

彼女が入学してからは先生方から厳しく指導もされたしね。

それでも監督生なのだから一応は注意しようと思つたよ。

それが、まさか身内の……その、あんな場面に遭遇するとは夢にも思つてもみながつたよ。

リンリーの呪いやら色々あるだろうが、未成年なのにけしからん！

それでもジニーの恩人だし……その、ジニーが想っている相手だ。

ママやパパに相談をしようとも考えたけどどうしたらいいか分からなくなつた。

正直僕に出来ることなんて無いんだと結論付けしてしまつたよ。

~~~~~

○ロナルド・ウィーズリーの憤慨

パパとママ、卒業したビルやチャーリー、フレッドとジョージ、それに真面目なパーシーからもグワーツは楽しいところだと話を聞かされてきた。

入学案内が来て僕もその一員になるんだとはしゃいだのは今となつてはいい思い出だ。

最初のコンパートメントであのハリー・ポッターと友達になつたのも僕の自慢できる数少ないことだ。

勉強はつままないし、兄貴たちと比較されると嫌な気持ちになることもあったけど、友達と一緒に毎日が楽しかった。

だから、あの日のあれだけはやり直したいと心から思う。

今でも女子たちは僕の事をまるで存在しないように扱う。

廊下でぶつかっても僕だと認識した途端、何もなかったかのようにふるまわれる。

まだ、デインやトーマスの様に馬鹿をやつて蔑まれた目で見られた方がマシだ。

というか、あいつらそれで楽しんでいる風な気がする。

それは置いておいて。

これも全部リンリーのせいだ。

リンリーの事は正直怖い。でもそれ以上に嫌いだ。

僕がこんな目に合っているのも僕のせいもあるけどアイツがああ言ったからだし。

それに……ジニーの事を洗脳して奪ったのだ。

あんな女子なら誰でも良いと思つているような異常者にみすみす大切な妹を奪われた自分に腹が立つ。

それでも誰も文句を言えない。そうすればホグワーツの半数が敵に回るのだから。

例のあの人にも負けないような本当に厄介な魔王のような奴だ。

~~~~~

くくくくくく

○リーマス・ルーピンの後悔

毎日が辛い。

まともにはしゃワーも浴びれないし、ベッドで寝たのはいつ以来だろうか。

それぐらいならまだいいが、食料が少ないというのは思いのほかきつい。

トライウィザード・トーナメント
三大魔法学校対抗試合があるというのに魔法省の一部は未だに私とシリウスを探して

いるようだ。

動物もどきのシリウスだけならもう少し自由に動けるのだろうか、私はそうはいかな

い。

それどころか狼人間であることが災いして人里のすぐ傍など最初から選択肢にすら

入らない。こんな状況だ、脱狼薬の入手たなんてグリーンゴッツに侵入するレベルの難度

だ。

シリウスもシリウスで一人にするとすぐにも暴走して闇雲にピーターの事を探しに

行ってしまうようだ。

ダンブルドアの陰ながらの支援があってもこれだ。本当に気が滅入る。

どうしてこうなってしまったのか……。

何がいけなかったのだろうか。

トム、闇の帝王ヴォルデモートを滅ぼせる存在のハリー・ポッターとリンリー家の娘が同世代で入学するとは計算外だった。

いや、わしの怯えから調べが足りなかったというべきじやろう。

ハリーの一年目は予想以上に経験を積むことができたと言える。

いずれ訪れるヴォルデモートの復活。それに対する切札となるハリーには試練が必要になる。わしはあえてハリーに試練が訪れるように道を調整し続けた。

だが、上手くいかなかった。

二年目も事件が起こった。

わしはこれもトムが裏で糸を引いているとすぐに直感した。

これを利用してハリーに経験を付けさせようとも、もつと言えばハリーとトムとの繋がりを確認できればとも計画していた。

蛇語使いという有益な情報は得られたが、それでおしまいだ。

あのリリアン・リンリーの行動がわしの予想を裏切る結果をもたらす。

三年目はリーマスにハリーの心の支えになるように頼んだ。

吸魂鬼ディメンターの影響かハリーの中の負の感情が大きくなっている。非常に不安定だ。

今まで育った環境、英雄視される己、そこから出てくる承認願望。

だが、結果は違っていた。才能あるクイディッチでさえ、いてもいなくても良い、負

けることも少なくない。罰則などが重なり周りからの評価は正直よく無い。一年目の賢者の石の件で最後にああなったのもダメじゃった。

これでもう少し何かしらの功績を出せていたのならば違ったのかもしれないが……。何はともあれリーマスにはハリーの父親の代替にでもなってくれれば良いのじゃが。まさか、裏目に出ようとは。

ハリーが表向きのお父さんの死の真相とシリウスの事を誤解したまま仇だと認識してしまつた。

更に、ルーピンの事も共謀した裏切り者だと憎悪を募らせている。

これはダメだ。英雄となる者が憎しみに囚われてしまうのはダメだ。

真実を伝えようとも思ったが、今のハリーは聞く耳を持たぬじゃろう。

落ち着くのを待つて本人たちと会わせて誤解を解きたいのだが。

そんな暇も与えられず、ハリーに次の試練が来てしまつた。

もう見てられぬほどに、心が傷ついていた。セブルスから直接ハリーの事を心配されるなど余程じゃろう。

それでも、ヴォルデモートが復活にハリーの血を使ったのは僥倖だった。

これで奴は自ら滅びの道へと進み始めたじゃろう。

だが気がかりなのは、ハリー自身の事じゃ。

わしの最悪の予想が正しければ……。

ハリーはこれまでの事から不安定じや。これは非常にまずい。

早急にハリーに閉心術を伝授しなければ。

気にはなるのはリンリーとヴォルデモートの繋がりもだ。

奴は前の戦争の時には女性に対しての危害が明らかに少なかった。

これはリンリーとの繋がりがあるとわしは確信している。

やることは山積みだが、魔法界の為に止まるわけにはいかぬ。

~~~~~

○ヴォルデモートの

10年以上。

実にあのハロウィーンの日から10年以上ぶりに肉体を取り戻した。

ハリー・ポッターの血も取り込み弱点は克服した。

今度こそ魔法界をわが手に！

やることは多い。

戦力の確保。情報の収集。そして何よりハリー・ポッターとアルバス・ダンブルドア

の排除。



魔法界を手中に収めたら次こそはあの力を。リンリーを。

幸いにも今のホグワーツにリンリーの者がいるという情報は得られた。

リンリーの魅了、呪い、血。

俺様以外誰もアレの素晴らしさを正しく認識していない。そう、ダンブルドアやリンリー自身でさえ。いやリンリーはそもそも興味を持っていないというのが正しいか。

アレは素晴らしいものだ。

アレこそは俺様の夢へとつながる力だ。

今度こそ全てを我が手に……！

## 5章 不死鳥の騎士団に女はいらない

### 45. 忍び寄る闇

1995年8月。

イギリス魔法界はこの時期はホグワーツも夏休みに突入しているのでダイアゴン横丁などの魔法使いたちの店もいつも以上に賑わいをみせる。

そのはずだった。

確かに、人は多い。いつもの買い物客だけでなくホグワーツ生と思わしき子供たちも大勢いる。

彼らの顔の多くは笑顔である。

それでもどこか必死な、怯えるような感情が見え隠れしている。

ホグワーツ生からその家族に伝えられた事柄。

それが正しければ今にもこの平和を崩してしまえるほどの恐怖の存在。

例のあの人、名前を言っではいけないあの人。ヴォルデモート卿。

それが復活したというのだ。その情報だけで不安にならない魔法族はこの英国にはごく少量だ。今も彼らの中にはただ買い物をしているだけでなく自衛のため、身を隠し

て生活するのに必要なものを揃えるために訪れている者がちらほらといる。

今は平和な日常が流れている。

しかしそれは嵐の前の静けさというものであることを知る者は理解していた。

~~~~~

イギリスの山奥にあるリンリー邸。

いつもは主であるロザリンド・リンリーが妻であるレイラや愛人兼メイドたちと楽しくも淫らで欲に満ちた生活をしている屋敷だ。

夏休みに突入したこの時期は一人娘のリリアン・リンリーとその嫁とハーレムも一緒になつてより賑やかになっている。

だが、今年が一番のムードメーカーでもあるロザリンド・リンリーが不在であることが多いため幾分か静かな時間が流れていた。

これにももちろんヴォルデモート卿復活が影響していた。

今はまだ、リンリー家に直接の害が及ばないことをロザリンドは確信していた。

しかしながら、世界中にいるロザリンドの愛人が無事である保証はないのだ。

ロザリンドが世界中に広がる愛人ネットワークとメイドたちが持ち帰った情報、そして娘からのヴォルデモート卿復活の情報を聞いてメイドたちと今後の方針について話

し合った。

結論として、まずは出来るだけ情報を集め、どんな状況であろうとも対応できるようにすることに決めた。

もちろん家族の安全が第一だが、リンリーとして愛人をないがしろにするという発想は無かった。

そのため、得た情報や対策をもってロザリンドが直接伝える為に、世界中の東西南北あらゆる場所へとふくろう便の梟よりも移動しているのだ。

伝えることは基本的にはシンプルに、イギリス魔法界には関わるなというもの。

イギリス国内なら仕方がないが、国外の魔法界の女たちには極力イギリスに近づかないようにと願った。国内の女たちにはどちらの陣営にも協力せず傍観しろと、もしも闇の勢力に害をなされそうならロザリンドの名を出せと命令した。

この内容の理由にはヴォルデモートとのある約定があったが、リリはまだそれは知らない。

まあ、この世界中の大移動の理由の数割ほどはこの機に世界中の愛人巡りツアーをしようなどと思っただけなのだ。

そしてそれはロザリンドの事を誰よりも理解している嫁にはお見通しであった。

出発前には散々色んな意味で搾られたと付け加えておく。

に戻ってきた。

ここはリリのハーレム全員が集まって色んな事をするために用意された部屋だ。

勉強会だったり、皆で特大のベッドで一一緒に寝たり、ティータイムを楽しんだり、若い情欲を発散させたりとまさに多目的な部屋だ。

(これからするのが楽しいことなら良いのに……。本当にあの人とやらは余計な事しかないわね。)

愛する女の子たちが一堂に集まっているいつもの幸せな空間だというのに、これから行うのはキャツキャウフフな楽しい美味しい時間とは真逆だ。

育った環境が特殊ということもありリリアン・リンリーは闇の帝王に対しては恐怖ではなく憤りを感じていた。

(ハーマイオニーやパドマ、ダフネは真面目なのよね。そこも好きだけど。)

いつもは真面目とは遠い存在のロザリンドがあんなに真剣に表面上は動いているのを見たハーマイオニーは自分たちも何かできるのではないかと動き出したのだ。

具体的にはまだ何をするかは決まっていないが、とりあえず動かすにはいられないといった感じである。

ついでにフランスのフラーからもポーバトンを無事卒業して今はフランス魔法省でイギリス魔法省で言う闇祓いのような部門で様々なことに対処する仕事に就いてイギ

リスの問題にも関わるから再会するのも近い、などと言うふくろう便が届いたからライバル心が刺激されたのも大きいのかもかもしれない。

「よし、みんな集まったわね。それじゃこれからについて話し合っていきましょう！」

「はい！ 具体的にはどうするの？」

「もちろん考えてきたわ！ はいこれ。」

ジニーの問いかけにハーマイオニーは用意していた要点をまとめた紙を皆に手渡ししていく。

そこにはこんなことが書かれていた。

1. 能力向上 リリを護るためには力が必要！

2. 連絡手段 皆と協力するためには連絡が不可欠 マグルの電話などを参考に出来ないか？

3. 情報収集 大人だけでなく自分たちからも色々と知っておく必要はある

その他にもハーマイオニーが思う必要なことが10項目以上がずらつと並んでいた。

その後も話し合いはハーマイオニーが中心となって盛り上がる……というよりはハーマイオニーだけが一人熱が入りすぎているような感じだ。

他のハーレムたちはハーマイオニーの言うことに対して別に否定的ではないし、リリを護るためには必要な事であると認めることだ。

それでもハーマイオニーは熱で空回って冷静さを欠いているように見える。

リリを護るためなら比喩ではなく本当に何でもすると行ってしまおうジニーも若干引くほどに力強くこれからについて一方的に考えを口に出している。

「リリ……。」

「分かっているわ。任せせて。」

絶賛熱暴走中の正妻を見かねたダフネがリリに耳打ちする。もちろん気付いていたリリはハーマイオニーの目の前に座る。

「ん？ どうしたのリリ？ 大丈夫よ。私の考えたようにすればきつとうまくいくわ。」

「ハーマイオニー。こっちに来て。」

リリはハーマイオニーの事を誘う様に広げる。

「えつと……？ リリどうしたのいきなり。」

「んっ！」

リリは腕を広げたまま催促する。

ハーマイオニーはそれにおずおずとその腕の中に入る。

胸に納まった最愛の嫁を優しく抱きしめるリリ。

「よしよし。いい子よハーミー。いいこ、いいこ。」

「ちよっリリ?! どうしたの?!」

いきなりの驚くハーマイオニーは羞恥からリリの腕から逃れようとする。

それに対してリリも腕の力を強めるだけでなく魅了を強めて抵抗の意志を弱める。

次第に動きもなくなり完全にリリに抱かれて大人しくなる嫁の頭を優しくなでながら、もつと強く抱き寄せて耳元で囁く。

「ハーミー……。あなたは頑張っているわ。えらいえらい。でも頑張りすぎよ。

もつと力を抜いて。そう、もつともつと。焦らなくても大丈夫。私も、皆も大丈夫よ。

ほら今日はもうこのままベッドでゆっくり寝てしましましょう?」

「リリ……。私、焦ってたのかしら?」

「ふふ……。そうかもね。でも今日は何も考えないで夢を楽しみましょう。寝るまで一緒にいてあげるから。」

そのままリリはハーマイオニーをお姫様抱っこをして大部屋に備え付けられているベッドに優しく寝かせる。隣には自分も一緒にいる。

他のハーレムたちは今日は二人の邪魔をしないことを決めて黙って部屋から出て行っているのだ二人きりだ。

「リリ……ごめんなさい。それと、ありがとう……。」

「私の方こそありがとう。ハーミーが頑張ったのも焦ったのも何でも私の為でしょう? 何もするなどは言わないわ。さあ、明日からは少しづつゆっくりと頑張っていきま

しよう。」

「うん。」

「ゆっくり眼を閉じ意識を閉ざしていく最愛の人を見つめながらリリもまた睡魔に誘われるまま夢の世界へと沈んでいった。」

46. 迷惑な勧誘

ハーマイオニーはリリと一晚を共にしてから大分余裕を取り戻していた。

次の日からは無理して力を入れすぎるといふこともなく、時間がある時にみんなでこれからについて話し合い、魔法について勉強をするぐらいに落ち着いた。

夏休みも後半に入るころにはロザリンドとキャロルもリンリー邸に戻り、いつもの賑やかさも一緒に帰ってきた。

それと同時にハーマイオニー達ハーレムはリリの為にいつものメイド仕事の邪魔にならない程度にキャロルに魔法の師事をすることを願いだした。

脱獄囚のシリウス・ブラックや人狼のリーマス・ルーピンを一蹴した強さを実際に目で見ていたハーマイオニーとパーバティはリリを護るためにその強さが必要になると考えていたのだ。

それと同時にリリを護るその姿にあこがれも抱いていた。

「いいでしょう。しかしながら私の魔法は誰でも使えるというわけではない、むしろ外道な魔法ということ覚えていてください。」

キャロルの唯一得意とする空間魔法。

天才的に特化したそれを習得できたのは結局のところ今まででも教わっていたクラウド
ディアだけであった。

それでもハーマイオニーやダフネもある程度は習得することには成功していた。
空間魔法は攻撃だけでなく、護ることや逃げることに使うことができる。

魔法を習得したい理由はリリを護ることである。盾の呪文を発展させたり、物理的な
防壁を創り出したり、姿くらましをしたりと幅広く使える空間に対する魔法は協力だっ
た。何も敵を打倒することが目的ではないのであるから十分な成果である。

ハーレムたちは現状に満足せず日々精進を続けている。

もちろんリリとの絆も深めることも忘れない。

そうして充実した夏休みを送っていたある日。

リンリー邸に予想外の客人がやって来た。

~~~~~

客人をもてなすのはメイドではなく、当主である自分がするものだ。

それがリンリー家現当主ロザリンド・リンリーの考えであった。

もちろんどうでもいい相手や興味がなければ敷地に入れることさえしない。

今、ロザリンドがいるのは客人をもてなすための広間である。

隣にはレイラが座り、後ろには護衛のキャロルが控えている。

対面に座るのはこの屋敷にいる魔法使い、いやイギリス魔法界では知らぬものがない二人だった。

今世紀最高の魔法使いと名高き Hogwーツ魔法魔術学校校長のアルバス・ダンブルドアと副校長のミネルバ・マクゴナガルである。

「マクゴナガル先生、お久しぶりですね。10年ぐらい会ってないかな?」

「ええ。あなたがいた時の Hogwーツは私の教師生活の中で最も大変な7年間でした。」  
「でも皆は楽しんでいたと思うんだけどなあ。」

「おほん! すまんが思い出話はまたの機会にして欲しいのお。」

ロザリンドは懐かしい寮監との話を邪魔されてじろりとダンブルドアを見る。

歴代最高最悪の呪いをその身に宿すロザリンドの視線を受けて体が凍えたように震えるダンブルドア。

魔法界の未来を守るため勇気を振り絞ってここに来たが今すぐにも逃げ帰りたくなってくる。

それでも懐から精神を強める魔法薬を出して飲み干しどうにか耐える。

「ふうー……。できればそれは止めて欲しいのお……。」

「用件は? どうせヴォルデモート関係なんだろうけど。」

「その通りじゃ。簡潔に言おう。我々に協力して欲しい。」  
「断る。」

広間が静寂に満ちる。

ロザリンドはそれで話は終わったと言わんばかりに席を立とうとする。

それを見てマクゴナガルが必死になる。

「ロザリンド・リンリー！ なぜです!? あなたは色々とアレでしたけど……決して邪悪ではなかった。なのになぜ！」

「ミネルバ。良いんじゃ。これも予想していたことじゃ。」

「しかし！」

「ロザリンド。ヴォルデモートとどのような約束をしておるか分からぬが、あやつは信用など出来る存在ではない。いつかそなたと愛する人に害を成す。そうなっては遅すぎるのじゃ。」

ヴォルデモートやその配下と戦えとは言わぬ。ただ、協力して欲しい。

今を生きる全ての人やこれから生まれてくる子供たちのために。

どうか……！」

必死に頭を下げるダンブルドア。

それを見ても何も感じないロザリンドだったが、ヴォルデモートが信頼などできない

というのは正しい。それに闇の陣営は今隠れて力を蓄えているのか静かなのだ。

情勢を見極めるためにも情報は必須。

ならば。

「キャロル。」

「はい。」

「不死鳥の騎士団と情報共有するように。頻度はたまにでいいから。そんでもって女が危機だったら助けること。男は無視していいよ。」

「畏まりました。但し、最優先はご主人様、その次にお嬢様、その後にこの屋敷にいる皆。他は余力があればということになります。」

「付け足した。自分の命が危機だったら逃げる。これは命令な。これでいいですか？  
マクゴナガル先生。」

マクゴナガルはダンブルドアを見る。ダンブルドアはうなづき返した。

元より協力を取り次げる確率の方が低かったのだ。

強力な戦力であるキャロル・フォードが女性限定でとは言え味方に付いたのは心強い。  
い。

「ありがとうございます。ミス・フォード。騎士団の基地は秘密の守り人が守っています。場所のメモを渡しますので記憶しておいてください。」

キャロルが受け取ったメモには『グリモールド・プレイス 十二番地』と書かれています。即座に覚えメモを燃やす。これでキャロルは騎士団本部に自由に行き来できる存在となった。

その後は現状の騎士団の状況や闇の勢力についての情報を伝え二人はリンリー邸を後にした。

~~~~~

それからはハリー・ポッターが未成年なのに魔法を使って裁判沙汰になったぐらいで、他には特に事件も起こらず平和だった。

夏休みも残すところ一週間程度。リリ達もとうとう5年生となる。

クラウディアにいたっては今年が最後のホグワーツだ。

この日は久々に屋敷全員の都合があったのでリリたちは屋敷の全員でダイアゴン横丁での買い物中である。

「さて！ それじゃ必要なものは揃ったし各自、自由行動！」

ロザリンドの号令で自由行動となったがメイドたちはロザリンドから、少女たちはリリから離れて行動することなど最初から選択肢にない。ロザリンドも言ってみただけでデートをする気満々である。

結局はリンリー親子が中心となって動いて回る事になってしまふのだった。

「そう言えば今年つてふ、ふくろう？ 試験つてやつがあるのよね。憂鬱だわ。」

「大丈夫！ 私たちに任せなさい！ 最低でも全教科で良以上を約束してあげる。こらつ逃げないの！」

今年はいつも以上にハーマイオニーとパドマ、ダフネが勉強熱心になるのではないかと戦々恐々になるリリ。こんな話題を出した数秒前の自分を恨みたくなってきた。

「別にそこそこでもいいんじゃない？ リリは私たちに愛をくれればそれで充分よね。」

「はいっ！ お姉さまはこのジニーがお世話します！ ふふふ……一日中お姉さまを世話して養う……。私だけでは生きられないお姉さま……。」

ハーレムの中ではリリと双壁を成す勉強苦手なパーバティと自身の欲望に忠実なジニーがリリの味方をする。

リリは二人を両脇に抱いて勉強賛成組から逃げるように距離を取る。

これで勢力は三対三。そして最後の一人は最後の一人はどうかと皆の視線が向けられる。

「私はねえ。リリちゃんはもうちよつと頑張つてもいいなうって思うわ。」

「うう……。クラウディア。」

いつもは自分を甘やかしてくれる筆頭のまさかの裏切りに思わず涙目になりそうに

なるリリ。そんな主をクラウドディアは優しくロザリン^実ド以上^母に母のように抱きしめてくる。

今年で17歳になる彼女は未成年とは思えぬ母性と成熟したハーレムで一番女らしい体系をしていた。

ぶっちゃけると相変わらず一番胸が大きいのである。とうか成長中である。

他の皆も成長するにつれ色々なところが大人になっているが、クラウドディアは圧倒的であった。

そのたわわな双丘にちょうど顔が位置するリリはこの柔らかさがお気に入りポジションの一つであった。

「よしよし。ごめんね。でも意地悪しているわけじゃないのよ？ リリちゃんがいっぱい勉強したら未来が広がると思わない？」

想像してみるとクラウドディアは皆に言う。

ハーレムの主としてのリリじゃなく、色んな職に就いているリリを。

教師として教えるリリ。癒者^{ヒーラー}として癒しを与えるリリ。魔法省役員としてきっちり働くリリ。

他にも色々。どれも違ってどれも良い、と全員が同じことを思った。

「リリちゃんがどうなるかは分からないけど、夢があった方がいいと思うわ。」

ちなみに私の夢はねくキャロルさんの後継か癒者ヒーラーなの。これも頑張ったから得られた選択肢なのよ。」

普段はポヤポヤ癒し系なのだが何だかんだと一番年上なので一番考えを持っているのが彼女なのだと改めて思わされた。

「それにね……。私は今年で卒業しちゃうから……。頑張っているリリちゃんを見たいなって。ゴメンね、私の我がままね。」

そこで気付く、いや気にしないようにしていただけだ。

クラウディアと一緒にホグワーツが今年で最後ということを。

リリは決意した。

「クラウディア。私頑張るね。もちろんクラウディアにもいっぱい甘えるし、甘えさせるし、甘々な1年にしましょう。」

「うん！」

二人の間にいつもの優しい空間が出来上がっていた。

~~~~~

この日のダイアゴン横丁は最近の暗い雰囲気か幾分か解消されていた。

理由はある女たちの一団だ。

いつもはその集団に対して警戒をしているのだが、今回は逆だ。リンリーがいれば例のあの人でさえ女は襲われない。

それが前の戦争時でも囁かれていた噂だった。

それが事実にしる嘘だったにしる今はそんな不確かな事でさえ心の支えにしたいというのが人間だ。

ダイアゴン横丁には大勢の人がいる。もちろん女もいっぱいだ。

そんな中で男だけを狙って襲うなど厳しいというものだ。

つまりリンリーがいれば戦闘自体が発生することが少ないと言える。

いつもは色んな意味で来てほしくない存在がこんな時だけ女神に見える。

当の彼女たちはそんな事を微塵も気にした風ではないが、都合がいい時だけでもすがりたくなるぐらいには世間は不安に包まれているのだった。

## 47. 先行き見えぬ五年目

5年目の Hogwartz に出発するためにキングス・クロス駅へと向かうリリアン・リンリー一行。

いつもはキャロルが空間魔法で内部を調整した特別に屋敷の全員が乗り込める車の移動であったり煙突飛行粉フルーパウダーを使用していたが、今回はより安全で確実な方法をとった。

その方法とは空間魔法を極めたキャロルによる付き添い姿現しである。

何の違和感もなく気が付いた瞬間に、全員が九と四分の三番線のホームに立っていた。

リリの見送りにメイドたちは全員集合だ。今年は一丸となって動いた方がいいという判断である。

リリはメイドの一人一人にハグとキスをして別れの挨拶とする。

最後に両母に抱きしめられる。

「行ってきます！」

「はい、気を付けるんですよ。何かあればすぐにキャロルの魔法具で連絡をしてください」

いね。」

「無茶だけはするなよ？ ああ、あと一つ。今年の闇の魔術に対する防衛術の教師は女だ。」

それとデキる奴だ。頑張れよ。」

教師に女性が追加されるのは喜ばしい情報だ。

それにしてもこのママはいつもどこからこういった情報入手するのだろうか？

去年の三大魔法学校対抗試合も知っていた風であつたし、やはり世界中の愛人ネットワークが凄いのだろうか？

リリとしては今のハーレムとあと数人の候補で満足なのでママの底知れぬ欲にちよつと引くこともある。

それはともかくいつもの様にハーレムでコンパートメントを占拠して窓を開けて両母とメイドに見えなくなるまで手を振り続けた。

次に会えるのはクリスマス休暇になるだろうか。

~~~~~

「それにしても暗かったわね。……まあ、しょうがないかしら。」

ダフネが言ったとおり、例年に比べて九と四分の三番線のホームは暗かった。

ホグワーツに出発する子供も、それを見送る大人も今生の別れであるかのような悲観的な空気を作っている親子が何組かいたのだ。

そうじゃない者たちもいつもの明るさは無く口数少なく、何かに怯えているかのようだった。

リリが来たことで女子生徒たちは幾分か活気を取り戻してはいたが、本調子にはほど遠かった。

「じゃあ、私がすることは一つね！ 列車にいる全員と触れ合ってくるわ！」

「あ、リリちよつと待って。試したいことがあるの。」

飛び出していきそうなりりをハーマイオニーが止める。

その手には羊皮紙が握られていた。

「それって開発したっていう連絡手段だっけ？」

「そうね。私とダフネ、パドマそれにキャロルさんとレーナさんに協力してもらって作ったの。まだ試作品だし改良点もあるけど……とりあえずここでテストしてみよう。」

あ、そうだクラウディア。このコンパートメントの内部を女子全員が入るぐらいに広げられるかしら？」

「ん〜と……。とりあえずはホグワーツに着くまでならいけるかしらね〜。」

「お願いするわ。さてと。」

ハーマイオニーは羊皮紙にリリがいるコンパートメントの場所と要件を書き込んでいった。

しばらくすると内部をホグワーツの大広間並みに広げたコンパートメントに続々と女子たちが集まってきた。

ハーマイオニー達が作り上げた魔法具はこういったものであった。

ハーマイオニーが持つ大元の羊皮紙に書き込んだ文章がコピーした羊皮紙にも書き込まれるといったもの単純な物。

この程度の魔法具ならば他にも存在するが、この羊皮紙の特徴的な点は女性にのみ存在を認識できるという点だ。男相手ならば情報が漏れることも無いし、そもそも女性でリリリーに敵対することなど困難だ。

これを夏休みの内にホグワーツの在校女子生徒にふくろう便でおくっていたのだ。

今のところは文字の表示時間や伝達距離に制限があるのでここは改良の余地ありだ。呼び出された女子生徒がほぼ全員リリのコンパートメントに集まった。

リリは用意された台の上に立ち皆を見ながら話し始める。

「皆久しぶり！ 二気……じゃない娘もいるみたいね。確かに、色々あって不安になると思う。でも私は皆の笑顔が好きだし暗い顔になって欲しくないの。」

歌詞や曲は毎回変わるが基本的には新入生に組分け帽子の役割と寮の特色を説明する内容である。

そこに今年は警告し結束を促すといった今の魔法界に必要なものを付け加えたのだ。これには前年度のダンブルドア、行きの蒸気機関車内でのリリの言葉もあつて生徒たちは気持ちを引き締めていた。

宴はつつがなく終了しテーブルの上はきれいさっぱり片付いた。

ダンブルドアが立ち上がり話始める。

「さて2年生以上の皆はお帰りなさい、そして新入生の皆はようこそホグワーツへ。

さて今年もいくつかお知らせしなければならぬことがある。

禁じられた森への立ち入り禁止にフィルチさんからの要望の廊下での禁止事項など色々あるのじゃが、全部言っておると明日になってしまふのでの。

玄関ホールに一覧を張り出しておくのでよく読んでおくように。

さて毎度のことじゃが新しい闇の魔術に対する防衛術の先生を紹介しよう。

アンブリッジ先生どうぞ。」

ダンブルドアの言葉で立ち上がったのは……一言で言うならばカエル人間であった。

実を言えば大半の生徒はその存在の事を大広間に入った瞬間から気が付いていたし、ずっと気にもなっていた。それがまさか闇の魔術に対する防衛術の新しい教師だとは

夢にも思っていなかったが。

その新任教師は中途半端にカエルの姿になる呪いをかけられたのか、ヴィーラとの混血がいるようにカエル系の魔法生物の血が混ざった存在なのか、それともこういう生物なのか。

あんまりな容姿にリリを除いてドン引きしている皆が注目する中、カエル人間は少女のような甘ったるい高い声で更に驚くことを話始めた。

「皆様、初めまして。私の名はドロレス・アンブリッジ。またこうしてホグワーツで過ごせるなんて、しかも子供たちに闇の魔術に対する防衛術を教える立場になれるなんて、と感動しています。私については授業でその人となりを見せていきましょう。

その前に……一つ皆様に話しておくことがありますの。

私、魔法省からのスパイとしてここに参りました。」

いきなりの爆弾にダンブルドアでさえ驚いていた。

魔法省から送り込まれた、ということとはコーネリウス・ファッジ魔法大臣からのスパイであることは明らかだったが、まさか彼女自身の口から大々的にそれも生徒の前で出るとはダンブルドアも思っていなかったのだ。

「驚かれたでしょうか？ スパイならばなぜそんな事を言ったのか？ そもそも本当なのか？ まあ、疑うのも無理ないでしょう。私、こんな容姿ですしね。」

自嘲するように笑うアンブリッジ。

だが、それでも目は真剣そのもので話を続ける。

「例のあの人が復活したというのに、今の魔法省はこんなことスパイ活動をするほどにホグワーツ、いえダンブルドア校長の事を危険視しているのです。正直に言つて腐っています。

魔法大臣やその他の古臭い老人たちは幸せで怠惰な時間がいつまでも続くと楽観視しているのです。

私は違う。いえ、ある人のおかげで変わった。

私がホグワーツに来た本当の目的は逆です。ホグワーツの嘘の情報を魔法省に流し、魔法省やその他の動向を真実を知っているダンブルドア校長たちへと伝えるためです。

……なぜそんなことをするのか疑問ですよね？ 女の子ならば理解できると思いますが。

ここにはリリアン・リンリーという私が唯一敬愛する方の一人娘がいます。

その方の幸せを守るためならば……魔法省に牙を向けることも、二重スパイをすることもダンブルドアやファッジの靴だって舐めますわ。

言いたいことは言えました。恐らく私が教えるのは一年で終了となるでしょう。

それではこの一年間、生徒も教師の皆様もよろしくお願ひしますね。

……ああ一つ忘れていました。私のこの発言を受けて魔法省に働く親がいれば告げ

口をする男子生徒がいるかもしれませんが、オススメはしませんよ。親が無職だと悲しいですわよ？」

言うことを言いきって席に着くアンブリッジ。

大広間の全員が動き出すまでしばらく時間が必要だった。

最初に復帰したダンブルドアの号令でその日は解散となった。

各自がそれぞれの寮に戻る中、女子たちはアンブリッジの覚悟をしつかりと感じていた。

自分たちもリリの為だったら同じようなことができる。それをあの女はやっているのだ。

つまりあの教師は味方であると確信していた。

こうしていつもと違う予感をさせながらリリアン・リンリーの五年目のホグワーツがスタートした。

48. リリちゃん絶対護る隊

毎年恒例のことだが、ホグワーツでは新学期が始まってすぐ翌日には授業が始まる。上級生にとつては慣れたものだが新入生は初めての授業の準備に朝食にとあたふたと忙しそうにしている。

そんなカワイイ後輩（女子限定）を見ながらリリは朝食を取っていた。

「余裕そうだけど今年は私たちもOWLがあるから大変になるわよ。」

忘れていた、いや忘れていたかつたことを容赦なく思い出させてくれる愛しの嫁。^{ハイマイオニ}

そう五年生になったリリ達にはOWLという大きな関門が立ちふさがるとのだ。

O・W・L試験、正式名称Ordinary Wizarding Levels。^{普通魔法師試験}

五年生の学期末に何と二週間もの長期の時間をかけて実施される試験だ。

OWLは将来の仕事に影響する重要な試験でもある。マグルたちで言えば資格試験や国家試験などといったものに該当する。

成績は点数ではなく6段階評価で行われ、高い順に「優・O」の大きいに宜しい、「良・E」で期待以上、「可・A」がまあまあ、「不可・P」になると良くない、「落第・D」に至ってはどん底と続く。最低は「トロール並み・T」である。"O"から"A"までが

合格であり、”P”以下は不合格である。

リリが受講するのは変身術、呪文学、薬草学、魔法薬学、闇の魔術に対する防衛術、魔法生物飼育学、数占いそして占い学だ。

「クラウディアとも約束したし、頑張るよ。それでも憂鬱……。」

「はい、しゃつきりする！ 行くわよ！」

朝から気合が入りまくっている嫁に抱きかかえられながら大広間を後にする。

初日の授業は変身術に呪文学、薬草学に占い学だ。

この中でいつも通りだったのは占い学だけだった。リリはトレローニー先生にこの日程感謝したことはなかった。

OWLでは一定以上の成績を修めた生徒だけが六年生からのさらに難しいNEWT^{イモリ}レベルの授業に進む事ができる。つまり四年生以下と違って落第する生徒が出てくるのだ。

落第生が出る＝教師の能力不足、またはより高いレベルの生徒しか教えたくないなどの考えから教師達はこのOWLに対して意識し、五年生から授業のレベルが格段に上がる。

それだけでなく毎回の授業毎に大量の宿題を出してくる。過去四年間とは比べ物にならないその量には、ハーマイオニーやパドマでも手間取る量だ。

当然リリはノックアウトされた。ついでにパーバティも。

~~~~~

今まで以上の難易度に厳しさも増し、宿題もマシマシ、ついでに魔法薬学一部授業では嫌みも絶賛増量中な授業の中でも一番に意識されていたのが闇の魔術に対する防衛術だった。

新しく来た教師ドローレス・アンブリッジ。

魔法省からのスパイと言いつつ、本当はホグワーツの力になりに来たと言う。

男子は何が本当か信じられずにいたが女子は彼女が発した単語からほぼ味方であると結論を出していた。

リンリー。

女性であるのならこの名は大きな意味を持つてくる。

それを口にした彼女を疑う理由はほぼない。

それでも新しい教師ということで授業内容は全員の注目の的だ。

真実はどうであれアンブリッジを見極めるために全生徒の興味が集まる授業なのは確かであった。

リリ達が教室に入ると既にアンブリッジは準備万端で待っていた。

「さあさあ！ 席に着くように。早速授業を始めます。」



最初に行われたのは四年間の習得度を測るためのテストと簡単なアンケートであった。

テストはそこまで難しいものではなかったが、アンケートは闇の魔術に対する防衛術でやるようなものとは思えない内容だった。好きな物、好きな場所、好きな魔法、苦手な魔法、魔法省について、などと言ったものでどういった意図があるか分からない。

授業時間の半分が過ぎ、テストとアンケートが回収される。

「さてと……。皆さんの能力は昨年までの成績と今回のテストで把握させてもらいます。

それとアンケートについてですが、これには各個人の適正を測定する魔法が仕込んでいました。神秘部や他にも色んなところと協力して作ったものです。

今回の結果と本人の要望を兼ねて今年の授業はそれぞれの適性を見極めて防衛魔法、攻撃魔法などといった風に長所を伸ばす授業を行っていくかと思えます。

もちろん、その他のOWLに合格するのに必要なことも学んでいきますのでご安心を。

自分と仲間を闇から守るための力をつけていきましょう。この授業はそのためのものですから。」

その後は今年の授業の計画を大雑把にだが説明された。

細かいところは各個人に合わせて調整するらしいので未定もあるということであった。

「もうすぐ授業も終わりですね……。最後にお知らせをして終わりましたでしょうか。

もつと力が欲しい、授業だけじゃ満足できないという人は特別に実習をしましょう。

今は少しでも力があつて困ることはないですから。

詳細は希望人数によって変わるとは思いますが、魔法省の闇祓いや腕利きの魔法戦士を講師として招くこともあると思います。

これでも私、魔法省ではそれなりの立場ですので伝手も多いのですよ。それに魔法省にも今の体制に不満を持つている人は多いのでホグワーツに協力したいという声も表立っては無いけどかなりの数になっているのです。

もちろんあの方にも協力してもらいますので魔法省以外からも協力者は来てくださると思います。

希望者は今回の授業までに私までお知らせください。はい、これにて授業は終了です。」

そこで終了のチャイムが鳴った。

初回の授業はハーマイオニーでさえ認めざるを得ないような隙の無い内容であった。

各自の適性をまずは見極め、それに合わせた授業をするという計画。

それに追加で色んな経験者からの手ほどきもできるというのだ。

過去四年間の授業と言えば、ニンニク臭が酷いおどおどした授業、詐欺師による芝居の練習、まともだと思ったら狼人間だった、過激すぎる授業内容ではあったが力はついたのに寄りにもよって死喰い人<sup>デスイーター</sup>と散々だったのだ。

それに反して今年の授業は期待ができそうだと皆が思っていた。

カエル顔や魔法省というのはまだ多少気にはなるがそれでもホグワーツは彼女を受け入れ始めていた。

~~~~~

「リリ、特別実習はどうするの?」

「……正直そんな余裕はないかなって。皆はどうするの?」

初日の夕食後にリリハーレムはグリフィンホール談話室に集まっていた。

もはや女子たちに寮の垣根はなくなりほぼ誰でも自由にどの寮でも行き来するまでに開放的になっていった。もちろん教師には秘密ということになっているが寮監やダンブルドアは気づいていて放置しているのだった。

「私たちは参加したいと考えているわ。やっぱりリリを護るのに力があるに越したことはないし。」

「そうです！　そうなのです!!」

ハーマイオニーの言葉にジニーの叫びが加わる。

そこに更に話を聞いていた女子たちも続々と参加の表明をし始める。

「みんなが張り切っているなら、私も頑張らなくっちゃね！　皆の事は護るなんて言っておきながら私だけが弱いままだなんて笑い話にもならないもの。」

リリの参加宣言。それだけで特別補習の女子参加率がどうなったかは言うまでもないだろう。

「あ、ついでに頑張った娘にはご褒美もあげようかしら。私の為なんて言ってくれているんだからこのぐらい私もしくっちゃね。」

それを聞いて盛り上がりたらないはずもなく翌日にはアンブリッジの元に女子生徒が参加表明で列を成すこととなる。

特別補習、そのまますぎる名称だとはつまらないということで『リリちゃん絶対護る隊』などと呼ばれることになった。

もちろん男子には不評だったが、黙殺された。

49. 少女進化中

授業が始まってからは忙しくも充実した日々が続いていた。

どの授業も初回から変わらなず難しくそれでいて大量の宿題が生徒たちを襲う。

リリも毎回のようにはハーマイオニーやパドマ、ダフネを頼りにしていたが一人でも頑張るようにと週に一回は図書室で一人だけの力で戦^{勉強している}っている。

そのハーレムメンバーがいない隙にレイブンクロー生や成績上位者がリリとの距離を縮めようと計画をしていたが、リリの一人でも頑張れるようになりたいという思いを尊重してぐつと我慢していた。

リリがいる日は司書のピンスの機嫌を損ねないように静かにしながらもリリの事を見守る女子たちで図書室はいっぱいになるのだった。

それ以外のホグワーツの外では大きな動きなどは起こっていない。

情報漏洩の恐れがあるためふくろう便や暖炉を使った会話などは使えないが、キャロルの魔法具やロザリンド愛人ネットワークからアンブリッジに届けられた情報からは闇の勢力は未だに目立った動きは無いとの事だ。

それが逆に不気味ではあるが、リリ達は学生なのだからそつちに集中するようにと口

ザリンドとレイラからの伝言でとりあえずは気にしないことにした。

そして最後に特別実習はどうかと言うと、予想以上の好評であった。

あまりの申し込み人数に大広間を使っても面積不足であったため、クイディッチ競技場を臨時で使用することになった。

ホグワーツ生は直接ダブルドアやハリー・ポッターの口から例のあの人の名を聞いているのだ。不安も相応に抱えるのも当然というもの。

例えリリアン・リンリーの存在が無くとも特別実習は満員近くになったことだろう。

初回到アンブリッジが招集したのは男女3人、合計6人の闇祓い。

リリアン・リンリーがいるということもあつて男女を分けることは必然であつた。

1〜3年生、4〜6年生、そして7年生に分けて闇祓い3人がそれぞれが指導に当たる。

最初は講義からだ。これには実戦をさせると不満の声も多かつたが、闇祓いの一人、いかにも歴戦の戦士と言つた風貌の男が黙らせる。

「馬鹿者！ 何事も知ることが最初だ。お前たちは知らない魔法をいきなり使えるのか？」

敵が使う闇の魔法を知らないで対応できるのか？ 知は力だ！」

この一喝で静かになった。

低学年が教わるのは基礎の重要性。

それを叩きこまれた後に必須の魔法の習得。その後魔法を使うのに慣れるということだ。

まだ若い彼女たちは授業以外に魔法を使う機会はない。

まずは多く使ってコツをつかむことが重要だ。

講師の老女は子供たちの間を見て回って小さな、しかし今後の上達の妨げになる癖を修正していった。

「その魔法はもつと杖をしつかり振るうと良いよ。そう……上手上手。ゆっくり焦らずに。」

高学年は基礎の復習とより高度な魔法、そして個人の適性に合った魔法の習得。

そして何より力を入れたのは体力づくりであった。

これには先ほどの講義の時以上に大きな不満の声があがった。

だが、そこで講師たる若い女性の闍祓いがこう言った。

「体力があるっていうのは良いことよ。だってリンリーの女になるなら相手をする体力が必要なものね。すぐばてちゃったら次の人にいつちやうもの。」

これには効果バツグンであった。

リンリー家の人間は総じて夜の体力だけは常人の何倍もある。

ロザリンドなど毎晩のようにメイドと嫁を相手に出来るほどだ。

それはともかく、体力は在るに越したことはない。

呪文を言葉に出す、避けるなどの動作、逃走に追跡、闇の魔法使いとの戦闘において体力を使わない場面など無いのだ。

最上級生はバランス良く高度に高めたオールラウンダー、もしくは一点集中型に振り分けられることになった。

オールラウンダーは攻撃・防御・回避・逃走・索敵・治癒全てを使えるどの役割でもこなせる無駄にならない人材だ。

ある程度の水準であればほとんどの人間が一通りを使えるためこの立場になれるが、全てを高水準でこなせる者はそれだけで敵対勢力の脅威になる。

全てを極めた存在こそが両陣営のトップ、アルバス・ダンブルドアとヴォルデモートなのだから。

それに対して一点集中型は役割こそ限定されるが他の誰にも代えられない存在だ。こちらはリンリー家のメイドのキャロル・フォードが該当する。

火も出せない、治癒もできない、初歩的な失神呪文やステューピッド武装解除だつて満足に仕えない。それでも空間系の魔法だけを極めたキャロルはそれだけで強者たりうるのだ。

特別実習の最後はどの学年も模擬戦を一戦行う。

やはり講義や体力づくりなどよりは実際に杖を使い、戦わなければ解らないものがあるのだ。

さて、リリアン・リンリーのハーレムたちはどのような力をつけていったらだろうか。

~~~~~

ハーマイオニー・グレンジャーは日ごろの勤勉さもあつてほぼどんな魔法でも使うことができた。

その中で特に防御系の魔法に対して高い敵性を示していた。

それは彼女の心の中では愛する存在を護りたいという強い想いがあるからに他ならない。

「プロテゴ・マキシマ！」

彼女が使った最大の護り。それは見事に闇祓いからの呪文を防ぎきっていた。

無論、相手が学生ということもあつて全力ではない。それでも生半可な盾では防げない代物だ。

ハーマイオニーは確かな手ごたえを感じながらより明確にリリを護る盾を構築していく。

パーバティ・パチルはハーマイオニーや双子の妹ほど魔法の腕は高くなかった。しかし、癒し手としての才能の片鱗が見え始めていた。

最初は何となく魔法の暴発で怪我した仲間に手当として使った時だ。

普通に治療はされたが、相手がリリであったなら？ そんな考えがふと頭によぎった。

「治療する相手をリリだと思い込んだら圧倒的に効率が上がったのだ。」

パーバティは確信した。自分にはリリから全ての傷・痛み・呪いを取り除くための力がある、と。

クラウドディア・エンジェルはもう道を決めていた。

師匠のキャロルほどではないが高い空間認識力とそれを活かすセンス。

それを鍛えられたのだ。更にはキャロルとは違い他の魔法も人並みには使うことができる。

姿くらし、空間固定による防御、衝撃をぶつける攻撃。

彼女は既にホグワーツの学生の中でもトップクラスの實力を誇っていた。闇祓い達でさえ逆にコツを聞いているぐらいである。

パドマ・パチルは姉とは違う道を進もうとしている。

彼女が持っていた才能、それは精神に關するものだった。

呪いは物理的なものだけではない。

許されざる呪文の服従インベリオの呪文を代表に、錯乱コンファンド、忘却オブリビエイト、開心レシリメンスと精神に影響を与える魔法は多く存在する。

パドマはそれらに対する適正と耐性に優れていた。

自らは何者にも操られることなく主の心を護る。そう誓うのだった。

ダフネ・グリーングラスは決意した。

ハーマイオニーが体を護る。パーバティが癒す。クラウディアが逃がす。パドマが心を護る。

ならば自分はリリに脅威を与える存在、その悉く殲滅しよう。

通常の学生が使える武装解除エクスペリアムスや失神ステューピファイだけだけでなく、もつと苛烈で敵を倒すためだけの呪いが必要だ。

この考えは闇の魔法使いに近づくものかもしれない。

それも当然かもしれないとダフネは心の中で自嘲した。何せ自分はスリザリンに選ばれたのだから。

だが、そんなモノはリリアン・リンリーの前では何の意味もない。

闇の魔法使い、マグル、純血、そういつたこと以前に己は女なのだ。

リンリーを愛し愛される存在なのだ。闇の魔法など怖くはなくなった。

ジニー・ウィーズリーが手に入れた力、それは彼女の願望からにじみ出てきたものだ。彼女の願いそれは何時いかなる時も主たるリリアン・リンリーのそばに居ること。

朝起きた時から食事、排泄、入浴、就寝にいたるまで全ての時間を。

つまるところハーレムの一員でありながらストーカーをしたいと思っているのだ。

その心に秘めた願望から身に付けた力は透明化に始まり、気配遮断、周辺の認識強化・探査といったものだった。

これらは勿論有事の際にも有効だ。透明かつ気配を殺したままなら奇襲を可能とする。

周囲の認識と探査を行えば接敵を防いだり逃走も可能となるだろう。

本人の欲望から出たことだったが結果的にはリリの助けにもなっているということ

はちゃんと主人の事も想っている証拠であろう。

ハーレムのメンバーはそれぞれが得意とすることが何一つ被らない結果だ。

それすなわち彼女らが協力すればそれだけで多くの事ができるということでもある。

こういう結果になったのも、やはりリンリーの呪いがなす結果だ。

リンリーの周りには自然とそういう風になるようにできている。

リリの母、ロザリンドのメイドたちも得意分野はまるで違い、それぞれが協力して主を護っている。

恐らくリンリーの呪いがそう望んでいると思われるが詳しいことは分からない。

もちろんハーレムだけでなく女子たちは総じてリリへの想いから力量を順調に上げて行っている。

ちなみに、リリアン・リンリーはと言うと特に何に秀でるといいうことも無く平均的な学生であった。

## 50. 幸せな夢

1995年度の hogwarts が始まって数カ月が過ぎようとしていた。

今年は昨年のような大きなイベントや脱獄囚や秘密の部屋などの事件も起きておらず平和な日常が流れていた。

だが、その裏では不死鳥の騎士団、闇の帝王、魔法省と言った様々な陣営の思惑が錯綜し、蠢いていた。

hogwarts 校長室。そこに集まった者たちは各々が手に入れた情報の交換を行っていた。

集ったのは四人。

部屋の主であるアルバス・ダンブルドア。

副校長にして不死鳥の騎士団の団員でもあるミネルバ・マクゴナガル。

騎士団所属かつ闇の陣営にもスパイとして潜り込んでいるセブルス・スネイプ。

そして魔法省がスパイとして送り込んだことになっている闇の魔術に対する防衛術の教師のドローレス・アンブリッジ。

「それでは、まず私から。魔法省に動きがありました。どうやらファッジは相当に焦っているようですわ。ホグワーツ高等尋問官なる頓珍漢な役職を私に与えて徹底的に粗を探すつもりの様です。それと噂では私の他にも幾人か派遣を検討しているとか。これに対しては私の方でこちらの協力者が潜り込めるように調整しておきます。

他、独自の情報源からでは闇の陣営は様々な方法で力を蓄えているとか。

闇の種族、魔法具、古の呪文、などなど。

それと何かしらを探しているような動きもあるそうです。

私からは以上になります。」

アンブリッジが言い終わると他の三人はこの女が味方で良かったと思っていた。

情報とは力だ。

闇の勢力と比較すれば危険度は低いとはいえ妨害をされれば何かの拍子で、どんな原因でこちらが不利になるか分からない。そんな相手の情報を入手できるのだ、助けにならないわけがない。

それに独自の情報源という騎士団でさえ難しい情報を手に入れられるのだから非常に強力な味方だ。

「それでは次は我輩が。闇の陣営に対する情報はほぼ間違いないかと。闇の帝王は今ほ潜在で力を蓄えつつ、死喰い人<sup>デスィーター</sup>どもに何かを探させている。それが何かまでは不明だ

が、非常に重要視しているようだった。それと Hogwatts に対しては思ったよりは感心が無いようですな。」

「最後にわたくしからの報告です。騎士団員が闇の勢力との接触した回数は前回の戦争時と比較にならない程少ないままです。今は各地の異常など地道な調査を続けています。」

それと……。例の二人についてですが、やはり信用しきれないという声が多いです。「ダンブルドアは三人の報告を聞いてしばし考えを巡らせる。」

「ふむ……。ミネルバよ、今の情報を騎士団員に伝達しておくれ。それとわしはあの二人の事は信じておる。皆にも今一度そう伝えて欲しい。今は皆が一つにならねば。」

セブルス、そんな渋い顔を戦ではくれんか。お主には引き続きあやつの信を得るよう行動を心がけてほしい。

アンブリッジ先生も今までと同じように注意深くお願いします。」

「ダンブルドア校長は闇の帝王が探しているモノに心当たりはございますの。」  
アンブリッジの鋭い目がダンブルドアを見る。

釣られてマクゴナガルとスネイプもどうなのかと尋ねるように見えてくる。

「……可能性の段階じゃが、いくつか予想をしておる。」

じゃが、これはそうやすやすと話して良いものでもない。



アンブリッジ先生、秘密裏で良いので魔法省の警備を強化することは可能かの？」

「なるほど。闇の帝王の狙いは魔法省内部にあるかもしれないと。分かりました、できる範囲でやってみますわ。他には何かございますか？」

特に他に特筆することはなく、ダンブルドアを除いた3人はそれぞれやるべきことを成すために校長室から退室していった。

ダンブルドアはアンブリッジ達が退室した後も一人思案を続ける。

不死鳥の騎士団は今のところは人的被害もなく、10数年前の戦争時とは比較にならないくらい平和だ。

だが、任務が全てうまくいっているわけではない。

闇の勢力に先手を打って巨人や人狼を引き込めないかと交渉しているが成果はでない。いやい。

ハグリッドの巨人の説得は失敗だった。異父弟のグロウプのみが着いてきたがある意味厄介事が増えただけだ。

人狼の方はまだ交渉が続けられているだけ希望があるが、ルーピン個人についてはよろしくない。

半分狂乱状態のシリウスと合わせて騎士団の中でさえ半信半疑なのだから仕方がない。

(やはりもう少しゆつくりと情報を皆につたえるべきじゃったかのお……。)

更にアンブリッジとスネイプの二人からもたらされた情報、二つの角度から得られた情報からやはりヴォルデモートが必死になってまで、しかも秘密裏に何かを探している。

このことから例の運命を決めた予言であると確信する。

(やはり世界を救うにはハリーの力が必要になる。しかしどうしたものか……。)

運命に選ばれた子。英雄となるべき男の子。ハリー・ポッター。

そのハリーだがアンブリッジ主催の特別実習にも参加せず、閉心術の授業もさぼりがちになっている。

元々スネイプとは相性がいいとは決して言えないが、今回はそのスネイプからも心配されるレベルで明らかに精神状態が悪い。決してスネイプが悪いわけではない。

無理もないことかもしれない。

劣悪な環境で育ち、ホグワーツでは最初こそ生き残った男の子としてもてはやされたが、今ではただの一生徒だ。

ダンブルドアが思い描いたような活躍をすることもできず、それなのに困難だけが彼に襲い掛かる。

去年は最初の内は嘘つき呼ばわりだ。この時のハリーの精神状態は酷かった。

更には両親の仇の復活と悪いことばかり重なる。

誤解を完全に解かずしリウスとルーピンに引き合わせたのも失敗だった。

ダンブルドアがいくらか説明しようともその心から疑念と憎しみを消すことは出来なかった。

二人と出会った当初は呪いを放つほどだった。

両親の死の原因を作った脱獄囚とその仲間の裏切りの人狼。

ダンブルドアが説得しても効く耳を持たない。

(世界はままならぬ……。おちおちゆつくりする時間もないとは。) )

ダンブルドアはこれからについて計画を練るが嫌な予感を払しよくすることがどうしてでもできなかつた。

~~~~~

業務と任務を片付けてドロレス・アンブリッジはピンク色の自室に戻ってきた。

今日も激務、そして明日も、明後日も続くだろう。

それで構わない。

あの方とその愛娘を守るならば自身の疲労など、どうということはない。

やりがいがありすぎて日々が充実しつくしている。

心は毎日高ぶっているが、それでも体はどうしても疲れが溜まる。体力回復と夢見を良くする魔法薬を飲んでベッドに入る。

(夢の中で……あの方と会えますように……。)

~~~~~

夢を見ている。

まだ私が幼かった時の光景が目の前に広がる。私の住んでいた家、家族。

魔法省魔法ビル管理部という大して高くない役職に甘んじていた父。

マグルの母。

そしてスクイブの弟。

両親は毎日のように喧嘩三昧。

貧乏であつたから満腹の経験なんて皆無。

弟のせいでからかわれる毎日、容姿のこともあつて当然友達なんていなかった。辛かった。でも憧れの hogwarts に入學すれば何かが変わるのだと信じていた。

憧れだった hogwarts に本当の私の居場所は無かった。

私はスリザリンに選ばれた。

聖28一族や純血、貴族のお金持ちが多く集まるスリザリン。

そんなところでは貧乏、穢れた血が入った半純血、親族からスクイブが出た家系なんてものは汚物同然だったのだ。

私は自分を偽ることしか道が無かった。

私は純血。

私は貧乏ではない。

家族は全員立派な魔法使い。

虚偽だけが積み重なっていく。

魔法使いの娘である私がホグワーツに行ってしまったことで魔法が使えない母と弟はマグルの世界へと嬉々として行ってしまった。

私の嘘を現実が後押しするように、私の家族は魔法使いの父だけになった。

嘘を守るために、私は歪んでいく。

批判的、攻撃的、差別的に。

グリフィンドールを批判し、マグル生まれを攻撃し、穢れた血と差別する。スリザリンでは一応の場所を得ることができた。

それでも仲間とも呼べず友、恋人などとても……。

夢見たホグワーツは所詮夢でしかないのだと諦めて4年の時が過ぎていた。

その次の年、私は光を見た。

夢の中でさえその少女は光り輝いていた。

私、いえホグワーツにいる全ての女はそう感じていた、確信していた。

本当に光を放っているわけではない。だがこの目が、体が、細胞の一つ一つがあの少女からの光を感じていた。

その光輝く少女と目が合った。

醜いこの顔だ。きつと目を逸らされるに決まっている。

でも……そんなことは起きなかった。

可憐な少女と妖艶な美女と神聖な女神を合わせて三乗したような笑顔を向けて下さったのだ！

それから先は組み分けの儀式も料理の味も何も覚えていない。

気が付いたら自分の部屋のベッドの上で翌朝になっていた。大体の女子たちは同じことを経験しようだが。

次の日からホグワーツの支配者はその少女、ロザリンド・リンリーとなった。

女はほとんど彼女の愛に溺れ、男たちは近寄ることもできない。

私はそのどちらでもなかった。

嘘で固めたこれまで、そしてカエルのような醜い容姿。最初に笑いかけられたのも目の錯覚だったのかもしれない。そう思うと怖くて遠くから見つめることしかできないでいた。

どこかで彼女と幸せな日々を過ごせるなんて夢を見ながら日々が過ぎていった。

そんなある日、先輩たちから呼び出された。

この人たちは名家の出だ。断ることもできず空き教室に連れて行かれた。

自分の嘘がついにバレたのかとビクビクしていたが、教室に近づくにつれ訳も分からず幸福な気分になっていく。

一人で入るように言われ恐る恐る入る。

そこにはロザリンド・リンリーが待っていた。

「よく来たな。会いたかったぞ。」

「え。ええ？ ……。あ、あのえつと！ ど、どういう……？」

混乱した。当然だ。彼女と一対一で会えるなんて言う名誉を貰える人間なんてほんの一握りぐらいだ。その筆頭のレイラなんて止められなければ今頃禁呪が1000ダースは放たれていただろう。

「ん？ お前、私の事ずつと見てただろう？ なんで近づかないのか気になってな。」

「ど、どうしてなんで気づいて……。」

「当たり前だろ。女の視線は1000までなら同時に感じ分けられるぞ。それでどうしてだ？」

そう言いながら一步一步近づいてくる。体は言うことを聞かず足がピクリとも動かない。

黙っていると目の前に女神がいた。

そして抱きしめられる。

「ほら、話せ。何か理由があるんだろう？ 全部吐いてしまえ。私はどんな女でも愛してやる。」

限界だった。限界だった。げんかいだった！

年下の少女に秘密も隠してきた想いも何もかもぶちまけていた。

あの方は黙って抱きしめ続けてくれた。

「スツキリしたか？」

「はい……。すいません……。」

全てを終えて恥ずかしくなってきた。

逃げようとも考えたが、今の心地よさが逃げる意識を奪っている。

「まったく血筋やら金やらマグルやら顔やら……。そんなことで女から距離を取られて



いたなんて私もまだまだだな。」

ふっと息を吐いてロザリンド様は私の顔をしっかりと見て言った。

「胸を張れ。貧乏がどうした。マグルの血？ そんなの私にだつて入っている。女は女であるだけで素晴らしいんだ。何も臆することなんて無い。何か文句がある奴がいるなら私が許さん。」

「でも私、あなたみたいに美しくない！ こんなカエル見たいな……。」

「あゝごちやごちやうるせえ！」

ロザリンド様の顔が一気に近づいて夢だというのに血圧が上がって夢から覚めてしまふところだった。

そのまま私の口が蓋をされる。

「私からのプレゼントだ。もつと自信をもつて励めば追加もありだ。次はこそこそしないで堂々と私の前に来いよな。」

ロザリンド様は呆けた私を残してすたすたと教室を後にしてしまった。

この瞬間から私は生まれ変わった。

その日から秘密を隠さず堂々と生きるようになった。

勉強に励み、ありとあらゆる技能を学び、あの方の力になるため力をつけていった。

ホグワーツの生活も白黒の薄暗いものからカラフルで楽しいものに激変した。

魔法薬のおかげで夢でその楽しい青春を何度も繰り返してみている。卒業後に魔法省に入ってからそれもそれは変わらない。

今ではロザリンド様の愛人たちを管理運営を任される立場にもなったし、魔法省内部にも私の手が広く回っている。

そのおかげで愛をいただく機会も何度も得ることができた。

正妻やハーレムの一員になることはなかったが、それでもあの方の恥にならないような生き方をしている自信はある。

今回の件、ホグワーツへの就任も直々に名指しで愛娘の為にと依頼されたのだ。誇らしい。ああ、私は幸せだ。

あの方に出会って、運命が変わった。

いや違う。あの方に出会う運命だったのだ。

……そろそろ目が覚める。

過去の楽しい時間は名残惜しいが現実のロザリンド様のためにも頑張らねば。



## Casel. 新入生

その新入生は廊下を急いでいた。

新入生にはよくあることだが、次の授業の場所を覚えられずに焦って道に迷ったのだ。

(うゝ……。こんなんじやまた笑われちゃう。)

知に富んだレイブンクローに選ばれたというのに自分はなんでこんなにもどんくさいのだろうか。

そんな事を思いながら廊下を速足で進む。

焦っていたし、新入生だからまだあの気配に対して敏感になっていないのが災いした。

廊下の曲がり角で新入生は人とぶつかってしまった。

相手は上級生だろう。ぶつかった拍子に尻もちをついてしまう。

「わっ！ ビックリしたあ……。大丈夫？」

「あ、はいっ！ 大丈夫です！ ごめんなさい、前を見ていなくて……。」

(良かったあ……。優しそうな女の人だ。怖い男の先輩じゃない。……それにしてもいい香り……。)

差し出された手を取ろうと顔をあげる。

そこにあつたのは言葉では言い表せないものだった。

美人、美女、美、天使、女神、楽園、極楽、天国、そんな陳腐な言葉じゃ表現できない存在が目の前にいた。

もちろん、リリアン・リンリーその人である。しかも珍しいことに一人だ。

彼女の周りにはハーレムたち以外にも誰かしらの女の子がいるのが常なのでこれは非常にレアな状況だ。

「……あ、う、あ……。くく!!」

少女も組み分けの儀式の時からその存在を認知していた。

こんなにも惹かれる、欲する者がいるとは夢にも思っていなかった。

今までに出会ったどんな男の子よりもカッコイイし、どんな女の子よりも綺麗でかわいいい。

遠目から見ただけの、自分などが近づける人では無いと思っていた存在が目の前に！

色んな感情がごちゃ混ぜになって身動きどころかまともに声を出すこともできない。

「力を抜いて、はい。」

気が付けば手を握られて立たされていた。

しかも乱れた髪を手漉きで治してくれているではないか！

(顔が近い……！ 頭きもちいい……。幸せ……。っ!?)  
「!! えっ!? そんな……。」

リンリーに慣れていない、あまりにも急激な魅了呪いは体に毒でもある。  
幼い少女にはリリとの急な接近は負担をかけていた。

体力的な消耗はない、むしろ快感すぎるのが問題なのだが。

「あ、ああ……！ あの。私、恥ずかしい……。見ないでくださいー！」

少女の股間から足を伝って体液が滴りおちる。

スカートの下着は既にぐちゃぐちゃだ。

少女は粗相をしてしまったと羞恥で真っ赤だ。もちろん違うのだが、まだ入学したての11歳になったばかりの幼い子供に性的な興奮を認識しろと言うのは酷というものだろう。

恥ずかしさのあまり座り込んでしまう彼女を抱き上げて運びりり。

「大丈夫よ。それはあなたが女の子だっていう証拠なんだから。さ、一緒にお風呂に行きましょう。」

お風呂で、もちろん全裸で、二人つきり。

体の隅々まで洗われ、何もかもが初めてで未知の興奮や感情もいっぱい体験した新入生。

お風呂から上がる時にはすっきり、リリの虜になってしまっていた。

その日、少女は初めて色々知った。具体的には女体についてとか。

結果的には授業をさぼったことになってしまった彼女は同級生や先輩に問い詰められることとなったが、事の顛末を洗いざらい話すと逆にリリと一緒にのお風呂を体験したということで一目置かれる結果になった。

ついでに言うならば新入生にいきなりあんなことをしたので正ハイマイオニー妻から怒られるリリであった。

~~~~~

Case 2. お姉さま

ホグワーツ7年生。

それはホグワーツにおける最上級生。この年をもって卒業するということ。

それすなわち、ホグワーツの女子にとってはリリアン・リンリーと過ごせる最後の年ということの意味している。

ハツフルパフ生のフェリはそのことばかりを気にしていた。

自分もリリが入学してからの5年間で一緒にいる機会もそれなりにあったし、デートもしてもらった……もつと過激な事をしてもらったこともあった。

だが、ハーレムやお気に入りと比べればそれは少ないと言わざるを得ないものだ。

このまま卒業してしまえば、記憶にすら残らない数多い女の一人として消えていくだろう。

「はあ……。」

授業中だというのに溜息が漏れる。集中力を欠いた状態は魔法薬学の授業では致命的だ。

「馬鹿者！ 鍋から離れんか！」

「え？」

スネイプの一喝への反応も遅れ、自らの不注意によって鍋から発生される突風で吹き飛ばされてしまった。

気を失う前に思ったのは『こんな私じやりりちゃんはきつと愛してくれない。』という死にたくなるような結論だった。

目を覚ます。見覚えがあるような無いような天井を目にしてぼんやりとどうなったのか頭を働かす。

(たしか……。魔法薬の授業で……。)

頭をぶつけたのか、やけにフワフワと意識が定まらない。

後頭部があつたかくて気持ちがいい。

医務室の枕はこんなにも高級品だったのか。

「あ、目を覚ました？」

ここは医務室ではなく極楽だったのか。

自分は今、リリちゃんの膝の上に頭をのせている。膝枕である。

きつとこれは夢だ。そうに違いない。本当の私はまだ医務室で平凡な枕に頭をのせてこの幸せな夢を見ている。

「クラウディアから聞いたわ。あまりボーつとしちゃダメよ。……よし、大きな怪我もなくて良かったわ。」

体中を弄られて調べられる。

ああ……。夢でもリリちゃんは優しい。

夢なのだからと大胆にいこう。よし！

「リ、リリちゃん！ 抱いて！ いえ、抱かせて！」

「ふふ、今日は大胆ね。さあ、好きにしていいわよ。」

リリちゃんはベッドに無防備に横になって腕を広げて誘惑してくる。

（ほああああ！ いいの!? 流石夢！ 良いことしか起きない！）

服を脱がせていく内に、夢にしてはやけに感覚がはつきりしている気がしてきた。

（あれ……？ 夢じゃない？ いえ女は度胸！ 行くつきやない！）

夢だけど夢じゃなかった……。

でも満たされて気持ちがいいからどうでもいいやと幸せな一日を過ごしたのだった。

~~~~~

### Case 3. 同級生

リリアン・リンリーと同学年の5年生が一番長く、そして濃くりりと一緒にいる学年だ。

もちろん影響を一番強く受けている。

その内の一人、スリザリン生がリリに向けて一直線に廊下を進んでいた。

鬼気迫る表情でリリに近づいてきたのでハーレムやその周囲は流石に訝しむ。

それをリリはやんわりと抑える。

「リリ……。何も言わずに私を抱きしめて。」

彼女は聖28一族では無いにしろ例のあの人に賛同する一族の出身で家族や心無い

男子どもからのストレスでどうにかかなりそうだった。

リリは何も言わずに力の限り抱きよせた。

「うう……。リリ、リリ……。」

心が溢れ泣き出してしまふ。それでもリリは黙って抱きしめてくれている。

廊下のご真ん中でこんなことをしているのだ。女子からは嫉妬と羨望の目で、男子からは忌避と好奇の目で見てくるだろう。

でもそんな視線を遮るだけの優しい目が私の事を見てくれていると少女は感じていた。

今、この瞬間だけはハーマイオニー<sup>正妻</sup>でもハーレムでもない、私だけの事をこの愛する人は見てくれている。それだけで幸せだ。

~~~~~

Case 4. 人外

リリーに惹かれるのは魔法使い、人間だけではない。

性別がある、すなわち雌であるならばどのような存在もそれから逃れることは出来ない。

ホグワーツには禁じられた森がある。その名の通り生徒の立ち入りは禁止だが、森からリリを求めてくる動物を封じることが不可能であった。

森のそばには大きな柵で囲まれたスペースがある。

そこにいるのは巨大な魔法生物、ドラゴンであった。

過去に違法な取引で半巨人に卵の状態で連れ去られた可哀そうな子だ。

雌であったためリリに懐いているので禁じられた森のそばの一角で生きることが許されたのだ。もう今年で5歳になる。立派に成長しすっかり大人の仲間入りだ。

週に一回はリリが触れ合いに来てくれる。生まれたばかりの頃からリリに調教されているのですっかり大人しく育っている。

「さあ、行くわよノワール！」

慣れた様子でドラゴンの背に乗り空を翔けるリリ。箒などよりよっぽどこつちが気持ちがいい。

ドラゴンもリリに負担がならない速度でゆっくりと城を旋回して戻ってきた。

戻ると、リリの気配を感じてユニコーンや多種多様な生物の雌が集まりだしてきた。種族の壁などリリリーの呪いの前には無力。

捕食被捕食の関係、天敵同士など無視して集まる。

リリに取ってはアクロマンチュロなども毛嫌いな要素が無い。雌であるだけで良いのだ。

最後にモフモフの毛を持った種族に囲まれて堪能して次の場所に向かった。

リリが次に訪れたのはホグワーツの地下深く。

過去には秘密の部屋などと言われた場所だ。

そこには巨大な蛇、毒蛇の王とも言われるバジリスクが眠っていた。

(来た！ 妾の主！ いや、まだ動くな。寝たふり、寝たふりだ。さあ主よどう動く!?)
 リリはその巨体に触れ優しくなでる。

(ふうう！ 触れられている！ いい香り。暖かい！ もう少しこうしておくか？ いややはり目覚めてこちらからも舐めるべきか？ ぬおおおおお悩む！)

月に一回のスキンシップだが、バジリスクは毎回いろんなシチュエーションを楽しんでいた。今回は寝たふりをしたらどう反応するか楽しんでいる。

結局は自分からも触れたい衝動に負けて起きて頭の上へのせたりして楽しんだのだった。

ちなみに通訳のハリー・ポッターがいなくとも簡単な意思疎通ができるようになってくる。

~~~~~

### Case 5. 嫁

いつもの様に一緒にベッドで寝ているリリとハーマイオニー。

先に起きたハーマイオニーが準備を進める。

しばらくしてまだ時間には余裕があるがリリを起こす。

しかし……。

「むう〜いやっ！ 今日には休む！」

連日のOWL対策でとうとう疲れの限界が来たのか幼子の様に駄々をこねるリリ。

そのままハーマイオニーをベッドに引き込んで力いっぱい両手だけでなく両足をも絡めて渾身のハグだ。

「もう……。今日だけよ。」

ハーマイオニーはリリが限界に来たことを分かってしまったので今日は一日休講になると悟った。

リリは決して勉強が嫌でこうなったわけではない。

どちらかと言うと勉強のせいで女の事触れる機会がほんの少し減ってストレスになっただのだ。

「さて、一日休講にするんだからその埋め合わせはしてよね。」

「もちろん。溢れるぐらいに注いであげるわ。」

昨夜もしたけれど、と言うか毎日のようにしているが飽きる気配など微塵もない。

ここには二人きり。

数分後には一糸まとわぬ姿の少女がベッドの中で交わっていた。

ちなみに、リリとハーマイオニーの姿が無いことから察した残りのメンバーも午後

は合流して必要の部屋のキングサイズのベッドでお楽しみになった。

## 51 (裏)・澱み溜まり濁る心

夢を見ている。僕のこれまでの人生という、15年間の長い悪夢を。

僕の名前はハリー・ポッター。

生き残った男の子。運命に選ばれた子。英雄。

そんな風と呼ばれていたのが懐かしい。どのくらいの間そう呼ばれていただろうか。今ではどこにでもいるありふれた一人の魔法使いの子供だ。

僕が育ったダーズリー家は控えめに言つて屑だった。

伯父のバーノンと伯母のペチュニアは何かあるたびに僕の事を怒鳴り、時には殴り、自室と言う名の物置から出してもらえないなんて常だ。

食事も最低限、ブクブクと太る恥ずかしい従兄弟のダドリーとは反対に僕はいつもヒヨロヒヨロのガリガリだった。お腹いっぱい食べたことなんて無かった。

ダドリーとその取り巻きに殴られた回数や両手足の指で数えても十分の一にも満たない。



両親が死んだことも笑われた。馬鹿な親だと、死んで当然だと。

悔しかった。憎かった。

でも僕には力が無かった。

『お前は正しい。そんな愚かで下らんマグルなぞ生きている価値など無い。憎むがい。』

僕は魔法使いだった。

両親は馬鹿なんかじゃなく立派に戦って僕の事を護ってくれたんだ。

それに僕は皆が知っているほど特別だと知った。

初めて認められた。気分が良い。

ダーズリー家では暴力、暴言。学校では虐めに無視。こんなにも僕の事を見てくれるなんて想像でできなかった。

魔法使いの学校にも行けるし、両親は遺産を残してくれていた。これであの家からさっさと出ていける。

『そうだ。魔法使いは素晴らしい。その尊い血は価値がある。』

初めての友達ができた。

ロナルド・ウィーズリー。ロン。

何も知らなかった僕に色々と教えてくれた。友達というのを想像の中でしか知らなかったけれどこんなにも心地いいものだったなんて。

『それは幻想だ。よく見ろ、いや思い出せ。そいつはただお前の名声のおこぼれを狙う卑しい奴だ。他者を信じるな。』

授業は難しかったり、楽しかったり、嫌だつたりと色々だったがクイディッチの寮代表、しかも花形のシーカーに選ばれて順風満帆だった。

……でも、どこからかおかしくなり始めた。

あの嫌みなマルフォイと決闘をすることになった。リンリーとか言う異常な女と一悶着あったが、あの憎たらしいマルフォイの顔を歪めてやれると考えると良い気持ちになつて来る。

でも罨にかかつてグリフィンボールは大量の減点をくらってしまった。

その日から僕に対する目は変わっていった。キラキラした目で目ていたのが蔑むよ

うな眼に変わった。

ハロウインでまたロンがリンリーのお気に入りのお気に入りのグレンジャーと揉めた。

その時に僕はロンの事を見捨てて逃げてしまった。

後でロンには謝ったが、しばらくぎくしゃくしたものになってしまった。

ロンが悪いのになんで僕がこんな気分になんてさせられているんだ？

『お前は悪くない。だが愚かな者を友だと思ったのは悪い。所詮はお前を見ていない、お前の名にしか価値を感じていないからそうなるのだ。他の奴もそうだ。誰もお前など見てはいない。もつと正直になれ。』

クイディッチ最初の試合は思い出したくもない。

ニンバス<sup>くそ</sup>2000<sup>冊</sup>が突然いうことを聞かなくなつて空中で振り回されるだけになつてしまった。

周りからの評判を戻すために僕の力で勝たなくちゃいけないのに！

結果を言えば……僕は不要だった。

スニッチの点数を上回る点を僕がいなくても取つたのだ。

僕は結局、箒に振り回される、名前だけで選手に選ばれた奴と言われることになった。

『お前は悪くない。その鬱憤は正しい。考えるのはそれを誰に向けるかだ。お前は どうしたい?』

ハグリッドが逮捕された。

一緒に育てていたドラゴンの存在がバレたのだ。

僕らにもマルフォイのせいで罰則が言い渡された。また僕の価値がなくなったように感じた。最早見向きもされていない。

罰則は禁じられた森の調査。よりにもよって僕の事を嫌っているスネイプとだ。

そこで僕はあいつに出会った。

そしてハグリッドから聞いたニコラス・フラメルの名や色々な出来事からホグワーツに隠された賢者の石をあいつ、ヴォルデモートが狙っていると確信した。

この時僕が想ったことはヴォルデモートの復活を阻止することでも、両親の仇を取ることでもなく……僕が石を守ったら皆が認めてくれるということだった。

そしてそれは成功した。やった！僕はやり遂げたんだ！ダンブルドアも褒めてくれた！

グリフィンドールは寮杯を手に入れたし皆僕の事を見直してくれたはずだ。



の怒りは正当だ。その怒りを忘れるな。』

二年目。

ホグワーツに到着することから失敗続きだ。

訳の分からない屋敷しもべ妖精のせいで監禁されるだけならまだしも、ホグワーツに行けないかもしれないと焦った僕たちは違法な手段で来てしまった。

最悪なのはホグワーツで一番嫌いなスネイプに見つかつたことだ。

その後もスリザリンの怪物のせいで、ただ蛇語を使えるというだけで僕は非難されつぱなしだ。信じてくれているのはグリフィンボールの一握りだけ。

クイディッチも女にさせられたマルフォイに負けるなんて結果しか残せなかつた。

騒動を解決したのも他の人間。僕と違って学校の女の子からちやほやされているリリー。

僕は怪物の言葉を通訳しただけ。あれだけスリザリンの継承者だと騒いでいたのに解決したら僕は便利な翻訳機代わりだ。

『蛇語とはサラザール・スリザリンとその子孫だけが使える崇高な言葉だ。それを理解できぬ下等な者など理解する必要もない。お前は選ばれし者だ。』

~~~~~

またダースリー地獄家に戻ってきた。

おまけで醜いデブが追加された。僕が我慢できなくなったのは当然だろう。
僕は悪くない。

『その通り。マグルに魔法を使うことのどこが悪いのだ？ お前は悪くない。もっとやるがよい。』

三年目。

吸魂鬼デイメンターが嫌いだ。この世で最も嫌いだ。

父さんと母さんの最期の声が聞こえるから。

でも、その原因を作ったシリウス・ブラックへの憎しみはもつとずつと大きなものになった。

親友を裏切って何でのうのうと生きているんだ!? 死ね、死んで父さんたちに謝って

から地獄に堕ちろ！

父さんと母さんの悲鳴を聞きたくない一心で守護霊の呪文を父さんの親友という新しい闇の魔術に対する防衛術の先生のルーピンに教えを頼んだ。

あの時の交流は心地よかった。僕の事をすっかり見てくれて優しい大人。

まるで父親の様だと感じていた。

でも……僕の人生で最大級の誤りがこの頼みだった。

あの薄汚い人間もどきの人狼野郎は裏切っていた！ シリウス・ブラックと仲間だった！

あの二人が憎い。いつか報いを受けさせてやる！

その想いを力に変えるため必死に魔法を、相手を攻撃するための魔法を練習した。

闇の魔法もたくさん学んだ。闇がどうかあんな奴らに使って何が悪いのだろうか？

『そうだ。闇の魔法は決して悪ではない。闇の魔法は素晴らしい。それを認めない世がおかしいのだ。』

~~~~~



四年目。

ロンがクイディッチワールドカップに誘ってくれた。本当にいいやつだ。僕を外に連れ出してくれるんだ。とても便利でありがたい。

また事件だ。しかも容疑者扱い。

もう僕の事なんて誰も知らないのか……。

トライクイザード・トーナメント  
三大魔法学校対抗試合なるイベントがあるらしい。正直興味がない。

そんな事よりどうやってあの二人を見つけたかが大切だ。

それなのに運命は僕の事がとことん嫌いみたいだ。

何で？ 何で僕が選ばれる？

どうしてそんな目で僕を見る？ 裏切ったかのように、非難するように、なんでだよ

！

我慢の限界だった！ 減点がどうした、どうせ僕が寮杯を取っても意味ないんだろ？

だったら僕がどれだけ減点されてもどうでもいいんだろ？！

鬱憤に身を任せ暴れてやった。気持ち良かった。

『ほうら。魔法を敵に使うのは心地よいだろう？ そのままじっくり心の闇を解き放

て。』

医務室で目を覚ます。

暴れてスッキリしたのか心が落ち着いていた。自分ではないかのようなうだ。

それもどうでもいい。こんな運命から逃げられのなら潰すだけだ。

そうして突き進んだ先はあいつの復活だった。

あの場からどうやって逃げ帰ったかは今でも曖昧だ。

そしてまた裏切りだ。スネイプの事も合わせてダンブルドアは人をちゃんと見ているのか？

あの態度も僕を裏では殺したいんじゃないのか？ そうはいくか、死ぬ前に殺す。

……だめだ。殺すのはあの二人だ。

『そうだ。躊躇うな。敵は殺すのだ。そして、お前の敵は誰だ？』

学期の終わりにダンブルドアは団結が大事というが、こんな僕に対して協力する奴なんているのか？ 少なくとも僕が真に信じられる人は……いない。



何でダンブルドアはあいつらを信じた？

父さんと母さんの死はあいつらよりも軽いのか？

おかしいだろう!?! 無実？ 他に真犯人がいる？

何を言っているんだ!?! この世界は何時から都合のいい推理小説になったんだ!?!

世界一の魔法使いもそれを信じたのか!?! 他の騎士団だって疑っているというのに

!

『憎め憎め憎め。その憎しみが力になる。その力がお前の憎む相手を消してやる。』

バーノン・ダーズリーが憎い。

ペチュニア・ダーズリーが憎い。

ダドリー・ダーズリーが憎い。

セブルス・スネイプが憎い。

シリウス・ブラックが憎い。

リーマス・ルーピンが憎い。

『もつとだ、もつとだ！ 他にもいるだろう？ 憎いだけじゃない、妬ましい羨ましい奴



くくくくく

目が覚める。何か悪い夢を見ていた気がする。

今日は……スネイプの閉心術の授業があるな。ダメだ、行っ行く必要ははない。

今日もどこかで闇の魔法の本でも読もう。

途中で女子に囲まれたリンリーを見た。

それに対して食い入るように見る。

ああ……。僕も誰かとああいう風に囲まれて楽しく過ごしたかった。

## 5.2. 少女たちの決戦

とうとうこの日がやって来た。

O・W・L 試験である。

「う〜う〜……。」

「可愛く唸っても何も変わらないわよ。」

今後を左右するテストということもあってハーマイオニーも若干緊張気味である。

それを癒すためカリリを膝にのせて撫でている態勢だ。

「むう……ありがと。でも2週間もテスト漬けとかやだなあ。ねえ、終わったらお祝いしない?」

「ふふふ、お姉さま! そう思ってたジニーは用意してましたのですよ!」  
リリの提案にいち早く反応したのはジニーであった。

彼女だけは学年が下でまだOWLもNEWTも先である。

ストレスが幾分少ない彼女はこっそり準備していたリリ(とその他)を労う会を發表した。

開催場所はクイディッチ競技場を使つての星空の下でのパーティーだ。

もちろん許可も取ったし低学年たちでの準備も万端である。

「気合を入れて準備をしていますので期待しててくださいい！」

「おお。とりあえずカワイイジニーの為にサクツとふくろう狩りといきましょうか。」

~~~~~

そうは言っても簡単にいかない。

いつもの学年末テストとはわけが違っていた。

まず、試験官はホグワーツの教員ではなく魔法省の魔法試験局から派遣された役員だ。これについては特に問題はない。

アンブリッジの根回しで彼女に与している者たちが集められたのでホグワーツの現状が明かされる心配はない。

試験会場は大広間だ。いつもの4寮のテーブルは姿を消し、代りに個人用の小さな机が教職員テーブルの方に向けて設置される。監督の先生の机には予備の羽根ペン、インク瓶、羊皮紙の巻紙の他、試験時間を計る為の巨大な砂時計が置かれる。

筆記試験のペーパーには学生にはまず解除不可能なレベルの最も厳しいカンニング防止呪文が掛けられ、自動解答羽根ペン、思い出し玉、取り外し型カンニング用カフス、

呪文学

魔法史

休み1日目

薬草学

天文学

休み2日目

魔法薬学

闇の魔術に対する防衛術

休み3日目

占い学

数占い

休み4日目

魔法生物飼育学

ちなみにこの順番はテスト初日に発表されるといふ意地悪なものだ。

リリの選択した魔法史、天文学、占い学、数占い学は正直に言えばかなりマニアックなものだ。どの科目もその道の専門家に進むのであればかなりの知識が必要になってくるものだが、ほぼ専門家だけが必要なものであるともいえる。

魔法生物飼育学も若干その傾向であるが、これは他の分野にも関わっている。

それらとは別格で就職に関わるのは一年次からの必修の変身術、呪文学、薬草学、魔法薬学、そして闇の魔術に対する防衛術である。

この五つの科目に関しては担当教師の力の入れようも相当なものだった。

リリ達が最初の変身術のテストに向かっていた時、担当のマクゴナガルに呼び止められた。

「ミス・リンリー。あなたは別の場所で試験を受けてもらいます。」

「「ええ!?!」」

リリ本人、ハーレム、そして周りの女子たちが驚く。

「あなたが同じ場所で試験を受ければ女子はいつも以上の実力、男子は本来の力を発揮できません。それでは不公平なので特別に別室でのテストとなります。歴代のリンリー家の者たちも同様でした。お母上からは何か聞いてなかったのですか?」

「特に何も言っていないかったような……。先生、どうしてもだめですか?」

「駄目です。」

「お願ひしませう。」

「つ……。そんな目で見てもダメです! 他の者たちは速く大広間に向かいなさい!

ミス・リンリー、着いてきなさい。」

「はあい……。ゴメンね、皆。頑張つてね！」

「ええ、リリも頑張るのよ！」

マクゴナガルにとぼとぼと覇気のない歩みでついていく。始まる前から更にやる気が無くなってしまいうりりであつた。

~~~~~

そしてテストが始まつた。

変身術の内容はシンプルだ。

指定されたモノを更に指定されたモノに変化させるということだ。

もちろんシンプルではあるが難易度は高い。

形状、大きさ、色、わざと不自然なモノへの変化、など指定は多岐にわたる。

呪文学は今まで習つたことの集大成だ。

5年間で習つた魔法の内容を筆記テストし、それを実際に使えるか見るといふものだ。

しっかりと魔法の効果を覚えているか、そして使えるのか、そこに追加で魔法の発動速度、威力、正確性、杖の使い方を細かくチェックする。

魔法史は睡眠時間というのがホグワーツの極一部を除いて共通認識である。

それはOWL試験でも変わらなかった。

休み1日目。

「あ〜……。私、今日ここから動かないわ……。」

ハーマイオニーの膝の上で蕩けるようにだらけるりり。

それをクラウディアとジニーがカットした果物を口に運ぶという甘やかしぶりである。

周りの女子もその光景を見て試験の疲れを癒している。

「あと10分ね。」

だが、ハーマイオニーは甘やかすだけではなかった。

まだOWL試験は途中なのだ。本当は自分だって二人きりで部屋で過ごしたかったが、我慢している。

テストが再開する。

薬草学は時間との勝負になった。

制限時間内でどれだけ多くの魔法植物を正確に取り扱えるかの試験となった。

たった一人でこれを行っているりりは虚しさと寂しさでかなりミスをしてしまった。

天文学は魔法史といい勝負であった。

科目の内容から夜行う。しかも一人。つまり眠いのだ。リリは早々に仕上げて意識を手放した。

ここに他の女子がいたらリリの寝顔を見て試験どころではなかったであろう。実際に試験管の女はその光景を見て神に感謝していた。

休み2日目。

「……………もう嫌。」

「あらあら、まあまあ。」

クラウディアを対面から抱きしめ、その豊満な胸に顔を埋めながら全く動かなくなっ  
てしまったリリ。

他のメンバーも流石に疲れているのかリリをどうすることもせず、自分たちもリリの  
近くでゆっくり英気を養っていた。

再び試験が始まる。

魔法薬学はいつもより快適だった。

嫌みで男なスネイプに代わり、当然の様にリリの担当の監督官は女性だった。

これだけでリリのやる気は普段より120%UP、絶好調で難しい魔法薬が完成でき  
た。

闇の魔術に対する防衛術は模擬戦だった。

派遣された闇祓いや魔法戦士たちと一対一の決闘。

勝敗で成績が決まるわけではない、状況判断力や適切な魔法を選択する力など総合的に判断される試験だった。ちなみにリリの相手は男だ。女相手ではリンリー家を害することが至難なので当然の処置である。

休み3日目。

ここまできるとみんな疲れてノイローゼになっているような生徒まで現れ始めた。

リリは自室に引きこもってハーマイオニーを抱き枕にして勉強の事はすっかり忘れることにした。

「よしよし。今日は私だけに甘えていいのよ。ほらもつと抱きしめてね。」

「……愛してるわ。」

「ふふ、私もよ。」

地獄は三度始まる。

占い学と数占いはいつも通りだった。

特に占い学は授業と何が違うのか分からない内容だった。

トレローニー先生にここまで感謝したことはないだろう。

休み4日目。

ハーレムたちも疲労がたまっていた。特にNEWTを受けているクラウディアが顕著だった。

流石にそんな彼女たちに甘えるのもどうかと思い、ぼーっとしているとジニーが近づいてきた。

「お姉さま、ジニーはバッチ来いです！」

「ジニーー！」

試験をしていないジニーだけは元気ハツラツ。疲れたお姉さまを独り占めできる絶好の機会であった。

この時のために前3日の休日は少し距離を取っていたのだ。

(ふふふ……。計画通り！)

存分にリリ成分を摂取したジニーは過去最高のコンディションとなっていた。

そして最後の試験

魔法生物飼育学はリリの独壇場だった。もっとも相変わらず一人での試験なのだが。

魔法生物と言えど雄は絶対に距離を取るし、恐怖もあつてまず逆らわない。



雌は魅了で言うことを聞いてくれる。

どんな魔法生物でもやすやすと手懐けてしまうので試験にもならない有様だった。そしてようやくテスト終了となった。

~~~~~

「え〜。5年生はOWL試験、7年生はNET試験お疲れ様でした！」

他の皆もサポートありがとう！ それでは乾杯！」

「「かんぱ〜い！」」

打ち上げパーティーはホグズミードから取り寄せたバタービールでの乾杯からスタートした。

ジニー達が準備したのはいつものホグワーツの宴に加え、外部から妖精シスターズやサプライズでデラクール姉妹を呼んだりと楽しいものになった。

ちなみにテストの方はハーマイオニーたち上位組は余裕をもって、パーバティたち下位組は妬けになって涙目でパーティーを楽しんでいた。

「リリ！ 久しぶり！ 相変わらずいい女ね！」

「久しぶり、フラァ。そっちも変わらず綺麗ね。」

人外級の美人を久しぶりに目にし試験の疲れも吹っ飛んでしまったりり。

フラァも久しぶりのリリと会えてご満悦である。

その後はテンションがおかしくなったりリリが片っ端からキスして回ったり、フラァがリリを拉致しようとしたりと色々あったが、最後はマクゴナガルのお叱りでお開きとなった。

5 2 (裏). 墮ちる

リリアン・リンリーや少女たちがO・W・LやN・E・W・T、学年末試験を受けているのと同時にもちろん男子たちも同じように試験を受けていた。

その中の一人、アルバス・ダンブルドアからは魔法界の行く末を担う運命の子と決めつけられていたハリー・ポッターもO・W・Lに悪戦苦闘していた。

原因はここ数日、嫌な夢しか見ていないハリーは寝不足であったのだ。

悪夢……両親を直接手に掛けたヴォルデモートが笑い、上機嫌になっている光景が広がっている。

そして日に日に声がはつきりと聞こえてくるようになってきているのだ。

「はははっ！ よくやったぞ。流石は——。これで俺様の世界の支配というパズルのピースが一つ埋まろうとしている。」

今は大事なO・W・L試験、闇の魔術に対する防衛術のテストの真っ最中だ。

それなのに今まで以上にハッキリとヴォルデモートの声が聞こえる。

テストどころではない。もつと声を良く聞こうとそちらに集中する。
なぜ夢を見ているわけでもないのにそんな声が聞こえるのかという当然の疑問も頭から抜け落ちひたすらに声に耳を傾ける。

「さて、あと一押しだ。それさえ手に入れてしまえば憂うことも無い。魔法界は俺様の手に落ちるのも時間の問題だ。では行こう。」

見覚えのある場所にヴォルデモート奴が入っていく。

見覚えが……。あれは……魔法省！ まさか攻め入るのか!?

「駄目だ!」

試験であるという意識はすっかり消え去り大声を上げてしまう。

「ミスター・ポッター！ 今は試験中です。何がダメだというのです?」

監督する魔法省役員の言葉を無視してその場から飛び出す。

向かう先は校長室。このホグワーツで一番に伝えなければならない魔法使いの元へと急ぐ。

校長室へと繋がる螺旋階段の前のガーゴイル像との問答さえ鬱陶しい。

急がなくては、あそこへ行かなくては！

「ダンブルドア！ 大変です！ あいつが！」

「ハリーよ。落ち着くがよい。まずはそれが重要じゃ。」

ハリーは早口で今までの悪夢や今見た光景を話す。

それは自分が閉心術を習得していないということの暴露でもあったがそんなことは今の状況ではどうでもよかった。

話を聞き終わつたダンブルドアは考える。

誰が考えても明らかにこれは罠だ。

ハリーは予想通りならば……最悪なことにヴォルデモートの分霊箱ホークラックスになつてい

その影響なのか繋がりができ、今回の様に思考の誘導をされている。

今も冷静さを欠き魔法省に行きたいという一点に意識が集中されているようだ。

(どうするべきか……。恐らく狙いは神秘部の予言。あやつが直接取りに行くのは考えずらい……。ハリーに取らせるための計画か、それとも別の何か……。?)

しかし、これはチャンスでもある。奴らの戦力を測り打撃を与えると、いう絶好の好機。

幸いなことに魔法省内部もアンブリッジ先生のおかげで準備が秘密裏に進められている。

あやつが把握していない場合はこちらに分があるが……。」

考えながらも今回の事を不死鳥の騎士団員たちとアンブリッジに連絡を飛ばす。

損得を冷静に思案した結果……ダンブルドアは決めた。

「ハリー。まずは騎士団本部へと参ろうか。それからでも遅くはなからう。」

「でも！ あいつが何かしようとしているんですよ！ 急がなくては！」

「速さは力じゃ。だが強すぎる力は自らも害する。何事も適当というものがあるのじやよ。」

集まったホグワーツにいるマクゴナガルなどの騎士団員とアンブリッジの前で即席の移動ポルトキーキーを作る。アンブリッジも緊急事態ということで違法ということには目をつむっている。

そのまま騎士団本部のブラック邸へと飛ぶダンブルドアたち。

本部にもかなりの騎士団員が集まっていた。

「皆、良く集まってくれた。要点だけを簡単に伝えよう。魔法省にヴォルデモートの一派が現れる可能性が高い。だが、ヴォルデモート本人が現れる確率は低いじやろう。」

狙いは神秘部のあるものと考えられる。

わしらはそこで奴らの戦力を削ぐ作戦じや。」

「あるもの？」

騎士団の一人、キングスリー・シャツクルボルトが疑問の声を出す。

声に出していない他の者も同様の思いだ。

「予言じゃ。内容は今回の作戦の後伝える。ハリーとあやつに対して密接にかかわっておるとだけ言っておこう。」

つまり、今回の作戦にはハリーの参加が不可欠じゃ。むしろ予言を手に取りれるハリーの先行無くしては成り立たぬだろう。」

「何を馬鹿な!? 正気か!? ダンブルドア! ハリーを危険な目にあわすというのか!」

「そうですよ! この子はまだ未成年なんですよ。」

「シリウス、モリー。わしはハリーならば困難を乗り越える力があると信じておる。」

それに時間も有限じゃ。」

尚もダンブルドアに抗議をする二人。

ルーピンやアサーも非難の目を向けている。

そこへ一人の女性が姿あらわしをしてきた。

ロザリンド・リンリーの懐刀のキャロル・フォードである。

「御主人様の命で参りました。それとドロレスが魔法省の内の確認を行った結果、不自然に警備状態の穴があるとの事でした。恐らく服従の呪文で魔法省の警備が解除さ

れていると推測できます。どうしますか？ 敢えてこのままにするのか、魔法省内の戦力も使用しますか？」

「報告ありがとう。ここは敵の策に乗るとする。わざと手薄なままにして誘い込む。」

「わしらはそこを叩く。その後に魔法省の戦力も投入してもらおうとしよう。」

「分かりました。それでは作戦に参加する女性は何名ですか？ 私が守るべきは女性のみとの事なので。」

参加する女はマクゴナガル、モリー・ウィーズリーにニンファドローラ・トンクス、ヘスチア・ジーンズの4名だ。

彼女たちに防護の魔法具を渡していくキャロル。

その間もダンブルドアの作戦説明が続く。

「よし、それでは行こうかの。」

ホグワーツ生たちが試験に取り組むの裏で魔法界を左右する戦いが始まるうとしていた。

~~~~~

僕は一人で魔法省のロビーに入る。

魔法省ここにはいい思い出が無い。



くそデブのダドリーに正当な報いを与えてやっただけなのにまるで悪の魔法使いを見る目で見てきた裁判を思い出ししてしまう。

それに未だに嘘つき呼ばわりしてくる魔法省など誰が来たいと思うのか。

そんな思いを振り払ってこれからの事を考える。

まずは神秘部の予言の間に行つて予言を回収する。その後は逃げるだけだ。

今も姿は見えないが護衛の騎士団員がそばにいるはずだ。

(僕の役割は単純だ。騎士団にダンブルドアもいる。本当は僕も戦いたかった。けれど仕方がない。そんな事よりも！)

僕の役目がただ逃げることよりも！ 僕に力が無いことよりも！ なんであの裏切り者の殺人鬼までここに連れてきたんだ！

あのシリウス・ブラック！ 父さんと母さんの仇！

おまけに人狼まで！

これから戦いがあるっていう大事な時なのに、いつ裏切るかもわからないのに！  
何でダンブルドアは信じられるんだ？

……ダメだ、考えるな。目の前に集中しろ。

教えてもらったとおり予言の間に着いた。

どれが目当てののだ？

ああ……。あれだ。あの予言が呼んでいる。

予言には16年前の日付と共に僕の名が刻まれている。

それを手に取った瞬間、仮面を被った死喰い人デスイーターが現れた。

「それをこちらに渡してもらおうか、ポッター。」

「ルシウス？　こんなガキ相手に何丁寧に頼んでんのさ！　さっさとぶっ殺してそれ

からゆつくりと奪えばいいだろう？」

「それはならんぞ、ベラトリックス。我が君はポッターの五体満足が望みだ。」

「ふん。分かっているよ。」

目の前の愚か者どもが悠長に話をしている。僕の事なんか脅威にも思っていないのだろう。

僕は相手にせず走り出す。ここにもう用はない。

「このガキが！」　「待ちやがれ！」　「ステューピファイ！」

流石に見逃してくれないか。でも、問題ない。

「「エクスペリアムス！」」　「「ステューピファイ！」」

一斉に放たれた武装解除や失神呪文が何人かの死喰い人デスイーターを吹き飛ばす。

不死鳥の騎士団が突入してきたのだ。

そこからは乱戦、混戦の酷いことになった。

辺り一面にあった予言は多くが碎かれ、神秘部のよくわからない物品も燃え、切り裂かれ、ぐちゃぐちゃだ。

死喰い人<sup>デスイーター</sup>や騎士団員が何人か倒れている。

予想以上に死喰い人<sup>デスイーター</sup>が多かったのか騎士団員もかなり苦戦している。当初の予定では僕に護衛が付いてすぐに離脱する予定だったのだが、ここでも僕は上手くできない。

今は神秘部のある部屋で身を隠しながら様子を窺っている。

辺りに何か役に立つモノが無いか見まわす。

そしてそれを見つけた。

それは石の台座が置かれ、その上に石のアーチが立っていた。

そのアーチには黒いベールがかかり、風も無いのに静かに波打っている。

異様で違和感の塊だった。でもそれが怖いものだとは魂から理解できた。それと同じ時にベールに惹かれるということも。

「ハリー！」

あと少いでベールに触れそうになったという瞬間、現実引き戻された。

その声は僕にとっては何者よりも耐え難い声だった。

「シリウス・ブラック……！」

「ああ、良かった！ 無事だなハリー！ さあ、一緒に逃げるぞ。大丈夫だ俺が付いているもう危険はないそうだこのままどこかに行つて一緒に暮らそうしよう。」

相変わらず僕に狂気じみた目を向けて支離滅裂に話す。

やはりこいつは狂っている。

腕を掴まれて強引に引つ張られていく。

「離せ！ この人殺し！」

「ハリー、ハリー！ まだ信じてもらえないのかそうだあいつの死体を見せれば君も信じるはずさ。だってジェームズの子だそうだ俺が悪戯しても最後には許してくれた今回もきつとあいつを殺せば裏切りを殺せば天国で笑つてくれるはずだそうだろうハリー？ 大丈夫だ行こう！」

「天国にはお前が行きな！」

そこへ騎士団員がブラックに向かって武装解除の赤い光を飛ばしてきた。

やっぱり騎士団員もこいつの事を信じていないんだ！ このままこいつをぶちのめせ！

「邪魔をするなあああ！ アバ<sup>死</sup>ダ・ケダ<sup>ねえ</sup>ブラあ！」

ブラックの杖から緑色の光弾が飛んで行く。

それは騎士団員にぶつかる。そしてその人はピクリとも動かなくなつた。

死んだ。死んでいた。遠くから見てもそれを確信できた。

知っていた。この光景を僕は知っていた。

吸魂鬼デイモンターに見せられた光景を思い出す。

あの日。僕の両親が死んだ日。

母さんがヴォルデモートに同じことをされていた。

目の前の光景と過去の惨劇が重なる。

こいつ、こいつは！ この男は！ 僕の両親だけじゃなくて！ まだ殺したりないのか！

こんな奴は生かしてはダメだ！

「さあ、ハリー！ 邪魔者はいなくな「あああああああああ！ ブラックうう！」

あらん限りの力を使ってこの目の前の悪魔を吹き飛ばした。

出来るだけ遠くへ、この世からも消えるぐらい遠くへ！

呆然としたままブラックは吹っ飛んでいく。その先はあのボールだ。

そのままぐぐつていなくなった。この世から。

「はあ……はあ……。やった、これで。」

「そうだよくやったぞポッター。これでお前は人殺しの仲間だ。俺様の様に。」

声に振り返る。そこにはいたのは一度見たら忘れられない顔があった。

ブラックを屠れた達成感といきなりの出来事で杖を構える前に武装解除された。

「ヴォルデモート……！」

「そう睨むな。それでどうだ？ 名付け親をその手に掛けた感想は？」

「な、何を……？」

「ああ、話すよりこうした方が速いな。起きろ、我が一部よ。」

視界が暗転する。

完全な闇。そこにいるのは薄い僕と半透明なヴォルデモートだけだった。

動けない僕にヴォルデモートが近づいてくる。そして触れる。

その瞬間。今まで、僕がやってしまったことを理解させられた。

僕の中にはずっとこいつがいた。

僕の中の負の感情を、魂を喰らわれていた。

シリウスは無罪だった！（本当か？）

ルーピン先生も裏切っていなかった！（嘘じゃないか？）

ロンも本当に僕の事を心配していたんだ！（騙されるな！）

でも僕の闇が認めようとしなかった。

それもこいつがいたからじゃない。それはきっかけに過ぎなかった。

(いや違う！ こいつのせいだ！ 僕の中の！)

「いいや違わない。俺様は最早お前の一部。それは逆もまた然り。お前がやったことは全てお前の意志だ。」

(僕の意志……?)

「そうだ。周りを信じられなかったのも、嫉妬も、憎しみも、怒りも、全てはお前が元だ。そして殺したのもお前の意志だ。」

(そんな馬鹿な！ そんな！ そんな……。)

「嘆く必要はない。疲れただろう？ もうお前は何も考える必要はない。さあ……楽になれ。」

思考が消えていく。いや吸われ、喰われていく。

「さあ、これからはお前はヴォルデモート卿だ！」

目の前の半透明のヴォルデモートが色づく。

反対に僕が希釈されていく。

僕という餌で寄生虫は育つ。そして羽化する。

段々と目の前のヴォルデモートと僕の境が無くなっているのを感じる。

僕は誰だ？

「ああ、俺様はヴォルデモート卿だ。」

~~~~~

「ハリー！」

ダンブルドアが死喰い人デスイーターを蹴散らしてようやくハリーに追いついた。

並みの魔法使いとは比較にならない速度で敵をなぎ倒してここに来ることができた。

ダンブルドア以外ではできない芸当だっただろう。

だが、それでも遅すぎた。

「遅かったな。ダンブルドア。」

目の前のハリーが発する声。

いつもと同じ声。

だが、何かが決定的に違っていた。

「お主……。まさか。何ということじゃ……！」

「ふふふ。いい顔じゃないか。さて俺様たちは帰らせてもらおうとしよう。目的は達成した。ついでにこの予言もじっくりと聞かせてもらおうとしよう。」

「待て！ 待つんじゃない！」

とつさに放つ呪文も虚しく空を通り過ぎる。

後に残ったのは自分を呪う愚かな老人だけだった。

この日、ハリー・ポッターは死んだ。

~~~~~

魔法省の戦いから数日が経過した。

流石の魔法省も内部で死喰い人<sup>デス・イーター</sup>が現れ大規模な行動をしていれば認めざるを得ない状況だった。

更に、アンブリッジが集めていた数々の情報から今までの隠蔽や腐敗も暴露されコーネリウス・ファッジやその支持者は一晩でその地位を失い魔法省から追放された。

魔法省は新たにルーファス・スクリムジョールが率いる有能な組織に生まれ変わろうとしていた。

だが、それでも魔法界は暗く沈んでいた。  
ヴォルデモートが蘇っただけが原因ではない。

かつて赤子だった時に闇の帝王を打ち破り、今度もそうしてくれるはずと期待されていた英雄。

ハリー・ポッターが死んだというのだ。

ただ死んだだけではない。帝王に屈しその心を喰らいつくされたという噂まで流れている。

魔法界には闇が蔓延しようとしていた。

## 53. ハーレム五年目

2週間もの長いOWL試験もようやく終わり、後は学年末パーティーまでゆつたりと時が流れるだけ。

リリとそのハーレム、そしてホグワーツの女子たちは今学期の残り僅かな時間を穏やかに過ごすそうと思っていた。

リリ達は身支度をしてみんなと一緒に朝食を食べるために大広間に向かおうとしていた所だ。

「ハリーが！ 例のあの人も！ 魔法省が認めた！ ハリー……ハリーが！」

リンリーがいるから女子は楽しく高揚し、男子は真逆に得体の知れない恐怖に耐えるといういつものグリフィンホール談話室だったが、テスト明けということで男女ともにいつも以上には心が弾んでいた。

それが飛び込んできたロナルド・ウィーズリーの言葉で先程までの談話室の雰囲気は戸惑いと恐怖に様変わりした。

闇の帝王が復活したことを疑うホグワーツ生は少なかったが、それでも今まで全く認めていなかった魔法省が認めたということはいよいよ戦争状態になってしまうのかと



レイブンクロー生は平静を装いながらも以上に勉強に打ち込んでいた。もう期末テストも終わったというのに、何もかも忘れたいかの様に。

グリフィン・ドール生が一番の酷いことになっていた。ハリー・ポッターと近かったということもあり、少しの事でスリザリンに対して闇の魔法使いだと、攻撃を放つ有様だ。それらとは逆にいつもと変わらないのがスリザリンだ。まるで自分たちが優位に立ったかのようにふるまう始末だ。

これらの動きは全て男子生徒の間だけで起こっていた。

リリは全校の女子と一人ずつ一対一でじっくりと話し合い、触れ合い心を落ち着けていった。このカウンスリングのおかげでほぼほぼ平時と同じぐらいにまでは女子たちは落ち着きを取り戻していった。

その後には女子たちはリリアン・リンリーを中心に結束を更に強めていった。

特にスリザリン女子とは今まで以上に仲を深めるように注意していた。

闇の帝王の復活、魔法界に闇が蔓延する。聖28一族や純血の貴族が多くいるスリザリンは表立っては言わないが多くが闇の陣営だ。

だからこそ、スリザリンにいる女子たちは危険だとリリは直感した。

今もダブネを中心としたスリザリンの女子たちに囲まれてのお茶会で仲を深めている。

「みんな、馬鹿なことはしちや嫌よ。もし家族が何かさせるようなら私に言って。」  
「もちろんよ。言うまでもないけど、純血主義や闇の魔法なんかよりあなたの方が魅力的なんだから。ここににいる女子であつちに行こうなんて間抜けはいないわ。」

ダフネの言葉に全員が頷く。

女子たちは寮同士の諍いとは無縁だ。

だが、男子たちの馬鹿な争いに巻き込まれる可能性はある。

「はあ……。ホグワーツが女子だけの学校にならないかしら。」

「良いわね……。それ。」

「そしたらさ、古い寮制度も廃止になって皆リリちゃんと一緒にいられるわね!」

「リリちゃんが卒業しても学校の運営側としていれば安泰じゃない?」

リリの何気ない一言だったが、下手をすればホグワーツの一部が独立して新たな魔法学校を立ち上げるなんてことにもなりかねない。

教師がこの場にいたら速攻で止めに入っただろう。

~~~~~

ホグワーツ女子とは違ってイギリス魔法界はパニックに陥っていた。

今まで魔法省が発表していた闇の帝王が復活などしていないというのが嘘。

ダンブルドアたちが警告していたことが真実。

もはや何を信じればいいのかさえ分からなくなりそうな有様だ。

おまけの今回は前回の戦争の様に英雄が倒してくれるなんてことも期待できない状況だ。

ダンブルドア率いる不死鳥の騎士団とトップが入れ替わった魔法省がこの戦争の早期の終結と敵勢力の打倒の声明を出すのが、焼け石に水どころの効果もない。

だがそれでも、魔法省だけは混乱などしていなかった。

元々コーネリウス・ファッジ元大臣に懐疑的だった者やアンブリッジの裏工作や根回しの結果、各部署の重鎮や歴戦の猛者たちは何時かはこうなると分かっていた。

準備はとうにできていた。だからこそ魔法省の襲撃をきっかけに彼らは即座に動いた。

無能な官僚や闇に近い純血主義と言った腐敗は徹底的に除去された。

今回は不死鳥の騎士団任せではない。魔法省の力を闇の勢力に見せつけてやるという気概が溢れていた。

「皆さん、時は来しました。聞くまでもありませんが、あの方の為に命を使う覚悟はありますね？ たとえ、あの方が望まれなくとも。」

「「はー」」

「よろしい。ならば戦争です。」

その裏で闇を打倒するために別の勢力も動き始めていた。

~~~~~

大なり小なり混乱は続いているが、それでも時間は過ぎていく。

リリ達の五年目も終了だ。

大広間で学年末パーティーが行われているが、男子生徒の落ち込みによって盛り上がりに欠ける。今年で卒業するウィーズリー双子が悪戯で場を盛り上げようとしているが、効果はいまいちだ。

宴も終わり、テーブルの上はきれいさっぱり片付けられる。

ダンブルドアが立ち上がると生徒たちは一斉にそちらに目を向ける。

帝王の復活以来ホグワーツにいることが少なくなったダンブルドアからどのような言葉を聞くことができるのか皆一生懸命耳を澄ます。

「……皆が言いたいこと、聞きたいことは山ほどあるじやろう。だがその前にアンブリッジ先生からのお話がある。」

魔法省送り込まれていたアンブリッジは本人が言っていた通りに今年度いっぱいホグワーツを去ることになっている。



今後は魔法省の役員として魔法界の為に力を費やすということは生徒たちはすでに聞いていた。

魔法省の人間ということもあってダンブルドアと同じぐらい彼女からの言葉にも大広間の全員が注意する。

「エヘン。もう周知してはいますが、わたくしは今日限りで闇の魔術に対する防衛術の職を辞することとなっております。一年という短い間ででしたが未来あるあなた達を教えられたことを誇りに思います。

まあ、こんなありふれた言葉を聞きたいわけではないですよね。  
それではまず大前提として。

敵は強大です。魔法省は今までの腐敗がありました。英雄はいなくなりました。

それでも……魔法省は戦います。負けるつもりなどありません。

そのためには皆さんの、その家族の力も必要になってきます。

私がこの一年間で教えたことを少しでも活かして、闇になど屈しないでください。」

「その通りじゃ！ 今、我々は脅威にさらされておる。だからこそ何度も言おう！ 団結し一つになって立ち向かわねばならん。我々を信じて強く心を持って欲しい！」

ダンブルドアの続く言葉にグリフィンドール男子を中心に賛同とやる気の声があがる。

それは他の寮にも派生し一部のスリザリン男子を除いてホグワーツは闇に対しては一丸となつて戦く覚悟が決まつた。男子と女子では守るべき対象は違つているが、敵は同じだ。

宴は始まつた時とは変わつて活力に満ちた終わりとなつた。

~~~~~

宴が終わつて、生徒たちが奮起しているというのにダンブルドアは一人校長室で嘆いていた。

もちろんハリー・ポッターについてだ。

生徒たちの前であれだけ啖呵を切つたというのに一人になると弱気になつてしまう。

ハリーの事を気にかけてきたつもりだったが、自分は何も見ていなかったのではないか。

ホークラックス
分霊箱の事も確信を持つていたのに何も話さなかつた。予言の内容についても秘密にしていた。もう少し何かしていればこんなことにはなつていなかったのではないか？

そんな考えばかり浮かんでは消えていく。

しかし……今は嘆く時間すら許してくれない。

嘆いては何も解決しない。こうしているうちに脅威は増し、生徒やその家族の命が危

険にさらされる。生き残った者たちはかつての、妹を失った時の自分と同じ気持ちで体
験することだろう。

それではダメだ。それだけは絶対に認められない。

『より大きな善の為に』

かつての友と語り合った時の言葉が思い出される。

守るためには今のままではダメなのかもしれない。

だが、それでもアルバス・ダンブルドアは最後の一線だけは超えることはしたくは無
かった。

~~~~~

マルフォイ家の別荘。

その屋敷は一族と極に近い者たちしか知らない秘密の場所だった。

今の主はマルフォイ家の当主ルシウス・マルフォイではない。

闇の帝王ヴォルデモートが支配する場となっていた。

そこに死喰い人<sup>デスィーター</sup>達が呼び集められていた。

大ホールに集まったのは50を超える死喰い人<sup>デスィーター</sup>。

呼ばれた理由は不明だ。幹部たちもそれは知らされていない。褒美かそれとも罰か、

様々な憶測が飛び交いざわめきが止まらない。

扉が開く。一瞬で静寂が場を支配した。

入って来るのは主たるヴォルデモート卿。死喰い人<sup>デスイーター</sup>たちは一斉に膝まづく。

その後の続く人間を見た瞬間、驚愕でほとんどの死喰い人<sup>デスイーター</sup>が声をあげた。

「ハ、ハリー・ポッター!?!」

「黙れ。」

主の一言でピタリと再び静寂が戻って来る。

「さて、貴様らと呼び寄せたのはこの者の紹介だ。最初に一番大切な事だけ言っておこう。何があってもこの者を守れ。お前たちの命よりこの者の方が価値がある。」

「わ、我が君それはどういう……?」

「ハリー・ポッターは死んだ。こいつは俺様だ。この体の中には我が魂の一部が入っている。この体は最早我が物、つまり俺様だ。頭の悪い貴様らが理解する必要はない。だが、こいつの言葉は俺様の言葉と同じ価値があるということは理解しろ。」

「そ、それはその小僧が我らの上ということですか?」

「クルーシオ<sup>苦しめ</sup>!」

突然の磔の呪文。疑問を呈した死喰い人<sup>デスイーター</sup>が苦痛で叫びながらのたうつ。放ったのは

ハリー・ポッターだ。

「俺様の言葉が聞こえなかったのか？ 本体ではないとはいえ俺様もヴォルデモート卿。疑問に思うことも許さん。」

声はまだ少年の声だというのに、それを聞いた瞬間に魂が目の前の小僧が主と同質のものだと理解させられた。膝まづくしか死喰い人デスィーターに選択肢は無かった。

「さて、次だ。魔法省には警戒を怠るな。あそこはかつての砂で出来た城ではない。難敵へと生まれ変わった。」

そして相手が敵対せぬ限り女は殺すな。服従も磔も無しだ。

最後に、次の目標は……ダンブルドアだ。」

~~~~~

ロンドンへと向かう帰りの蒸気機関車では卒業した女子たちがリリリに慰められていた。

今までの平和な世の中ではない。これで会えるのも触れ合えるのも本当に最後になるかもしれないのだ。

「リリちゃん……」

「リリ！ リリ！」

一人一人をしつかりと触れ合う。それぞれの希望に合わせて抱きしめ、撫で、キスを

する。

何者にも侵されぬようにと気持ちを込める。

キングス・クロス駅に到着するまで時間の限り少女たちはリリを求めた。そしてリリはその全てに応えていった。

キングス・クロス駅 九と四分の三番線に降り立ったりりとハーレム一行。

「さーて。帰ったらクラウディアの事もしつかり愛してあげるわ！」

ハーレムの一員のクラウディアも今年で卒業だ。

先程の場は友人たちに譲つたが家に帰れば自分を優先してくれると約束してもらつていた。

「ふふふ。お手柔らかにね。ゴメンね。みんな。」

正妻や他のハーレムに申し訳なきそうにする。

それに対してハーマイオニー達は

「良いのよ。来年からはホグワーツに來れないんだから。」

「そうそう。逆の立場ならリリを攫つてどつかに逃げちゃうかもしれないし。」

「ありがと。あ、でも私がリリちゃんを籠絡したらわからないわよ？」

「あら、ちよつと楽しみ。さあ、帰りましょう！」

出迎えてくれたリリの両母とメイドたちに向かつて走つていった。

た。世の中は暗い闇が迫っていたが、この一族とその周りにはそれが全く無意味な物であつ

6章 プリンセスになつて出直せ

54. 降伏勧告

1996年の夏の暑い日。その日、イギリス魔法界は恐怖に包まれた。

ダイアゴン横丁、魔法省内部、ホグズミード村、その他大小様々な魔法使いたちの集落や店など数十か所以上で同時にあるものが現れた。

口から蛇が舌のように出ている髑髏、すなわち闇の印である。

闇の印は帝王や配下が誰かを殺す、襲う時に打ち上げる印だ。これが現れたということは身近に死が迫っていることと同義なのだ。

闇の印を目にした者は、逃げまどうあるいは立ちすくんで動けなくなつた。

魔法省内部も混乱のさなかであつた。内部に裏切り者、服従させられた者がいる。それに続々とイギリス中で同時に現れたという情報が舞い込んでくるのだ。

『静まれ。』

闇の印の口が動き言葉が紡がれた。

そのあまりの恐ろしさを感じさせる声に逃げる者も一瞬で固まってしまった。

抵抗する気でいた闇祓い達も初めての事態に注意深く様子を観察している。

次に起こったのは蛇の目から光が照射されたのだ。

それは空中にある像を映し出す。

「ひっ……！」

それは見ていた大半の人間が同時に悲鳴をあげる映像だった。

髪が無い頭、削がれたような鼻、人ではないことを示すかのような赤い瞳。

史上最強最悪の闇の魔法使いヴォルデモートその人であった。

『イギリス魔法界の全魔法使いと穢れた血に告げる。降伏せよ。

寛大な俺様は歯向かわねば魔法使いは殺さぬと約束しよう。

穢れた血どもも奴隸として特別に生かしてやろう。

但し……。』

そこで闇の印の真下にこれを創り出したであろう仮面を被った魔法使いたちが現れた。

その次の瞬間

「「ヴォルデモート卿万歳!!」」

一斉にヴォルデモートへの賛辞を言うのと自らの首を切り裂いた。

明らかに致死量の血をまき散らしながらも笑い、笑顔でこと切れるまでヴォルデモー

ト万歳は止まらなかった。

『齒向かった場合はこの様な無残な死が待っている。

魔法省や不死鳥の騎士団に期待するのは愚かなことだと忠告しておこう。

我らの力は日に日に高まっている。抵抗は無意味だ。

その意味を貴様らにもよく分かるように教えよう。

闇の帝王を打ち破る力を持った者が近づいている。

七つ目の月が死ぬとき、帝王に三度抗った者たちに生まれる。

……これが何か解るか？ そうだ、忌々しい年前の出来事、俺様が力を失った時の事だ。

その事の予言だ。この予言通り俺様は力を失った。

そしてこれには続きがある。

…そして闇の帝王は、その者を自分に比肩する者として印すであろう。

しかし彼は、闇の帝王の知らぬ力を持つであろう。

一方が他方の手にかかって死なねばならぬ。

なんとなれば、一方が生きるかぎり、他方は生きられぬ。

闇の帝王を打ち破る力を持った者が、七つ目の月が死ぬときに生まれるであろう。

理解したか？ そして俺様の勝利を確信するがいい。

俺様とハリー・ポッターは互いに殺し合い、一方しか生き残れない。

そしてハリー・ポッターという存在は最早この世にはいない！

……愚鈍な穢れた血でも理解できたか？ もう、俺様を止める者など誰もいないということをな！

さて、聞いているだろうダンブルドア？ 次は貴様だ。今年が貴様の最期の年だ。じつくりと最後の Hogwーツ校長生活を楽しむと良い。

ふふふ、ハハハハハ、はあーはっはっははははは……！』

高笑いと共に闇の印が消えていく。

残された魔法使いたちは絶望に押しつぶされそうになっていた。

~~~~~

闇の印による大々的なヴォルデモートの宣言。

これに対して魔法省もすぐさまに全イギリス魔法族へと通達をおこなった。

しかし、闇の勢力のような手段を持っていないため日刊預言者新聞などに頼らざるを得ないのが現状である。

「我ら魔法省は闇の帝王などには屈しない！ 断じてだ！」

魔法大臣のルーファス・スクリムジョールが力強く宣言するが、民衆の多く特に純血や半純血たちは抵抗するよりは恭順してでも生き残る方に傾いていた。

どちらにも敵対せずに勝った陣営に身を寄せるなどと考えている一族もいる。

マグル生まれや混血、一部の純血だけが戦う気概が残ってはいるが、総じて様々な面で力不足は否めない。

特に予言の影響が強い。

既に魔法省が公式に前の死喰い人デスイーターの襲撃が魔法省内の神秘部予言の間であつたことを発表していたのだ。今更どうあがいても予言が嘘だったなどと信じる者が少ないだろう。

しかも、他ならぬ帝王自身がそれを信じそして一度はハリー・ポッターに打ち破られている事実がある。

つまりは予言は真実となる。それは最後に勝つのは闇の帝王であるということだ。戦う意志を奮い立たせている者たちも内心では不安でいっぱいの有様であつた。

更に悪いことは続きアズカバンも事実上収容不可能になつた。

看守であつた吸魂鬼デイズンターは一匹残らずアズカバンを放棄して姿を消した。

凶悪な囚人たち、既に脱獄している死喰い人デスイーターの中でもとりわけ凶悪で主に忠実な者以外も大勢が闇の勢力に戻つていった。

これらの危機に魔法省は強権を発動した。

禁じられた呪文を解禁。

死喰い人デスイーターやその一派、そして自身と仲間の命が危険にある状況という前提はあるが、同じ人に対して服従、磔、そして死の呪文の使用を許可したのだ。

もはやどちらが闇の勢力であるかというのはあくまで主義主張と言うだけで戦いに関しては闇の魔術同士の打ち合いという構図になってしまっている。

ダンブルドアはこれを危惧して魔法大臣になったスクリムジヨールや副官のアンブリッジに抗議した。しかし、

「それではこちらがやられるだけだ。敵の方が強い武器を使い、こちらは同じものを使えるというのに使わないと言うのか？ ダンブルドア、あなたの言うことは正しい、そして立派だ。まさに善なる魔法使いの頂点に立つ者の言葉だ。だが！ そんな言葉が通用する段階はとつくに過ぎ去っている！ こちらも躊躇などしていたらすぐにやられる！ 敵は殺す、捕らえたら服従してでも情報を吐かせて手駒にする。そのぐらいしなければもうダメなのだ。

……あなたも本当は分かっているのだろうか？」

「しかし！ それではむしろあ奴らと同じじゃ！」

「確かに使う魔法は同じだ。だが、そもそも闇の魔法と定義しているのは魔法使いたちだ。魔法自体がどんなもののかなど、どうでもいいのだ。人に害を成し、世を乱す悪

の存在が闇の魔法使いなだけで死の呪文を使ったからと言って闇の魔法使いとは言えぬ。」

尚もダンブルドアは講義をしようとするがそれ以上スクリムジョールは取り合わなかった。

禁じられた呪文がその名の意味をなさなくなった時、次代はより混迷を深める闇の時代に突入していった。

~~~~~

そんな世間とは打って変わってリンリー家はと言うと。

昨年までの忙しそうにしていたロザリンドであるが、今年はどこにも出かけず家でレイヤやメイドたちと飲んで食べて、遊んで、寝てとイチヤイチャな生活を満喫していた。つまりはいつも通りのリンリー家であった。

ロザリンドが言うには

「根回しは終わったのさ。後は期を待つだけ。そのあたりはドロレスが上手くやるさ。」

リリやハーミーちゃんたちは何も心配することはないぞ。残り2年のホグワーツを
楽しみな。」

ロザリンドが何をしたのかは子供ということで何も教えてはくれなかった。

ハーマイオニーやダフネはしばらく食い下がっていたが、大人の仕事ということで取り合ってもらえなかった。

しかも屋敷の防護の強化はしっかりと行っているためなおさらリリハーレムの出演は無いのだ。

リリとしては面倒な事をやってくれるのだから子供として存分に親に甘えることにした。

自分たち用の大部屋に戻ったリリ達。

ハーマイオニーはまだ納得しきれていないようだ。

「私たちだって色々やれるのに。」

「まあ、実際私たちは未成年だしね。今は何も考えずこの時間を楽しみましょう。」

「賛成よく。もう少ししたらリリちゃんが Hogwarts に行っちゃうものね。こっちに來てく。」

卒業したクラウドディアがリリを抱き寄せてくる。

「あ、ずるいです！ 私も一緒に行きます！」

ジニーがリリに抱き着いて一緒にクラウドディアの腕に納まった。

「ふふふ。よくしよし。今日はこのままぐるぐるしましょうか？」

リリとジニーがクラウディアの肉に溺れている後ろでは残りのメンバーがじゃんけんをして次の順番を決めていた。

そして次を勝ち取ったパドマが膝枕でリリの耳かきをしている。

「かゆいとくは無いかしら？」

「ああつ……。ふああ……。」

「可愛い声。良いみたいね。」

英国にこういう文化は浸透しておらず綿棒で軽く拭くぐらいであるが、日本出身の娘に聞いて実際にやってみたらうとこれが気持ちいいのだ。

膝から頭にパドマの体温、近くにいることでより強く感じる女の子特有の香り、そして無防備な耳を蹂躪されるといふ緊張と快感。正直、日本出身の娘がホグワーツに来てくれて本当に感謝だ。

幸福を感じているとハーマイオニーが開発した魔法具である羊皮紙が反応を示した。ホグワーツに通っている女の子たちからの定時連絡である。

ふくろう便や煙突を使った会話などは監視される恐れがあるため、去年作った羊皮紙が活躍しているのだ。

羊皮紙に浮かび上がる文字は生徒の名前。女子生徒に配布した羊皮紙に決まった時間に入する取り決めになっているのだ。

定時連絡で問題なければ通常の黒い文字で表示される。何か連絡することがあれば黄色の文字。その文字に触れれば更なる詳細を表示できる仕組みだ。

赤文字は危険が迫っていることを示す。そうなればリリはママたちの力を使ってでも助けに行くだろう。

今のところは女の子たちは特に異常なく休みを過ごさせているようである。

これで安心してこつちもイチャイチャできるといふものだ。

唯一の休みの不安は女の子も自分たちもダイアゴン横丁などでの買い物の基本禁止されているのだ。危険だからと言って子供は外に極力出さないのが今のイギリスである。

ちなみに今後は文字だけでなく闇の帝王の闇の印を参考に映像や声もやり取りできるように強化改造をしていくつもりらしい。

我が嫁と愛人ながらハーマイオニーやパドマ、ダフネの熱心具合に関心と呆れを覚える。

「ふうー……。」

「ひゃあんー！」

不意打ちの耳への吐息でつつい変な声をあげてしまった。

「また可愛い声。もっと聞かせてね。」

「もうっ！ ダフネ次は私がやってあげるわ。」

そんなこんなでイチヤイチヤしながらリリ達は変わらず過ごしていた。そしてあつという間にホグワーツへと旅立つ日がやって来た。

55. 希少種

1996年9月1日 キングス・クロス駅 九と四分の三番線

毎年この日のここはホグワーツへ向かう子供とその親でごった返しているのが常であつた。

しかし、今年はそうはならなかつた。

闇の帝王が復活した影響は当然のようにここにも表れていた。

マグル生まれや魔法使いの血が薄い者たちは安全のためホグワーツ行きの紅い蒸気機関車に乗ることさえ禁じられている。

過去に魔法省の管理下にあつたはずの吸魂鬼デイトターが列車を止めて侵入してきたことがあつたのだ。今の魔法省の制御下を離れた、いや闇の陣営の手先となつた吸魂鬼デイトターがいつ襲つて来るとも限らない。

列車には幾人かの闇祓いが乗車しているが、どうなるかは未知数だ。

特に狙われるであろうマグル生まれなどは新学期が始まる前から付き添い姿くらましなどでホグワーツに移動済みだ。

それ以外にも本当にホグワーツが安全かと疑つた親たちが雲隠れや一族全員で海外

逃亡するなどしていることもあって、列車はいつもの半分以下、コンパートメントも選
び放題であるが全く嬉しくもない。

そして当然のことながらホグワーツへと来られなくなった生徒は全員が男子だ。

女子はどのような危険があるうともリリアン・リンリーと同じ空間、同じ時間を過
ごせるホグワーツには戻ると決めていたのだ。

中には反対する親の制止を振り切つて独力でホグワーツにたどり着いた猛者もいる。

命を失うかもしれないのに、いやそれ以上の悲惨なことになるかもしれないのに、そ
んな事を思考から失わせてしまっただけの魅了と言う名の呪いがリリアンにはある。

それを知らない新入生は幸福でもあり、また不幸でもあると言えるだろう。

~~~~~

動き始めた列車の中でリリとその嫁、愛人たちはいつもの様にゆつたりと過ごしてい  
た。

今年は色々あって人数が少ないので女の子たちとの再会の喜びはホームで済ませて  
きた。

後はホグワーツまでの旅を楽しむだけ……そう思っていた。

「あの………すいません！ お楽しみのところ申し訳ありません！」

コンパートメントの扉を開けてやって来たのは下級生のレイブンクロー生であった。  
 「どうしたの？ 何かあった？ それとも……もつとして欲しい？」

「ひいあう……。そ、それはまた今度に……。その、要件なんです、リリアン先輩とグレンジャーさん、グリーングラスさんの三人にこれを渡してほしいと言われまして。」

リリの魅力に顔を赤くしながらも耐えた少女が渡してきたのは招待状であった。

「なにこれ？ 誰からだろう？」

「宛名はホラス・スラグホーンね。確か魔法薬の本で名前を見たことがあった気がするわ。」

「私も家にいた時に会ったことがあつたはず。多分今年の新しい先生じゃないかしら。で、どうするのリリ？ 行くの？」

「むむむ……。」

ハーマイオニーとダフネの話からすればそこそ有名な多分新しい先生だ。

名前からして恐らく男。今更教師に対しての態度なんかを気にもしないリリだ。

突っぱねてしまおうかとも思ったのだが、ママロザリンドの言葉が思い出される。

『男でもたまには希少な奴がいるもんだ。スラグホーンって言う爺さんがその筆頭だ。な。』

世界中の女と知り合うのに役に立ってくれたよ。』

ママの様に世界中の女性と知り合いになれるというのなら非常に魅力にあふれることだ。

でも、男だ。

しばらく悩み続けるリリ。

（私一人だったら絶対行かない。けどハーミーやダフネも一緒。招待状には同伴は何人でもOKなんてことも書いてあるし。でも〜あ〜。）

~~~~~

蒸気機関車の前方部の広めのコンパートメント

教師や監督生たち用の豪華仕様だ。

その内の一つで、ホラス・スラグホーン主催の軽い立食パーティが催されていた。

有力な貴族や著名人の子供、それに成績優秀者などのスラグホーンの目に留まった者たちだ。

そこに追加で招待客がやって来る。

リリを中心としたハーレムである。

呼び出されていた男子たちはまさかリリーが男の誘いに乗ると思いきもしていなかったたので油断していた。一瞬で楽しそうだった顔が暗く落ち込む。

「ほっほう！ こりや嬉しい！ ダメで当然と思つての誘いだつたがまさか来てくれるとは！」

そんな男たちの中で唯一主催者のホラス・スラグホーンは嫌悪ではなく喜びでリリ達を迎え入れた。

「どうも。」

「ああ、こちらこそよく来てくれた。ふむ……。呪いの感じはロザリンドよりは弱いかな？」

だが、顔立ちは幼い頃のロザリンドとレイラに似ているな。」

「ママとお母様の事を知っているの？ それに私を避けない男なんて珍しい。」

「ああ、君たちは確かに怖い。正直に言うとも今も怖いよ。ロザリンドにもホグワーツ在籍時には手を焼かされたものだ。」

でもね、あれはあれで魔法界に必要な人材と直感したのだよ。

私は人に刺激を、影響を与える人間が大好きなんだ。そしてそこに私が少しでも関われば直良し。そういう意味ではあれ以上に人に影響する者はおらんだろう。実は今でも繋がりには在ったりするんだよ？

これを機に君とも是非お近づきになりたいね！

まあ、今回のところは短い時間だがパーティーを楽しんでくれたまえ！」

その後はせっかくなので女の子たちと楽しむことにした。

貴族関係者が多いこと、つまりスリザリン出身者が多かったが、大多数が親に愛想をつかして闇とは無縁の女子たちだ。男子については闇に堕ちようがどうでもいい。

そんな中、色んな意味でどっちとも言えない女の子が一人で窓から移り行く景色を見ながら憂鬱そうにしていた。

聖二十八一族のマルフォイ家、その一人娘になったドラコだ。

明らかに元気なさそうだったのでリリと同じスリザリンのダフネが元気づけに近づ

く
「ドローラーコー！ 元気ないわね。どうかした？」

「おおかたマルフォイ家で何かあったんでしょ？ あなたも大変ねえ。」

窓を見ていたドラコがリリ達の方に向く。

邪険にされるなりすると思っただが、暗い顔のままリリに「やあ……久しぶり。」なんて言うだけでまた景色を見るだけになってしまった。

これはホグワーツに着いたらもつと癒さないと、とリリは決意した。

~~~~~

ホグワーツに到着後は毎年のように大広間にて組み分けの儀式。新入生は人数が若



干減ったので活気に欠ける。

組み分け帽子の歌も去年と同じで注意を促すものへと変わったままだ。毎年の歌の微妙な違いを楽しみにしていた生徒はこれには残念に思っている。

宴の後のダンブルドアの忠告も暗い話が多い。いつもの朗らかでどこか茶目つ気のある校長の話も気を引き締めたどこか悲壮感すら漂う雰囲気では大広間全体まで暗くなるのも仕方が無いのかもしれない。

「さて、色々話したが諸君の本業は学ぶことじゃ。その学びに必要な新しい先生を紹介しよう。」

列車内での情報が伝わっていたのか知っている生徒が多かったホラス・スラグホーンは魔法薬学の担当。

そして昨年までその魔法薬学を教えていたセブルス・スネイプは何と闇の魔術に対する防衛術を教えることになった。

ついに念願の科目を教えられるということで明らかに喜色を顔面から隠すこともしていないスネイプにグリフィンドールからため息が漏れる。

スネイプは既知ということで挨拶は無かったが、スラグホーンから新任の挨拶となった。

「ほっほう！ 私が紹介にあずかった。ホラス・スラグホーンだ。」

またこうしてホグワーツに戻って若人を導くことになるとは、長生きするものだ。ダンブルドアが言ったように今は大変な時期だ。だが、それも長続きはしないだろう。

それを確信しているのだから、こうしてここに戻って来ているわけだ。

学生の諸君らは何も気にせず勉強に力を注いで将来を華やかにして欲しい。それに私がその輝かしい将来の為になっていると嬉しい。以上！」

そしてその後は各寮に分かれて就寝だ。

ただ、リリだけは先にホグワーツに来てキングス・クロス駅で触れ合えなかった女の子とイチヤイチャ楽しむので時間を取られて寝る時間が遅くなってしまった。

もちろん後悔なんてあるわけがないが。

こうしてリリアン・リンリー6年目のホグワーツがスタートした。

## 56. やさしさに溶かされる

授業が始まったホグワーツはいつもと同じ……ではなかった。

寮同士の、特にグリフィンとスリザリンの間の諍いは今までと変わらないのだが、その頻度と規模がかつてないのだ。

「おい！　なんだこっち見てニヤニヤして！　なんか企んでいるんだろう！」

「どうせ親と一緒に闇の魔術に魅入られているんだ！」

「おお、怖い怖い。勇猛果敢なグリフィン寮の勇者様たちは何もしていない善良な一般生徒を一方的に疑うのがお得意にようだ。」

「俺たちは君たちのご両親が心配なだけさ。何せ……なあ？」

「マグル生まれだからってバカにしてんじやねえ！　エクスペリアームス！」

今も廊下でただ目が合ってスリザリン生がニヤついただけでこの有様である。

基本的にはグリフィンとスリザリンが過剰にスリザリンに対して反応し、ハッフルパフやレイブンクローも表立って何かするわけではないが嫌な顔をしてスリザリンを睨んでいる。

それに対してスリザリンが嫌みを返すといった感じであるが、他の寮と違って余裕を

持った態度が更に神経を逆なでしている。

実際にホグワーツの外から入って来る情報では闇の帝王の勢力が猛威を振るっているという情報ばかり。つまりはそれに連なる家系が多いスリザリンはまるで自分たちの勝利が決まっているかのような態度を取っているのだ。それが気に入らないグリフィンドールたちがまた揉めての悪循環。

廊下での魔法や魔法薬での攻撃などの応酬や余波による怪我人の増加に、校内の備品の破損も必然として増える。

そんな事態に誰よりも怒りに燃えているのは二人。

「お前らあー！ いい加減しろお！ そんなにこの鞭での折檻が望みか!?」

一人は管理人のアーガス・フィルチである。

スクイブにもかかわわらず魔法使い同士の戦いに怒りだけで割って入るほどに日に日に怒りが溜まっていつている。

「貴様らは罰則だ！ いいか!? お前らの生まれなどわしが知ったこ「うるせえな。生まれ損ないのクズが。吹っ飛ばよ！」

去年までであったら罰則や減点を恐れて馬鹿な真似をすることはスリザリン生にとつてあり得ないことだった。それがスクイブとはいえ学校の運営側の人間を攻撃するなど異常も異常な事態である。

どれだけ罰則や減点されようが、最悪退学になったところで闇の帝王側で純血の自分たちは輝かしい未来が待っていると疑いもしていないのだ。

「おおう！」

「ははっ！ スクイブは魔力が無いからかよく飛んだな！」

「てめえら！ この闇の魔法使いが！」

普段は嫌みでこちらの粗を探している嫌いなフィルチでも一方的に攻撃されて蔑まれているのを見るのは正義感の強いグリフィンドールにとつては我慢のならないことだった。

もはや目の前のスリザリン生は闇の魔法使い！ 止める！

「インカーセラス<sup>レ</sup>！」

縛り上げられる馬鹿な生徒たち。もちろん寮関係なく全員だ。

「だ、誰だ!? こんなことしてただで……。」

そこに現れたのは怒り震えるもう一人、マダム・ポンフリーであった。

「来なさい。あなた達がしたことについてみっちり教えて差し上げましょう。もちろん医務室のベッドの上で。」

有無を言わせぬ迫力でマダム・ポンフリーは気絶したフィルチと馬鹿な生徒を連れて行った。



多くなった。

元々少ない教師で500人を超える生徒を管理するのが無理だったのだ。

特にグリフィンとスリザリンの寮監のマグゴナガルとスネイプが不在というのが生徒の暴走に拍車をかけている。

ちなみにリリ達女子にとっては授業が自習であることが多い、そのせいで宿題が大量というの方が問題となっていた。

異常なホグワーツでリリ達も独自に動いていた。

知らなければ何もできないと情報収集と戦力の強化を進めているのだ。

闇の帝王側に近いということでスリザリンの女子からは情報提供が多い。

「危ないことはダメ。私と約束できる?」

「もちろん!」

「危ないことなんかしないわ。」

リリは心配から変な輩に近づくこともして欲しくなかった。

しかしリリを想う心が強ければ女子たちの動きは活発になっていった。

得られた情報はリリからロザリンド、そしてキャロル経由で不死鳥の騎士団にもいきわたっている。もっともロザリンドの独自のルートによる情報収集によって新しい情報

報は無いと言ってもいいのだが。

とはいってもリンリーがいるこのホグワーツに通う女子を子供に持つ闇の帝王の一派から情報が漏れることも予想されていることと、女子自身の大半が闇の帝王よりリリの為にと家から出て行っていることが多いため、情報としての精度と信頼性は低いのだった。

男子や教師陣が騒いでうるさいが、リリにとってはいつものホグワーツすなわち女子と触れ合える場である。

特に、今年ハールレムのクラウディアが卒業したので癒しが足りず、色んな生徒にそれを求めていたのだ。

張り切るのはリリの一つ上の7年生。母性ならば正妻やハールレムに負けぬとその未成熟ながらリリ達より熟れた肉体を使ってリリに癒しを与えるために努力していた。

一番積極的なのはクラウディアが抜けて穴ができたハツフルパフ。

「はい、よくできました！ これで今日の勉強はお終い！」

「それじゃあ、皆で料理……お菓子でも作りましょうか。」

「賛成！」

「リリちゃんは何が食べたい？」

「う〜ん……。クッキーかな。ちよつと多めに作っていい？」





平和に過ごす女子たちの中で一人、ドラコ・マルフォイだけは憂鬱であったり、物思いに耽っていたりとどこかおかしかった。

聖二十八一族の男子たちも親や上からの指示で女子とは接触するなど言われてはいないが、ドラコとはどうすれば良いのか測りかねていた。

一応は友であつたグラブとゴイルが近づく。

「お、おいドラコ。」

「これ喰うか？」

差し出された激甘そうなチョコレートケーキ。

流石にどうかと思うが一応は彼らなりに精一杯気をつかつた結果なのである。

「ありがとう。でもそれは二人が食べなよ。私はちよつと……散歩でもしてくるね。」

女になつてから時間が経つにつれて仕草や言葉使いが徐々に女の様になつてきているドラコ。更にはリリアン・リンリーを中心とした女子たちとも距離があるし、男子に対してもきつくはない。

これで元が男でなければ……そう思うスリザリン男子は多い。

実際に何も知らなかつた下級生から告白されたことも数知れず。

本人は嬉しくないであろうが。

「はあ……。」

ぶらぶらと当てもなく歩き続けて気が付けば湖のそばまでやって来ていた。

何だかんだでスリザリンの地下の談話室の窓から見えているので愛着がわいているのだろうか。

ドラコは悩んでいた。

魔法省の襲撃の際、父親のルシウスは騎士団に負け捕まった。死喰い人仲間デスイーターによってすぐに脱出したが失態に変わりはない。そして闇の帝王はそのしりぬぐいをルシウス本人ではなくドラコにやらせようとしていた。ルシウスにとってはその方が厳しい罰になると知つてのことだ。

ドラコに命じられたこと、それは学生の身には無理難題。

どう考えてもその方法が思いつかない。

(でも……どうにかしなければ父上が……!)

「ダンブルドアの暗殺なんて、どうやれば……。」

「ダンブルドアがどうしたの?」

「っ!?!」(聞かれた!?)

知らず声に出していた不覚の一言、それも致命となる言葉!

何としても誤魔化さなければ、最悪記憶を消す!

そう思つて振り返ればダフネを連れられたリリアン・リンリーが立っていた。

「やつほ、ドラコ。クッキー食べよ?」

列車の中からドラコの異変に気付いていたりリりはずっと気になっていたのだ。今日のクッキーも話すきつかけにするために作ったのだ。一応警戒心を下げるためダフネも同行してもらっている。

「ほらほら、食べようよ。結構自信作なんだから!」

「リリの手作りなんてレアなんだからありがたく食べなさいよね。」

「……聞こえてなかったの?」

「ん? さっきのダンブルドアを暗殺とかどうかつてヤツ? そんな事より食べて感想を聞かせてよ。」

「なっ!? そんな事! 私の父上の命が掛かっているのにそんな事 むぐう!」

言葉はクッキーを口に入れられることで遮られた。

吐き出そうとも思ったが予想以上に美味しくついで飲み込んでしまった。

前を見ると先ほどまでの笑顔ではなく真剣な顔のリリがいた。

「ダンブルドアがどうなろうとどうでもいいこと。私は気にしないわ。もしダンブルドアが死んでもきつとママたちが何とかしてくれる。私はそう信じている。」

「私の父上と母上はダンブルドアを殺さなきゃ殺される！ 私も！」

「なら助けなきゃ。」

「え？」

リリの顔がさつきより近く、すぐ目の前にあった。そのまま優しくまるで母の様に抱きしめてくれる。

ドラコの顔が真っ赤になって抵抗するが、リリは放してくれない。

「ドラコ。どうでもいいと言ったのはダンブルドアの事。でもあなたが危険な目に合うなら助けるわ。もちろん全力で、取れる手段は全部使ってね。」

「どうして……?」

「あなたが女の子で、私がリンリーだから。それだけよ。」

ドラコにとって自分の価値は純血であることが一番だった。

周りも家の力を求めて近づいてくるものが多かった。女子や取り巻きの男。

それが女になって自分の価値がなくなったと思っていた。

女子はより強いリンリーに惹かれ、男子は女子になった途端距離ができた。

闇の帝王が復活して、周りに集まった大人たちも女になった自分が、もう普通の子を産むことすらできない自分の事を見もしないことも、価値が無いということ強調させ

ていた。

こんな無価値な自分は誰にも助けてもらえない。誰も頼れない。

そう思っていた。

でも目の前の人は自分を見て、助けると言ってくれた。

両親と自分の死という想像を絶するプレッシャーですり減らされた心にリリのやさしさと言う魅了呪いが染み込んでいく。

気が付けばリリの事を抱き返して泣きじやくる自分がいた。

何もかも忘れてこの幸せに浸るのを止められなくてもいいじゃないか。

目の前の存在が自分がこんな思いをする元凶というのも忘れて継り付いていた。

## 57. 大人の助けと少女の癒し

リリに泣きついて全てを吐き出したドラコは幾分かスッキリと嫌な気持ちも抜けていた。

とはいっても状況は何も変わってはいないし、リリ達にそれを変える力はない。だがしかし。

リリにはそれを変えるだけの力を持っていると信じている人を知っていた。

「とりあえずはママへ連絡つと。それと……男だけど有能らしい校長先生様に頼るとしましよう。」

ハーマイオニー達がキャロルと協力して作った連絡手段はリンリー家のメイドたちも当然所有している。大事なお嬢様とその伴侶たちの安全のためには当然である。

それをもって現状について簡単に連絡。すぐにでもキャロルが姿現しでやって来るだろう。

その後はダンブルドアへと伝える必要もある。

「あー、いいところに。」

そう思っているとマクゴナガルとスラグホーンが何やら話しながら廊下を歩いてい

るのが見えた。

「マクゴナガル先生！ ちょっといいですかー！」

「廊下で大声は淑女としてはしたないですよ、ミス・リンリー。そういうところは口ザリンド似ですね。」

「ほっほう。元気でよいではないか、ミネルバ。さてわしに用はなさそうなので退散……ん？ そっちの二人はスリザリン所属だね。セブルスは自室にいたよ。」

「先生、校長先生に用があるんです。」

「ミス・リンリー。ダンブルドア校長は多忙です。用件があるなら私が取り次ぎしましょう。」

「んんん……。どうする、ドラコ？」

「もう、誰だつていい。私の家族が助かるなら……。」

「ということなので助けて下さい！」

「リリ、それじゃ何も分からないわよ。マクゴナガル先生、スラグホーン先生、私が説明します。」

その後、ダフネが一から十までしつかりと説明してくれた。所々でドラコの補足も入ったので大体は伝わったであろう。

「分かりました。この件に関してはダンブルドア校長に伝えると約束しましょう。ミス



……いえ、ミスター・マルフォイには進展があれば連絡があります。

だから、焦らず馬鹿な真似だけはしないことです。いいですね？」

「はい。私の家族を助けて下さい！」

ドラコはマクゴナガルの目をしっかりと見て言い、そして頭を下げた。

スリザリン生がグリフィン<sup>マ</sup>ドール<sup>ク</sup>の寮監<sup>ゴ</sup>に対して頭を下げるなどここ数十年は無かった珍事である。

だが、そんな体裁などを気にする余裕などドラコには無かった。

「ミス・リンリー。後の事は任せて大丈夫ですか？」

「ええ、女の子の事ならお任せを！」

「はあ……。」

ロザリンド  
母親を見ているようで逆に不安になってきます……。」

~~~~~

ホグワーツ校長室。

その主が戻ったのは深夜遅く、日付も変わって2時間ほど経ったところだった。

「ふう……。」

本来の子供たちを教え導くという職務ではなく、敵を探し打倒することに力を注いでいるという現状に体力以上に精神力が使われている。

溜息の一つも付かなければそれはもう人間ではない。

だが、まだダンブルドアの仕事は残っている。気力と体力回復の魔法薬を一気飲みして老体に無理やり活力を注入する。

そこにタイミングを見計らったかのようにノックの音が聞こえてきた。

「どろぞろ。」

許可を出すと入ってきたのは副校長のマクゴナガルとスネイプやと言った騎士団員にスラグホーンや魔法省のアンブリッジまでいる。

これから毎日のように行っている作戦会議だ。

敵の動向、味方の損害、魔法界全体の情勢、連絡経路の確立、諸外国とのやり取り。

話し合う内容が尽きることはない。

「校長。耳に入れて欲しい情報があります。」

そんな数ある議題が一段落したとき、マクゴナガルから聞かされたドラコ・マルフォイに関する話はダンブルドアにとっては特段驚くことではなかった。

「ふむ……。失敗した部下の家族を使うとは、いかにもあやつの考えそうなことではあるな。」

それはともかく、ミス・マルフォイも立派なホグワーツの一員じゃ。見捨てるわけにもいかん。」

「そうは言いますが、どうなさるおつもりで？　まさか死喰い人デスイーターのルシウス・マルフォイも救うとおっしゃるのですか？」

アンブリッジが呆れた口調でダンブルドアに聞いたのだす。

それに対して当然のようにダンブルドアは返す。

「もちろんそのつもりじゃ。」

「はあ……。まあそれはこちらの管轄ではないのでこちらに不利益が無ければどうでもいいでしょう。」

それより、闇の帝王は何が何でもあなたを殺したいようですね。未成年の生徒を使って失敗する可能性が高い策まで使うとは。」

「そうじゃな。向こうもこちらに策がバレることも想定してはいるじゃろう。」

さて、ミス・マルフォイは耐えきらなくてこちらに話してしまったが、もしそのまま作戦を続けられ、成功するとしたらどのような手段になっていたじゃろうか？

暖炉の利用した侵攻？　前ならいざ知らず、今の魔法省ではそれは難しいじゃろう。

ホグワーツの保護の解除による姿現し？　流星にセブルスが協力したとしてもそれは無理じゃろう。

一番可能性があるのは何かしらの方法での侵入、その後暗殺が可能性としては高いじゃろう。

肝心なのは侵入方法じゃが、わしには思い当たる節がある。

そしてその方法を利用して罠に嵌めようと提案するが、どうじゃろう？

もちろん色々と協力は必要になって来るじゃろうが。」

「ほっほう。ダンブルドアが悪い顔をしとる。」

「して、どのような策ですか。我輩もそれによつては動きが変わつて来るでしょうな。」

「うむ。ここはあえて敵の策が成功したようにして敵をこのホグワーツへと誘い込むつもりじゃ。」

「校長!? ここには生徒もいるんですよ! それに前の魔法省で敵の策で……!」

「ああ、その心はまさに教師の鏡じゃな。ミネルバよ、安心しておくれ。誘い込むとは言ったが、実際作戦時はホグワーツには誰一人侵入させるつもりはない。ただ、ミス・マルフォイには協力してもらふことになるかの。これからは騙し合いになるかの。」

そしてハリーの時の様と同じ過ちは繰り返さん!」

その後も夜が明けるまで闇の陣営に対する作戦会議は続いた。

もちろんこれはリリ達にとっては関係のない大人たちの争いである。

~~~~~

リリ達はマクゴナガルに報告した後はドラコを連れて必要の部屋へとやって来た。

何はともあれ、今のドラコには癒しが必要だ。

今に必要な部屋は大きなベッドに落ち着かせるためのアロマ、そしてこれまたリラックス効果のあるハーブティーや安らぎの水薬などが揃っている。

「何するの……?」

「ドラコにはまずはゆっくり休んでもらわないとね。」

ドラコは辺りを見回す。初めて入る必要の部屋というこの場所に警戒心を持っているようだ。

そしてドラコの目にあるものが映る。

「わ、私に何するつもり!? み、淫らでイヤらしいことなんでしよう!」

ドラコが見たのは未成年が持つてはいけない淫らな道具の数々だった。

ここは必要の部屋。入るものが求めるモノが用意されている不思議な部屋。

今はリリが必要と思つたものが、主にドラコに安らぎを与えるためのモノが用意されている。

だが、何だかんだと心の奥底ではこの機にもつと仲良くなりたいたいという願望やダフネとも色々したいという欲望を隠しきれていなかった。

それを的確に読み取った必要の部屋が気を利かせて用意していたのだ。

「え？ ドラコが望むならそうしたいけど。今はとりあえずはゆっくり休みましょう？」

（休む↓寝る↓ベッド！　ベッドも準備万端！　はっ！　あの飲み物には睡眠薬や愛の妙薬が!?）

「や、やっぱり私の身体が目当てなのね!?　わ、いや僕はこんなにされたけど男だぞ!?」  
普通ドラコが妄想していることは男女で行うものであるが、もはや混乱して何を言っているのかドラコも分かっていない。

「顔を真っ赤にしてカワイイ。というかそんなに可愛い娘が男とか何言っているの?」  
リリにとってドラコが男だったという記憶は既に消え去っている。

目の前にいるのは真っ赤な顔で目に涙をためて恥ずかしがっているシルバールブロンドの美少女だ。

……何だかんだと、そんな美少女を見ていたら性なる欲望が出てきたリリである。

「はいそこまで。リリ、まずはドラコには休んでももらいましょ。ドラコ、私が止めるから安心して眠りなさい。色々と酷い顔なんだから。」

「ダフネ……。ありがとう。」

その後はリリを一旦離して、ダフネがドラコを寝かしつけた。

安らぎの水薬を飲んでダフネに撫でられながらベッドに入れば疲労からかすぐに夢の世界だ。

「やつぱり、妹がいるから手慣れているわね。」

「まあね。アステリア妹は前までは病弱だったしね。さて、私たちはどうす、んむう!」

リリの舌がダフネの唾内を犯していく。数十秒たつぷりお互いを堪能した二人は口を離す。

二人の間には唾液による橋がかけられていた。

「ダフネ……。さっきのでスイツチ入っちゃった……。しよ?」

「もう……。服を脱がしながらそんなこと言われたら、ねえ? ドラコも寝てるんだからほどほどにね。」

「善処するわ。」

ちなみに、ドラコは事の途中で目が覚めて悶々として眠ることができずにいた。

それでも何だかんだと心労が取れていい顔になっていたのだった。

## 58. 新人歓迎

ドラコ・マルフォイ堕ちる。

その噂、いや真実は即座にホグワーツ中に駆け巡った。

女子たちにとっては新しいリリの仲間が増えた喜ばしいことだが、男子にとっては違う。

たとえ男であつても女にされてしまえばリリアン・リンリーには逆らえない。

その事実がドラコ・マルフォイという実例をもつて証明されたのだ。

ちなみにスリザリン男子たちは希望の星であつたドラコがリンリーに屈したと知つて断トツのショックを受けていた。他の寮も男のシンボルを潰されれば一ああなる未来が待っていると知つて恐怖している。

男たちはより恐怖を込めて、怒りを買わないように、関わらないようにリリアン・リンリーとさらなる距離を取るようになった。

~~~~~

女子たちはちよつとした祝賀ムードだつた。

ドラコが女としての自分を認めてリリの元に来たことでほぼ全てのホグワーツ女生徒は一つになった。

リリと距離があつたり片手の指で足りるほどだが男子と関係を持つている女子もいるが極僅かである。

リリとしてはそういうのはもつたいたいと思つてているが、本人の想いを蔑ろにしてまで無理やり魅了^{呪い}で惹きつけるのは違うというスタンスだ。

……ロザリンドならば無理やりにも全ホグワーツの女子を自らの手中に収めただろうと容易に想像ができた。

ともあれドラコがこつちに来た記念でちよつとしたパーティーを開催することを学校側に提案することにした。

男子生徒や教師の一部からはこの非常時に、などと言う意見も出たが最近はずい話題ばかりで楽しむ心を忘れてるように感じているということもあつてダンブルドアやマクゴナガルの許可も得てパーティーと騒ごうということになった。

今回のパーティーはホグワーツだけでなくホグズミード村も全面協力だ。

ホグズミード村への訪問もいつ何時襲われるかもしれないということから今年は禁止にされていたので今回の事で久々にホグズミードの商品を楽しめると大いに賛成されることになった。

ホグズミード村としても貴重な収入源であるホグワーツ生徒の訪問が途絶えていたので今回の依頼で少しは活気が戻ると大助かりだ。

言うまでもないことであるが、パーティーは男女別だ。

そもそも男子は寮同士の険悪な雰囲気がいっつも以上なため男子は各寮の談話室で行い、女子だけが大広間での盛大なパーティーだ。

入ったばかりの一年生の中には文句を言いたい気持ちもあるが、上級生になるほど男子のこんな扱いはいつもの事なので慣れっこになっていた。

~~~~~

「さて、パーティーで楽しい気持ちになる前に気になることは片付けてしまいたいでしょうか。」

パーティーに行く前に話があるということで、ドラコはリリハーレムと一緒に空き教室に来ていた。

ハーマイオニー、ダフネとパドマがドラコをここに呼んだのだ。

ドラコはこれからナニをされるのかと怯えている。

リリは信頼からか特に何をするのか聞いてはいないし心配もしていない。

ジニーは新たな女、しかも特殊な相手ということで警戒をし、パーバティは怯えるド

ラコを見てゾクゾクと新たな感覚に目覚めようとしていた。

「ドラコ・マルフォイ、あなたに聞きたいことがあるの。現状とこれからの作戦とやらについてね。」

「まあまあ、ハーマイオニー。ドラコもそんな態度じゃ怯えつばなしよ。」

「とりあえず、リリに危害が及ぶのかどうかだけ話してちょうだい。」

ハーマイオニーやパドマはリリへの安全面からドラコの関係することについて全部知りがついていたのだ。ダフネももちろんそうなのだが、一応は二人のストツパーとしての役割で円滑に情報を話してもらうためにいる。

「は、話すよ。ダンブルドアが言うには……。」

ドラコは知っていることを全て隠さず話した。

それを聞いたハーマイオニーはこの作戦ならばリリに危害が無いと判断した。

「まあ、大丈夫かしらね。それじゃあ、聞くこと聞いたからパーティーに行きましようか。」

「これからよろしくね、ドラコ。」

「え!? それだけ?」

「何が?」

「いや、もつと男だったのがどうか……。スリザリン生がとか、そういうことは無いの

かなって……。」

「リリが信頼しているからあなた自身に対しては特にないわね。その周りからの影響だけが気がかりだっただけよ。もうあなたもリリに魅せられているんだから仲間よ。」

「あー、ま待つてー！」

部屋から出ようとするハーマイオニーを引き留めるドラコ。

ハーマイオニーが振り向くと頭を下げるドラコの姿があった。

「グレンジャー……。あの時、あんな言葉を言つてごめん、ごめんなさい！」

「……もういいわよ。さつきも言つたように仲間なんだから。でもその謝罪はしつかり受け取つておくわ。そしてもうこれつきりにして、これからは仲良くしましょう？」

「そうそう。ドラコも最初は慣れないだろうけど女として楽しんでいきましょう。」

ハーマイオニーはドラコの事を許し、ダフネもこれからについて一緒に過ごす仲間として歓迎している。

ドラコは自分が女になった原因でもある発言を受けたハーマイオニーから許され、少し胸が軽くなった。

もう男には戻れない、女として生きる。

そういう覚悟を決めたドラコの手をリリが優しく包み、外に向かつて引つ張つていく。

「さあ、行きましようドラコ。今日はあなたが主役でもあるんだから笑顔！ 笑顔！」  
 「……そうよね。もう楽しむしかないわね！」

~~~~~

パーティーは盛り上がった。

大広間はリリの希望でいつもの長テーブルは撤去されて、立食形式でのパーティーだ。

そもそも、リリはあの寮ごとに分かれる長テーブルにはずっと不満があったのだ。

あれでは寮別になって色んな女子の組み合わせで楽しむことができないのだ。

追加の希望でホグワーツ外からの参加も許可が下りていた。

こんな時だからと、リリを求めて訪れる卒業生がそれなりにいる。それでも普段から連絡を取り合っている親密度が高い者たちだけだ。やはり距離と接する時間が空くと少しは魅力魅力が薄まってしまいうらい。

「はあい、リリ！ はるばるフランスから来てあげたわよ！ 嬉しい？ ねえ嬉しいわよね?!」

「お姉さまはしゃぎ過ぎです。招待してくださいありがとうございます。でもフラワーお姉さまは私のです。」

国外からもデラクール姉妹が参加である。と言ってもガブリエルは姉にくつついてきただけである。

「リリちゃん！　うう……本物だあ……。」

「ク、クラウディア……。胸に潰される……。あ、でもなんか気持ち良くなって……。」

もちろん、ハーレムの一員のクラウディアもその中にいた。

久々（三日ぶり）の本物のリリに抱きしめた格好のまま数分間動かなくなっていた。

リリに惹かれたもの以外にも多くの魔法使いやそれ以外が参加していた。

ホグズミードからはマダム・ロズメルタがバタービールを樽で持ってきて、料理も屋敷しもべ妖精が張り切る。特に雌の屋敷しもべ妖精の働きぶりは同じ屋敷しもべ妖精の雄が引くレベルであった。

料理に、お菓子、ダンスに、音楽、そしてこっそり卒業生が持ってきた酒。

ドラコもスリザリンだけでなくグリフィンドールの女子からも受け入れられ分け隔てなく歓迎された。

これにはドラコの目から涙が溢れてしまうことになったが、最後は皆笑顔で楽しむことができた。

その光景を見ていたパーティーの羽目を外し過ぎないように監督のマクゴナガルは女子限定だが寮が一体となったことで静かに涙していた。

寮の垣根を越えて笑顔で一体となる。これこそがホグワーツ創始者の求めていた光景ではないか。

~~~~~

そしてパーティーも終わりお楽しみ夜の時間だ。

ドラコ・マルフォイにとってはある意味本番でもある。

酒に酔った卒業生のお姉さまたちから強引にリリと一緒にベッドにダイブさせられたのだ。

曰く、

『若いうちにリリちゃんに愛してもらわれない女子が存在してはならない！』とか

『学生時代の特権！』だとか無茶苦茶言っていた。

ちなみに、ハーマイオニーやハーレム、その他の女子は誰も何も言えなかった。

ホグワーツで最も淫らで爛れた生活をしているという自覚はある。

低学年はともかくリリとの付き合いの長い女子は大抵がリリと経験済みなのだ。

ドラコだけ省いてしまうのは今回のパーティーの趣旨に反する。

ということドラコとリリは今、ベッドの上で向かい合って座っていた。

リリは余裕をもってドラコを見て、ドラコは真っ赤になって唸っていた。

（いくら女になったからって、受け入れたからっていきなり!?）　そもそも女同士ってどうするんだ!?　いやリンリーだから何か変なのか!?　というか男のままでもこういう場合どうするのが正解なんだ!?!）

ドラコ大混乱。

そうこうしているうちに我慢限界のリリがいつの間にか近づいて目の前にいる。

「ドラコ、いいい?」

魅力と混乱で思考停止したままつい、頷いていた。

ドラコ・マルフォイ、女を知り、真の意味で女となった夜だった。

~~~~~

リリ達ホグワーツ女子が楽しむその裏では闇との戦いは続いている。

その夜も闇の拠点が不死鳥の騎士団に強襲されていた。

そこは拠点と言っても監獄扱いに近いところであった。

死喰い人^{デスィーター}達もまさかここが襲われるとは思っておらず、あつという間に制圧された。

檻の中にいるのは主にミスを犯して帝王の不評を買った者たちだ。

そういったものも立派な情報源になる。生き残った者は次々と連行されて魔法省に

よって服従された後次の作戦の役にたつてもらふことになる。

その中にルシウス・マルフォイと妻のナルシツサがいた。

二人は魔法省ではなく、不死鳥の騎士団の拠点へと連れられて行く。

跡地には擬装用の死体も用意するという他とは違う対応だ。

「……私たちをどうするのかね？」

自分を連れて行く、犬猿の仲のアーサー・ウィーズリーに聞く。

「ダンブルドアの命令だ。お前を保護する。……子供に感謝するんだな。死喰い人だつデスィーター

て子供には愛情ぐらいあるだろう。」

それでルシウスはドラコの取った行動を察した。

ドラコがどういうことになっているかは嫌みな看守係に聞かされていた。

そんな子供がこうして自分たちを助けてくれている。

ドラコの安否が不安やら嬉しいやら複雑だが、とりあえず生き抜くことを誓う。

58 (裏) 攻防とその裏で

ホグワーツの生徒たちは多少の問題を抱えながらも勉強に友情、そして恋愛と青春を謳歌している。

その裏では大人たちが我が子や次の世代の子達の平和のために命を懸けて戦っていた。

人里離れた森の中。

マグル避けの結界が張られたそこには古びた屋敷が建っている。

外見はボロボロであるが、内装は汚れもなく新築同様だ。

そこに数人の男たちが下品な笑い声をあげながら酒を楽しんでいた。

「いやゝありや最高だったな。またやりてえぜ。」

「いいねえ。マグルを^{能無し}思うがままに操って最後にはボカン！ 闇の帝王万歳だな。」

「魔法使いってだけでこんなに楽しいし酒も美味い！ マグルには味わえない楽しみだわな！」

「ああ！ あくでも女をいいように使って喰らって遊べてえなあ……。」

「馬鹿野郎！もしバレでもしたらどうなると思ってるんだ！」

「い、言ってみただけだ！……あん？」

酒で判断力が鈍っていた男たちは一瞬反応が遅れた。

そしてそれが命取りとなった。

光、轟音そして怒号。

それもほんの数分の内に納まる。

先程までのバカ騒ぎから一転静寂に包まれる屋敷。

男たちは気絶、あるいは息絶えて転がっている。

立っているのは襲撃者だけだ。

襲撃者……不死鳥の騎士団と闇祓いの混成部隊だ。

敵の無力化作戦は成功。騎士団たちの被害はせいぜいが魔法を使ったことや戦いの緊張による疲労程度だろう。

だが、この屋敷にいたのは死喰い人とも言えない下っ端。所詮は思想も何も無い暴れたがりの愚か者。

この時世にただ魔法を自由に使えるから暴れている脳無しだ。

とは言え、こういった輩を放置するだけでもどんどん被害は広がる一方。それにどこに情報があるかもわからないのだ。騎士団と魔法省はこういう下っ端の更に下っ端で

さえ風潰しに対応するしかないのが現状だ。

襲撃した騎士団員の一人、リーマス・ルーピンは今しがた敵を殺したばかりだというのに消えない憎悪と怒りによって次の戦いの場を求めている。

（ああ、次だ！　もしかしたら次にはハリーがいるかもしれない……！　そのためには誰が相手だろうと容赦はしない！）

今までは騎士団の方針から敵は極力殺さないようにということになっていた。

だが、それは過去のものになってしまっていた。

友を殺され、親友の息子も奪われたルーピンには怒りと憎しみ、そして後悔しか残っていないかった。

ルーピンも敵を殺すのに最初はあった戸惑いが怒りに塗りつぶされて無くなっていくのを感じていた。

それがとても恐ろしいことだとは理解はしている。

今も目の前に転がる死体を見て後悔の感情が沸き上がって来る。
だが、そんな後悔をする時間も資格もない。

そう、自分に言い聞かせて足早にその場を後にした。

それを見ていた、見ていることしかできなかったニンファドローラ・トンクス。

彼の事を愛していると伝えた。拒絶されつつも近くに居続けた。

あんな風に自分を追い詰め、命を捨てる覚悟を持った愛しい彼を追ってトンクスもまた闇に消えていった。

~~~~~

イギリス魔法界全域で大小問わず戦いが頻発している。

それはイギリス魔法界の統治を司る魔法省でも例外ではない。

「おはようございませす！」

「ああ、おはよう。で？」

「闇祓い局と神秘部は不可侵。」

「よし。」

魔法省の入口では必ず合言葉を言うようになっていた。

警備がそれを確認し、言えない、知らない者はその場で即座に問答無用で捕縛される。

合言葉は毎日変更され、前日に魔法省に来ていなかった者はあらかじめ出勤していた

者と追加の合言葉を決めて必ず知るようにならなければならない。

こんなことをしても服従イシンの呪文ペリオを使われれば効果はほぼ無いも同然であるが、未熟な

術者であれば合言葉を聞き出せないかもしれないし、抵抗が強ければ合言葉の段階で警

備が違和感を感じるかもしれない。

様はないよりはマシということだ。そんな事をしなければならぬ程魔法省も危機を感じているとも言えるだろう。

「次、おはようマーク。」

「おはようございます……。」

「ん？ どうした……。！ 至急闇祓いに連絡を！」

返事をしたかと思えば合言葉も言わず杖を取り出す。明らかにおかしい。

すぐに取り押さえられたが、数人が負傷する結果になった。

入口のホールでの出来事だったので致命的なことにはならないが、これが奥まで侵入され悪霊の火などの大量破壊を生む魔法を使われれば大損害だ。

「はあ……いつまで続くんだよ。くそっ。」

職員たちの疲労も蓄積される一方だ。

何時となりで笑っていた仲間が襲ってくるかもしれない。

自分もそうならない保証はない。傷つける相手は愛する家族かもしれない。

疑心暗鬼と不安に負けそうになりそうなの職員たちは最前線で戦うスクリムジョールやダンブルドア率いる騎士団の活躍、そして何より家族のために力を振り絞って戦っていた。

~~~~~

くくくくくく

極一部の死喰い人デスイーターにしか知らされていない秘匿された場所。

その一室で闇の帝王ヴォルデモート卿は笑顔でワインを楽しんでいた。

魔法界と言う巨大なチェス盤で、数多の死喰い人デスイーターと言う駒を使つてじっくり確実に詰めに行っている。

こちらの駒も多くが取られたが全てはポーン。

対して敵側は徐々に駒が取られて疲弊して言っている。

そして勝敗を決する要のキングダンブルドアを打ち取る準備も進めている。

更に言えばこちらのキングは複数だ。

この戦争、負ける要素がどこにもない。

「ふふ……。」

笑顔になるのも無理なことだった。

「我が君！ 非常事態です！」

幸福な気分は飛び込んできた下僕の態度で霧散することになった。

「……俺様はつい先ほどまで気分が良かった。貴様の言う非常事態が俺様の気分を害してまで報告するに値するというのは出なければ、その命は残りわずかと思え。」

「つ！ も、申し訳ありません！ で、ですが！」

「言え。」

「はっ。アズカバンが崩壊しました！」

報告に来た死喰い人^{デスイーター}は激昂したヴォルデモートに拷問の殺されることになった。

~~~~~

アズカバン。

魔法界の脱獄不可能と言われた絶海の孤島にある監獄だ。

それが今や看守だった吸魂鬼<sup>デイメンター</sup>が跋扈し罪なき者が囚われ、邪悪な死喰い人<sup>デスイーター</sup>が幅を利かせる今までとは違った地獄となっていた。

闇の陣営にとっては大きな拠点。

正義側にとつては絶対に無視できぬ悪の巣窟。

そんな場所が一晩のうちに吸魂鬼<sup>デイメンター</sup>は消え去り、島も徹底的に破壊されたというのだ。死喰い人<sup>デスイーター</sup>だけでなく多くの囚われの者たちも命を落としてしまった。

これに対して魔法省の動きの方が速かった。

魔法省としてもアズカバンの崩壊は予想外だった。が、不利な現状ではこれを利用しない手はない。この一件は闇の陣営側の不始末で島が崩壊したという情報ではあるが、詳細は判明していない。



魔法省側は敵の陣営に乗り込み、打破寸前までいったが敵が島ごと自爆したというシナリオを世に対して発表。囚われの身の者は助け出せなかったが、こちらの被害はなし。

結果的に見れば敵の代拠点を落とせたという勝利を大々的の報じたのだ。

これに対して闇の陣営はどうしてそうなったのかは不明の不気味さが残っていた。

魔法省側の発表は嘘だとは分かっていた。だが、どうしてこのような結果になったかまではこちらとしても不明のままだ。

どちらにしても気味の悪い結果だけが残っていた。

世間にとつてはそんな両陣営の思惑などどうでもいい。ただ単に恐怖の象徴が消え去ったということさえ分かれば良かったのだ。

アズカバンの崩壊で両陣営の勢力はまた均衡することになった。

この結果にダンブルドアもヴォルデモートも違和感をぬぐえずにいた。

余りにもタイミングが良すぎた。まるでどちらも疲弊するようになっていたかのよううに。

アズカバンを滅ぼしたのも、それを両陣営に的確なタイミングで情報を流したのも、裏から様々な行動をする監視やスパイがいる。それも至る所に。

そんな何者かの存在を感じざるを得ないが、目先の戦いや作戦などを無視することは  
出

来ない。

この考えも何者かの思惑通りなのか。

~~~~~

ダンブルドアはドラコ・マルフォイを利用した作戦を進めていた。

元から知っていた外のボージン・アンド・ボージン店にある対となったものと繋がる
キャビネット棚。

その存在を知ったドラコがリリリから必要の部屋を紹介されて、そこでセブルスと協力
して修復したというシナリオにすることにした。実際にはドラコの手では直すのは難
しかったろうがダンブルドアの手で即座に修復されている。

そしてそれが実際に繋がっていることも確認済みである。

既に簡単な概要は説明してあるが、クリスマス休暇にドラコは一度屋敷に戻って
死喰い人^{デスイーター}にこのことの詳細を報告してもらう予定だ。

敵の作戦もスネイプのスパイ活動で判明していることも多い。

敵は畏だとしても攻め込んでくるようだ。ダンブルドアを殺すために相当な人数を

用意するという情報もある。他に何か切札もあるようだがそれを知るのはほんの一握りらしい。

だが、作戦決行の時期はある程度絞り込めた。それに合わせて準備万端で迎撃、そのままの流れで逆に攻め込むことも視野に入れている。

どちらの陣営も作戦の成功を確信している。

決戦の日は着々と近づいてきている。

59. 前夜

今日から楽しいクリスマス休暇。

ホグワーツの生徒たちも普段の授業や宿題を忘れて家族と共にクリスマスを楽しみ、新しい年を迎えるのだ。

……だが、そんないつもの事さえ今は難しい。

闇の帝王とその一派と不死鳥の騎士団や魔法省との戦いは膠着状況に陥っていた。

敵も味方も小競り合いこそあれど大きな動きは無い。

まるでこれから起こる大きな戦いに備えて力を蓄えているかのようだ。

それでも毎日のように誰が怪我をした、行方不明になった、死んだなんて言うニュースが日刊預言者新聞には溢れている。

こんな状況ではわざわざ危険を冒してまで家族の元に子供たちを返すなど恰好の餌をやっているようなものだ。

生徒と保護者の双方が望まぬ限り休みの間でもホグワーツからの移動は制限されていた。

そういう理由でクリスマス休暇に突入したというのにホグワーツはいつもとほぼ変

わらず生徒でいっばいだ。

家に帰るのはスリザリン生男子と極一部の生徒のみ。女子は誰一人としてリリアン・リンリーがいるホグワーツから動こうとしなかった。

ただ、例外は何事にも存在する。

その例外がドラコ・マルフォイだ。

「……本当に行くの?」

「ええ、それが対価だもの。」

「別にあんな男たちの命令なんて無視してもいいのに。」

「でも今後の為にも必要になると思うしね。」

ドラコは今後の戦いの行方を左右する作戦のために一度ホグワーツから死喰い人達デスイーターの元に戻ってホグワーツ侵入の為の経路の説明をするのだ。

ドラコの両親は既に助け出されてはいるが、表立っては二人とも騎士団の手によって死んだことになっている。ドラコはその敵討ちとして死喰い人デスイーターの手先となって働いているというシナリオである。

もちろん嘘であるし、死喰い人側デスイーターもそれは分かっているだろう、それさえも騎士団は承知でお互いに裏をかき合ってこの作戦でどれだけ相手に損害を与えられるか裏の裏の読み合いだ。

今回のドラコの報せで敵がどう動くのかを判断して更なる計画を進め修正するのだ。危険な場に戻ると知ったりりは当初校長室に女子全員を連れて突撃するつもりでいた。

しかし、当のドラコがそれを止め、納得しているというのだから渋々引いた。ただ微塵も納得はしていない。今も無理やりにでも帰るのを止めたかった。

「大丈夫。リリアンの母上もそう言っていたんでしょ？」

「それは……そうだけど。」

ロザリンドから女子は絶対に安全だと言われたこともあるが、やはり不安は不安。

何かドラコに自分ができることはないのかと考えるが思いつくのはやはりいつも同じ。じ。

「ドラコ！ 危険を弾くりンリー家の加護ね！」

加護と言うがいつもと同じ熱い抱擁と情熱的なキス。

それでもこれをされると女子は全員生き生きと力が湧くのだから間違っではないのだろう。

それにキャロルやロザリンド伝手の魔法具があるのでいざという時にも保険はある。

「それじゃあ、次は来年になってからね。」

紅い蒸気機関車に乗り込み手を振るドラコ。

それをリリは見えなくなるまで見続けていた。

~~~~~

年が明けて活動再開なホグワーツ。

ドラコ・マルフォイも無事戻ってきた。

戻ってきた時には女子から暖かく迎えられた。

もちろんリリもしつかりとホグズミード駅に降りた瞬間に抱きしめている。

他にはスリザリン女子たちがドラコの事を心配していた。寮内の結束が強く、純血同士で付き合いが長いことからリリに次いで心配していたのだ。

「ただいま。」

「うん、お帰り。」

こんな平凡なやり取りでもリリの事を愛おしく思ってしまう自分にすっかり女の子になつてしまったなどドラコは今更ながら感じていた。

死喰い人側<sup>デスィーター</sup>に情報は伝えたが、向こうの詳しい内容はドラコのような下っ端には当然伝わってこない。

一度ホグワーツに通じるキャビネットを死喰い人側<sup>デスィーター</sup>から言われた日時に繋げてテス

トするまでがドラコの役割らしい。

その後は実際に襲撃されるのか、何時なのかというのは騎士団と死喰い人側デスイーターの裏の探り合いになるらしい。この点はスネイプが頑張ることになるようだ。

それから戻って来るコンパートメントで騎士団の計らいで両親とは無事に会うことができたらしい。とりあえずはあと一回危険なことさえ乗り切ればドラコが働くことも無い。

リリ達はその後は大人の頑張りリに期待するしかない。

「ま、私たちは存分にイチヤイチャしながらホグワーツを楽しみましょう。」

~~~~~

闇の陣営も着実にホグワーツ侵攻、ひいてはダンブルドア抹殺の準備を進めていた。

ホグワーツへの侵入手段を見つけたというドラコ・マルフォイから詳しく話を聞くことでより具体的な作戦も計画した。

一度、死喰い人デスイーターの下つ端一人をその手段であるキャビネットを使って忍ばせたが本当にホグワーツ城へと侵入できることを確認した。

脳無しデスイーターの暴れたいだけの愚か者はこれで勝つたも同然など思っている。

しかし、古株や熟練の魔法使いたちそして闇の帝王はこの一連の動きが出来過ぎてい

ると、罨だと見抜いていた。

そもそも一学生がすんなりと抜け道を見つけたというのからして怪しき満点だ。侵入した下っ端がすんなり帰って来るのもおかしい。試しに拷問したがやはり服従させられていた。とりあえずはどこかしらに通じていることが確認できただけだ。

わざわざシルシウス・マルフォイを監禁しているところが襲撃されたこともドラコが裏切ったていることの信頼性を高める結果だ。

本音を言えばドラコ・マルフォイを服従するなりすれば詳細がわかるといふものが、リンリーの元それは許されない。

「我が君いかがいましてしょう？」

「無論、帝王に逃走は無い。敵が罨を張って待ち受けているのならばそれを真正面から粉碎し力を示すとしよう。」

帝王は逃げない。立ちほだかる敵は殺して進むのみ。

敵も馬鹿ではないだろう。こちらが罨だと気づいたことを理解しているだろう。

そのために強襲する部隊は精鋭揃いだ。

帝王の左腕のベラトリックスやなど重鎮を揃える。

更には数も用意した。服従されたマグルなどいい壁になる。

そこに追加されるはダンブルドア、いや一部の騎士団にとっては力を十全に発揮でき

そしてそれを粉碎するため全力で攻めてくるはず。

つまりはこの戦いが今後を左右する一大決戦だ。

「闇の帝王は何やら精鋭の部隊を集めているようです。それと、マグルを今まで以上に服従させ捕らえているという話も多数聞こえてきます。まだ準備があるようで恐らくは後一カ月ほどかと思われます。」

「ご苦労じゃセブルス。敵はホグワーツに侵入できないことは分かっているが、まだどこに転移するかまではつかめていないのじゃな？」

「おそらくは。」

「では、襲撃直前になったら別の場を偽って情報を流してほしい。少しは戦力が分散するじゃろう。」

「了解しました。それではそれをおこなったら我輩は……。」

「ああ、もう二重スパイは無理じゃろうな。そろそろ完全にこちら側についてもらうことになるじゃろう。」

「それでダンブルドア。魔法省はどうする？ 闇祓い局は戦う気にいるが。ここで一気に逆に転移して敵を打ち取ることも視野に入れるべきでは？」

「いや、大臣。敵もそれは想定しているじゃろう。帝王は来ないと推測しておる。別の場所で隠れているじゃろうな。あくまで今回の戦いは大きなものじゃが最終決戦には

ならんだろう。」

「エヘン。それでは魔法省にも時期が来たら即座に知らせていただくようお願いしますね。」

ホグワーツの校長室に騎士団のリーダーダンブルドア、二重スパイのスネイプ、魔法大臣のスクリムジョールにその部下のアンブリッジが話し合っている。

前回の魔法省の件は結果を見れば大敗だった。

今回は負けることが許されない。負けは戦力の大幅減とそのまま士気の低下から一気に敗北が見える。

今回はダンブルドアも前線に立つ。これだけで勝てると思わせる。

敵の大將のヴォルデモートが出ない限りこれで負けはなくなったと言えるだろう。

難敵のベラトリックス・レストレンジでさえダンブルドアを抑えることは出来ない。

「勝とう。我々に負けは許されない。」

魔法界の未来、子供たちの未来の為にその闘志をみなぎらせてダンブルドアは言った。

~~~~~

「ええ、はい。順調です。このままいけば両陣営は激突。恐らくは勝つのは騎士団側。」

ですが少なくない被害がでるはず。

情報通りならば死喰い人側はアレが動きまわります。それ対してお願いいたします。

死喰い人側はこれを機に大きく動くはず。

そろそろこちらも表に出て動く時かと。」

ある屋敷である女性が報告していた。

そしてそろそろ自分の真の役目が来る事を覚悟して仲間への連絡を入れ始めた。

「それではみなさん。来年でさつくり戦争を終わらせましょうか。」



盾プロテクトの呪文と同等の効果を持った魔法具を装備し、陣の前には罫が設置されている。

そんな彼らの前方には一つぼつんとキャビネット棚が置かれている。

何でもないようなそのキャビネット棚を前にして歴戦の魔法使いたちは緊張の面持ちだ。

そのキャビネット棚の扉が開いた時が戦い始まりを告げる。

「！ 来たぞー！」

扉が開く。飛び出してきたのはシルバーブロンドの少女ドラコ・マルフォイ。

即座にリンリー家のメイドのキャロルが回収して戦闘域を離脱する。

残ったのは開かれたキャビネット棚のみ。

次に現れるのは仮面を被った闇の魔法使い、死喰い人デスイーターだ。

……そのはずだった。

「な、なんだ!？」

「これは……。」

驚くのも無理はなかった。

敵が来るはずだったキャビネット棚が突如として巨大化したのだ。

巨大な扉はそれ相応に意味を成す。人間用に作られたキャビネット棚を潜り抜けられぬその存在の為だ。

巨人が戦場に現れた。

「おおおおおおおおお！」

人の姿をしたその獣たちは咆哮をあげ突撃してくる。

防御の陣も、罾も、魔法も多少の足止めにならず、全て無駄だというように蹴散らされた。

混乱する場に声が響く。

「各自散開後、あらかじめ決められた場所に集合！ 巨人に対し連携して各個撃破に当たれ！」

魔法大臣、そして闇祓い局長でもあったルーファス・スクリムジョールだ。

その声でいくらか落ち着きを取り戻した闇祓い達が態勢を立て直しにかかる。

だが、敵の追撃が来た。

巨人の次は人の波だった。

騎士団や闇祓い目掛けて一心不乱に、隣を走っていた仲間たちが巨人の足裏の紅い染みになろうがお構いなしに一直線に突撃してくる。

魔法での迎撃に対して防御もせずただやられるだけ、それでも数が数だ。

闇祓いの何人かががちり抑え込まれ、そのまま諸共巨人に圧殺された。

「ダ、ダンブルドア！ こいつらマグルだ！ 服従されたただのマグルだ！」



キングズブリーが叫ぶ。事実、現れた人の波は全てマグルだった。

それでも魔法使いとマグル、その差は魔法の有無だ。肉体的には変わるものではない。

肉弾戦になってしまえば、組み敷かれてしまっただろうすることもできない。

「おのれ、トム！ ここまで非道な手を使うとは……！ じゃが、まずはこうじゃ！」

ダンブルドアが巨大化したキャビネット棚を破壊した。

敵が死喰い人を送り込む気が無いようならば転移先に敵の拠点ではないのだろう。

こちらから攻め込む利点が無いのならばあるだけ無駄だ。

これでとりあえずの増援はなくなった。

「次はこうじゃ。」

大量の水を創り出し、放出する。もちろん味方には当てないように。

抵抗できぬマグルたちはそれで無効化される。

後は厄介な巨人だけだ。

厄介と言うが巨人は魔法使いにとって天敵ともいえる恐怖の存在だ。

性格は粗野で野蛮で同族の殺し合いの頻度も高い。魔法使いとのコミュニケーションをとることも難しい。

だが、そんな事よりも魔法使いにとっては魔法を弾くという点が恐怖なのだ。

5メートルを超える魔法が効かぬ巨体が迫って来るのはそれだけで絶望的になる。だが、ここに集った魔法使いは精鋭たちだ。

一人が囷となって引き付け、別の者が目を潰す。そして残りが大質量の岩などで押しつぶし、そして悪霊の火で死ぬまで焼き尽くす。

もちろん簡単ではない。それでも一体一体確実に仕留めていった。

~~~~~

一時間後。

あちこち荒れ果てた戦場痕に生き残った者たちが集まっていた。

「損害は？」

「闇祓いは7名が死亡、13名が重傷です。残りは軽傷や疲労だけで戦闘は可能です！」

「

闇祓いは半数ほどが戦闘不能となってしまった。不死鳥の騎士団は流石で死亡者はいない。それでも重傷者はゼロではない。

「手ひどくやられたものだ。各自警戒を怠るな！」

「了かあつ……。」

返事は永遠に途切れた。

突如飛来した緑の閃光がその者の命を奪い去った。

それだけではない。彼らの上空には闇の印が打ち上げられていた。

巨人やマグルに紛れていた数人の死喰い人^{デスイーター}が姿を隠し打ち上げたのだ。

それを目印に続々と敵が姿現しをしてくる。場はまたもや混戦になってしまった。

「さて、疲れた獲物をサクツと狩ってしまおうか。」

敵の最前列には子供が、それも不死鳥の騎士団にとつては見慣れた最悪の相手だった。

~~~~~

疲弊した騎士団たちに死喰い人<sup>デスイーター</sup>が襲い掛かる。迎え撃つ騎士団と闇祓いたちは先の戦いで疲弊しているが、一進一退の戦いが続く。

爆発が、怒号が、悲鳴が戦場と言う名の楽曲を奏でる。

時間が経過することに夜の静けさが戻って来る。それは両陣営の命が次々と失われていくことを意味していた。

「はあははははははー！」

そんな中でハリー・ポッターの姿をしたそれは笑いながら敵に死の呪文<sup>アバダケダブラ</sup>を放つ。

躊躇も葛藤もなく、ただただ楽しそうに敵を殺していった。

「ハリー！ 目を覚ますんだ！」

その姿を見ていられなかったアーサー・ウィーズリーがハリーの前に進む。

もう、息子同然だった子供のそんな姿は見たくなかった。

一縷の望みをもって説得しようとするが、それをあざ笑うかのように死の閃光が胸を貫く。

「愚かなり。姿形に捕らわれるような純血は不要だ。」

「もうやめてくれ！ ハリー！」

「ん？ そいつはいったい誰の事だ？」

ルーピンは人を、それも父親同然に慕っていたアーサーを殺したというのに顔一つ変えぬ親友の息子の姿を認めたくなかった。

ハリーの姿を見た瞬間からあれほど燃えていた憎しみの炎が消えていった。あるのは後悔と憐憫。

ハリーを殺したら自分も死ぬ。

ルーピンは躊躇なく禁じられた死の呪文アバダケダブラを放とうと構える。

「止めて！ ルーピン先生！ 助けて！」

演技だ。そう、演技のはずだ。

目の前にいるハリー・ポッターは敵、もう魂ごと殺されたんだ！

そう思っても一瞬止まってしまふ。

ジェームズとリリーが抱きかかえた赤ん坊の姿、短い時間だが教師として接した時のジェームズそっくりの姿。そんな思い出が邪魔をした。

「ああ、あなたは最高の先生だ。」

その隙に胸を死が通過していった。

~~~~~

「さて、そろそろあなたを殺しておきましょうか？ ダンブルドア校長先生。」

周りに転がる死体に目を向けることもせずハリー・ポッターの姿の闇の帝王の分け身は最大の障害を見据えた。

「ハリー、いやトム。 ここでその体を返してもらおう！」

「どうぞ。 やれるものならな！」

史上最高の魔法使いと史上最悪の魔法使いの一騎打ちが始まった。

一流の魔法使いと比較しても呪文一つとっても速度も威力も桁違い。

そんな魔法が縦横無尽に行き交う。

「アハダケダブ^{息絶}ラー！」

ハリーが死の呪文を的確に放つも、ダンブルドアは老人とは思えぬ身のこなしで紙一

重で躲し敵を打倒すべく呪文を放つ。

ハリーは一瞬で姿をくらませダンブルドアの背後に現れる。

放たれるは蛇を模った悪霊の火。

対するダンブルドアは杖を振るうだけで地面を隆起させ大質量の塊を炎に向けて突撃させる。

蛇も食らいつくが質量差で押しつぶされる。

「くっ。やるではないかダンブルドア！」

「……おしゃべりじゃのおトム。その肉体のせいなのか？」

「黙れ！」

戦いは激しさを増し続く。

ダンブルドアがお返しとばかりに不死鳥を模した炎を放てばハリーは水の刃でダンブルドアごと切断しようとする。

呪文の応酬は周りを次々と破壊するほどだ。

だが、徐々に戦況の天秤は傾いていった。

周りでの死闘も終息しつつある。

気が付けばハリーを狙う呪文はダンブルドア以外のものも現れ始めた。

「っ!? おのれえ！」

ハリーが周囲を見渡せば死喰い人^{デスイーター}どもは捕らえられたり、殺されたりと無力化されていた。

殆どは逃げたようだったが、結果は敗北だった。

「まだだ！ この俺様がいる限り！ 負けはない！」

「いいやトム！ これで終わりじゃ！」

いくら強くとも多勢に無勢。それにそのうち一人でさえ苦戦をしていたのだ。

追い詰められて地面に無様に転がり、杖を突きつけられるのは当然の結果だった。

「くそが！ この俺様が……！」

こんなことは認められないと、死ぬことを受け入れられぬと最後まであがこうとするハリー。その時頭に直接自分の声が響いた。

（いいや、予定通りだ。いや予想以上にやってくれたよ。褒美だ俺様の為に死ぬが良い。今なら大勢の付き添いがあるぞ。）

「な、なにを?！」

ハリーの身体から黒い煙が噴出する。

ダンブルドアたちは距離を取ろうとするが、何かに阻まれ離れられない。

「おのれおのれおのれおのれえ！……このおでぎまなああ……。『さて、ダンブルドアよ。より完全な存在は一人で良い。死ね』」

「皆！ わしの後ろに！」

別人の声を出したかと思えば一気にハリーを中心に数メートルが闇で覆われた。

ダンブルドアは己の後ろに仲間を集めその闇に手を向ける。そしてそのまま闇に飲み込まれる。

闇が晴れた時には誰一人立っている者はいなかった。

そして中心のハリー・ポッターは姿を消していた。

~~~~~

「くそが……。」

己の魔力を、魂を限界まで使った呪いの放出。

その放出時のわずかな隙をつけてハリーは呪いから脱出していた。

それでも魔力も体力もゼロに等しい。今はただ、地面に横たわることしかできない。

「ああ……。でも……。流石は俺様の本体ということか……。」

ヴォルデモートは己の魂を7つに分けていた。

ヴォルデモートの不死の秘密。ホークラックス分霊箱。

そして本体を合わせて魔法的に最も強い数字である7個を作っていた。

ヴォルデモートにとって、ハリー・ポッターを分霊箱ホークラックスにするのは想定外だったのだ。



宿敵、予言の敵を殺すために利用したが、7という数からはズレてしまった。

それにいつかはハリーが本体にとつて代わろうと叛逆する可能性もあると考えていた。

倒れながらハリーは確かに自分ならばいつかはそうするだろうし、逆の立場ならこう使っているのも理解できた。自分自身のことだからこそ理解できる。

本体としては叛逆の恐れがある分身の始末、自身強化、そして敵の排除もできて一石三鳥だ。

本体の手際とヴォルデモート卿という存在の永遠を願って静かに消えようとしていた。

「おいおい死にかけじゃないか。」

そこに現れたのは予想もしていなかった人物だった。

「ロザリンド・リンリー……!」

「はいよ。」

「貴様……! 協定破棄だぞこれは!」

「何言つてんだか。いつかはこうなるってわかっていただろう?」

そして無造作に杖を向けられる。このまま死を覚悟をしたがこんな奴に殺されるこ

とには怒りが湧いてくる。

しかし、放たれた呪文は死ではなかった。

「ルールサス<sup>去勢</sup>」

想像絶する痛みが襲い掛かり男が死んでいく。

そして肉体も魂も変わっていくのを感じながら意識を手放したのだった。

「これでいいのか？」

「ええ、ええ！ 流石は我が主。さて、後はこちらにお任せください。

ちようど今、魔法省も落ちたようです。全ては順調ですね。」

「まあ、面倒なのは任せるよ。私は帰って寝る。」

もちろん普通以外の意味も含めてである。

メイドに連れられて消える主を見送った女は眩く。

「さて、これからますます忙しくなるわね。正念場だわ。」

~~~~~

激闘の裏では。

任務をやり遂げたドラコがご褒美としてキャロルに連れられた来られていた。

そこはホグワーツの寮、恐らくはグリフィンボールその一室。

「()は……?」

「中で一晩楽しんでください。もちろん許可は得ております。それでは。」

それだけ言って姿を消すキャロル。

恐る恐る中に入ると中にはリリが一人だけで眠っていた。

(え?! なんて? ハーマイオニーやダフネたちは?)

疑問でいっぱいのだらこの前に羊皮紙が落ちてきた。

そこには今回のご褒美として一晩リリを独り占めしていいと言うことが書かれていた。

もちろんハーレムの許可済み。しかもドッキリとしてリリには秘密らしい。

ドキドキしながら寝ているリリに近づく。

可愛らしい寝顔に耳をとろかしそうな寝息。

更に近づく。目に映るのはリリの顔だけだ。

「触つても大丈夫かしら……?」

ツンとほっぺをつつく。その柔らかな感触は何に例えれば適切なのかいっぱいっぱいになっているのだらこには思い浮かばなかった。

「ううん……ドラコ……。」

(わ、私の名前を!?)

眠ったままとは言えハーマイオニーやハーレム以外の名がリリの口から出た。

それだけでドラコの理性は崩れようとしていた。

息もつい荒くなってしまう。

流石にリリも瞼を開いた。

「んん〜ドラコ? ……寂しくなっちゃった? おいで。」

寝ぼけたまま手を引つ張つてベッドに引き込んでくるリリ。

ドラコは抵抗することなくそのままリリに包まれて眠れない夜を過ごすことになった。

61. ハーレム六年目

魔法省の大臣室。

そこに備え付けられた高級な椅子に闇の帝王はゆったりと腰を下ろす。

周りには誰もいない。この場所に最も相応しくない敵の首魁がいるというのに警備や闇祓いは誰一人やってこない。

今や魔法省は完全に闇の手に落ちた。

抵抗する者は全て死ぬか服従させられた。

ドラコ・マルフォイを発端とする一連の戦いは闇の陣営にとつても、ヴォルデモート卿にとつても確かに重要ではあった。

相手が罠を張って待っているが、それは逆に必ず敵がそこにいるということ。

そこにはダンブルドアもいるはず。

戦力を削ぐには、邪魔者を殺すには絶好の機会だった。

こちらも十分な戦力を投入する。事実スパイのスネイプにはそう伝えていたし、それだけの戦力は用意した。

それでも真実の全てをスネイプには伝えていなかった。疑い深い闇の帝王は完全に

スネイプの事を信用していなかったのだ。

更にワームテールを参考に小動物の動物もどきを別に送り込んでいた。結果スネイプの裏切りが発覚し、スネイプにはより正確でない情報が流されていたのだ。

そして戦いの本当の狙いは敵の殲滅ではない。

真の狙いはハリー・ポッターの、予想外の分霊箱ホークラックスの破壊にあつた。

敵の数減らしも、ダンブルドアの殺害もあくまで副次的な物。

分霊箱ホークラックスとは言え己自身。少ない下僕どもで十分に働いてくれた。その間に自分は別動隊を率いてこうして魔法省を落とせた。

確かに向こう側に費やした戦力も少なくない。

それでも闇の帝王は最終的な勝利を確信していた。

騎士団は痛手、ダンブルドアは瀕死、魔法省という政府機関は掌握済み。

こちらの損害はマグルの駒が全部と、巨人族といくらかの下僕。

分霊箱ホークラックスが自身を入れて7つになって力を高めたことを考えればむしろプラスである。「さて、チエックだな。」

チエック詰メイトみまであと一手。後はホグワーツに集まるであろう残党の処理。

そうすれば英国魔法界はこの手に落ちる。いずれはヨーロッパ、そして世界だ。

だが、その前にやらなければならないこともある。支配するに必要なこと。

永遠の命と永遠の支配を両立するための力。

「必ず手に入れるぞ。リンリーの力。」

~~~~~

「さあ、急いで！ ポンフリー！ こちらへ！」

ホグワーツ学び舎がまるで野戦病院の様だった。いや、実際野戦病院と言うべきか。

この日の作戦のために聖マンゴ魔法疾患傷害病院から集められた癒者ヒーラーが忙しなく動き続けている。

魔法薬も、魔法具も用意していた分がみるみる減っていく。

闇の勢力との戦いから帰還した騎士団や闇祓いで無事な者は一人もない。

裂傷、打撲に骨折、火傷そして呪い。

皆どこかしら負傷していた。

そんな中で一際酷い有様なのが、ダンブルドアだ。

帝王の分身ハリリーからの呪いから仲間を守るため身を挺して庇った結果である。

呼吸は弱く体温も異常なほど高い。体中におぞましい色をした斑点ができています。

一番ひどいのは両腕であった。炭のように真っ黒な塊に成り果てていた。

この有様で生きているのはダンブルドアの高い魔力があるからこそである。

並みの魔法使いなら3回死んでもおつりがくるぐらいの凶悪な呪いがダンブルドアを蝕んでいた。

ポンフリーを中心とした癒者<sup>ヒイラー</sup>、呪いに詳しいスネイプや魔法薬学のスラグホーンなども処置に当たる。

「夜明けまで保てばいいが……。」

誰かがそう呟いた。事実1秒ごとにダンブルドアの命は減り続けていた。精鋭たちがいくら治療をしようとも限度がある。

そこに不思議な歌が響き渡る。不安を和らげるような不思議な音色だ。

出所を見れば不死鳥が舞っている。

「フォークス……。」

意識をわずかに取り戻したダンブルドアが呟く。そこに不死鳥が舞い降り主の痛ましい姿に涙する。

その涙がダンブルドアに触れると今まで苦しめていた呪いの勢いが止まった。

「これは……！ 不死鳥の涙！ これならば！」

その隙を見逃さずスネイプが全力で呪いの解呪を行う。

癒者たちも手が空いたものから順番に交代しながら夜通しダンブルドアの治療が続けられた。



長い夜が明けた。

どうにか負傷者の中から一人も死者を出すことなく乗り切れた。

ダンブルドアも容体は安定した。それでも今までのように戦うことはおろか、動くことさえ困難になるだろう。それに寿命も後一年あればいい方だろう。

「治療に携わってくれた全てに癒者<sup>ヒーラー</sup>に魔法大臣として、そして一人の魔法使いとして最大の感謝を。」

自身も決して軽傷ではなかった魔法大臣のスクリムジョールが礼を言う。

このまま終われば気分が良いまま朝食にありつけるだろう。

それでも自らの役割としてハッキリ言わねばならぬときがある。

「今回の作戦は敵の多くを捕縛した。打倒した！ 帝王の分け身であるハリー・ポッターも滅んだ！ 結果を見れば我々の勝利だ。だが！ 心苦しいと言わねばならぬ！

魔法省が闇の帝王の手に落ちた。」

知っていた者も知らなかった者もそのことに言葉を失う。

「我々は追い詰められているといつていいだろう。イギリス魔法界を司る魔法省は敵の手に落ちた。戦力は低下している。最大最強の魔法使いは瀕死だ。そして闇の帝王は健在。」

最悪だ。

だが！ それでも我々は戦う！ この魔法界をあんな愚か者の好きなようにはさせ  
ん！

断じてだ！

スクリムジョールの啖呵に賛同する者の雄叫びが重なる。

だが、それでも心の中の弱音を隠しきれていなかった。

~~~~~

イギリス魔法界はどん底だった。

去年の闇の帝王の宣戦布告など比較にならない。

それもあんな発表がされれば仕方がかもしれない。

魔法省直々の発表とすることで日刊預言者新聞や様々な者が魔法省に集められてい
た。

「新しい魔法大臣のご登場です。」

皆が一斉に疑問に思う。スクリムジョールはまだ生きているし、前任ファッジと違い
まともだ。それなのになぜ？

その場にコツ、コツ、と階段を下りる靴音がやけに不気味に響いてきた。

段々と場が静まり始めた。

現れたのは闇の帝王だった。疑問は恐怖に代わり絶望がやって来た。

「さて、魔法省は俺様の手に落ちた。この帝王がイギリス魔法界を支配した。前に言ったことをもう一度言おう。降伏し俺様に従え。抵抗するならば殺す。」

それだけ言つてヴォルデモートは再び戻つていった。

後に残つた者たちに死喰い人達デスイーターがこの事実を家族、一族、友人、知人全てに伝えるようにと、闇の帝王に従うか、抵抗して死ぬかどちらかを1週間の間に選べと言つて消えた。

突然の連続にしばらくその場から誰も動くことができずにいた。

悪い情報は広がるのが速い。あつという間にイギリス全土に混乱と恐怖が伝播した。

まだスクリムジョールも生きているし、不死鳥の騎士団も戦力は十分なのにもかかわらず人々はもう敗北を受け入れ始めていた。

それどころか生き残ることを目的に少しでも闇の帝王に敵対的な言動をしただけで売り渡そうとする臆病者まで現れ始めた。

帝王の定めた期限の1週間が過ぎた。

服従を決めた一族は当主が直々に出向いて帝王に跪いた。

そして最期まで抵抗する覚悟を持った誇り高い魔法使いたちはホグワーツに集まつ

彼女はこの状況に対して何の不安も抱いていない。ならば彼女の愛を受ける自分たちが不安になってはいけない。そう言う思いから負の感情を隠そうとしているのだ。特にハーレムや近いものほどリリの愛に包まれて不安は薄くなっている。

そんなホグワーツにドローレス・アンブリッジがやって来た。

そして生徒や抵抗者を集めて言う。

「皆さん、大丈夫です。ここは安心です。」

何の根拠もない、ただ不安をぬぐうために言った出まかせにしか聞こえない。

そんな安っぽい言葉ではもはやここにいる魔法使いは誰一人納得などできない。

誰かがそんな無責任なアンブリッジに文句を言おうとした時。

音一つなくなつた。

魅力的な存在がやって来る。

その存在がいるこの場の空気は何よりも幸福に満ちていた。

その存在を前にしては闇の帝王も霞む、闇の帝王などもはやどうでもよい。

ロザリンド・リンリーがそこにはいた。

「ママ!?! なんで?..」

リリの言葉で目の前にいる女神悪魔がリンリー家の者だと理解した。

「んゝとな。とりあえずこれ以上あのバカが何かすると世界中の女に害が及ぶってドロレスが言うんで出てきただけさ。ま、これだけは言っておくか。」

この馬鹿げた戦いはすぐに終わるさ。だから安心しな。」

この言葉だけで女は勝利を確信していた。負けるわけが無いと、負けることなど許されない。

~~~~~

不死鳥の騎士団や魔法省の生き残りたちは動き出した。

戦争はすぐ目の前に迫っている。まずはホグワーツの防衛の固めと情報収集、それに仲間集めだ。

そんな事でいつもの様に夏休みだからと帰ることもせずホグワーツに残り続けることになった生徒たち。

当然リリもそこに含まれる。

「大変みたいだけど、来年で私たちも卒業だからたっぷりホグワーツで楽しみましよう。」

「ええ。あれこれ考えても始まらないし、いつもと違った休暇を楽しみましょう。」

「そうですねそうですね！ お姉さまは後1年で卒業！ 今年は私をいっぱい可愛がってください！」

世間とは違っていつものリリ達。

大変な世の中を無視して甘い空気の中でリリ達の6年目は終了した。

## 最終章 リンリーの秘宝

### 6.2. 闇に染まる日常と非日常的なホグワーツ

『ヒトおよび、ヒトたる存在の再定義』

『純血保護法の制定及び純血証明書の発行』

『反マグル法の制定』

これらが新たな魔法大臣が就任してから1カ月の間にイギリス魔法界で施行された法令などである。

どれもこれもマグルの事を人と認めず、純血が優れているという考えに基づいたものだ。

いずれは『国際機密保持法』および『国際魔法使い連盟機密保持法』からの離脱し、真の意味での、マグルの世界も含めての世界征服を開始していくだろう。

こんな馬鹿げた法令の数々に対して純血主義者たちは何の疑問もなく受け入れていた。

しかし、大多数の魔法使いたちは破滅を感じていた。

いつもは純血主義でなくとも魔法使いたちはマグルに対して優位を感じていた。



それはマグル生まれでも変わらない。いやむしろマグルを知っているからこそ心底ではマグルに対しての優越感や普通感の魔法使いより強いことも多い。

それでもここまで徹底的にマグルを排除し人と認めないようなことはなかった。

こんなことがまかり通ってしまえばいずれは魔法使いがいなくなる。

年々増え続けるマグル生まれや混血を見れば誰だって知っている。

それでも純血主義者たちは血を重んじてそんなことはないという。

その極地が今のイギリス魔法界だ。

イギリスの魔法使いたちはそれを受け入れるしかない。

彼らは敗北者なのだ。抗うことを諦めた者たちなのだから。

小さな反抗はある。だがそれを潰す準備も着々と進められていた。

くくくくくくくく

抗う者たちが集う場。

イギリス魔法界の正気の最後の砦。

それこそがホグワーツ魔法魔術学校だ。

数カ月前まではここは未来を創る若者たちを育てる場であった。

表面上はその部分は今でも変わらないでいる。

ダンブルドアを筆頭に教師達の方針としてホグワーツでは子供たちはできるだけいつもと同じような日常を送ることができるよう配慮している。

今は夏休みであるので寮で過ごしていたり、避難してきた家族と当たり前の日々をおくるように大人たちは必至だ。

夏休みも終われば教師それぞれの特色のある授業にたっぶりの宿題のある生活が始まるだろう。

今のこの状況は少し異常だがいずれは大人たちが、騎士団が、魔法省が解決してくれる。

そう信じるしかできない。

そうは言っても不安は増していく。

この状況はいつまで続くのか。夏休みが終わればそれが合図でホグワーツが消えてしまうのではないか。そんな不安が付きまとう。

子供たちは変わらないようにするといっても無視できない変化も多い。

その筆頭がスリザリンがほぼ解体されたことだろう。

スリザリン生の多くがすでにホグワーツを去っていた。

残っているのは混血やマグル生まれであることを隠していた者だけだ。そういった生徒は他の寮、大抵はハッフルパフへと併合していった。

更にはグリフィンドール生を主体とした自警団もどきも結成されている。

一人でも多く敵を倒すんだという意気込みで日々熱心に戦い方を学んでいるのだ。

ホグワーツの内部ともいえる学生でさえ変化が起こっている。ならば外はどうなっているのか。

ホグワーツ城は今や要塞化が進んでいた。

至る所に配置された侵入者感知と迎撃の魔法具。

増設された闇祓い達の拠点。

クイディッチ競技場は臨時の住宅となっている。

眼には見えないところでもあらゆる加護が強化されている。

「魔法具の設置急げ！」

「魔法薬の備蓄が切れそうです！ 材料もこのリストの物は急ぎ必要です！」

「ええい、外との通商ルート構築はまだなのか!？」

「国外との連絡はどうなっている？」

「まだ安全な方法が確立されていません。やはりどの方法も監視されている模様です。」

「新たな加入者の尋問はどうなっている？ ……そうかやはりスパイか。」

「グリーンゴッツは何と？ くそっ！ あの意地汚い小鬼どもめ！」

「足元見やがって！」



二人が揃うことによる相乗効果で大変なことになってしまいうので母娘だということに出来るだけ離れたり、耐性があるリリやロザリンドのハーレムだけが一緒にいる場にいることができた。

基本的には校内はリリが、校外にはロザリンドの魅了が満ちていた。

生徒はリリに癒しと安定を求め、逃げてきた抵抗者たちはロザリンドを崇拜と信仰を向けているといつていい。

結局は女はこの状況でも大半が大して変わらない様子であったのだ。

忙しそうにしているのは騎士団所属の一部魔女やアンブリッジなどのロザリンドの為に暗躍する女たちだけだ。

~~~~~

「いや、これだけいっぱい女の子に囲まれた夏休みなんて最高ね。ホグワーツ最後の夏休みだからなおさら満喫しなくっちゃね。」

リリは今のこの状況を堪能していた。

ホグワーツには学生だけでなくリリと接していた卒業生も多く集まっていた。

そしてほとんどすべてが命の危機を感じており、リリを今まで以上に求めてきたのだ。

正直体が後三つは必要になるほどの人数だ。

それでも誰一人ないがしろにすることなく女の子の相手をした。

幸いに今は夏休みだ。一日中女の子と接することができる。

この時間は低学年の娘を相手にしている。

場所はグリフィンホール寮の談話室。寮関係なく小さな女の子たちが順番待ちしながらリリの周りに集まっていた。今はハツフルパフの一年生の番だ。

幼いからかまだ少し外の事が怖いのだろう、震えながら全力でリリにすり寄ってくる。

キユンときながら優しく抱きしめて背中をさすってあげる。

そうすれば不安も消えこちらを潤んだ瞳で見つめてくる。

「リリお姉ちゃん……。」

お姉ちゃん。それに幼い娘特有のまだ女になり切れない香り。正直レーナロリコンメイドの気持ちも分かるというものである。

「は〜い、リリお姉ちゃんだよ。もつといっぱい甘えてね。」

その娘を切っ掛けにリリの事をお姉ちゃんと呼ぶのが低学年で流行りだした。

「出会った瞬間からお姉さま呼びの私は時代を先取りしすぎていたわね！　そして誰よ

りもお姉さま、お姉ちゃん、姉と呼ぶことに相応しい妹は！　そうこのジニーよ！」
ついででのジニーの熱も加速していた。

さて、年下がいるのならば当然年上もいる。

リリは今年で7年生、つまり最高学年になる。

そのリリの年上とは卒業して働くお姉さまたちとなる。

「リリちゃん抱き枕♡」

「ああ〜日々の疲れが癒される〜」

先程とは逆にリリが積極的に抱きしめられる番となった。

今いる場所は先程とは正反対のスリザリンの談話室である。

ムードたつぷりに内装を変えて日々を働く女たちの癒しとなっているリリ。

「お疲れ様です。さ、もつといっぱい癒されて。そして夜までたつぷり愛し合いまし
う？」

年下とはできない性的な関係も大人の女とならば遠慮することはない。

求められるがままにリリは身体を使い喜ばせ満足させたのだった。

そして夜。

自分の部屋に戻ったりりを出迎えるのは嫁を筆頭にしたハーレムたちだ。

「お帰りなさい。さ、今度は私たちの番よ。」

「ふふふ。女の子たちと楽しんで帰れば優しい嫁と愛人が出迎えてくれる。ああ、やっぱり最高ね。」

そんなこんなで朝も昼も夜もりりはたつぷり女たちに囲まれてホグワーツの外など知らんとばかりに楽しんでいる。

63. 世界連合

始まりがあるものには全て、終わりがある。

イギリス魔法界の魔法使いたちの苦悩も。

ホグワーツに集う抵抗者たちの奮起も。

そして、全てを支配できると思いついていた闇の帝王の愉悦も。

終わりの始まりは唐突にやってくる。

イギリス魔法界に過去最大の衝撃が襲った。

アメリカ、フランスやドイツなどヨーロッパ諸国、北欧や中東にアフリカ、中国、日本、南米……。

世界中の魔法界、魔法使いの政府を持つ国が連合を創り一斉にイギリス魔法界に宣戦布告をしてきたのだ。

布告内容は今のイギリス魔法界は世界の平和と安定を著しく脅かす恐れがあるということ、そして今の政権、すなわち闇の一派の排除をおこなわない限り全力で世界全て

の魔法界がそれを実行するというものだ。

戦力とは数、たった一国とその他世界の全てでは戦力差を比較するのも馬鹿らしいほどだ。

その情報が老若男女問わず、善悪問わず一斉にイギリス中の魔法使いの元に羊皮紙の形で届けられた。

手段は分からないが、既に人々の場所さえ把握されている。

色々と分からないことばかりだが、これから起きることは分かる。

かつてない規模の戦いが始まるのだ。

いや違う、もはや戦いとは言えぬそれは虐殺だ。

魔法使いたちは恐れおののいた。このまま闇の帝王に屈したままであれば仲間とみなされ共に排除されるだけかもしれない。

国外に逃げるべきか、ホグワーツならば安全ではないか、闇の帝王ならばこの事態もどうかかしてしまふのか、ただただ時が過ぎるのを待つべきか。

様々な考えが人々の間を駆け巡り、親族や友人同士で話し続けるが答えは出ない。

逃げ始めた者もいるがなぜか国外に姿くらはまは出来ず、イギリス全島は既に包囲されていくという情報も次々聞こえてきた。

闇の帝王側からの指示も命令も何も無い。

混乱が最高潮になったタイミングをもつて世界連合から次の布告が人々に届けられた。

『杖を捨て、指定した場所・時間に来れば無理やり従わされていた被害者としてイギリス国外で保護を約束する。』

同一の指定場所・時間の者以外に情報を話した場合、記憶からこれらの情報は消去される。

また、指定場所・時間以外からの国外への逃亡はヴォルデモートの仲間と認定する。以下のリストに名があるものはどのようなことがあるかと国外逃亡は認めない。

最後に、我々は敵には一切の容赦はしない。』

これを受け取った魔法使いたちはほとんどが覚悟を決めた。

今のイギリス魔法界でもいずれは少しでもマグルの血が入っていると思われるだけで良くて奴隷、最悪死が待っている。

純血であろうと闇の帝王の機嫌しだいでもうなるか分かったものではない。

ならば、ここは逃げるべきだ。死ぬかもしれないが少なくとも今よりはマシだと思いたい。

イギリスから続々と魔法使いが消え始めた。

~~~~~

くくくくくく

闇の帝王はかつてない危機を感じていた。

学生時代にダンブルドアに監視されていた時や憎い赤子（ハリー・ポッター）に魂だけの惨めな姿に貶められた時でさえここまでの危機感を感じたことはなかった。

不死を実現したこの身はやがて世界の全てを支配するつもりではいた。

だが、それは長い時をかけてゆっくり確実に実現する予定であった。

それがどうして世界の全てが一斉に敵に回る？

「わ、我が君！ 我々はどうしたら……！」

「逃げましょう！ 一度身を隠すのです、期を窺うのです！」

下僕どもが狼狽え弱腰な事を言いだしている。

危機感から来るいら立ちを死に変えて打ち出す。

二つの屍が出来上がると他の者は黙り込んだ。

静かになった場で必死に考えをめぐらす。

逃げる気はない、負ける気もない。

だが、自分が死ぬことはないだろうがどうやっても妙案は浮かんでこなかった。

（なぜ全てが敵に回った？ 何か理由があるはずだ。それさえ分かればバラバラになった世界に手を打てるはずだ。）

帝王が熟考する間に死喰い人デスイーターの中でも混乱は広がっていた。

「俺は死にたくない！ 死んだら全部お終いなんだぞ！」

「私は楽しくやりたいだけ！ こんな負け戦はゴメンよ！」

このまま玉砕するつもりは無いと投降しようとする一派。

「負け戦は認める。このままでは勝ち目はゼロだ。」

「だが、偉大な我が君ならいずれはこの状況を打開するはずだ。」

「ああ、だからこそ今は逃げて時を待つべきだ。」

逃げて力を貯め時がくるのを待つべきと主張する一派。

「まったく腑抜けた軟弱者ばかり……。」

「我が君の命にだけ従っていれば良いのだ！」

「あの方が敵を殺せと命じれば殺し！ 死ぬと言われれば死ぬのが我らだ！」

そして最も忠実で過激な敵と戦おうという一派だ。

同じ陣営なのに緊張が高まり一触即発の状態だ。

こんなことしている間に事態は動き続けていた。

~~~~~

抵抗者が集まるホグワーツにも当然世界連合からの布告は来ている。

ホグワーツの保護魔法でも不安であれば国外に逃げることも選択肢だ。

流石の闇の帝王と言えど世界全てを相手に勝てるわけが無いと、抵抗者たちの中では安堵が広がっていた。

その一方で困惑もあつた。

不死鳥の騎士団やスクリムジョール率いる魔法省の生き残りは集まって会議をして
いた。

もちろん議題はこれからについて。

ついこの前までは戦況は絶望的だった。

それが急に何もかもが変わっている。

その中でただ一人、余裕をもって動じていない人物がいる。

魔法省の高官のドロレス・アンブリッジだ。

ロザリンド・リンリーを連れてきたのも、安全で安心だと自信を持って言ったのも、戦争がすぐに終わると断言したのも、全て彼女が連れてきたロザリンド・リンリーだ。

もはやこの一連の流れにこの女が関わっていないと考えることは出来ない。

疑問も方法も何もかも分からない。

会議に参加していい全員が自分に視線を向けているというのに優雅に紅茶を楽しんでいるアンブリッジ。

ゆつくりとティーカップを置き口を開けた。

「さて、そろそろ隠す必要もないでしょう。全てをお話しましょうか。」

アンブリッジは話を始めた。

「何から話しましょうか……。そうですね事の始まりは私がホグワーツを卒業した時。

その時代は闇の帝王の絶頂期でした。魔法省に就職したての若輩者にはどうすることもできないまさに暗黒の時代。そしてそんなものは我が主に、リンリーにとつても悪いことだと確信を持ちました。いくら我が主と闇の帝王が女に手を出さないと盟約を結ぼうといずれは反故されるに決まっている。いずれは女も主も悉く酷いことになる
と直感しました。

……でもそれはハリリー・ポッターが闇の帝王を退けたことで終わりました。

ですが、私は全てが終わったとは思えませんでしたの。

私は考えました。考えて考え抜きました。

どうすれば、主の平穏を守れるか。

その答えが今のこの状況です。

……皆様はこの世の魔法使いの半分が女であると知っていますか？

真に理解していますか？ 世界の半分はリンリーが支配できると理解していますか

？

主の為に主の力を借りるのは本当に心苦しいものでした。それでも主の為と頑張りました。

あらゆる国、組織の女を主が虜にする。そして私はそれを纏めあげる。もちろん私人の力ではなく、多くの女性に助けられました。

体制を変え、人を変え、組織を作り、束ねる……。

その結果、国だけでなく世界の全てを動かすまでになりました。

この10年の主と私の成果が世界連合というものです。

後は闇の帝王が滅ぶのを待つだけです。純血主義が滅ぶのを見ていただけです。

例えどんなに強大な魔法使いと言えど所詮は一個人。

世界に、それを支配するリンリーに敵うはずが無いのです。

これは真理です。」

聞いていた誰も何も言えず啞然とするしかなかった。

簡単に言うが、世界の全てをまとめ上げるなど途方もないことだ。

ロザリンドは確かに女を魅了したかもしれない。だが、それだけだ。

後の全てはこの女がやったのだ。闇の帝王を滅ぼすだけに世界の全てを束ねたのだ。

皆の視線の先にはやり切った満足気な女の顔があった。

~~~~~



く  
く  
く  
く  
く

闇の陣営もホグワーツも、イギリス魔法界に生きる全ての魔法使いが激動を感じている裏で、次々に事態は急速に進行していた。

被害者を保護するという名目でイギリスに入り込んだ世界各国の魔法使いたちは、これを機に巨人族や吸魂鬼デイモンター、その他危険な闇の魔法生物が次々と駆逐していった。

もちろん損害はあるが、それでも数の差、そしてマグルの力さえ借りてイギリスの闇は少しずつ消えていった。

ドラゴンのような魔法薬など役に立つ存在でもなければそのまま絶滅させられてしまっていた。

淡々と魔法薬の材料を刻むがごとくイギリスの闇は解体されていった。

## 64. 愛とは呪い

どうしてこうなった。

それがイギリス魔法界を恐怖に陥れた闇の帝王ヴォルデモート卿の率直な思いだった。

復活してからは何もかも順調だった。

予言による宿敵<sup>ハリ・ポッター</sup>も取り込んだ。運命の予言も手に入れた。

目障りだった不死鳥の騎士団は旗頭のダンブルドアを失ったも同然だ。

魔法省も掌握した。

後は生き残りを葬ればイギリスは我が手の中のはずだったのだ。

それが……いつの間にかこんなことに。

なぜだ？ いつだ？ いつからこんなことになっていた？

思い返しても分からない。違和感こそあれ明確な答えにはたどり着けない。

ヴォルデモートは頭の中でこれまでとこれからについて考えを巡らす。

今の事態を少しでも打開するために考え続ける。

「いたぞー」

「最終目標は後回しだ！ 少しでも数を減らせ！」  
ヴォルデモート

帝王の必死の考えを中断するように追撃部隊が現れる。

そう、追撃だ。

今……ヴォルデモートは逃げていた。

全力で、必死で、無様で。

かつてない屈辱を感じながらそれでも逃げていた。

二度目の布告の後始まった戦争虐殺で数時間もしないうちに、大小問わず拠点と呼べるも

のは制圧された。

巨人や吸魂鬼デイメンターも気づけば根絶やしにされたようだった。

残った安息の地は側近と呼べる者たちで固めた魔法省だけだった。

そこも今や大人数による大量破壊魔法の一掃射で瓦礫と化している。

闇の帝王は命からがら逃げるしかなかった。

数日前までは我が城としていた魔法省や数多の闇の拠点は既に無く。

今まで追い立てていたマグル生まれのように森の中を隠れるように進むしかない。

周りにいるのは長年の部下、仮にも優秀と呼べる純血の者たち。

「あつ！ ……我が君万歳……。」

「ロドルファス！」

だが、それも一人一人減っていった。

純血は低俗なマグルの血が流れる下賤な者よりは優秀だったはずだ。

それなのにどうして容易く蹴散らされる？

なぜ、ここまでの速さで追い詰められているのだ？

敵は数が多いとはいえ不死鳥の騎士団の方がよっぽど手強かったというのに！

帝王だけでなく死喰い人も、誰もその疑問に答えることは出来なかった。

その理由の答えは簡単だ。士気の差である。

極一部を除いて恐怖や服従の呪文で従わせた者たちと統一された目的のために集ま

り、訓練を数年間この時のためにし続けた集団では気迫も練度も段違いである。

更には集団による戦術・戦略と言うものを魔法使いは熟知していなかったのだ。

古臭い決闘やただ単純な戦闘程度では戦争に勝てるはずもない。

索敵は宣戦布告前にすでに終えている。

世界連合だけが使える感知魔法具もイギリス全土に設置済みだ。

戦力が少ない拠点には数で一気制圧。

強敵は複数で、不意打ちで、罨で、確実に消していく。

ヴォルデモートなどの自分たちより強い者が前線に現れば迷わず逃走を決める。

そしてその繰り返しを膨大な構成員で行う。

闇の帝王と言う強大な個に支えられていただけで一部を除き協力することを覚えていなかった死喰い人<sup>デスイーター</sup>はあっけなく数を減らしていった。

戦う前から闇の陣営は負けていたのだ。

今やイギリスを覆っていた闇はわずかになっている。

こんな負け戦が決まったような状況でもヴォルデモートは諦めていなかった。

残りの戦力でもホグワーツならば落とせると思っていた。

そしてホグワーツならばどのような攻撃も守り切れると。

ホグワーツに対して妄信していたのだ。

しかも情報によればホグワーツにはロザリンド・リンリーがいる。

あの力を我が物に出来れば……。

そして敵の結末も裏にはリンリーの力がある。そう確信していた。

あれを攻略すれば全てがこちらに向く！

敵から姿を隠しながらヴォルデモートとその狂信者は進む。

その先に死が待っていると薄々感じながらも歩みを止めることは最早できなかつた。

~~~~~

くくくくくく

もちろんその移動も目的もすでに筒抜けである。

ホグワーツに設けられたイギリス奪還作戦本部では様々な国の魔法使いたちが忙しそうに動き回っている。

その中心には一人の女の姿があつた。

「アンブリッジ殿！ 敵本隊は三日後の深夜にはホグワーツ付近に到着すると推測されます。」

「結構。作戦は予定通りに。開始と同時に一気に殲滅させます。」

「了解！」

今もこうして動きを読んで作戦が進められている。

指示統制のトップはドローレス・アンブリッジだ。

この集まりを作った要因こそロザリンド・リンリーだが、それを纏め機能させたのはアンブリッジの手腕だ。

作戦本部には正式なイギリス魔法省の人員としてスクリムジョールや役員たち、そして不死鳥の騎士団員も集まっていた。

本来、イギリスのトップとして敵を打倒す指揮する立場にいるはずだったスクリムジョールや不死鳥の騎士団は見ていることしかできない。

その間にも次々に一般人の救助や敵の捕縛、無力化の情報か舞い込んでくる。

「さて……。あらかた片付きました。後はヴォルデモートのいる本隊だけですな。」

不死鳥の騎士団や闇祓い達は城の防衛をお願いします。打ち漏らしがあつた場合に仕留めてください。」

「我々は用済みだと?」

「いえいえ。適材適所です。連携がとれぬ部隊など邪魔でしょう? それならば別の役割を与えるだけです。個々人の能力であればそちらの方が上ですから。」

それだけ言うアンブリッジは次のため別の場所に移動していった。

残された騎士団たちはもう自分たちではどうにもならない悔しさを感じていた。

~~~~~

推測通りの三日後。

ヴォルデモートはホグワーツ内の禁じられた森に身を潜ませていた。

忍び込んで敵の本部拠点の襲撃とロザリンド・リンリーの確保をして離脱。

正面切つて戦うこともせず臆病者のように振舞うのは業腹だが気持ちを切り替える。

「お前らは陽動だ。手当たり次第に暴れて気を引け。」

一部の配下に命令を出す。

残り僅かになったベラトリックスなどの部下と共に突撃するまであと数秒という瞬間。

彼らの周囲が闇で満ちた。

星や月の光も城から漏れる光も何もかも消えた。

何のことは無い対象の周囲の灯りを消し、暗闇を創り出す魔法だ。

学生でもできる大したことの無い魔法である。

即座に解除し臨戦態勢を整えようとする。

だが、その数瞬の隙が命取りになった。

光を取り戻した彼らに四方から数メートルはある炎の壁が迫りつつあった。

追加で頭上にはクイディッチコート程度はある謎の塊が降ってくる。

「う、うあああああああ！」

「助けて助けて！ あついいい！」

「ボンバーダ<sup>完全粉</sup>・マキシマ<sup>砕</sup>！ ボンバーダ<sup>砕</sup>！ ボンバーダ<sup>砕</sup>あああああああ！」

迫る炎は悪霊の火、容易く消すことは叶わない。

頭上の大質量は魔法的な保護をかけられた金属に巨人やドラゴンといった魔法耐性を持つ生物の組織でコーティングしたもので破壊は難しい。

その場に立ち止まれば圧死。逃げれば焼死。



姿くらましも阻害されたこの場を逃れる方法は塊が落ちる前に炎の壁を飛び越えるだけだ。

だが、魔法使いが空を飛ぶ方法は実のところ少ない。

箒を使うか空を飛べる魔法生物にまたがる程度で他の手段は低速な浮遊魔法程度だ。

「おのれええええええ！」

唯一の例外はヴォルデモートが編み出したオリジナルの飛行魔法だ。

これを配下全員に習得させていれば戦況はまだましになっていただろう。

ヴォルデモートは自らだけを特別視していたためそんな事をする気も、また時間も無かった。

結果として今の攻撃を逃れられたのは闇の帝王ただ一人であった。

彼が降り立った場所にすぐに敵が現れた。

数は……魔法使いの戦いとしてはあり得ない規模だ。

たった一人を殺すために百を超える人数を集めるなど狂気の沙汰だ。もちろん控えもまだまだいる。総数で言えばいくらになるだろうか。

「ふ、ふふふ。はははははははははは！」

その光景に闇の帝王は笑った。

「滑稽だな！ この帝王を殺すのに臆病な貴様らはこれだけの数を用意せねばならん

だ！ 貴様らの中に純血はどれだけいる!? 汚らしいマグルの血が入った下賤な者どもにはこの帝王は敗れはせん！ さあ、打ち滅ぼしてみよ！」

「総員！ 戦闘開始！」

~~~~~

闇の帝王はすさまじかった。数の差を感じさせない戦いを繰り広げた。

まさに一騎当千。まさに帝王。その力は後世の歴史に必ず語り継がれるだろう。

それでも数の差は埋めがたいものがあつた。それが連携を取つて来るのだ。10や20程度ならば打ち破ることもできたであろうが、限界は誰にでもある。

ヴォルデモートは焼け残つた森の中で地面に横たわつていた。

敵は今も止めを刺そうと探しているだろう。

パキリと枝を踏む音が聞こえた。

自分を殺す者がやって来たのだろう。

だが、己には分霊箱ホークラックスがある。この体が滅んでもまだ機会がある。

不死なる帝王は有限の生を持つ愚か者とは違う！

音の方を見るとそこに一人の少女が立っていた。

「……………誰だ？ お前は……………」

「ハリー・ポッター。」

驚愕した。ハリー・ポッターは既に魂を喰われて死んでいるはず。

その魂も捨て去った。そもそもハリー・ポッターは生き残った男の子だ。女ではない。

何がどうなっている？

「あなたには愛を教えてあげる。そのために来たの。」

「愛……だと？ はっ、ダンブルドアの様な事を言う。不愉快だ！ アバダ^息・ケダブラ^絶よ！」

この体に残った最後の力で死を放つ。謎の少女は避けるそぶりも見せずそのまま命
中し……死ななかつた。

それどころか死が跳ね返ってきた。

10年前の再現だ。砕け散る帝王の肉體。

黒い靄の様なゴーストにも満たないヴォルデモートの魂の残骸がそこには残っていた。
た。

逃げようとするそれを少女は抱きしめるようにする。するとそれは吸い込まれるよ
うに少女の身体に溶けていった。

「これであなは私。そうすれば一緒にあの方からの愛がおくられるわ。」

それから数十分後。

少女からの連絡で状況を確認したアンブリッジは帝王の敗北を宣言。

これでイギリス魔法界は闇から解放された。

戦争開始からわずか1週間後の事であった。

65. 終わりそして

終わりは驚くほどあつけなかった。

イギリス魔法界とこの世全ての魔法界との戦争は終わった。

宣戦布告がされて2週間も経たずにイギリス魔法界を覆っていた闇の脅威はきれいさっぱり無くなり当たり前前の日常が戻って来ている。

国外に逃げた賢い者、隠れていた臆病者、そして抵抗するため Hogwーツに集った勇士。

その全てがあまりに速い戦争の終結に拍子抜けしていた。

どんな結果でも平和は何物にも代えられない。この世で一番大切なものだ。

戦争の終結が宣言されたこの日は誰も彼も昨日までの恐怖を忘れて祝って騒いで泣いて喜んでいた。

不死鳥の騎士団、魔法省、 Hogwーツ学生、混血、マグル生まれ……。

身分も立場も関係なく家族や友人、隣人が生き残って今日を迎えたことを喜んだ。

たった一つの例外は……純血主義者と言う古くから魔法界に巣くっていた不要物だった。

(まったたく……。いったいどれだけこの女は手を回していたのやら……。)

溜息をつきそうになるが、どうにか押しとどめる。

これからも色々大変になるのだ、溜息をつくのは全てが終わってからでいいだろう。

他にも懸念していた他国からの干渉についても特に何もなかった。

どうやら最初から闇の帝王や純血主義、その他危険物の排除だけが目的だったようだ。

普通だったらここで盛大に恩を売るだろうにそれはない。どれだけロザリンド・リンリーの影響が巨大か改めて感じて呆れるしかない。

それでも、イギリスも他国も『いつも通り』という平和がその強大なリンリーに約束されているので何も文句など無かった。

ここで文句を言つて関係を拗らせては余計に面倒にあるだけだ。

「さて、今日もやるとしようか。」

魔法大臣は今日の仕事に繰り出していった。

~~~~~

不死鳥の騎士団は完全に解体された。

戦いに生き残った者たちはそれぞれの生活に戻っていく。仕事に余生にそれぞれの生きる時間を大切にするために。

そして、創始者であり、騎士団を率いていたアルバス・ダンブルドアは団員達、そしてホグワーツ、イギリス魔法界が安定するまで命の限界を超えて見守っていた。

そしてこの平和が仮初のものではなく、これから続くものだと確信してこの世から去ることを受け入れた。

その最期は穏やかなのもであった。

この世に未練など感じさせないような死に顔であった。彼は100年を超える人生を終えようやく家族の待つあちらへと旅立ったのだ。

遺言で葬儀はひっそりで行われる予定であった。過去の人間になる自分はゆっくりひっそりと旅立つのがふさわしい。それが死にゆく賢者の考えであったのだ。

そんな彼の意志を優先してホグワーツで限られた者たちと生徒だけで葬儀が行われた。

それでも偉大な魔法使いの死を知ったイギリスだけでなく世界中の魔法使いがその死を悼んだ。

~~~~~


ヴォルデモートはその魂をハリー・ポッターの肉体に封じられた。そしてハリー・ポッターの肉体ごと嚴重に管理されている。ロザリンド・リンリーの意向もあり軟禁程度であり罰などは与えられていない。

そして彼女もそれを大人しく受け入れている。

残りの分ホークラックス霊箱もハリー・ポッターから得られた記憶により探索されてその全てが破壊

されていた。残ったハリー・ポッターに宿ったものもいざれ確実に破壊されるだろう。

もつともそれはハリー・ポッターの寿命と共にである。

これまたロザリンドによつて天寿は全うさせて欲しいというのだ。

それも後10年は持たないだろう。

ヴォルデモートによる魂の浸食や決戦時の負荷に性転換。

いくらリンリーの加護があつても限度はある。

「短い時間かもしれないませんが、それでも愛を与えられました。それは私の中の彼も同じでしょう。だから何も後悔はしていません。」

ハリー・ポッターだった少女は運命を受け入れていた。

ロザリンドもたまに会いに来てくれるので自由はないがかつてない幸せを感じていた。

死喰い人^{デスイーター}はほぼこの世から消え去った。死亡した死喰い人^{デスイーター}の死体もマグルの技術も合わせて徹底的に調査したので逃げた生き残りがいる可能性はほぼ無かった。

僅かに捕らえられ生き残った者もいるが今回は前の戦争とは違う。

腐敗したイギリス魔法省が相手ではない、世界の魔法使いが集まった連合だ。

賄賂も効かず、言い訳にも耳を貸さず、泣き落としも通じずにあつという間に処刑された。

淡々と死の呪文で作業のごとく処理されていった。

罪が比較的軽く死が免れたとしても体の自由を剥奪されて一生を孤独に過ごすというただただ生きていくというだけの状態にされた。

多くの者が死んだ方がマシと死を懇願するが、言葉も話す権利も能力もないのでどうすることもできぬ有様だ。

かつての最高刑の吸魂鬼^{デイメンター}の接吻も吸魂鬼^{デイメンター}そのものが根絶されたので廃人になることも無く一生を孤独に生きることが強制された。

これで純血主義というものは完全に衰退した。

そしてそれはある一人の女の狙い通り。

その女、ドローレス・アンブリッジはこの戦争を利用しつくし目的はここにほぼ達成

できた。

狙いは魔法界から純血主義を無くすこと。

彼女はこれからの魔法使いたちは血ではなくマグルを受け入れることが重要だと悟っていた。

それは多様性を生み、様々な個性を生むだろう。

そして千差万別の女を生み出す。

そして未来のリンリーがそれを楽しむ。

主であるロザリンドだけではなく未来永劫リンリーの為に尽くすための土壌を作ったのだ。

……少しは私情が入っていることは否定しない。

最後の死喰い人^{デスイーター}の処分を終えてとりあえず仕事は一段落。

だが、まだまだ整備することは山ほどある。イギリス国内も安定したとはいえやることは多い。ましてや他国の方にも今回の件をもって純血主義が愚かであることを宣伝していかねばならない。

とりあえずは目先の仕事を片付けるため今日も敬愛する主ロザリンド・リンリーのために魔法省へと向かっていった。

「さてと……。今日も我が主のためにがんばりましょう。」

男子と女子に分けるだけで、今までの制度は完全に失われた。もちろん加点や減点と言ったものも存在しない。

今までの伝統が無くなることで反対する卒業生は少なからずいたが四寮が競争することが無くなり、争いが減りお互いを助け合うような関係を築けるという意見の方が多かった。

卒業生たちも寮間の争い、特にグリフィンとスリザリンの諍いにはうんざりしていたのだ。しかも卒業した後も色々とと言われる始末だったのだ。ハッフルパフが劣等生と言われたり、レイブンクローが勉強ばかりで遊びの無い奴なんて言われるということが数え切れぬほどあったのだ。

生徒を分けるのは男女の性別だけになったが、それぞれの寮の形だけは残っている。気に入った場所を自室にしたり、ルームメイトを入れ替えたりと自由を優先している。

寮が無くなったことでクイディッチも変わった。

プロリーグを参考に複数のチームが争うようになっていた。

これも寮の争いではなく純粹にお互いを高め合うということで良い変化であった。

余り強いチームに偏らないように同じチームは1年で解散するのも良いことであった。

実はグリフィン・ドールチームを鼻履していたマクゴナガル校長がかなり落ち込んでいた。

楽しい学生生活に戻ってきた。

そしてリリアン・リンリー最後のホグワーツ生活。

これからは幸せいっぱいの子との生活が再び始まろうとしていた。

66. ジネブラ・モリー・ウィーズリー

戦争が終わって平和になったイギリス魔法界。

まだまだ、完全に今までと同じとはいかない。

とは言え、純血主義は過去のものとなり腐敗したものは一掃された。

新しい世界が始まろうとしていた。

そんな事もホグワーツ魔法魔術学校で学ぶりアン・リンリーたちには関係ない。

彼女たちは平和になった世界でイチヤつくだけだ。

……まあ、それは戦争中でも変わっていなかったかもしれないが。

とりあえず確実なのは今年でリリアン・リンリーはホグワーツを卒業するという事実だ。

それに対して下級生の女子たちは考えるだけで涙が出てくる。

特に一番長く接していた6年生たちは毎日リリが見ていない時には気落ちしていた。

特にひどいのがリリハーレムの一員でもあるジニー・ウィーズリーだ。

他のハーレムはリリと一緒に卒業だ。ただ一人の年上のクラウディアもその先で既

に待っている。

ジニーは一年間リリがないホグワーツで過ごすことが確定しているのだ。

彼女が入学してからホグワーツには必ずリリがいた。

それが損なわれる！ しかも1年間！ 365日！ 8760時間！ 52560分！ 31536000秒！

ことさらリリの魅了にやられているジニーにとつてそれは耐えられないものだった。

だからこうなるのも致し方が無かったのかもしれない。

「……ジニー？ 寂しいのは分かるけど……。流石にちよつと……。」

「駄目ですか……？ お姉さまはジニーの事を嫌いになりました？」

「好き！」

「ここ最近のジニーは四六時中リリにくっついていた。

比喩でも何でもなく24時間ずつとなのだ。

「でも、これは……。トイレを一緒になんて……。」

「お姉さまに汚いところなんて存在しません！ それに……。ふふ、お姉さまが経験したことのない初めてを私と一緒になんて……。高ぶりますね！」

場所は女子トイレの個室。

個室と言うのだから一人で入るものだ。それがどうしたことかリリはジニーと一緒に

「さあさあさあ！ お姉さまは身体のを抜いてリラックスしてください。お召し物を脱がしていきますよ。」

ジニーは慣れた手つきでリリの衣服を全て脱がしていく。

下着に手をかけた時に鼻息が荒くなるが……まあ、誰しも愛する人の秘場が目と鼻の先にあればそうなるだろう。……たぶん。

そういつた普通であれば恋人であろうともドン引きするところもリリにとっては特段奇異には映っていない。周りにいる女子は少しばかり引き気味である。

ハーレムメンバーに至っては自分たちもそういう人物に見られないかちよつと恐怖を感じていた。

お互いに生まれた姿になった二人は髪や体を洗い合いきれいきさっぱりだ。

普段からリリはハーレムに洗ってもらったり洗ったりしているので今更テレも何もない。

だが、流石に洗っている最中に泡だらけで体を押し付けてやり始めようとするのはびっくりする。

「ジニー？ 今日にはベッドよ。それまで待つてね。」

「はい。」

洗い終え湯船に浸かるリリ隣にはジニーとハーマイオニー。

最近大きく成る速度が速くなった胸でリリの腕を包む。それを見てハーマイオニーが逆の腕に同じようにする。若干、差がついてジニーが嬉しそうだ。

「やれやれ張り合っているわね。」

「余裕そうだけど本当は羨ましいんじゃない、ダフネ？」

「姉さんそれは言わないの。私たちの中で一番小さいんだから。」

「あなたたちも大して変わらないじゃない！」

そして夜。

普通は一日の疲れを癒すための時間だが、リンリーにとってはある意味本番なのかもしれない。

ある一定の年齢以上の女はリリと夜を共にする。

もちろん誰だろうと構わず体を重ねているわけではないが、基本は一对一で人数はハーレムメンバーとだけだ。

ジニーも流石に他の女の子がリリと愛し合いたいからと遠慮……などということはなく一緒に混ざって大変だ。流石に相手も文句を言うがリリが結局三人で気持ち良くするので忘れてしまう。

体力的にはリリはリンリー特殊なのでその辺は大丈夫なのだが、毎日一緒に夜の運動をしているジニーはどうとう寝込んでしまった。

~~~~~

倒れた翌日。看病はマダム・ポンフリーに任せてある。

ここ最近のジニーの行動に流石に周りから苦情が出始めた。

ハーレムメンバーも事情を理解しているが限度があると言う。

「リリはジニーには甘めよね。でもね！ しつかりしなさい。」

リリも流石に少し困惑気味である。

「どうすれば正解かな？ ハーミーは分かる？」

「女の子についてあなたが解らないことを私が解るわけじゃない。私やあなたより

女について知っている人に聞いたら？」

ということで最強無敵のロザリンドに話を聞くことに。

古今東西全ての女を虜にしてきたロザリンドならばいいアドバイスが来るはず。

そうでなくとも長いリンリーの歴史の中には様々な女の情報があるはず

魔法具に投影されたロザリンドが放つ第一声はこうだった。

「抱け。」

ロザリンドのアドバイスは簡潔、シンプルイズベスト。

「抱いてるよ！ もう毎日ね！」

だが、リリは反論。抱いた回数で言えば実は一番ではないかと思ひ始めていた。

「だったら量より質さ。相手の全部をぶつかって受け入れんだな。そしてリリも愛を全力でぶつけてやれ。そうすりや大人しくなるさ。」

ロザリンドが言うにはジニー相手は寂しがってそこに加えて一番魅了されているから暴走しているということらしい。そこまではリリも分かっていた。

そうなのだからこつちもたつぷり愛してやるのが礼儀とのこと。

過去にもそういう事例があつて愛で解決したらしい。

「良し！ ありがとうママ！」

「どういたしまして。と言うか私も経験あるしな。キャロルの奴が大変で」

ブツと通信が切れた。魔法具を作ったキャロルが恥ずかしがって切ったのだろう。

リリは気合を入れた。他の女の子やハーレムたちには悪いが次の休みはジニーを一日愛そうと決めた。

ジニーが元気を取り戻して自室に戻るために廊下を歩いている。その足取りは重い。

(はあ……。お姉さまや皆にも迷惑をかけちゃった。でも抑えきれない……。)

自室の扉の前に着く。そこで気付く。その中には愛してやまないリリがいる！

「お姉さま！」

入るとそこにいたのは当然リリだ。

しかも全裸。誰に見せてもいいが急いで扉を閉める。

「お、おお、お姉さま!?! なぜ裸で!?!」

質問の答えの前に濃厚なキスが襲ってきた。

舌が何枚にも分裂したかのようにジニーの啞内を蕩けさせていく。

舌が動くのに合わせてリリの魅了も強弱する。

それに連動してジニーの脳内の麻薬物質も放出と停止を繰り返す。

そんな事を5分も続けられればもはや立っていられない程体は疼いてしょうがなく  
なってしまう。

下着は既に新しいのにするのが決定だ。

「もちろん愛のため。さあ、脱いでベッドに行きましょう?」

座り込んでいると頭を撫でられゆっくり舐るようにリリの細い指がボタンを外し、服  
と皮膚の間に入って来る。

自分が纏う布が一枚一枚丁寧にゆっくりと剥ぎ取られていく。

その間も不意にキスが襲ってくる。

まだそれだけだというのに、ジニーはいっぱいいっぱいだ。

「さて、最後の一枚も脱げたわね。立てる？」

ふるふると首を振るのが精いっぱいジニー。

リリはジニーを抱っこして運ぶ。

その間も舌が絡まり合ったままだ。

「本番はこれからよ。今日は寝かせないわ。」

ジニーは死を覚悟した。だが、同時にこれ以上の無い幸福も予感した。

リリとジニーは休みを丸々一日使ったつぶり愛し合った。

翌日ジニーはまた寝こむことになった。

だが、その顔は見る者全てが幸せそうだと思える顔であった。

## 67. ダフネ・グリーングラス

ジニー・ウィーズリーが起こしたちよつとした騒動はひとまず落ち着いた。

女子生徒だけでなくハーレムもホツと一安心だ。

もつとも一番心の平穩を取り戻したのは教師たちだ。これ以上女子の生活が乱れることになったら制御をできる自信が無かつたので仕方がない。

だが、そこで終わらないのがジニー・ウィーズリーという少女だった。

自分の暴走を終息させたあの一夜。思い出すだけで興奮でどうにかなりそうになるその時の出来事を最初から最後まで詳細に話して自慢して悦に浸るといふことをしているのだ。

それを聞いて性的な耐性が少ない娘などは顔を真っ赤にし、性欲が強い娘などはより詳細に聞きに行く始末。そのどちらも誰一人として興味を持たない女子はいなかつた。

仕舞いには性欲がジニーほどでは無いにしろ爆発した娘がリリにおねだりをすることも起き始めた。

だが、リリはハーレム以外にはあそこまでのことはしないと宣言した。

まず第一に、余程のことが無い限りジニーの様にはならないこと。



第二に、よりリンリーと接しているハーレムメンバー以外では魅了に耐えられない可能性が高いということ。

先代のロザリンドからリンリーの事として教育され、止められていたのだ。

「そうだからと言って皆を抱か愛さないないということとは決してないわ！ だって愛は無限だもの！ 皆もそれは知っておいて。」

女子たちはリリからの愛が変わるわけではないので納得はした。

でも機会があればそういうリリからの過激な愛も体験したいという希望は一定数残り続けた。

~~~~~

落ち着きを取り戻したホグワーツだが、きっかけがあれば何かが起きるといふもの。

こればかりはリンリーは関係なく閉鎖されたホグワーツで繰り返されてきたことだ。

ジニーの件が落ち着いたと思えば同じリリハーレムメンバーのダフネがそわそわし始めているのだ。

そわそわしていると言っても他の生徒には気づかない程度。日頃接する機会が多い同じハーレムメンバーやその主たるリリが気付くほどの些細なものだ。

その日はダフネはぼんやりと窓を眺めながらリリの言葉を思い返していた。

(ハーレム以外にはしない……ってことは、私にはしてくれるのよね……?)

その自分が無茶苦茶にされる光景を想像してごくりと唾を飲み込む。

それに期待している自分がいる。

それでも自分からジニーのようにがつついていくには抵抗がある。

もうすでに解体されたも同然だが、聖28一族という貴族だった時に教え込まれたからなのか、生まれ持った性分なのか分からないがどうもそういうことには一歩引いている自分がある気がする。

(……この思考の繰り返しも何度目かしらね。まったく我が事ながら素直になれば済むことなのに。いつかのドラコの事を言えないわ。)

ハーレム内で一番そういう行為をしているのは正妻であるハーマイオニーだ。

次いで魅了を強く受けているジニー。その次が包容力の強いクラウディア。

続くはパチル姉妹で最後に自分だ。

そういうこともあってなのか急に欲求不満にでもなったのだろうか？ 最近非常に悶々とする。

普段ジニーのことを窺めているというのにこれでは格好がつかない。

「はあ……。」(もつと素直になりたいわねえ……。)

~~~~~

く  
く  
く  
く  
く

リリはそんなダフネの様子に気が付いていた。ハーレムの主として全員のちよつとした変化にも気付くようにしろとロザ<sup>マ</sup>リンド<sup>マ</sup>から教わっているのだ。

もうすぐリリは卒業する。すなわち周りの環境もガラリと変わる。ただ親に養ってもらうだけの立場ではなくなるのだ。

独り立ちするリンリーには二通りの道がある。

一つは普通の大人と同じように働いて生活するというもの。

もう一つは愛する女に養ってもらうというもの。ロザ<sup>先</sup>リンド<sup>代</sup>なんかはこちらになる。

どちらになるかはリンリー本人の性格や周りのハーレムの性質、魅<sup>呪</sup>了<sup>い</sup>の強さによって変わる。歴代のリンリーは大体半々という具合だ。

リリはどちらでもよかったのだが、ハーマイオニーが養いたいと言ってきたのでロザリンドと同じ道に行くことに決めていた。

もつともパドマやダフネなどは働けるようにと学校の勉強はしっかりこなすようにとは言ってくる。ハーマイオニーもその点については賛成している。まあ、結果的に言えればハーレムは誰一人反対はしなかった。

そういうわけでこれからは先達のロザリンドのハーレムの主の教育を受け始めている。

女の様子や変化を少しでも敏感につかみ取ることが必要になると、リンリーの心得をロザリンドから伝授中のリリは女として日々成長中だ。

~~~~~

それから1週間ほど経過した冬の日。

授業の真つ最中にダフネは後輩から呼び出された。

「ダフネさん！ アステリアが！」

内容も詳しく聞かず、教師に何も言わずに教室を飛び出した。

どんなことになっているか、どこにいるのか聞かずとも解る。

向かった先は医務室だ。

入るとマダム・ポンフリーはすぐにベッドに案内してくれた。

ベッドで苦しそうに眠っているのは妹のアステリア。

「今、鎮痛薬と安らぎの水薬を投与しました。これで落ち着くとは思いますが……。分かっていてと思いますが、あくまで対処しただけで根本的な解決にはなっていません。やはり聖マンガ病院に長期入院させるべきでは？」

「でも、前も何も良くならなかつたし……。それにアステリアはここが好きですから。」
グリーングラス家には先祖が受けた呪いがあつた。

その呪いが何世代も先のアステリアに発現した。それが「血の呪い」

それゆえに彼女は非常に虚弱で幼いときは屋敷をまともに出ることもできなかつたほどだ。

ホグワーツに入学することでも一悶着あつたぐらいだ。

結果で言えばここに来たことで体調は良い方向になつた。それでも今回のように倒れることもある。ここ数年発作は起こつていなかったので油断していた。

ダフネは何時も必ず駆けつけてアステリアのそばにいた。

リリのハーレムに加わる時に家との縁を切つたが、妹との絆まで切つたつもりはない。

しばらくするとアステリアが目を覚ました。

「お姉ちゃん……？　ゴメンね、また……。」

「いいのよ。何度も言っているでしょ？　姉妹なんだから。もつと頼つて、ね？」

「でも……。」

いつもだ。いつもアステリアは倒れた後はダフネの顔を見て申し訳なさそうにする。気にしなくてもいいのに。

「失礼します。アステリアちゃんは大丈夫？」

そこにやって来たのはリリだった。

「リリ。」

「リリアン先輩!？」

ダフネは普段通りに、だがアステリアはベッドから飛び起きた。

これにはダフネも驚いた。いつもなら倒れたら1週間はベッドの上でもおかしくな
いの。

「アステリア? 体は大丈夫なの……?」

「あ、アレ? なんか調子が良い?」

「あ……。多分私が近くに来たからじゃない? ほら。」

リリが更に近づく。リンリーの呪いは女を魅了するだけでなくその力も引き出す。

恐らく体の害になっている呪いへの抵抗力があがったのだろう。

二人の距離が近くなるにつれ確かにアステリアの顔色が良くなっていく。

(それなのに私ったら安堵より嫉妬と私もそうして欲しいなんて欲望が大きいなんて
……姉失格ね。)

リリはそのまま勢いで抱きしめようとした。だが、

「ダメです!」

アステリアからの拒絶。一瞬呆けたリリだったが、アステリアの泳ぐ視線と顔色から
察した。

「ん〜？ 何がダメなのかな？ 気持ち良くなかった？」

「い、いえ！ リリアン先輩のそばはとつても気持ち良くていい匂いですつとそのまま
でいたくて！ あ、いえそうじゃなくて！ そういうのはお姉ちゃんとする方が……。」

「だつてダフネ。」

「……いいからリリに抱きしめられなさい。何だつたらもつとすごいことされたらあつ
さり直るんじゃないかしら。」

「あーあり得そう。」

「でしょう？ と言うかアステリアの呪いもあつたから体力を考慮してリリもあまり負
担になることとしてなかつたんだろうしいい機会じゃ「お姉ちゃん！」

アステリアの声が医務室に響く。幸いなことにポンフリーホムは不在だ。

「お姉ちゃんがリリアン先輩の愛人なんだよ。だから私よりお姉ちゃんが優先されるべ
きなよの！」

「な!? アステリア！ あなた自分の身体がどうなっているか分かっているの!？」

「分かっている！ でも大好きなお姉ちゃんが幸せな方がいいの！ それにリリアン先輩
も良いけど！ 抱かれるなら最初はお姉ちゃんが良いの!!」

「へ？」

ハツつとした表情で口を押えるアステリア。

「聞き間違いかしら？ 最初の方はまあ、嬉しいわ。その後のはいっつと……。」

「間違いじゃない。私お姉ちゃんが大好き！ いつも看病してくれるし優しいし家族の中で一番私を見てくれたもん！ だからお姉ちゃんが幸せならそれが良い！ 本当はリリアン先輩の正妻はお姉ちゃんが良いの！ でも幸せならって我慢してた！

せめて私だけはリリアン先輩と距離を取ろうとした。そうすればその分お姉ちゃんに回る愛が多くなるもの。ついでに私のお姉ちゃんの気持ちも抑えられるし。

でも言っちゃった。そうお姉ちゃんが好き、愛してる！」

実の妹からの愛の告白。何となく同僚のジニーを連想させられて困惑が強くなる。

妹と言うのはこうなるのか？ まあ、とりあえず女同士なんて今更過ぎるし嫌ではない。

「ふふふ。よく言えました。えらいえらい。さてここで一つ提案が。」

妹の頭を撫でるリリを見て何となくその先を想像できたダフネは引きつった。

「リリもしかして……。」

「そう！ 三人でやりましょう！」

アステリアちゃんがダフネに抱かれて、その次に私が抱いて望みも叶って呪いも直つてハッピー。でしょ？」

「はい！」

「ちよつと!？」

結局はリリとアステリアの二人に流されるままその日は必要の部屋で一夜を過ごした。

妹とそういうことをするには最初は若干の抵抗があつたが、リリによつて歯止めが無くなつたのですんなりとことが進んだ。

(まあ……妹は可愛いし)

結局妹が妹なら姉もそういうことだつた。

その次のリリとアステリアの情事を見せられたのは一種の拷問だつた。さつきまで私が蕩けさせていた女妹を最愛リの人がもつと乱れさせている。

血の呪いは予想通りに消えたが、その時のダフネの頭にはもつとしたい、されたいという考えだけであつた。

そしてリリに対しておねだりをするのは必然であつた。

「リリ……。私にもいっばいして……。」

その後は三人で乱れまくつた。

リリを中心に三人で並んで横になる。もうすぐ朝だ。

結局ここまで交代交代で愛が交じり合つた。

「ふふふ。もう朝ね。どうだつた?」

「最高でした。またお願いしたいです。あ、お姉ちゃんと一対一も是非。それからもつとお姉ちゃんの事を愛してあげてください。」

「まったく……。まあたまになら……。ね。それに久々にリリに愛してもらってなんか軽くなったわ。やっぱり我慢は良くないのかしらね。」

「ジニーもダメだけどダフネもダメよ。やっぱり愛は適切な量が必要ね。」

その後は疲れが限界にきたのか意識が闇に吞まれていった。

もう授業なんか知らないということできぼって一日ゆっくり休んだ。

68. パドマ・パチル

友達からはよく双子の姉妹なのに似てないね、と言われる。

寮もグリフィンとールとレイブンクロウで違っていた。

それでも特に気にしたことはない。

私も、パーバティも自分が好きだと思ったままに行動するという点は姉妹だと思っ
ている。

ただその好きになるものや方向性が違ってはいるだけだ。

……最も一番好きな人が一緒になったのには驚いたけれど。

パーバティのように体を動かして元気いっぱいのは積極的にならないが、私も自分の思
うままに動いている。

まあ、大なり小なりリリを前にすれば女の子の欲は刺激されてしまうものだけだ。

最近ではダフネもその傾向が現れてきた。あの子は結構内に秘めている方だから
こっそりホツとしていた。

ジニーは……会った時から解放しすぎている気がする……。

まあ良いわ。

いつかのホグズミードで誓ったのだ。リリの事を一生愛すると。

そのためにはクールに、冷静に常にリリの事を考えなければと心に決めている。

それでも他人には見せたくないが、甘えたい時もある。

思う存分、何も考えないでリリに溺れたい。

そう、今日はそんな気分なのだ。

~~~~~

ジニーの暴走にダフネの解放。

そんな事が続いたのでハーレムメンバーにはわがままを許す日と言うものを設けた。

リリの事を一日自由にできると言うホグワーツ女子生徒であればグリーンゴッツが空になつてでも手に入れたい権利である。

『ハーレムは平等』……まあ完全にそうじゃない時もあるができる限りはそう心がける。

リリがロザリンドから教わった長く深く女を愛する秘訣である。

休日の朝速くに元グリフィンドールの談話室でリリを中心にハーレムメンバーが集まっている。

ジニーとダフネ以外の三人が用意された箱をじつと見つめる。

これから箱に入ったくじの数字でリリとの自由権を行使できる順番を決めるのだ。ちなみに箱は『リリ特製！ 一日自由権！』とカワイイフォントで書かれているリリの手作りだ。

ハーマイオニー、パーバティ、パドマの順番でくじを引く。  
一斉にくじに書かれていた数字を見る。

パドマが1、パーバティが2、そしてハーマイオニーは3だった。

「くじ引きの結果！ 次はパドマの番ね。さあさあ！ 何時が良い？ 何がお望みかな！? 私は何をすればいい？ それとも……何かされちゃう？」

「何かテンションが高いわね……。そうねえ……。早速使わせてもらおうわ。必要の部屋に行きましょう。」

パドマが必要の部屋に望んだのは『ゆっくりできる空間』

現れたのは二人がリラックスできるように設計された部屋。

紅茶もお菓子も座り心地の良いソファや本、いい香りのするアロマに娯楽用品も充実している。

だが、それより凄いのが『時間』だった。

何とこの部屋、外と比べて時間の流れが遅いのだ。

時計が2種類あり、部屋の経過時間と外の実際の時間が表示されている。

「時間をいじれるなんてこの部屋本当に何でもありなのね。」

「逆転時計なんてものがあるしね。ホグワーツ創設者ならこんな部屋も作れるんじゃないかって調べたのよ。すでに実験済み。これで二人の時間が増えるわね。」

知に富んだレイブンクローに所属してただけあつてしつかりとズルしていた。

そんな自信に溢れたところもまたカワイイとりりは何も文句はない。

~~~~~

二人きりになって最初にしたのは紅茶を楽しむことだった。

パドマが望んだのは一日(時間延長在り)まつたりと何もかも忘れて過ごすというもの。

ジニーのように激しさも、ダフネのように蕩けるような愛も良い。それは認める。

でも彼女は二人きりのこういう時間が何より好きだったのだ。

ここにいるのは二人だけ、存分に甘えられる。

いつもは主従とも愛人とも言える関係だが、今この一時だけは恋人という関係だ。

そんな二人は向かい合つて座つてティータイムを楽しんでいた。

出ているお菓子は一口サイズのケーキだ。

「どう？ 料理担当のリディアさんに習って作ってみたんだけど。」

「うん、うん！ 美味しい！ 皆でお菓子作りの勝負なんていうのも面白いかも。」

「良いわねそれ。でもやるからには負けられないわね。」

その後も他愛のない会話をしながらケーキを楽しむ。

「はい、あ〜ん。」

いきなりリリがフォークでケーキをこちらに向けてくる。リリは結構突発的に感覚で行動しがちだ。

「あー……んっ。」

少し恥ずかしいがそれを口に入れる。

いつも以上に甘い。フォーク越しにリリの味を感じる。

「次はパドマがやって？」

「もう。どれがいい？」

「チョコレートケーキの上のチョコでコーティングされたのフルーツ！ あ、フォークじゃなくて手で詰まんで。」

可愛らしくおねだりされては堪えきれない。リリの小さな口まで持っていくと美味しそうに甘みと酸味のハーモニーを堪能し始める。

「あ、残ってる。」

リリは引き戻す。パドマの手を取り体温でわずかに溶け付着したチョコをなめとる。

「うん、甘い……。もつと食べていい？」

「それはチョコよね。私は食べても美味しくないわよ？」

「でも今までも食べたけど最高よ？」

「はいはい。今日はそういうのは禁止。」

「むー。」

「膨れてもダメ。と言うか最近ジニーの影響か歯止めが効かなくなっているわよ。」

「むむむ……。自制自制！ よしさあ次ちようだい？」

その後も食べさせ合いっこは続いた。

こういうことをするのは初めてではないがいつもは周りの女子たちがリリとやり合いたいと取り合いになるのでこんなにいっぱい独り占めしたのは自分ぐらいではないかとちよつと優越感に浸っていたパドマだった。

~~~~~

その後は魔法使いをダメにするソファアでリリの肩に寄りかかって何をしてもなく時間を過ごす。

「んっ……。」



たまに髪を撫でられたり、不意打ちにキスをされるがお互い無言のままだ。

それでも心地よい。この静かで、この世で最も安心できる存在がそばにいるのがたまに  
 らなく気持ちがいい。

(う……ん……。私、寝てた?)

パドマは余りの心地よさに気が付いたら眠っていた。まだ目をつむっているが頭の  
 後ろが気持ちいい。

感触からソファアーではない。人肌の温度の快適な枕の正体はリリの膝のようだ。

薄っすらと瞼を開けて時計を見ればそう時間は経っていない。ゆっくり時間が流れ  
 るこの部屋とは言えどこの日を少しでも無駄にしなかつたことにほっとした。

すっかり目を開けるとリリも寝ていたのかかっくり頭が沈んで目の前にある。

少し体を浮かして目覚めのキス。

おとぎ話のようにお姫様は目を覚ましてくれた。まあ、こっちは王子様ではないけれ  
 ど。

「おはよう。お姫様。」

「おはよう。お姫様。」

~~~~~

くくくくくく

その後は二人でキングサイズのベッドに。

でもイヤらしいことは何もない。ただ横になるだけだ。

抱きしめ合ってこれからの事、授業の事、家族の事、お互いの事を、とりとめのないことを話すだけの時間。ただ、気をつかわれたのか他の女の子の話だけは出なかった。

「リリはやっぱリエツチなことしたい？」

「えくくそんな事は……あるけど……。でもこういう本当に何もしないでイチヤイチャしてぬくぬく寝ているだけでも満足よ。」

「じゃあ、もっと抱きしめ合ってキスしてくっついてみましょう。今日はまだまだ長いわ。」

1日が終わるまでまだまだ時間がある。

こういう日があってもいい。お互いにそう思える一日だった。

69. パーパティ・パチル

パーパティ・パチルはリリアン・リンリーのハーレムの中でも特に活動的な元気っ娘である。

今日もいつもの様に元気にリリとホグワーツを楽しんでいる。

こんな気質のせいでハーレムの一員に選ばれた当初は嫌みな先輩（スリザリンだけにあらず）から仲の良い友達の延長で選ばれただけでも言われたことがあった。

実際、パーパティ自身他のメンバーと比べると愛が弱いかななんて思うこともあった。

正妻のハーマイオニーは一番の愛を。

ジニーは一番魅了されている。

ダフネは自覚しているかはともかく依存している気がする。

双子の妹のパドマは崇拜だ。

母性たつぷりのクラウディアはぬくもりと癒しを惜しみなく。

パーパティ自分は何だろう？

自分では何となく答えは恋人だと思っている。

嫁や愛人、それに他にも普通ではない仲の女の子がいるというのに恋人と言うのもおかしいかもしれないがそれが一番しつくりくるのだ。

まあ、納得するような答えではないかもしれないが、とにかく長く共にいる時間は負けていないと思っている。

どんなことがあっても恋に愛に真剣そのもの！ 今日もリリと楽しく過ごそうと意気込んで部屋を飛び出した。

~~~~~

年も終わりに近づき、最終学年の7年生はそろそろ卒業やその後の事もしつかりと考え始める時期だ。

リリの周りもN<sup>イ</sup>・E<sup>モ</sup>・W<sup>モ</sup>・T<sup>リ</sup>試験がどうか、就職先がどうか、そんな話が多く出始めていた。

「みんなはどうしたいの？」

ハーレム全員で夕食を食べている最中に卒業後の話をしていると主であるリリがそんな事を聞いてきた。

「そうねえ……。私はしつかりと働きたいとは思っているわ。誰かさんは口ザリンドさんと同じようになりそうだし、しつかりと養わないとね。」

ハーマイオニーは働いてリリの事を養うつもりだ。リンリー家は歴史が長く蓄えも多くあるし女たちが放っておかないので何もしなくても生活だけは出来るがここはしっかりと働きたいというのがハーマイオニーの考えだった。

「ふむ……。私も働こうかしら。」パドマがハーマイオニーに同調する。

「私は正直悩み中。働くことも魅力だけどリリと離れるのも嫌なもの。」

最近少しずつ素直になっているダフネは本音を隠さずに言う。

「私は……。どうしましょう。」

ここでメイドとして愛人として常に一緒にいます！なんていうかと思いきやジニーはちよつと悩んでいた。自分の愛が暴走して迷惑をかけたのが実は時間をおいて堪えてきたのだ。

ちなみにここにはいないクラウディアだが、キャロルの後任としてリンリーと屋敷の護衛の役割として日々修業中だ。しかも上司のキャロルと違い他の魔法や家事全般も高水準なので総合的にはロザリンドのメイドたちの誰よりも上であったりする。

「はい！ 私はずっと一緒に良い！ だから屋敷でメイドになる！」

ずっと一緒に良い。それがパーパティの答え。

前の特別授業で癒しの力が開花したので癒者などに就職することは容易いだろう。

だが、就職など関係ない傍で支え続ける。癒しはリリだけに与えたい。

自分は頭も妹やハーマイオニーほど良くない。だから愛する人を支え続ける道を選びたい。

そう言う決意の表れでもあった。

その後は就職希望はどこがいいとか話し合ったり、パーバティの話からロザリンドのメイドたちの中で誰が一番かなどと言う話題で盛り上がった。

ちなみに先代リンリーのロザリンドの愛人たちも就職している者と屋敷で専門の者に分かれている。

専門は二人でメイは屋敷全般を仕切り、キャロルが警護担当。

他三人はレーナが魔法省勤務、リディアがお菓子メーカーに、アンがグリーンゴッツで働いている。

働いていると言っても常人の勤務形態よりも自由に働くことができるため屋敷でメイドでいることも多い。この5人がお互いに得手不得手を補ってリンリー邸は成り立っている。

~~~~~

次のリリの一日自由権利はパーバティの番である。

何を要望したかと言うとデートだ。

休日一日全部を使ったオールデート。

行き先はホグワーツ生にとつてのデートスポットのホグズミードや魔法使いにとつて馴染みのあるダイアゴン横丁ではなくロンドン市街、つまりはマグルの街だ。

マグルの商品は魔法使いにはない魔法に頼らずに到達した洗練されたものである。衣服や食べ物の種類などは比べようが無い。

パーパティは片親がマグルであるのでマグルの文化にも通じている。リリは逆にマグルの血は入ってはいえるが魔法界でほぼ生活していたためマグル文化は新鮮に映るだろうというパーパティの計らいだ。

デートということではあるが待ち合わせ中である。

目印の建物の下でリリを待つパーパティ。ちなみに集合時間1時間前から待っている。

ワクワクそわそわしながら待っていると無粋な輩が近づいてきた。

「君、一人？」

「可愛いね！ 良かったら俺らと付き合わない？」

パーパティの口から過去最大級のため息が出る。べたはべたでもこんな展開はビンの魔法史の授業以上に要らない。

無視をしているが邪魔者^男は一向に立ち去らない。

そしてべたな展開は連続する者である。

「あなた達、その娘は私のよ。パーバティお待たせ！ 待った？」
魅了呪いを全開にしてリリアン・リンリーがやって来た。

待ち人はシチュエーションもあつて最高にときめいている。

不要物はさっさと消え去つて記憶にさえももう残っていない。

「ううん、今来たところ……ふふつ。」

これまたありきたりな事を繰り広げる二人。やってみたくて実際にやってみたが何となくおかしくなつて笑つてしまう。

「さ、エスコートよろしくね。」

「お任せあれ、お嬢様。」

今日は二人ともいつもの魔法使いの恰好やホグワーツの制服ではなくマグルのファッション誌を参考にした格好だ。どんな服を着て来るかは当日まで内緒だったが、これは大正解であつた。

普段見慣れた姿でないだけで魅力の補正が大幅に上昇だ。

ちよつとしたアクセサリー一つとっても素晴らしい。

このリリを今日は独り占めできると思うとそれだけでにやけてしまいそうだ。

それに関してはリリの方も同じ気持ちであつた。


~~~~~

街中を歩くだけで物珍しさにリリは目を輝かせる。それを微笑ましい気持ちでパーパティが見守る。

店に並ぶ商品の説明を求められたり、マグルの道具に驚くりりは新鮮だ。

ただ二人で並んで歩くだけでも楽しすぎる。

途中でお菓子を買って食べ歩くとこれまたマグルによる新鮮な味に驚いているようだ。

「リリ、クリームついてる。」

「どいっ？」

「はい、よ。」

口元に付いたクリームを指でふき取る。そのまま指事リリの口に持っていく。

美味しそうにそれを頬張るリリ。

本当は舐めとつても良かったのだが、ここでは我慢、我慢だ。

「口でも良かったのに。」

「せっかく我慢してたのに気持ち揺るがさないで。そういうのは夜になってからのお楽しみにしたいの。さ、次は着せ替えショーよ。」

やって来たのはどんな服でも揃うと評判の店だ。

前にダフネが着せ替えシヨウをしたというのを聞いて自分もやってみたかったのだ。

あつちはロンドンや海外のパリにも出店しているグラドラグス魔法ファッション店だったが、こちらはマグルの店だ。また違った楽しみができそうな予感で胸がいつぱいのりり。

「さあさあ、どうぞぞー！」

ロザリンドのコネと金の力で大きめの部屋を貸し切ってモデルりり、観客パーバティの個人ファッションシヨウが幕を開けた。

まずはドレス。色は大人な黒、しかも背中を大胆に開けたものだ。

「どう……どう？　ちよつと恥ずかしいんだけど。」

「5億点。」

普段は比較的子供っぽいりりがいきなりアダルトな雰囲気になって目の前に現れたのだ。

パーバティの語彙力は死んだ。

恥ずかしがったりりはすぐに次の服に着替えた。

先程と打って変わってゆつたりとした落ち着いた雰囲気。

こちらまでほわほわとした空気になる。





ホテルを出て軽く朝食をいただく。  
帰るまでがデートということでギリギリまでこの時間を楽しんだ二人だった。

## 70. クラウディア・エンジェル

季節は移り行きすつかり冬に。

ホグワーツは雪に覆われ、まだまだお子様な低学年男子が雪だるまを作ったりしている。ホグワーツは雪に覆われ、まだまだお子様な低学年男子が雪だるまを作ったりしている。

ホグワーツ城の中では何本かクリスマスツリーが準備されている。

平和になって初めてのクリスマス。いまだに色々な事情で帰れない生徒のために学校として盛大に、それこそ卒業生や不死鳥の騎士団も呼んでのパーティーをする計画らしい。

今は亡き前校長のダンブルドアに平和な世界を見せたいという思いもある。

もつとも、平和になったからこそ家族と幸せに過ごしたいというのが大半なのでホグワーツに残るのは極僅か、メインは卒業生たちの同窓会の方だ。

リリは当然ハーレムと一緒にリンリー邸に戻る予定である。

そしてあつという間にクリスマス休暇へと突入した。

ホグズミード駅からキングス・クロス駅へと向かう紅い蒸気機関車に乗り込むリリとハーレム一行。

コンピュータメントをいつもの様に嫁と愛人でいっぱいにして蒸気機関車に揺られてゆつたりロンドンまでの旅路を楽しむ。

途中で休暇中の別れを惜しむ女子生徒が何人もやって来る。軽くおしゃべりをしたリスキンシップを取って女子たちはリリ分を充填していく。

ドラコ・マルフォイもその中の一人にいた。

ドラコへの熱い抱擁を終えたリリは今の状況を軽く聞いてみた。

「ドラコは大丈夫？　なんだか貴族は大変みたいだし。卒業したらどうするの？」

「まあ、マルフォイ家はしぶといから大丈夫……らしい。父上はどうかするつもりらしいけど、もうそういう時代じゃないからね。私はまっとうにどこかしらで働くよ。

……卒業しても気が向いたら会ってもらってもいい？」

「遠慮なんかしないでよ。いつでも来ていいんだから。」

リンリーにとっては女と言うだけで大事なものだ。断ることなんてありえない。

そう伝えるとドラコは笑顔で自分のコンピュータメントに戻っていった。

その後はハーレムの時間ということでコンピュータメント内はお菓子に今後について話したりと盛り上がる。

特にメンバーそれぞれのリリと過ごした一日について話し合うとお互いのデート内容などで自分だったらこうするという意見交換であったり羨ましがったりと過去最高

に大盛り上がりだ。

順番がまだのハーマイオニーだけは話題に入れず小さな疎外感を感じてはいたが、その間ずっとリリが抱きしめてくれたので役得だ。それに気づいた残りのメンバーも話題がデートからリリの抱き心地、抱きしめられた時の感触に移っていった。

~~~~~

キングス・クロス駅の九と四分の三番線では次期メイド長予定のクラウディアがお出迎えた。服装はメイド服。ロザリンドのメイドたちとはデザインが違うがこれは主の趣味の差とメイドが誰のものかをちゃんと主張するための処置だ。

これからのためとということ護衛役の引継ぎを兼ねて一人でこの場を任されている。実はこつそりと姿を消したキャロルが見守っているが知らされていない。

姿を隠しているのは空間系の魔法の応用である。最早何でもありかと思われかねない。

「リリちゃん！」

「クラウディア！」

久々の、とはいっても一週間程度だが、再会で抱きあう二人。

クラウディアのハグは力のかげ具合も絶妙で苦しさは一欠けらもない。

暖かく安心感からこのままずっと身を委ねていたくなる。ハーレム一の包容力でハグも一番上手い。正直ロザリンドママやレイラお母様より母性がある気がする。

周りの女子生徒からの羨ましそうな目が集中してきたのでハーマイオニーが咳払いして現実には引き戻す。

「コホン！ はい、続きは帰ってからね。クラウディアが付き添い姿くらましをするの？」

「そうよ。もうキャロルさんのお墨付きをもらってるんだからね。」

そう言つてリリを抱きしめたまま全員に触れるように言う。

「それじゃあ、しゅっぱっ！」

姿くらまし特有の音もたてずに一瞬でリンリー邸の目の前に移動した。

「はい到着！ それじゃっつ・づ・き！」

再びリリに抱き着くクラウディア。そのまま抱き上げて屋敷に入っていく。

今まで学生のメンバーと比べて接する時間が格段に減っているのでこうなるものしょうがない。リリ一日自由権もクラウディアに限っては期間を延長することでバランスをとっている。

リリはさっさと荷物を整理して部屋着に着替えてリリハーレムが集まる大部屋へと足早に進む。

クラウディアにお土産話として色々とホグワーツでの出来事を話し、クラウディアはメイドとしての仕事について話し返す。

その間ずっとリリはクラウディアの膝の上で髪を梳かれたり、撫でられたりしている。

腰に回された腕のこそばゆさ、膝から感じる体温、何より後頭部を包み込む豊満な胸の柔らかさ。これらから得られる安らぎは他のメンバーには誰にも真似できない。

磨きがかかった包容力と母性の塊でリリは安心しきっていた。
優しさに溺れるように眠るのも当然であった。

~~~~~

「あらあら〜？　寝ちゃったわね〜。」

自分の胸を枕にして眠るカワイイ主の寝顔を見てほっこりする。

安心してくれているのだろう。自分の愛がリリのためになっていると感じてうれしくなる。

リリもそれに応えて愛をくれる。もうたつぷりと。

ああ、なんて自分は幸せなんだろう。

こんな包容力と母性が爆発しているクラウディア・エンジェルだがその過去は暗いものだった。

彼女という存在は両親のは愛の無い結婚の結果であった。

どういった経緯で二人が結婚してクラウディア子供ができたのか聞いたことも無かったがそれは確かだった。

両親の間に愛が無ければ子供に愛があるはずもなし。

彼女に用意される衣食住のみ。そして必要があればそれ以上の金額のお金。ただそれだけだ。

ぬくもりや会話は全くと言っていいほどなし。必要なことを事務的に話すだけ。

クラウディアが一人で暮らしていける年齢になったと判断されたら、とうとう家にもいなくなつた。

愛を与えてくれぬ両親だが、クラウディアは愛を求めた。だが、何をどうしても反応が返ってくることはなかつた。

世間体を気にするからか、最低限の情はあるからなのか、自分専用の口座にお金だけは振り込まれていた。

ホグワーツに入学すると伝えても信じているのかどうかさえ分からない。

それが良い契機だったのか、もはや繋がりはなくなつた。成人までに必要な金額が一

気に振り込まれ連絡先も変えられた。クラウディアにマグルの世界での居場所はなくなったも同然になった。

それでも魔法界に来て良かったとは思えた。両親の事を知らないこの環境ならば今までの周りからの奇異の目や同情、差別……はあつたかもしれないが今までと比べるとどうでもよかつた。

友達もいっぱいできた。ハツフルパフ寮で周りに人がいる生活は楽しく暖かつた。間違いなく幸せであつたと言える。

それでもその関係はあくまでも友人として。

確かに今までに比べれば天地の差がある。それは疑いようがない。

それでもクラウディアは愛が欲しかった。愛したかった。早くに成熟した体になつた彼女と付き合いたいという男子は多くいたが、その裏に潜む劣情を感じて断り続けた。

誰かが自分を心から愛してくれる、そんな思いが強くなり続けて3年目のホグワーツ。

運命がやって来た。

~~~~~

（二目見て運命の人だつて確信、そこからはリリちゃんを全力で甘やかしたら気が付いたらハーレムの一員だもんね。）

何があるか分からないものね。）

クラウディアはリリが眠っている間ずっとその寝顔を見ていた。

飽きない。愛がここにいることを確かめるように触れる。ああ、暖かい。それだけで胸がいつぱいになる。

ジニーが目立つが、クラウディアも相当魅了されている。表面に出ないだけで別のベクトルでヤバいのだ。

次の日からのリリ自由権を使い始めたクラウディアとのリンリー邸の生活はダダ甘の一言。ひたすらにリリを甘やかして溺愛するという生活になった。

「はい、あくん。」

「あくん。料理また上手になったね。ハイお返し。あくん。」

食事一つとつてもお互いに食べさせ合うというバカツプルかよと言う状態だ。

普段だとハーマイオニーやダフネ辺りの厳しきでバランスをとっているが今回は自由権の行使と今回が最後ということとでただただ甘やかされる生活が幕を開けた。

何をすることもクラウディアが甘やかしてくれるのでリリはそれに溺れるダメ人間が出来上がっていった。

「ああ〜……。ダメ人間になる〜。でもクラウディアが気持ちいいからしようがないよね。」

あ、次クツキーが良い。あ〜……。」

「は〜い。」

今もこうしてソファで膝枕をされながら口にクツキーを運ばれるだけの存在に成っていた。ちなみに太りそうなものだが、夜の運動もあるので体型は維持できるのである。

「クラウディア、ぎゅー。」

「はいはい。ぎゅー!」

何だかりりが幼児退行をしているような気がする。

それに気づいてもあと数日なのだからと厳しさを担当組が我慢していた。

ジニーやパーバティと一緒に甘やかしたりリリと一緒に甘やかされたりしたいなんてことを考えてはいた。

そしてクリスマス休暇が終わり Hogwarts に戻る日。

キングス・クロス駅九と四分の三番線ではリリがクラウディアに抱き着いて離れないという一悶着があった。

「う〜クラウディア〜一緒にいこう?」

「よしよし。でもここままでね。卒業まで我慢我慢。」

「うう最後にこの柔らかさを全身に刻み込む！」

そう言う顔と顔を胸に埋めて揉んで深呼吸を始めた。

それを窒息しない程度に抱きしめて蒸気機関車の出発ギリギリまで二人は抱き合い続けていた。

71. ハーマイオニー・ジーン・グレンジャー

イースター休暇も終わり、リリ達のN・E・W・T試験も無事終了だ。

働く予定のハーマイオニーやパドマ、そして自分の目標を決めたダフネはしっかりと良い出来を出していた。この三人はどこで働くことになっても問題ない成績だろう。

一方のリリとパーバティは最初から諦めていた。

元から養ってもらうつもりのリリと屋敷にて専業で仕える予定のパーバティはN・E・W・T試験に価値を見出していなかった。

二人そろって頑張る嫁や仲間のサポートをしていただけだ。

そんなこんなでリリ達が卒業するまであと一カ月ほど。

後は残りわずかとなったホグワーツ生活を堪能するだけだ。

「さてと……。今日は一日私がリリを自由にする番ね。」

最後のリリ自由権を使うのは正妻たるハーマイオニーである。

正妻が何をするのかハーレム含めて皆興味ありまくりの様子だ。

皆が見ている中でハーマイオニーはリリの手を取る。

「それじゃあ行きましょう。」

「ええ、どこまでも一緒に行くわ。」

~~~~~

今日は休日でもない唯の平日。

N・E・W・T<sup>試験</sup>試験も終わっているがホグワーツでは終業式前日まで授業がみっちりある。

7年生の授業内容は卒業後為のものへと変わっているが、授業には違いなかった。

それなのに7年間、一度もさぼることなどしなかったハーマイオニーがまさかこんな日に授業をさぼってまで自由権を使うとはリリにも予想外だった。

二人が向かった先はホグズミード駅。

休暇前後でホグワーツ生が蒸気機関車での乗り降り以外で使うことはなく、いつもはほぼ無人なだけの場所だ。

「なんでここに？」

「ふふ、すぐにわかるわ。」

いつもは寂しいそこには何とお世話になっている紅い蒸気機関車があった。どうやら整備中の様子。

「もうすぐ夏休みだから整備するらしいのよ。それが今日だったからこの日に自由権を

使ったの。」

ハーマイオニーは紅い蒸気機関車を見ながら話し始める。

「私たちが出会ったのはこの中のコンパートメントだったわね。」

「そうだったわね。一目見た瞬間運命だ！　つてびびつと確信できたわ。あの衝撃は今でも忘れられないわ。」

「私も最初は衝撃で固まっちゃったのを覚えているわ……。この世界にはこんなかわい  
い人がいるなんて魔法以上に想像なんてできなかつたのよ。ハッキリ言つて小さな女  
の子には刺激が強すぎた気が……。」

「今の落ち着いたハーマイオニーも良いけど、あたふたしてたハーミーちゃんも可愛  
かつたわよ?。」

「もう……。次行くわよ。」

一年生の時だけ使う山道を抜けた後湖を進む。あらかじめ用意していた水面浮遊の  
魔法具を使つてゆつくり湖を滑るように進んでいく。姿勢を安定させるため密着状態  
である。

そして7年前と同じホグワーツ城が見えて来た。

「何年たつてもホグワーツ城は綺麗ね。ふふ、色んな事があつたわ……。」

「あの時も想っていたけど綺麗なものと綺麗なものを重ね合わせると最強ね。前も良かったけど今の成長したハーマイオニーだとまた別の趣が……。」

「あら、今の私と昔の私どっちが良い？」

「悩ましい……。分裂して片方年齢操作とかできないかしら？」

「そこは今の私って言いなさいよ。ま、私も過去現在未来全部のリリに囲まれたら……やばいわ。素敵すぎる。」

次は大広間。授業中の今は誰もいない。ここで組み分け帽子に運命を教わった。

「あの時はグリフィンドールとレイブンクローで大分悩まされたわ。でも組み分け帽子はちゃんと最適を選んでくれたわ。リリと別の寮なんて想像できないもの。」

「仮にレイブンクローだったとしても私はそっちに追いかけてたわ。その時からハーマイオニーの事を本気で狙っていたのよ。もし違う寮にされていたら組み分け帽子は引退してたでしょうね。」

「リリならやりそうね。私もあの時リリがグリフィンドールを選んでくれて本当にう嬉しかったの。」

そしてそれぞれの授業をする場所を歩いていく。

それぞれの授業の教室、使用中なので外を歩くだけだが、クイディツチ競技場、天文台、図書室、必要の部屋。

どこをとつてもハーマイオニーとの素敵な思い出が詰まっている。

「ハーマイオニーはどんな授業でもすごいよね。活き活きとして先生に答えるハーマイオニーの顔つて私好きよ。もうすぐそれも見れなくなると思うと結構寂しいわ。」

「ありがとうね。私も授業中に失敗したり慌てたりするリリの事微笑ましいって感じながら見てるわ。」

「むう。あつ、てことは私たちずっとお互いを見てたことよね。」

「……あまり大きな声で言えないけど授業よりリリの方が魅力だもの。」

「学年主席のハーマイオニー様にそこまで言われるなんて光栄だわ。」

歩き続けて普段は人が滅多に近づかない地下室の女子トイレにたどり着いた。

「……ここでリリから好きって、愛の告白をもらったわ。」

「我ながら何でこんな場所で大事なことを言っているのかしら……。」

あの時は落ち込んでいたハーマイオニーを見ていられなくて抱きしめて想いのまま全てを口にしていた。

励ましてからもっといいムードの場所で思い出に残るようにした方が良かったかと



リンリーが来るまで眠ることにしたらしい。

3年生の時はホグズミードで初めてデートをした。たまにしか外出が許されなくて特別な気分でもとてもいい思い出。

4年生の時はトライ・ウィザード・トーナメント フラワーデラクルの事を一番の美人と断言した時には結構ショックだったけど、その後が一番愛してくれていると言ってくれたことは嬉しいことだった。

5〜7年生は世間が騒がしかった。

楽しかったことも、怖かったことも、本当に色々あつて飽きない7年間だった。

その全てで隣にはハーマイオニーがいた。ずっと一緒にいてくれた。

ハーマイオニーは今日1日を使って二人の出会いから今までの軌跡を振り返った。

二人は改めて隣を歩く女性が生涯、いや死後の世界であろうとも唯一無二の最愛の女性であると認識を再確認した。

~~~~~

最後にたどり着いたのは二人の部屋。

6年前から変わらない二人だけの場所。

二人はベッドに腰掛ける。本日二度目のキス。

より熱くより長く相手の全てを自分のものにするために舌を絡める。

たっぷり時間を使って口を離す。

静まり返った寝室に響くはお互いの心音と吐息のみ。

「リリ……。私はリリアン・リンリーを愛している。リリの事が好きで好きでたまらない。」

本当は誰にも渡したくない。でも他の女の子と一緒にいるあなたも輝いてそんなあなたも好き。これからも絶対それは変わらない。たとえ服従の呪文が使われたってそれだけは変わらない。」

改めてハーマイオニーの心からの愛の告白。

もちろんリリの返事は決まり切っている。

「私もハーマイオニーを愛している。今までもこれからもずっと。女の子は好きだけどあなたが一番というのは嘘偽りない本当の気持ち。ずっと一緒よ。」

ハーマイオニーはリリを抱きしめてベッドに押し倒す。

「リリ……。もつと繋がりたい、もつとあなたを感じたい……。ただの繋がりにじやもう我慢できそうにない。だから……。」

一度深呼吸して息を整えるハーマイオニー。

そして意を決して言う。

「私、リリの赤ちゃんが欲しい。あなたと本当に結ばれて家族になりたい。」
「ハーマイオニー……。」

目と目で通じた二人は何も言わず、生まれた姿になっていく。

今日の二人にとって今までで最も体も心も繋がった夜になった。

そして真の意味で一つとなり結ばれたのだった。

7 2. 卒業

1998年の7月。今年もまた多くの生徒がホグワーツから巣立っていく。

その記念すべき日は雲一つない晴天であった。まるで天も卒業生の旅立ちを祝うかのようだ。

それに反して在校生女子の心は曇りを越して嵐の模様だ。

今年はまだの学生の卒業ではない。ホグワーツにとって一つの節目になる。

リリアン・リンリーが卒業するのだから。

ホグワーツに残る女子たちは悲しみを押し殺し、心の涙を満面の笑みで隠し盛大にリリの卒業を祝うことに決めた。

祝うからには過去最高に、男なんて言う存在は忘れて朝から旅立ちの朝まで悔いのようなように楽しまなければ。少しでも悔いが残ればリリも悲しむに違いない。そんな事だけは絶対に許せない。

毎年の卒業パーティーは男女共同で大広間で行うものだが、今年はそうはなりそうにない。

リリとの最後の時間は女子だけで集まりたい。今までは寮で別れていたが、その垣根

が無い今全員で集まるには広い場所が必要だ。

そこでホグワーツでも1、2を争う便利な存在、必要の部屋の出番だ。

「女の子皆でどんなことでも楽しむ部屋……。」

リリが代表として念じながら8階の廊下を往復する。

3往復すると即座に石壁が変化し扉が現れる。

リリが望んだのはホグワーツの女子全員と楽しく長く過ごせる場所。

現れたのはパーティーに必要なものは何でもそろった部屋だ。

料理にデザート。好きな音楽を自動で演奏してくれる数多の種類の楽器に、望んだように変わる装飾やイルミネーション。服もドレスから民族衣装まで選り取り見取りの品揃え。

部屋の大きさは大広間を優に超え、これまた望んだ椅子や座布団にソファ―更にはベッドまで自由自在に顕現させることができる。

特筆すべきなのは以前のパドマが望んだ時以上に時間の流れが遅いことだ。

おまけに男はこの部屋に入ることはおろか近づくこともできない効果まで付属している。これで邪悪な闇の魔法使いがホグワーツを襲つても女子は大丈夫だ。

最後の宴の時間が近づくにつれ続々と女子たちが集まりだした。

それに対して残った男と教師たちは大広間でこうなるのもこれが最後かと少しホッ

としつつも寂しんでいたりした。

~~~~~

「よし！ 皆集まったわね！ グラスは持ったかしら!？」

……私は明日でこのホグワーツを去るわ。確かに皆と今までのように会えなくなるのは寂しい……。でもね！ 最後にそんな湿っぽい感じで卒業なんか嫌よ！

だから最後の最後まで楽しましよう！ 乾杯！」

「「かんぱーい!!」」

リリの号令でホグワーツでの最後の宴が始まった。

皆料理にダンスにゲームに更には部屋の上部を更に拡大し、即席の観覧席まで作ってクイディッチまでして大いに楽しむ。

最も一番のイベントは最後のリリとの触れ合う場だ。

「はあい、マリーどうしたい?」

「リリ先輩！ 一緒に踊っていただけですか?」

「喜んで。」

リリはホグワーツ在校の女子一人一人とじっくりと最後の交流を深めた。

女子の望みは一人一人違う。一緒に食事するという希望だけでも食べさせ合いっこ

や一方的にリリから餌付けされるようにされたいと欲望は千差万別だ。

他には踊ったり、まったりとただ二人で過ごす、ひたすらに抱きしめて欲しい、手加減なしの魅了でキスが良いなど……。女子一人一人に対して望んだことをリリは全力で応えていった。

今日で最後なのだからと誰一人として遠慮をしない。

一緒にいた時間が短い下級生は少しでも思い出が残るように。

一番共にいる時間が長かった同級生はこれからもリリのことを思い続けるようにと最後の最後までこの宴を心の底から楽しんでいた。

その中の筆頭は勿論、ただ一人残されることになるジニー・ウィーズリーである。

最後に残った彼女が何をリリにおねだりするのか全員が興味を持って見守る。

「お姉さま……。愛しているって言つてください。全身全霊を込めて想いの全てを込めておねがいします。」

「ええ、良くつてよ。『愛愛しているしている』」

リンリーの魅了呪いを全力で乗せた愛の言葉。

その言葉をまるで全て自らの血肉に変えるように全身で感じているジニー。

「私も愛しています。卒業おめでとうござります。」

ジニーは抑えきれなかった涙を流しながらリリに抱き着く。

その勢いで周りの女子も次々とリリに抱き着いていった。

~~~~~

いくら時間が延ばされても時間が止まったわけではない。楽しい時間はあつという間。

喋って食べて歌って踊って乱れて楽しんで。

いつの間にか朝日が昇ってリリアン・リンリーがホグワーツを去る日がやって来てしまった。

ハーレムと一緒にホグワーツ城を出る。

目にするのは最後になるかもしれない、人生の半分近くを過ごした千年以上続く立派な城を見上げる。

ハーレムたちもリリと一緒にホグワーツ城を見上げる。

「楽しかったわ……。本当に色々あったわ。ハーマイオニー、パーバティ、パドマ、クラウディア、ダフネ、ジニー。皆と出会って一緒に時間を過ごしたのはここだった。ありがとう、ホグワーツ。」

リリだけでなくハーレムたちも様々な思いを感じている。そこには良い感情しかなかった。

そこに校長のミネルバ・マクゴナガルがやって来た。

「改めて卒業おめでとうございます、ミス・リンリー。」

「ありがとうございます。マクゴナガル先生。」

「あなたが入学してから色々ありました……。お母上よりは普通で正直ほつとしました。」

「ふふ、ママはやつぱり常識破りでしたか？」

「ええ。レイラがいなければ魔法界は終わっていたかもしれないですね……。」

ミス・グレンジャー。解っているとは思いますが、リンリー家は非常に特殊です。

だから次のリンリーの母になるあなたはもつとしっかりと手綱を握っておきなさい

！

あなた達もですよ！」

「「「「はいー」」」」

「よろしい。それではあなた達の未来に幸あれ。」

マクゴナガルは笑顔でリンリー達の未来を祝福した。

リンリー達は最後にもう一度目にしつかりとホグワーツ城の威容を焼き付ける。

そしてリンアン・リンリーはホグワーツを巣立っていった。

~~~~~

~~~~~

そして数カ月の時が経った。

ハーレムメンバーは学生のジニー以外はそれぞれ仕事やメイド仕事に忙しくしている。

ハーマイオニーは魔法省に就職した。

大臣の補佐をしているアンブリッジに師事して魔法界を根本から改革しようとしているらしい。ゆくゆくはマグル出身初の魔法大臣になるかもしれないと噂がすでにあ
るらしい。

パーバティは慣れない家事や色々な事務作業で日々翻弄されている。それでも持前の行動力や明るさで屋敷全体を盛り上げている。先輩メイドたちにも好評だ。

その妹のパドマは魔法薬の研究をすることになったようだ。それ以外にも色々な魔法具、特にキャロルの能力を活かせないかと研究中のようだ。やりがいがあつて充実した顔をしている。

クラウディアはすっかりリンリー邸を支えるメイドの一人として成長していた。

戦闘力も上昇中で一度キャロルとの模擬戦を見た屋敷の全員が引くぐらいであった。ちなみに甘やかしと女としての色気もマシマシであった。

ダフネはメイドをする選択をしていた。その傍らにかつての実家やドラコにも協力

してもらって旧聖28一族が保有する情報や財産をまとめ上げ一つの財団として成立させていた。

その運営とハーマイオニー達魔法省組と合わさって少しづつだが魔法界は発展していった。

ジニーだけは泣く泣く一人でホグワーツで勉強中だ。流石にかわいそうなので休日にはクラウディアに迎えに行ってもらってリンリー邸で過ごしている。

そんな忙しくも充実した時間も落ち着いてきた日。

「うぶっ!?!」

全員で朝食を楽しんでいたら急にハーマイオニーがトイレに駆け込んでいった。

「ハーマイオニー!?! 大丈夫!?!」

すぐに魔法薬を飲みますが体調は優れないはまだ。

心配でどうにかなりそうなりリリやハーレムとは逆に大人たちは笑顔だ。

「心配すんな。ハーミーちゃんの中に新しいリンリーがいるのさ。私もそろそろ引退かあ……。」

「えっ!?! ママ? ええ! それって!」

リリは恐る恐るハーマイオニーのお腹をさする。まだそこに命が存在しているかは分からない。それでも経験者たちが言うのだからそうなのだろう。

「ハーマイオニー！」

「リリ！ 私頑張るね。」

二人は抱きしめ合う。周りはそれを祝福していた。

それをきっかけにリリとハーマイオニーの結婚式を行うことになった。

リンリー家はその性質からあまり結婚式をする文化はないがお祝いも兼ねてということを決まった。

身内だけでやることになり、全員がドレス姿で過去最高に目出度いパーティーになったのは言うまでもなかった。

エピソード

2008年9月1日 キングス・クロス駅九と四分の三番線
毎年この日はホグワーツの子供たちで賑やかになる。

友人との再会を喜ぶ在校生と新たな環境に不安と期待でいっぱいの新入生たち。

そして見守る親たちは子供たちとの別れを惜しんだり旧友との再会を祝っている。

そこに音もなくある一団が姿あらわしをしてきた。

その集団を認識した時、老年の駅員は思った。

『ああ……また新たな混沌の7年間が始まったのか……。』と。

ホームにいるほとんどの魔法使いが一斉にその一団に視線を向けていた。

メイド姿の女がいきなり現れたのもそうだが、何より現職にして初のマグル出身の魔法大臣のハーマイオニー・リンリーが現れたのだから注目しないのが無理だというものだ。

だが、女たちはメイドや魔法大臣より……何物にも代えられない魅力を持った中心の女と少女に目が釘付けになっていた。

「わあ……！ 女の子がいっぱい！ あの子カワイイ！ あっちの子はカッコイイ！

どうしましょう最高です！ 母様！ 私行きます！」

その少女、ヴィオラ・リンリーは注目されていることなど気にも留めず、さっそく近くの女の子から手当たり次第に声をかけてスキンシップ^ハをしていつている。

された方もそのハグで骨抜きにされあつという間に少女の虜である。

「我が娘ながら手が速い……。と言うか私よりママの方に似ているよねえ。」

「あら、リリだつてそう変わらなかつた気がするけど？」

少女の母親のリリアン・リンリーの言葉に生みの親のハーマイオニーのツツコミが入る。

周りの女たちがうんうんと頷く。過去のリンリーハーレムがその言葉を聞いていたらほとんどの世代のリンリーも大差ないという結論に達することだろう。

リリやハーマイオニー、ハーレムたちが見守る中、次世代のリンリーである愛娘ヴィオラはピタリと止まり一人の少女を見つめていた。今までの勢いはどこへやら、初めての感覚に戸惑っているようだ。

数秒深呼吸してから目標の少女に意を決して話しかける。

「ね、ねえ？ あなたも新入生ですか？」

「ん？ ああ、そうね。あなたも？」

「ええ！ 一緒のコンパートメントになってくれませんか!？」

「もちろん喜んで。両親も来れなくて一人で不安だった中、こんなかわいい娘とご一緒できるなんて幸運ね。私、レイ。レイ・クラーク、よろしくね。」

「私はヴィオラ・リンリーです！ これからよろしくお願いします！」

ファーストコンタクトの結果は上々の様で相手もただ魅了されているだけではないようで盲目的ではなくヴィオラのことを良く見ていると両親は感じていた。二人は短い交流ですぐに距離が縮まっていった。

「あらあら、早速運命の娘が見つかったみたいね。あの子を見つけてから他の娘に見向きもしないからリリやお母様のようにハーレムタイプじゃないのかしらね。」

「二人が心を通わせられるならなんだっていいわ。重要なのは二人がどう感じ、どう思うかよ。私たちのようにね。」

愛娘とその恋人候補を見ながらリリは懐かしむ。

かつては自分も隣にいる最愛の人とあのように始まったのかと。

その時から自分は隣にいる女は決めていた。運命とは出会った瞬間から魂で理解できるのだ。

「あの子の娘が、次のリンリーができたら……私たちも旅立ちの時ねえ。」

あまり知られてはいないがリンリー家の寿命は一般的な魔法使いと比べて短い。魔法使いは魔法薬などもあつて年齢が百を超えるのも珍しくない。それとは逆にリン

ヴィオラ
愛娘が元気いっぱいコンパートメントの窓から身を乗り出して手を振っている。

リリとハーマイオニー達もそれに応え、見えなくなるまでお互いに手を振り続けた。やがて蒸気機関車の紅色も見えなくなる。

愛娘を見送ったリリとハーレムたちは屋敷に戻る。今日はヴィオラの見送りのために皆休みを取っていた。

「ヴィオラが卒業するまで7年かあ……。長いようで短いのかな。」

「あつという間よ。だから今のうちにできることをいっぱいしましなう？」

ハーマイオニーを筆頭にハーレムたちがリリを取り囲む。

皆が思い思いの方法でリリを愛で、また愛でられる。

日も高いうちからというのに娘の目が無くなって自重する必要が無くなって久しぶりに大ハッスルである。

リリとハーレム全員が寝ても十分すぎる大きさのベッドの上でリリを中心に集まり一塊になっている。

この愛する人に囲まれた状態がリリは好きだった。

それも後7年もしたら感じられなくなるのかもしれないのは残念である。

肉体を捨てると感覚も大分変化するらしいので今のうちにいっぱい楽しむべしとい

う先祖からの情報があつたのだ。

リリはリンリーに生まれたことから自身の先についても本能で理解している。いずれ自分も先祖たちと同じようになる。それについては何の恐怖も後悔もない。

(でも……)

ふと疑問と恐れが出てきた。娘の恋人候補が現れて明確な未来が想像できて弱気になつてしまったのかもしれない。

「……みんなは……平気？」

「? 何が？」

「その、肉体を捨てることとか、後7年ぐらいかもしれないってこととか。」

「いまさら?」

パーバティは呆れていた。

「何も問題はないでしょう?」

パドマは何が疑問なのかわかっていない。

「ぎゅ〜」

クラウディアは抱きしめることで返事とした。

「ずっと一緒よ。そんなの分かり切っているでしょう?」

ダフネはあえて口にするまでも無いといった感じだ。

「ずっとお姉さまと一緒にいられるとか何物にも代えられない至上の榮譽です！」

ジニーの顔には最大級の喜びが現れていた。

「リリ。私たちはあなたを愛している。あなたも私たちを愛している。それは永遠に。それに肉体とか時間とか関係ないわ。それに拒否するならこうして一緒にいないわよ。」

愛しているわ、リリ。」

「うん、ちよつと弱気になってた！ だから……もつと愛を注いで？ もつと愛を感じましよう？」

「もう……。明日も休みにしなくちゃね。」

全員は再び愛を確かめ合い始めた。

リリアン・リンリーとそのハーレムはこれからも愛し合っていくだろう。

肉体が無くなるうと、この世界の全ての人間が忘れようと、世界が滅びようと。

こことは別の何物にも邪魔されない遠い彼方で。

永遠に。